今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第13集

奈良尾遺跡

1991

福岡県教育委員会

今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第13集

奈良尾遺跡

1991

福岡県教育委員会

奈良尾遺跡全景（空中写真、西から）

第3号 火葬土壙出土青磁

整地層出土塼仏（実大）

第5号 火葬土壙出土青磁

第6号 火葬土壙出土青磁

第10号 火葬土壙出土磁器

第10号 火葬土壙出土磁器　　第１号 土壙墓出土唐津

第12号 土壙墓出土染付

Ⅱ区 奈良～平安期造成面の遺構群（西から）

序

国道202号線今宿バイパス建設に係る埋蔵文化財の調査は、昭和44年度からすでに20年余におよぶ長きにわたって実施しております。近年では、福岡市教育委員会、前原町教育委員会にも協力いただき、多大な成果をあげているところであります。

本書は、平成元年度に発掘調査を実施した、前原インター部分にあたる糸島郡前原町所在の弥生～江戸時代の墓地・鍛冶工房跡の調査記録であります。

本書が文化財愛護思想の普及、教育等に御活用いただければ幸甚に存じます。また調査に御協力いただいた建設省九州地方建設局、前原町教育委員会、地元の関係各位には、心からお礼申し上げます。

平成３年３月30日

福岡県教育委員会

教育長　御手洗　康

例　　言

1．この報告は、平成元年度に福岡県教育委員会が建設省九州地方建設局の委託を受けて実施した、国道202号線今宿バイパス建設予定地に係る埋蔵文化財の調査記録である。

2．鍛冶関係の鍛造剝片・鉄滓の分析については、新日鉄TACセンターに委託し、大澤正己氏には玉稿をいただいた。また、出土した塼仏については九州歴史資料館八尋和泉氏に執筆をお願いした。

3．発掘現場の実測には日高正幸と中間研志があたり、遺物整理は九州歴史資料館にて岩瀬正信の指導のもとに行った。遺物の実測・整図には平田春美・鬼木つやこ・原富子・豊福弥生・藺牟田秀子があたった。遺物の写真は石丸洋指導のもとに撮影した。

4．本書で示した方位は座標北である。

5．本書の編集は中間が担当した。執筆分担は以下のとおりである。

Ⅶ－C　三尊仏塼……八尋　和泉
Ⅴ　中の中・近世陶磁器の項……日高　正幸
Ⅵ　……大澤　正己
Ⅰ～Ⅶの上記以外……中間　研志

本 文 目 次

頁
Ⅰ．調査の経過 …… 1
Ⅱ．位置と環境 …… 8
Ⅲ．弥生・古墳時代の遺構と遺物 …… 11
　A．甕棺墓 …… 14
　B．包含層出土の遺物 …… 20
Ⅳ．古代の遺構と遺物 …… 25
　A．掘立柱建物 …… 27
　B．鍛冶炉 …… 35
　C．焼土壙 …… 36
　D．集石遺構 …… 47
　E．道状遺構 …… 48
　F．整地層出土の遺物 …… 52
Ⅴ．中・近世の遺構と遺物 …… 68
　A．火葬土壙 …… 69
　B．土壙墓 …… 82
　C．近世墓地 …… 96
Ⅵ．自然科学的分析 …… 107
　A．奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査 …… 107
Ⅶ　各論 …… 115
　A．鍛冶関連遺構について …… 115
　B．火葬土壙について …… 117
　C．三尊仏塼 …… 131
　D．まとめ …… 136

図版目次

巻頭 PL. Ⅰ　奈良尾遺跡全景（空中写真　西から）

巻頭 PL. Ⅱ　塼仏・火葬土壙出土青磁

巻頭 PL. Ⅲ　火葬土壙出土磁器等

巻頭 PL. Ⅳ　土壙墓出土染付、遺構群

PL. 1　奈良尾遺跡全景（北西から）

PL. 2　(1) Ⅰ区全景（東から）

　　(2) Ⅱ区全景（上空から）

PL. 3　(1) 重機による谷の試掘

　　(2) 遺構検出作業開始

PL. 4　(1) 第1号甕棺墓

　　(2) 第2・3号甕棺墓

PL. 5　(1) 第4号甕棺墓

　　(2) Ⅰ区第1号包含層（北から）

PL. 6　(1) Ⅰ区第1号包含層（西から）

　　(2) Ⅰ区第2号包含層（西から）

PL. 7　(1) Ⅰ区第2号包含層土器出土状態

　　(2) Ⅱ区西半部遺構全景

PL. 8　(1) Ⅱ区西半部遺構全景（西から）

　　(2) Ⅱ区西半部遺構全景（北東から）

PL. 9　(1) Ⅱ区造成面遺構全景

　　(2) 第1号掘立柱建物

PL. 10　(1) 第1号鍛冶炉

　　(2) 第2号鍛冶炉

PL. 11　(1) 第2号鍛冶炉切り取り作業

　　(2) 鍛造剝片を多量に出土したP－96と第2号鍛冶炉

PL. 12　(1) 鍛造剝片採集作業

　　(2) 鍛造剝片包含土水洗作業

PL. 13　(1) 鍛造剝片選別作業

　　(2) 第1号焼土壙

PL. 14　(1) 第2号焼土壙

　　(2) 第3号焼土壙（上層）

PL. 15　(1) 第３号焼土壙たち割り状況
　　(2) 第３号焼土壙たち割り断面
PL. 16　(1) 第３号焼土壙下層完掘後
　　(2) 第４号焼土壙
PL.17　(1) 第１号集石遺構
　　(2) 第１号道状遺構（北から）
PL. 18　(1) Ⅱ区谷上方トレンチ断面
　　(2) Ⅱ区造成面下層掘り下げ作業風景
PL. 19　(1) 第１号火葬土壙
　　(2) 第２号火葬土壙
PL. 20　(1) 第３号火葬土壙
　　(2) 第４号火葬土壙
PL. 21　(1) 第５号火葬土壙
　　(2) 第６号火葬土壙
PL. 22　(1) 第７号火葬土壙
　　(2) 第８号火葬土壙
PL. 23　(1) 第９号火葬土壙
　　(2) 第10号火葬土壙
PL. 24　(1) 第11号火葬土壙
　　(2) 第12号火葬土壙
PL. 25　(1) 第13号火葬土壙
　　(2) 第14号火葬土壙
PL. 26　(1) 第15号火葬土壙
　　(2) 尾根先端土壙墓群
PL. 27　(1) 第１号土壙墓
　　(2) 第９号土壙墓
PL. 28　(1) 第１号土壙墓土器出土状態
　　(2) 第９号土壙墓土器・下顎骨出土状態
PL. 29　(1) 第12号土壙墓上石積基壇
　　(2) 第12号土壙墓上石積基壇基礎部分
PL. 30　(1) 第12号土壙墓
　　(2) 第12号土壙墓の染付と六道銭出土状況
PL. 31　(1) Ⅰ区および近世墓地全景

(2) Ⅰ区尾根最頂部近世墓地
PL. 32 (1) Ⅰ区東側の改葬済近世墓地（南から）
(2) Ⅰ区東側の未改葬近世墓地（北西から）
PL. 33 (1) Ⅰ区東側の未改葬近世墓地（南西から）
(2) 近世墓地の僧形石像
PL. 34 (1) 近世墓地の地蔵形石像
(2) 近世墓地の「小三郎」墓石
PL. 35 (1) 近世墓地の「寛延元年」墓石
(2) 近世墓地の「亨保十五年」墓石
PL. 36 (1) 近世墓地の「高橋縫磨」墓石と板碑
(2) 近世墓地の板碑
PL. 37 (1)「高橋縫磨之墓」正面
(2) 同上裏面「頭山満立之」
PL. 38 (1) 重機による表土剝ぎ作業
(2) 気球による空中写真撮影作業
PL. 39 (1) 平板による地形測量作業
(2) 雪に埋もれた奈良尾遺跡（平成２年１月24日）
PL. 40 (1) 第１号甕棺
(2) 第２号甕棺
(3) 第４号甕棺（左：上棺、右：下棺）
PL. 41 Ⅰ区第１・２号包含層・他出土弥生土器・縄文石斧
PL. 42 (1) 第１号掘立柱建物周辺地山直上出土土器
(2) 各柱穴出土土器
(3) 第３・５号焼土壙出土土器
(4) 整地層出土須恵器
PL. 43 整地層出土土器
PL. 44 整地層出土土師器
PL. 45 整地層出土土師器
PL. 46 整地層出土土師器
PL. 47 整地層出土土器・鉄器・塼仏
PL. 48 (1) 整地層出土磨製石斧・砥石
(2) 第２号火葬土壙出土数珠玉
(3) 第４号火葬土壙出土土師器

(4) 第５号火葬土壙出土遺物
(5) 第３号火葬土壙出土遺物
PL. 49 (1) 第６号火葬土壙出土青磁
(2) 第７号火葬土壙出土土師器
(3) 第８号火葬土壙出土土師器
(4) 第11号火葬土壙出土土師器
(5) 第10号火葬土壙出土磁器・土師器
(6) 第２号土壙墓出土「洪武通寶」
(7) 第９号土壙墓出土土師器
PL. 50 (1) 第１号土壙墓出土陶器・土師器
(2) 第12号土壙墓出土六道銭（下は裏面）
(3) 第12号土壙墓出土染付
PL. 51 土壙墓群近辺出土石塔片・近世墓地出土遺物
Photo. 1 鉄滓の顕微鏡組織と硬度圧痕
Photo. 2 椀形滓断面の顕微鏡組織（1/50）
Photo. 3 鍛造剝片・湯玉の顕微鏡組織と硬度圧痕
Photo. 4 鉄滓と付着鍛造剝片及び硬度圧痕
Photo. 5 湯玉の顕微鏡組織
Photo. 6 奈良尾遺跡出土椀形鍛冶滓（E01B①）の特性Ｘ線像（×700）
Photo. 7 奈良尾遺跡出土椀形鍛冶滓（E01B②）の特性Ｘ線像（×700）
Photo. 8 鍛冶工房空間利用の各例

挿図目次

頁
Fig. 1 今宿バイパス路線内遺跡（縮尺1/50,000）…… 7
Fig. 2 奈良尾遺跡位置図（縮尺1/15,000）…… 9
Fig. 3 奈良尾遺跡地形図（縮尺1/3,000）……11
Fig. 4 Ⅰ区現況地形図（縮尺1/600）……12
Fig. 5 Ⅰ区遺構配置図（縮尺1/600）……13
Fig. 6 第１号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……14
Fig. 7 第１号甕棺実測図（縮尺1/8）……15
Fig. 8 第２～４号甕棺墓実測図（縮尺1/20）……16
Fig. 9 第２・３号甕棺実測図（縮尺1/4）……17

Fig. 10　第４号甕棺実測図（縮尺 1/8）……19
Fig. 11　Ⅰ区第１号包含層出土土器実測図（縮尺 1/4）……20
Fig. 12　Ⅰ区第１号包含層土石斧実測図（縮尺 1/2）……21
Fig. 13　Ⅰ区第２号包含層出土土器実測図（その１）（縮尺 1/4）……22
Fig. 14　Ⅰ区第２号包含層出土土器実測図（その２）（縮尺 1/3）……23
Fig. 15　Ⅰ区第２号包含層出土石斧実測図（縮尺 1/2）……23
Fig. 16　各遺構混入弥生土器実測図（縮尺 1/4）……24
Fig. 17　Ⅱ区現況地形図（縮尺 1/600）……25
Fig. 18　Ⅱ区遺構配置図（縮尺 1/600）……26
Fig. 19　Ⅱ区谷部下層旧地形図（縮尺 1/600）……27
Fig. 20　Ⅱ区谷部上方トレンチ土層実測図（縮尺 1/80）……27
Fig. 21　Ⅱ区谷部中央トレンチ土層実測図（縮尺 1/80）……28-29
Fig. 22　Ⅱ区斜面造成地断面模式図……28
Fig. 23　Ⅱ区谷集中部分実測図（縮尺 1/150）……30
Fig. 24　第１号掘立柱建物実測図（縮尺 1/100）……31
Fig. 25　第１号掘立柱建物周辺地山直上出土土器実測図（縮尺 1/3）……32
Fig. 26　第２号掘立柱建物実測図（縮尺 1/100）……33
Fig. 27　第１号鍛冶炉実測図（縮尺 1/20）……34
Fig. 28　第２号鍛冶炉実測図（縮尺 1/20）……35
Fig. 29　第１・２号焼土壙実測図（縮尺 1/40）……37
Fig. 30　第１号焼土壙出土土器実測図（縮尺 1/3）……37
Fig. 31　第３号焼土壙（上層）実測図（縮尺 1/40）……39
Fig. 32　第３号焼土壙（下層）実測図（縮尺 1/40）……40
Fig. 33　第３・５号焼土壙出土土器実測図（縮尺 1/3）……41
Fig. 34　第２号鍛冶炉周辺鍛造剝片出土状態（縮尺 1/40）……43
Fig. 35　第１号集石遺構実測図（縮尺 1/30）……46
Fig. 36　集石遺構より下層出土土器実測図（縮尺 1/3）……47
Fig. 37　第１号道状遺構実測図（縮尺 1/80）……48
Fig. 38　Ⅱ区各 Pit 出土土器実測図（縮尺 1/3）……50
Fig. 39　各柱穴出土鉄器実測図（縮尺 1/2）……52
Fig. 40　整地層出土須恵器実測図（その１）（縮尺 1/3）……54
Fig. 41　整地層出土須恵器実測図（その２）（縮尺 1/3）……55
Fig. 42　整地層出土土師器実測図（その１）（縮尺 1/3）……56

Fig. 43　整地層出土土師器実測図（その２）（縮尺 1/3）……60
Fig. 44　整地層出土土師器実測図（その３）（縮尺 1/3）……62
Fig. 45　整地層出土土師器実測図（その４）（縮尺 1/3・1/6）……64
Fig. 46　整地層出土緑釉他実測図（縮尺 1/3）……66
Fig. 47　整地層出土塼仏実測図（実大）……66
Fig. 48　整地層出土鉄器実測図（縮尺 1/2）……67
Fig. 49　整地層出土磨製石斧・砥石実測図（縮尺 1/2）……67
Fig. 50　整地層出土打製石鏃等実測図（縮尺 2/3）……68
Fig. 51　第１・２号火葬土壙実測図（縮尺 1/20）……69
Fig. 52　第２号火葬土壙出土数珠玉実測図（実大）……70
Fig. 53　第３・４号火葬土壙実測図（縮尺 1/20）……71
Fig. 54　第３号火葬土壙出土土器実測図（縮尺 1/3）……72
Fig. 55　第３号火葬土壙出土鉄釘実測図（縮尺 1/2）……72
Fig. 56　第４号火葬土壙出土土器実測図（縮尺 1/3）……73
Fig. 57　第５号火葬土壙出土土器実測図（縮尺 1/3）……73
Fig. 58　第５・６号火葬土壙実測図（縮尺 1/20）……74
Fig. 59　第６号火葬土壙出土磁器実測図（縮尺 1/3）……75
Fig. 60　第７・８号火葬土壙実測図（縮尺 1/20）……76
Fig. 61　第７号火葬土壙出土土器実測図（縮尺 1/3）……77
Fig. 62　第８号火葬土壙出土土器実測図（縮尺 1/3）……77
Fig. 63　第９・10号火葬土壙実測図（縮尺 1/20）……78
Fig. 64　第10号火葬土壙出土土器実測図（縮尺 1/3）……79
Fig. 65　第11・12号火葬土壙実測図（縮尺 1/20）……80
Fig. 66　第11号火葬土壙出土土器実測図（縮尺 1/3）……81
Fig. 67　第13・14・15号火葬土壙実測図（縮尺 1/20）……81
Fig. 68　第15号火葬土壙出土土器実測図（縮尺 1/3）……82
Fig. 69　Ⅱ区土壙墓集中部分遺構配置図（縮尺 1/80）……83
Fig. 70　第１・２号土壙墓実測図（縮尺 1/40）……84
Fig. 71　第１号土壙墓出土土器実測図（縮尺 1/3）……85
Fig. 72　第２号土壙墓出土銅銭拓影（縮尺 2/3）……86
Fig. 73　第３・４号土壙墓実測図（縮尺 1/40）……88
Fig. 74　第５・６号土壙墓実測図（縮尺 1/40）……89
Fig. 75　第７～11号土壙墓実測図（縮尺 1/40）……90

Fig. 76　第９号土壙墓出土土器実測図（縮尺 1/3）……91
Fig. 77　第12号土壙墓実測図（縮尺 1/40）……92
Fig. 78　第12号土壙墓出土染付実測図（縮尺 1/3）……93
Fig. 79　第12号土壙墓出土銅銭拓影（縮尺 2/3）……94
Fig. 80　土壙墓群西斜面出土石塔残片実測図（縮尺 1/3）……95
Fig. 81　既改葬近世墓出土銅銭拓影（縮尺 2/3）……97
Fig. 82　近世墓地出土の近世遺物実測図（縮尺 1/3）……98
Fig. 83　近世墓地墓石配置図（縮尺 1/100）……101
Fig. 84　板碑概測図（縮尺 1/10）……103
Fig. 85　高橋縫磨墓石概測図（縮尺 1/20）……103
Fig. 86　Ⅰ区北西端土層実測図（縮尺 1/80）……104－105
Fig. 87　鍛冶工房想像図……116
Fig. 88　奈良尾遺跡出土土師器の法量（糸切底のみ）……123
Fig. 89　大宰府SD1805（1501年）出土土師器法量と奈良尾のものとの比較……124
Fig. 90　糸島地方中世末期土器編年表……126

表　目　次

頁

Tab.　1　今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書一覧……1
Tab.　2　今宿バイパス関係埋蔵文化財発掘調査の実績一覧（県調査分）……2・3
Tab.　3　今宿バイパス関係埋蔵文化財発掘調査の実績一覧（福岡市調査分）……4
Tab.　4　今宿バイパス関係埋蔵文化財発掘調査の実績一覧（前原町調査分）……4
Tab.　5　第２号鍛冶炉周辺鍛造剝片採集一覧表……44
Tab.　6　第２号火葬土壙出土数珠玉計測表……70
Tab.　7　火葬土壙一覧表……83
Tab.　8　中・近世土壙墓一覧表……95
Tab.　9　15・16世紀火葬土壙地名表……118～121
Tab.　10　15・16世紀原田氏の被支配関係概略……128
Table.　1　供試材の履歴と調査項目……108
Table.　2　鉄滓・鍛造剝片・湯玉・砂鉄の科学組織……113
Table.　3　奈良尾出土鉄滓（E901B②）
電算機プログラムによる高速定性分析結果……114
Table.　4　奈良尾出土鉄滓（E901B①）
電算機プログラムによる高速定性分析結果……114

Ⅰ．調査の経過

前原町内の国道202号線今宿バイパス予定地内埋蔵文化財は、14地点分が分布調査であげられていた。このうち古野遺跡、上鑵子遺跡については昭和46～47年度に本調査が終了している。しかし、その後の路線の変更により、新たに分布調査・試掘調査が行われた。

Tab. 1　今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書一覧

番　号	副　　題	収録した遺跡	報　告　者	備　　考
第１集	福岡市大字拾六町所在の遺跡群	湯納遺跡 宮の前遺跡・Ｅ地点 高崎古墳群 大又遺跡	浜田　信也 酒井　仁夫 浜田 副島　邦弘	1969年調査 1970報告
第２集	福岡市大字徳永・飯氏所在の遺跡	若八幡古墳 飯氏馬場遺跡 飯氏鏡原遺跡	柳田康雄、浜田、副島 永井　昌文 柳田、副島、浜田	1970・71年調査 1971年報告
第３集	福岡市西区大字拾六町所在の遺跡	高崎古墳群 大又遺跡	栗原　和彦 上野　精志	1971年調査 1973年報告
第４集	福岡市西区大字拾六町所在湯納遺跡の調査	湯納遺跡	青峰重範、松本　昂 林　弘也、山本輝雄 栗原、上野、馬田弘稔	1971・72年調査 1976年報告
第５集	福岡市西区・糸島郡前原町所在遺跡の調査	湯納遺跡 今宿大塚南遺跡 今宿高田遺跡 今宿小塚遺跡 糸島平野条里及び古野遺跡 上鑵子遺跡	沢村　　仁 松本、林 細川　隆英 粉川　昭平 弓場　紀知 栗原、柳田 上野、馬田	1971・72・73年調査 1977年報告
第６集	糸島郡前原町大字波多江所在「波多江遺跡」	波多江遺跡	松本、林、大澤正己 丸山雍成、橋口達也 高橋　章、馬田	1978年調査 1982年報告
第７集	糸島郡二丈町深江・大入地区所在遺跡の調査	塚田遺跡 鎮懐石八幡宮裏古墳 赤岸遺跡	大澤、橋口、中間 橋口達也 中間研志	1979年調査 1982年報告
第８集	石崎・曲り田遺跡Ⅰ	曲り田遺跡	橋口達也、中間研志 上原周三、長　哲二	1980・81年調査 1983年報告
第９集	石崎・曲り田遺跡Ⅱ	曲り田遺跡	佐々木稔、大澤正己 東村武信、藁科哲男 船越公威 橋口達也、中間研志	1980・81年調査 1984年報告
第10集	今宿高田遺跡	今宿高田遺跡	大澤正己、橋口達也 佐々木隆彦	1982年調査 1984年報告
第11集	石崎・曲り田遺跡Ⅲ	曲り田遺跡	橋口達也、中間研志 佐々木稔、村田朋美、 伊藤　薫	1980・81年調査 1985年報告
第12集	東・太田遺跡	太田遺跡	橋口　達也 佐々木隆彦	1983年調査 1985年報告
第13集	奈良尾遺跡	奈良尾遺跡	大澤正己、八尋和泉 日高正幸、中間研志	1989年調査 1991年報告

Tab. 2　今宿バイパス関係埋蔵文化財発掘調査の実績一覧（県調査分）

地点番号	遺跡名	所在地	調査所要区間			既調査面積				
			長さ	幅	面積	44年度	45年度	46年度	47年度	48年度
1	遺物散布地	福岡市西区大字拾六町	34m	28m	520m²	45m²	m²	m²	m²	m²
2	〃	〃	52	50	2,600	63				
3	湯納遺跡	〃	280	40	11,200	168		1,200	4,612	
3	〃	〃	30	20	600					450
4	宮の前遺跡	〃	110	40	4,400	400				
5	高崎1·2古墳	〃	36	15	540	160				
6	大又遺跡	〃	57	20	1,140	300		900		
6	高崎3·4·5号墳	〃	40	15	600	200		249		
7	須恵器散布地	〃	55	20	1,100	27				
8	弥生散布地	〃	33	39	1,287					
9	若八幡古墳	福岡市西区徳永	50	40	2,000		1,100			
10	馬場遺跡	福岡市西区飯氏	70	70	4,900		290			
11	鏡原遺跡	〃	70	50	3,500		550			
12	条里遺跡	福岡市西区大字飯氏～糸島郡前原町篠原	3,000	40	120,000			136		
13	古野遺跡	糸島郡前原町大字有田·篠原	150	40	6,000			482		
14	上鑵子遺跡	糸島郡前原町大字有田	70	30	2,100			304	630	
15	遺物散布地	〃	300	30	9,000					
16	古墳2基	糸島郡前原町	30	30	900					
17	遺物散布地	〃	100	30	3,000					
18	〃	〃	40	30	1,200					
19	今宿高田遺跡	福岡市西区大字今宿高田	50	40	2,000					
19′	今宿大塚南遺跡	福岡市西区大字今宿	100	40	4,000					650
20	今宿小塚遺跡	福岡市西区大字今宿女原	30	40	1,200					500
21	遺物散布地	糸島郡前原町	250	20	5,000					
22	〃	〃	50	40	2,000					
23	〃	〃	100	20	2,000					
24	〃	〃	230	20	4,600					
25	奈良尾遺跡	糸島郡前原町大字多久	110	100	11,000					
26	〃	〃	200	20	4,000					
27	太田遺跡	糸島郡前原町東	300	30	9,000					
28	石崎曲り田遺跡	糸島郡二丈町大字石崎字曲り田	200	30	6,000					
29	遺物散布地	糸島郡二丈町大字上深江	100	40	4,000					
30	〃	糸島郡二丈町大字深江	100	40	4,000					
31	〃	〃	100	30	3,000					
(32)	鎮懐石八幡宮裏古墳	〃								
(33)		糸島郡二丈町大入								
(34)	赤岸遺跡	〃								

既調査面積									備考
53年度	54年度	55年度	56年度	57年度	58年度	59年度	平元年度	計	
㎡	㎡	㎡	㎡	㎡	㎡	㎡		45	調査不要
								63	〃
								5,980	発掘調査終了·報告書既刊
								450	〃
								400	報告書既刊
								160	発掘調査終了·報告書既刊
								1,200	〃
								449	〃
								27	調査不要
								0	消滅
								1,100	保存確定·報告書既刊
								290	調査終了·報告書既刊
								550	〃
3,360								3,496	調査終了·報告書既刊
								482	〃
								934	〃
									路線変更のため調査不要
									〃
									旧追1
				2,000				2,000	旧追2·58年度報告
								650	旧追2·調査終了·報告書既刊
								500	旧追3　〃
							11,000	11,000	平成2年度報告
					2,700			2,700	58年度調査·59年度報告
		2,000						2,000	調査終了・57～58年度一部報告 59年度一部報告
		100						100	遺構なし
	3,000							3,000	調査終了·56年度報告
									調査不要
	100							100	調査終了・56年度報告 （二丈浜玉道路）
	30							30	調査終了・遺構なし （二丈浜玉道路）
	224							350	56年度報告（二丈浜玉道路）

Tab. 3　今宿バイパス関係埋蔵文化財発掘調査の実績一覧（福岡市調査分）

地点番号	遺跡名	所在地	調査所要区間			調査年月日	備考
			長さ	幅	面積		
1	大塚遺跡6次	西区大字今宿字大塚	85m	25m	1,200m²	61年9月24日～61年12月29日	平成元年度報告 福岡市埋文報告224集
2	女原遺跡3次	〃　女原字中牟田	150	50	7,500	61年11月10日～62年3月31日 62年7月1日～62年10月31日	〃
3	徳永遺跡1次Ⅰ区	〃　徳永字引地	40	40	1,280	63年4月10日～63年6月10日	平成2年度報告予定
4	〃　Ⅱ区	〃　〃　字松尾	80	30	1,710	63年6月10日～63年10月6日	〃
5	〃　Ⅲ区	〃　〃	60	30	1,760	平元年1月17日～元年3月31日	
6	〃　Ⅳ区	〃　〃　字中尾	50	30	1,310	元年3月1日～元年3月31日	
7	蓮町遺跡1次Ⅰ区	〃　飯氏字蓮町	50	30	1,080	元年4月20日～元年7月20日	
8	〃　Ⅱ区	〃　〃	50	30	1,210	元年4月20日～元年7月20日	
9	飯氏遺跡群3次Ⅰ区	〃　字井尻他	140	50	6,900	元年5月15日～2年1月10日	950m²は3年1～2月調査予定
10	〃　Ⅱ区	〃　字馬場	45	20	650	2年1月18日～2年3月31日 2年7月10日～2年8月10日	県10地点（飯氏馬場遺跡）
11	〃　Ⅲ区	〃　字鏡原	170	55	9,200	元年8月15日～2年3月31日	県11地点（飯氏鏡原遺跡）
12	周船寺遺跡6次	〃　千里字屋形町他	200	40	7,500	2年4月1日～2年9月14日	県12地点

Tab. 4　今宿バイパス関係埋蔵文化財発掘調査の実績一覧（前原町調査分）

地点番号	遺跡名	所在地	調査所要区間			既調査面積				備考
			長さ	幅	面積	62	63	元	2	
12－2	池田東遺跡群	前原町大字池田	500m	45m	22,500m²	m²	m²	m²	18,000m²	2年度終了予定
13－1	名称未定	〃　篠原	90	45	4,050				4,050	調査終了
13－2	〃	〃　有田	110	45	4,950				4,950	2年度終了予定
13－3	〃	〃　有田	120	45	5,400				5,400	調査終了
14－2	〃	〃　有田	100	50	5,000			800		〃
14－3	〃	〃　有田	100	50	5,000			300		〃
15	多久口木古墳群	〃　多久	120	50	6,000	1,800				〃
16		〃　多久	10	50	500					試掘のみ 遺構なし 調査終了
17		〃　多久	60	50	3,000					〃　〃
18		〃　多久	70	80	5,600					〃　〃
21		〃　多久	200	80	16,000					〃　〃
22		〃　多久	150	60	9,000					〃　〃
23		〃　東	110	50	5,500					〃　〃
24		〃　東	250	60	15,000					〃　〃
25	東真方（マガタ）古墳群	〃　東	220	50	11,000		1,800			調査終了
26	東真方遺跡	〃　東	275	80	22,000		1,700			調査終了

昭和61年度からは、福岡市域内の分についての発掘調査は、福岡市教育委員会が担当することになり、現地の発掘調査は、平成２年度ですべて終了した。(Tab. 3参照) 一覧表については県教委調査分と重複するものもあり、混乱をさけるため、別途に掲載することとした。

昭和62年度からは、前原町内分に関しては前原町教育委員会文化課が委託を受けて調査を担当することになった。

平成元年度になると、用地買収も進み、国体開催にむけてという目標もあり、工事計画も急ピッチで進むようになった。そのため、前原町教育委員会だけでの対応は困難となり、建設省九州地方建設局福岡国道事務所と県文化課、前原町教委の三者での協議が重ねられた。

その結果、前原インターチェンジとなる部分の約73,000㎡の試掘調査を前原町教委の事業で県文化課の職員を派遣して実施することとなった。試掘調査は平成元年11月２日～11月30日まで、重機と作業員を導入して実施した。近代墓地で改葬時の掘削が著しい部分を除き、谷部水田部も含めてほぼ全面に60本のトレンチを入れた。試掘面積は合計2,383㎡に及んだ。

この試掘調査の結果、東側の尾根の北及び西斜面に、弥生・中世の遺構が確認され、当初予想された古墳群は皆無であることが判かった。本調査を必要とする範囲は11,000㎡となり、引き続き本調査に入ることとなった。

本調査は平成元年12月１日～平成２年３月19日まで、県教育委員会が事業主体となり実施した。この冬は特に雨や雪の多い年で斜面を主とする作業であったため、吹き上げる北風にふるえ上がりながらの発掘であった。

なお、調査組織は以下のとおりである。

〈試掘調査〉

総　括	前原町教育委員会	教育長	河原　吉美
	〃	文化課長	岸原　重美
	〃	文化係長	吉村　耕治
庶務会計	〃	文化振興係長	中園　俊二
調査担当	〃	文化財係主事	川村　博
	〃	〃	角　浩行
	福岡県教育庁指導第二部文化課	技術主査	中間　研志
	〃	臨時職員	日高　正幸

〈本調査・整理〉

総　括	福岡県教育委員会	教育長	御手洗　康
	〃	指導第二部長	月森清三郎

	福岡県教育委員会	文化課長	六本木聖久
	〃	文化課課長補佐	平　聖峰（前任）
	〃	〃	安野　義勝
	〃	文化課課長技術補佐	宮小路賀宏（前任）
	〃	〃	石松　好雄
	〃	文化課参事補佐	柳田　康雄
	〃	〃	井上　裕弘
庶務会計	〃	文化課管理係長	池原　脩二
	〃	文化課管理係主任主事	沢田　俊夫
調査担当	〃	文化課技術主査	中間　研志
	〃	文化課文化財専門員	日高　正幸

発掘作業員　高岡　早苗、川上　豊子、柴崎　末子、坂本　悦子、中原マチ子、井上ハルエ、東司テルコ、川上モモエ、森山シゲミ、川上ハルエ、溝口よしの、有富つたえ、行弘カツ子、行弘　ユキ、青柳　玲子、青木　敦子、武内　恵美、筒井アサ子、大塚フサ子、大谷ナヲ子、青木シゲ子、溝口イツ子、井上カツ子

なお、前原町教育委員会の諸氏には、本調査・整理の段階でも全面的な協力をいただいた。また、建設省九州地方建設局福岡国道工事事務所の各氏には、度々の現地協議に御足労いただいた。さらに、新日本製鉄株式会社中央研究本部八幡技術研究部の大澤正己氏には、鍛冶関連遺構や鍛造剝片等についての現地指導をいただいた。なお、福岡市教育委員会担当分の今宿バイパス関係遺跡の状況については、同市埋蔵文化財課の松村道博氏に御教示いただいた。以上の各氏については、心から感謝の意を表したい。

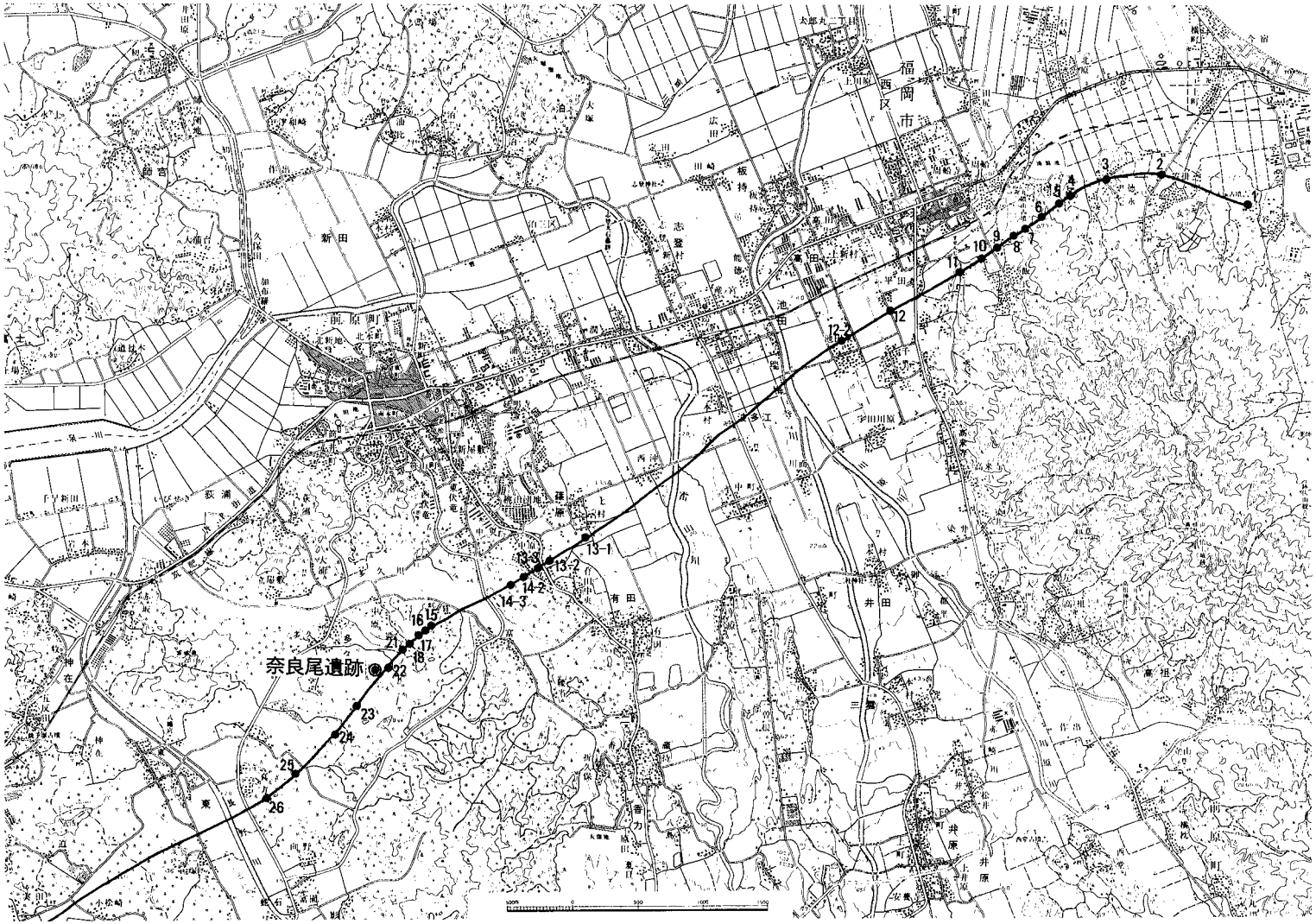


Fig. 1　今宿バイパス路線内遺跡（1/50,000）（番号は，福岡市・前原町調査分の一覧表と同じ）

Ⅱ　位置と環境

本遺跡（今宿バイパス第25地点、奈良尾遺跡）は、糸島郡前原町大字多久839－１、842－１、844－１、989－１・２、990－１・２、991－1番地に所在する。北緯33°32′14″、東経130°14′2″に位置する。

糸島半島の西側に大きく入り込む加布里湾に流入する河川は、東方から雷山川、南～南東から長野川・多久川が合流する泉川がある。この３河川にはさまれて、雷山山塊より派生して広がる標高100ｍ前後の丘陵がみられる。この丘陵は周縁から細い谷が入りくんでおり、軟弱な花崗岩の風化土を基盤としている。

奈良尾遺跡はこうした狭い谷にはさまれた、小丘陵の先端から300ｍ余入りこんだ小尾根の斜面に位置する。標高35～22ｍで、谷の水田面からの比高10ｍ弱となる。遺跡の立地としては、とても絶好の地とは言えない。むしろ、大きな谷から更に入り込んだ奥の山かげの見るからにさびしい場所と言った方がふさわしい。

この近辺の遺跡は、西方2.7㎞にある一貴山銚子塚前方後円墳(註1)、西北西２㎞にある大円墳釜塚(註2)の２例が有名である。いずれも国指定史跡で、糸島平野の西口をおさえる重要な位置を占めている。

しかし、他の主要な遺跡は意外と知られておらず、近年になって、バイパスの建設、長野川流域の県営ほ場整備事業、住宅都市整備公団による大規模宅地開発等によって、少しずつ遺跡の解明が進んできている。

旧石器時代・縄文時代の遺跡は希薄で、本石ヶ崎で押型文土器片が採集されているほか、南方へ3.5㎞の長野宮の前遺跡(註3)で、後期の磨消縄文系土器が出土している。

弥生時代になると、南西４㎞の曲り田・石崎遺跡群(註4)が当初期の遺跡として著名である。もっと近辺でも、長野川に面する沖積地の山裾や自然堤防上に集落が形成され始める。西方の宮地岳裾縁辺から、本や東にわたる微高地上に、弥生後期以降の住居群が営まれている。近年、三雲や井原周辺の集落の拡がりが明らかになりつつあるが、その巨大さに比べて、本遺跡周辺の弥生住居群は、小規模なものが点在するという、明らかな隔差がみられる。

甕棺墓地についてみても、1.9㎞西北西の神在周辺、北方へ1.5㎞の伏竜の台地上などにかなり調査されているが、これも曽根丘陵以東の王墓的あり方とは、全く質的に様相を異にする、一般群集墓である。本書で報告する奈良尾遺跡の甕棺墓地も、住居群があると推定される台地先端から離れて尾根上に営まれた、農耕小共同体の組成員による墓地と考えられる。

古墳時代は、既述した銚子塚・釜塚の当地域では突出した大古墳の他に、長野川による沖積

Fig. 2　奈良尾遺跡位置図（1/15,000）

1.口木１号墳　2.口木２号墳　3.口木３号前方後円墳

地を眼下に見降ろす丘陵先端上に、小古墳・群集墳が多くみられる。小型の前方後円墳では東二塚古墳、横枕古墳、日明11号墳、日明３号墳などがあるが、既述２者に比肩すべくもない規模である。

群集墳は東方の宮地岳斜面に点在し、奈良尾遺跡のある大きな丘陵上でも、密集するような状況ではなく、縁辺に散在する程度である。かなりの部分で密柑をはじめとする果樹園造成が進んでおり、古墳群が残っていない可能性も強い。

また、古墳時代住居も点的に調査されてはいるが、具体的な集落の動向がわかるような結果は出ておらず、今後の課題となろう。

歴史時代のこの地域の重要性については、怡土城、周船司がより直接的な大宰府と係る東の玄関口とすると、この地域は外来者にとって弥生時代以来の上陸目標地（例えば可也山を目印にして船をこいで来るというような）としての西の重要な交通の要衝の地と考えることも可能であろう。二丈町一貴山の夷巍寺跡が奈良時代創建と伝えられるのも、そのあたりの事情を伝えるものであろう。

中世に至るまでの小規模掘立柱建物は、近年この近辺でも各所で調査されている。特に、西南西1.1kmの東五反田遺跡(註5)発見の方形環濠居館跡は、当地方有数の豪族原田氏の屋敷と伝えられている。当時の根拠地がこのあたりだとすると、本書で報告する火葬土壙群への外来陶磁器類の供献が、他遺跡では例をみないほど豊富である事実もうなずけるのである。

註１）　小林行雄「福岡県糸島郡一貴山村田中銚子塚古墳の研究」　1952

２）　前原町教育委員会「釜塚」前原町文化財調査報告書　第４集　1981

３）　前原町教育委員会「長野川流域の遺跡群Ⅰ」前原町文化財調査報告書　第31集　1989

４）　福岡県教育委員会「石崎曲り田遺跡」Ⅰ～Ⅲ今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第８・９・11集　1983～1985

５）　前原町教育委員会が1987年に長野川流域の県営ほ場整備事業に伴って発掘調査を実施し、55×40ｍの環濠とその内側を全面調査した。報告書は近日発刊予定。

Ⅲ　弥生・古墳時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構の存在は、かなり谷の奥に入り込んだ位置であったために、当初予想していなかった。しかし、その後現地踏査の際に、西側頂部の近代墓地のがけ面、即ち第１～３号甕棺墓の北東側で弥生中期土器片を多く採集し、更にその北西側30ｍの斜面で甕棺口縁破片をひ

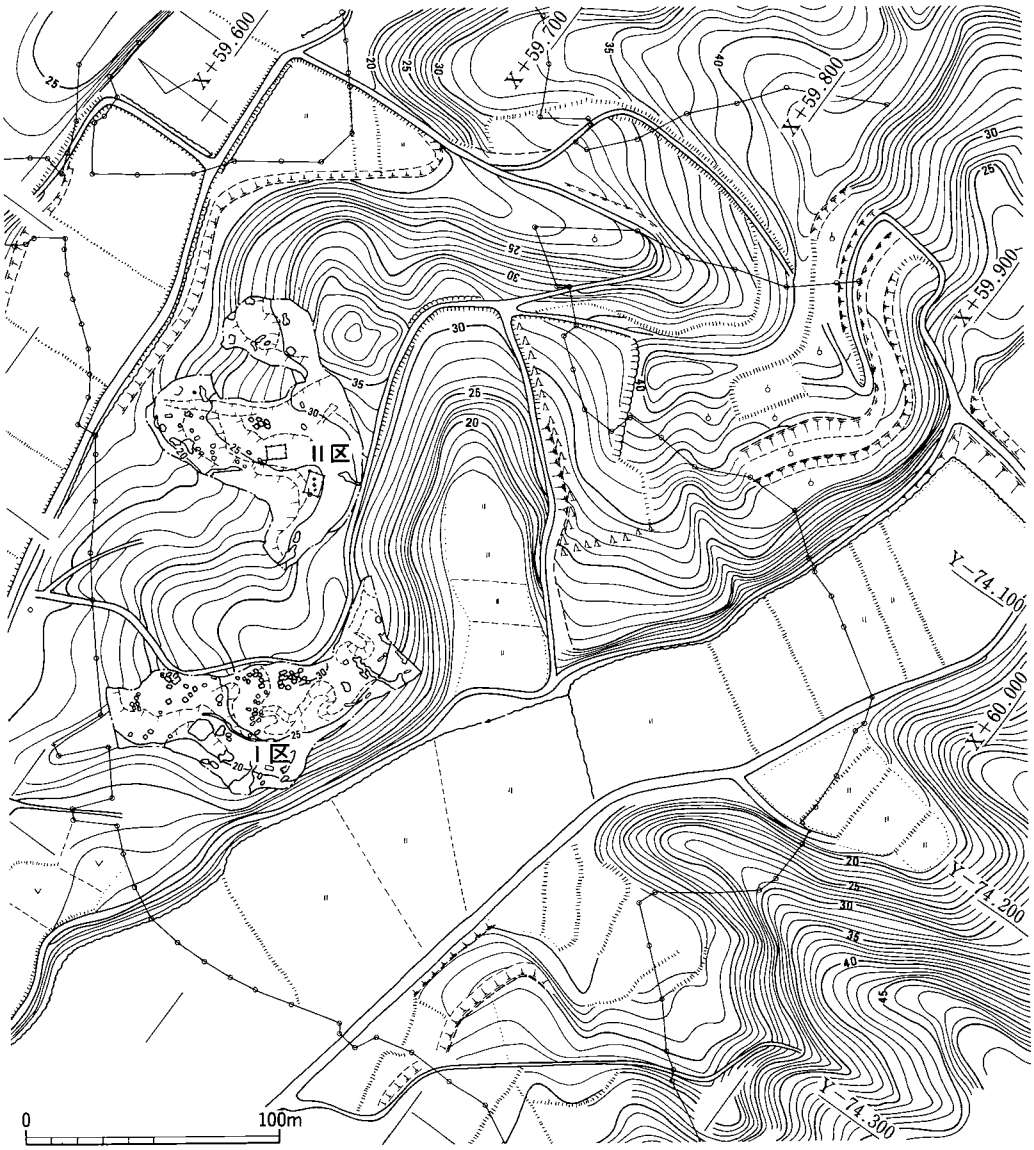


Fig. 3　奈良尾遺跡地形図（1/3000）

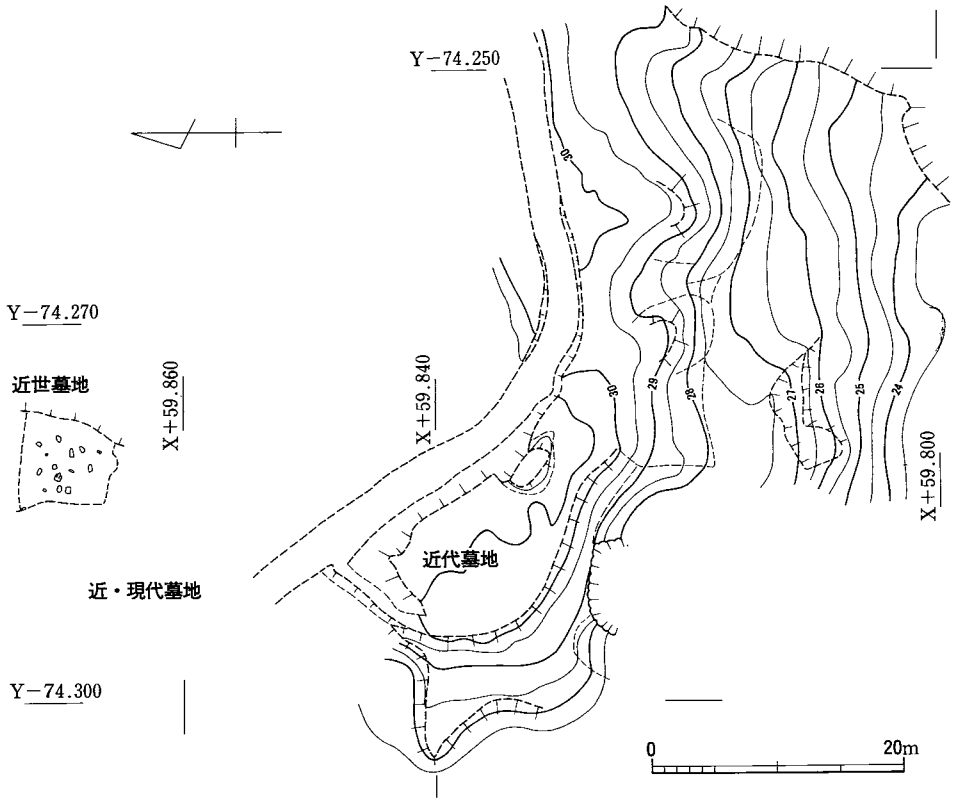


Fig. 4　Ⅰ区現況地形図（1/600）

ろったため、この近辺に弥生時代墓地を想定できた。古墳時代については、尾根頂部や東側斜面の地形の凹凸から、群集墳と低墳丘古墳群を予想したが、それに反して試掘の結果は、古墳皆無ということになった。

弥生・古墳時代の遺構の総数は、以下のとおりである。

弥生時代

甕棺墓　4基（成人用2基，小児用2基）

包含層　2個所（西斜面）

古墳時代

包含層　1個所（西斜面で弥生包含層と重複）

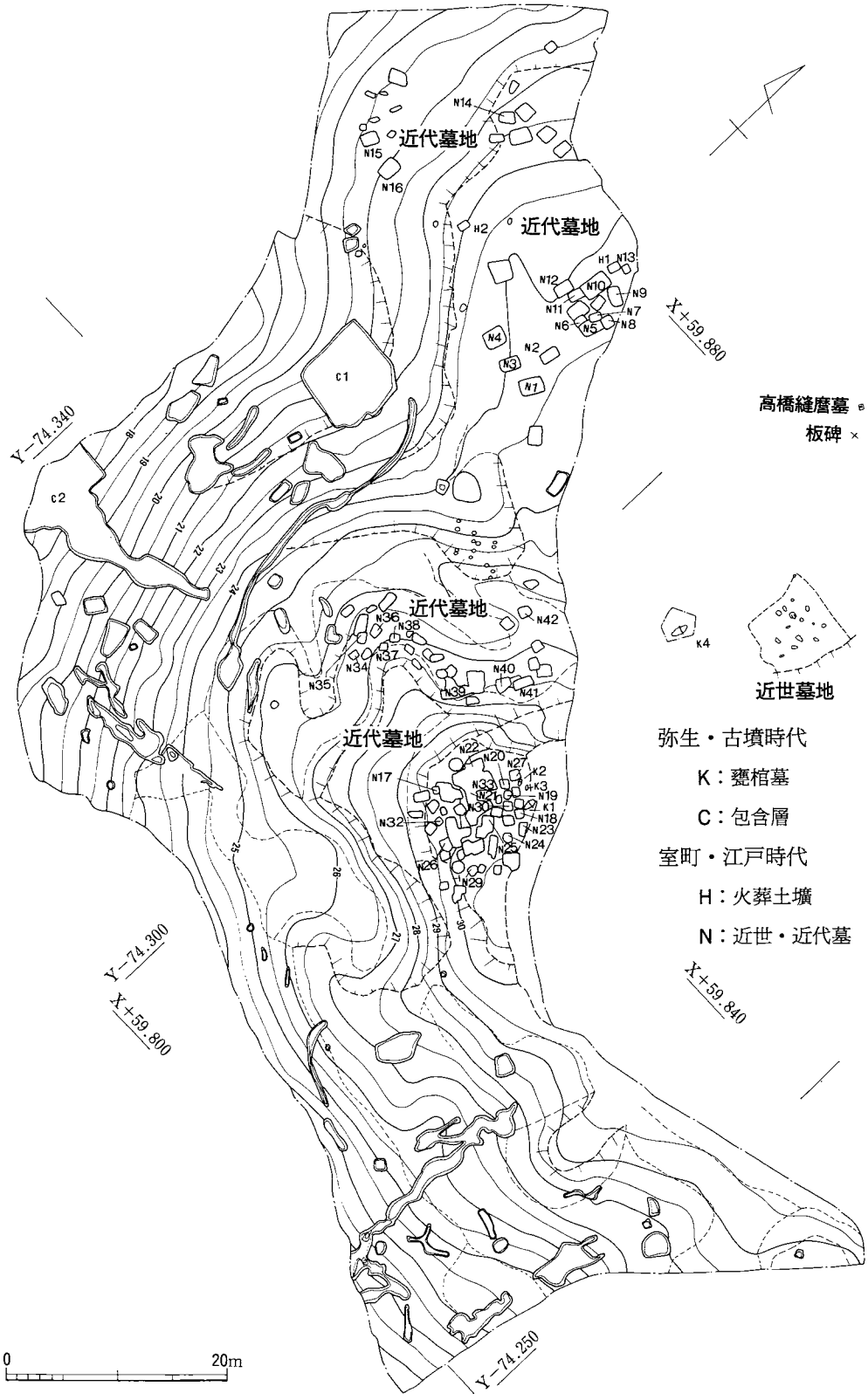


Fig. 5　Ⅰ区遺構配置図（1/600）

A　甕棺墓

第１号甕棺墓

（Fig. 6，PL. 4）

西側尾根の最頂部は近代墓地が密集し、ほぼすべてについて改葬が行われており、それ以前の遺構の存在は知る由も無いほど、完璧に旧地形が改変されていた。そのうち北端に近い部分の、山道の切り通し崖面に墓壙の掘り込みを確認し、検出するに至った。

墓壙は、長さ171cm、幅100cmの長方形気味の平面形を呈し、現存の深さ58cmとなる。南西端の一部を近代墓に切られ、北～北東側は山道の切り通しで削られている。下甕底部差し込み部分の掘り込みは15cmと浅い。

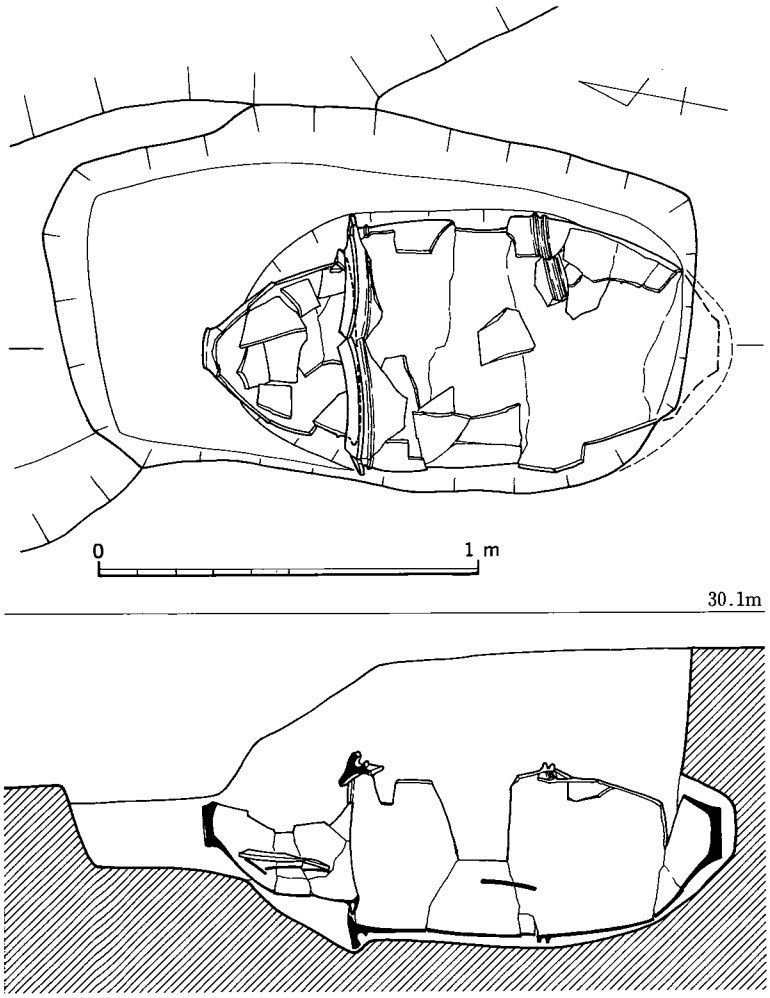


Fig. 6　第１号甕棺墓実測図（1/20）

主軸はＮ11°Ｗで、尾根方向に略平行の関係をとる。棺は、下棺に大形成人用甕を、上棺に鉢形土器を使用する。埋置傾斜角は２°で、ほぼ水平に近い。

粘土目貼り、赤色顔料の使用等は認められず、副葬品や遺骨も残存しなかった。

上棺（Fig. 7，PL. 40）口径51cm、器高38.4cm，底径9.25cmの鉢形土器である。口縁は内端が突出し、口縁下には低い断面三角形凸帯が付けられている。胎土には細・小砂粒を多く含み、焼成良く、内面橙褐色、外面は黒～橙褐色をなしている。口縁にいくらか歪みがみられ、胴部外面下半の一部に黒斑がみられる。口縁～凸帯周辺は横ナデ、胴部内面は丁寧なナデ、外面はハケをナデ消している。

下棺（Fig. 7，PL. 40）口径67.2㎝、器高106.6㎝、底径13.25㎝の細長めの大形棺である。口縁上面は外傾し、典型的T字口縁をなす。口縁下には、外端に小さな面をつくる、「コ」字状凸帯を意識したような三角凸帯を付ける。胴部中位の2条の凸帯は、外端に明瞭な面をつくる「コ」字状凸帯に極めて近いものである。口縁～凸帯周辺は横ナデ、胴部内外面は丁寧なナデ、底部外面もナデている。胴外面下端付近には細かい縦ハケが残る。胴外面上半の一部と、底部付近の一部に黒斑部がみられる。胎土に小砂粒をやや多く含み、赤褐色粒も若干みられる。焼成良く、内面黄褐色、外面は黄褐色～黒色をなす。

以上述べた第1号甕棺は、中期中葉須玖式に含まれるが、「コ」字状凸帯となりつつあることや、口縁下の胴部がわずかにくびれ気味になることなどから、その中でもわずかに後出的傾向を示す型式と考えられよう。

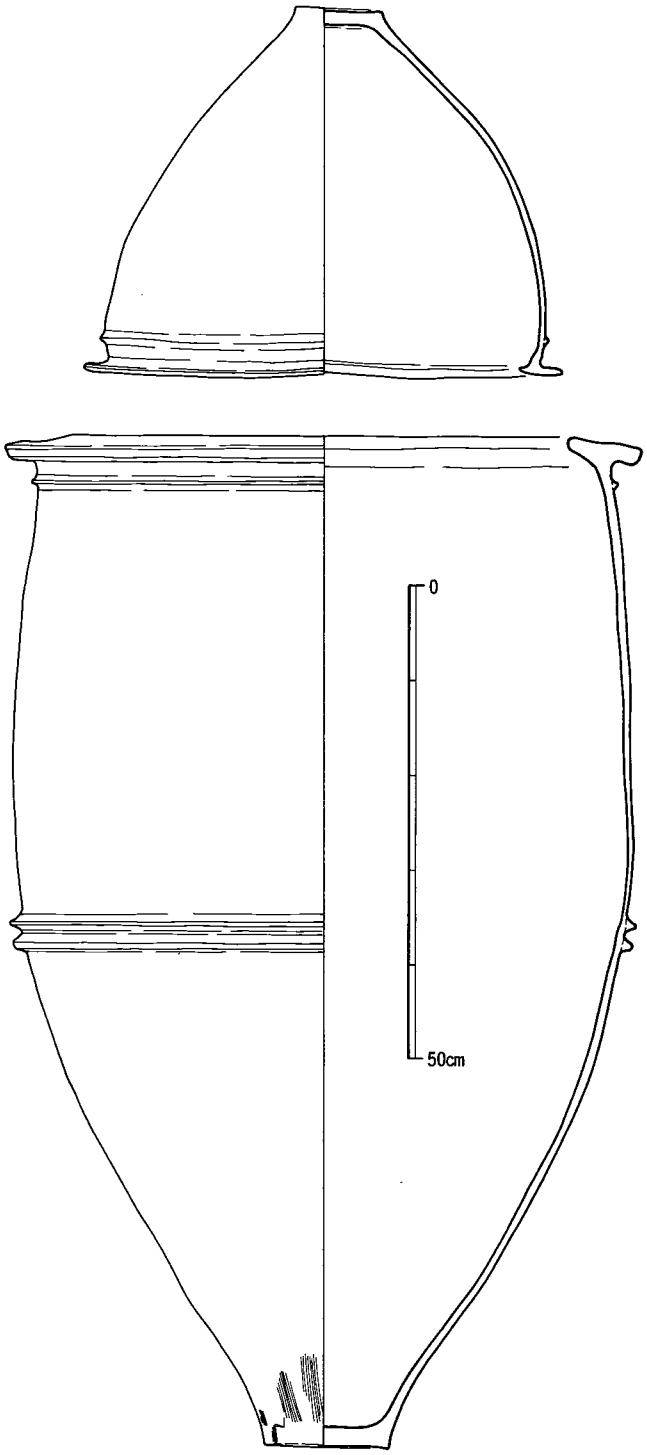


Fig. 7　第1号甕棺実測図（1/8）

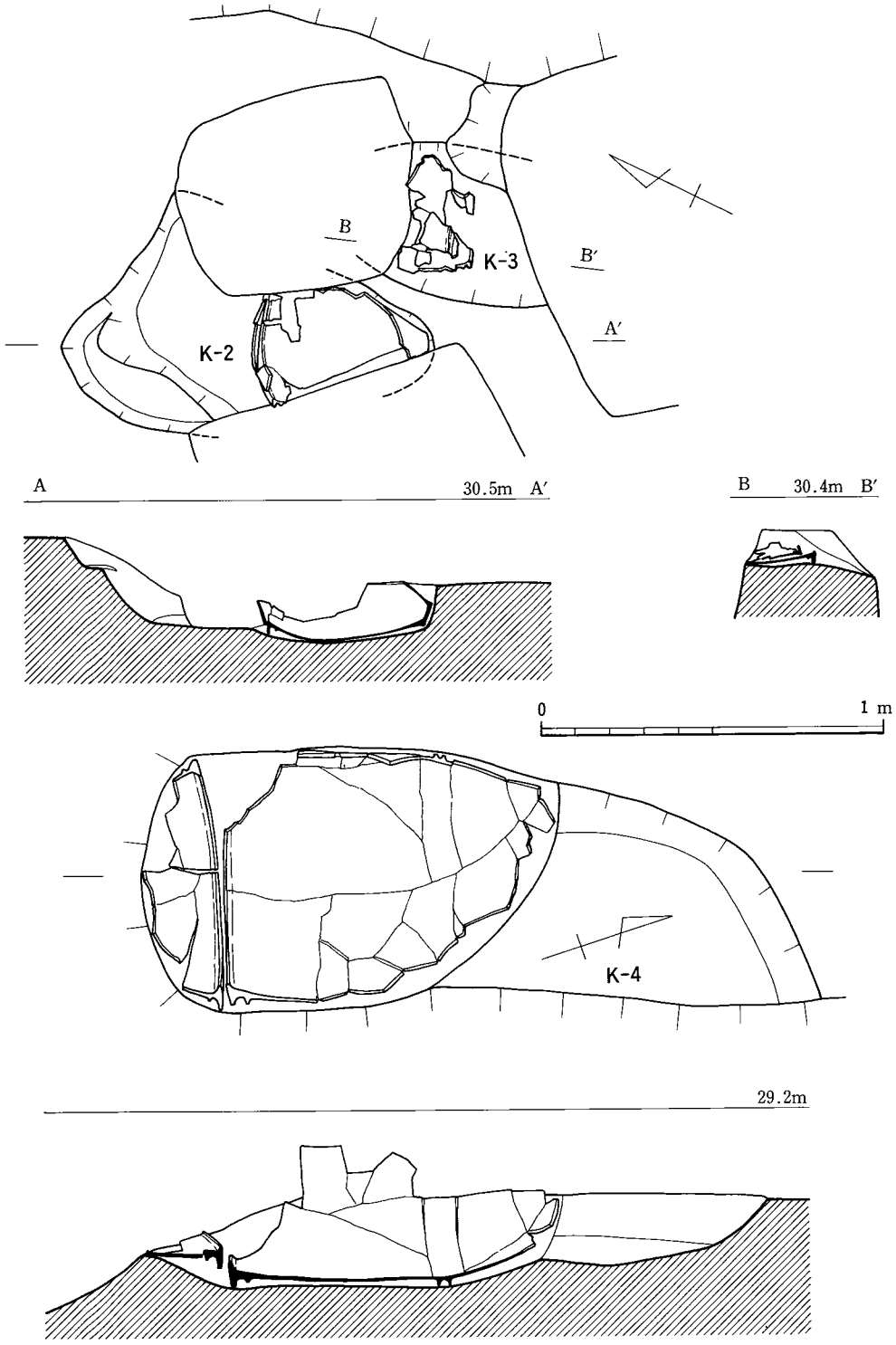


Fig. 8　第２～４号甕棺墓実測図（1/20）

第２号甕棺墓

(Fig. 8, PL. 4)

第１号甕棺墓の西側に隣接して、第２・３号の小児甕棺墓が営まれる。いずれも上面を大きく削平され、残りはよくない。第１号甕棺墓寄りの切り通し崖面から、かなりの量の小型甕片を採集していることから、この近辺には、この２基以外にも小児甕棺墓が複数存在していたと推定される。

墓壙は、東西の両側を大きく近代墓に切られており、かろうじて残存していたという状況であった。棺の主軸は、N 26° 30′ Wにとり、下棺埋置の傾斜角は16° となる。

上棺は蓋形土

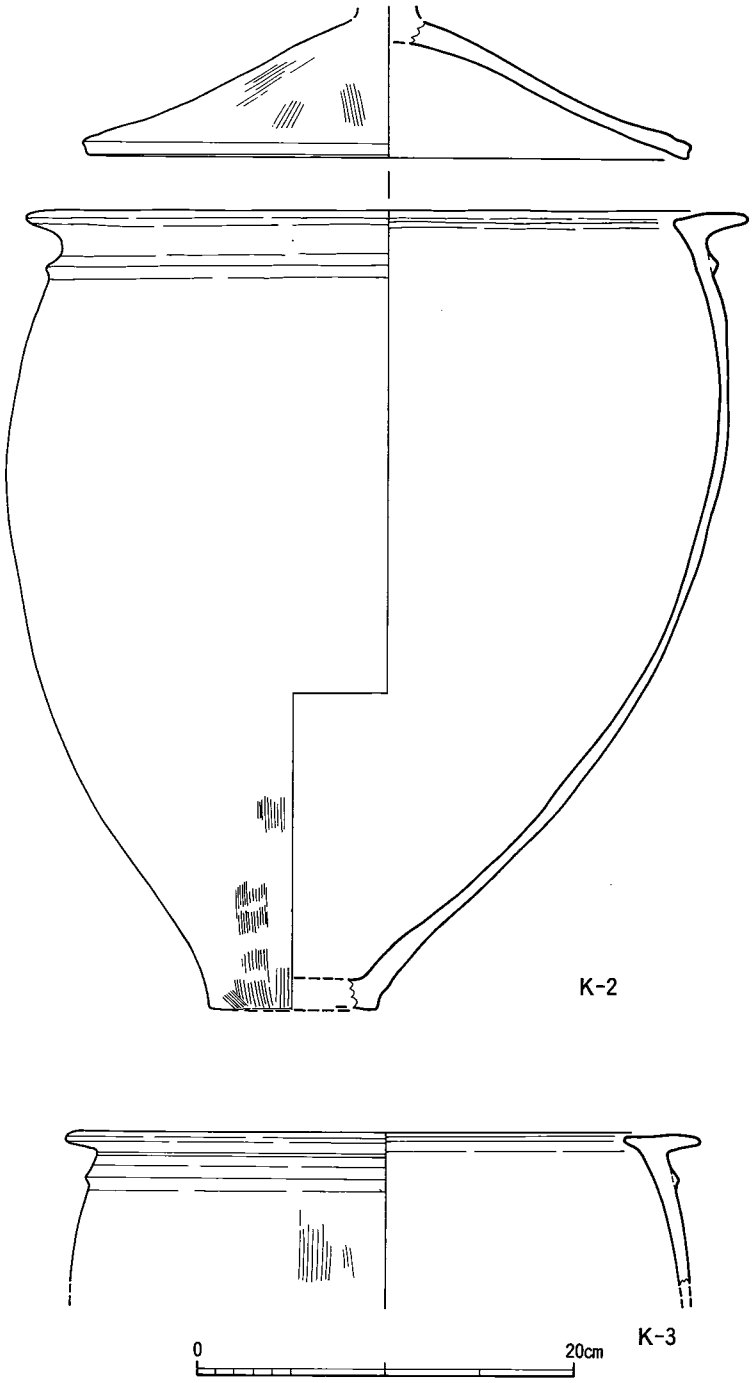


Fig. 9　第２・３号甕棺実測図 (1/4)

器を用い、その口縁片のみが残っていた。下棺は生活土器の甕で、粘土目貼り等は認められない。遺骨、副葬品も皆無であった。

上棺（Fig. 9）復元口径31.8cm、現存器高7.2cmの傘蓋形土器である。口縁外端は凹状につくり、その内外面は横ナデを施す。内面は丁寧なナデ、外面には部分的にハケを残している。胎土に細・小砂粒をやや多く含み、赤褐色粒や雲母片も目立つ。焼成良好で、橙茶色をなす。

下棺（Fig. 9，PL. 40）復元口径38cm、器高41.6cm、底径9cmの甕形の生活土器である。全体の1/4しか残らない。口縁上面は内側がやや内傾気味となり、外面口縁下に低い三角凸帯を付ける。上半で胴部がふくらみをみせる。口縁内外面は横ナデ、胴部内面はナデている。胴部下端外面には縦ハケが残る。胎土に細・小砂粒を若干含み、焼成良く、内面黄橙色、外面は黄橙色～黒色をなす。底部の一部に黒斑部がみられる。

この小児甕棺は、下棺の特徴から中期中葉の須玖式の範囲に含まれるが、口縁がわずかに内傾化傾向をみせることや、口縁下で胴がくびれる方向へむかっていることから、やや後出的と考えられる。

第3号甕棺墓（Fig. 8，PL. 4）

第2号甕棺墓の東南に接し、南北両側を大きく近代墓に切られており、かろうじて残っていたものである。よって、上棺を用いていたかどうかも不明で、全体の様相は詳らかでない。

主軸を略N23°Wにとるが、埋置傾斜角度はほぼ水平と推定されるが、詳細は明らかでない。遺骨、副葬品等、全く残っていない。

下棺（Fig. 9）復元口径32.5cmで、胴上半でふくらみをみせる中型の生活土器を転用したものである。口縁内端が長く突出して、口縁下には低い三角凸帯を付ける。胴部外面には縦ハケが残り、煤が付着している。胎土に細・小砂粒を多く含み、焼成良好で橙茶色をなす。

この小児甕棺は、残りが極めて悪く不明な点が多いが口縁の特徴などから、中期中葉の所産と考えられる。

第4号甕棺墓（Fig. 8，PL. 5）

第1～3号甕棺墓の一群から離れて、北へ約20mの近現代墓地端にて検出した。現状ではこの両者は、山道の切り通しにより隔てられているが、本来、同一尾根上の並びであっと推測される。

上下棺ともに上半を削平され、両端側も大きく失われており、近代墓による攪乱も下棺側に認められる。主軸方位をN18°Eにとり、尾根線に略平行の埋葬と考えられる。下棺の据え方からみて、ほぼ水平埋置と想定される。

上棺は鉢形土器を用い、下棺は大型甕棺を使用している。粘土目貼り、赤色顔料等の使用は

認められない。遺骨、副葬品等は全く残存していない。

上棺 (Fig. 10, PL. 40)

復元口径72cmのやや深い鉢形土器で、胴部下半は欠損している。口縁上面はわずかに内傾し、口縁下の三角凸帯外端は押さえられて、小さな面をなす。胎土に小・細砂粒を若干含み、焼成良好で茶褐色をなす。口縁上面に黒斑部がみられる。口縁～凸帯周辺内外面は横ナデ、胴部内外面ともに丁寧なナデでハケを消している。

下棺 (Fig. 10, PL. 40)

復元口径64cm、胴部最大径70.4cm、器高はゆうに100cmは超える大形棺である。口縁上面がわずかに外傾するT字口縁で、口縁下の凸帯は明らかな「コ」字状をなす。胴部のかなり下がった位置に2条の高い「コ」字状凸帯を付けて、それ以下で急にすぼまってゆく。口縁～凸帯の内外面は横ナデ、胴部内外面は丁寧にナデている。胎土に小礫粒いくらか含み、金雲母もやや目立つ。焼成良好で、内面褐色、外面は黄褐色～黒色をなす。

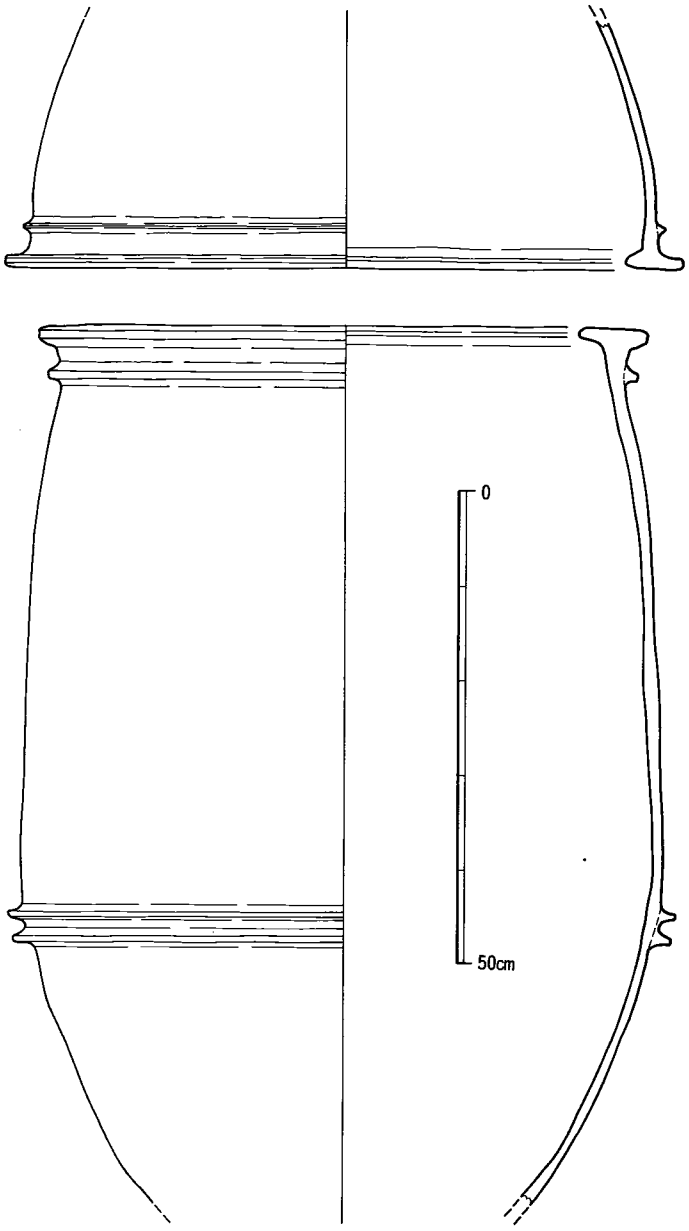


Fig.10 第4号甕棺実測図 (1/8)

この第４号甕棺は、下棺の凸帯が高く典型的な「コ」字状凸帯をなし、第１号甕棺に比べて明らかな後出型式と認められる。中期中葉のうちでも、後葉にかなり近い時期のものと考えられよう。

以上の甕棺墓４基は、小児棺２基を含めて、弥生中期中葉須玖式の範疇に含まれる時期のものである。細かくみると、尾根最頂部の第１～３号甕棺よりも北側尾根上の第４号甕棺の方が新しく、かつて尾根がつながっていた状況を想定すると、その占地の変遷が推測される。

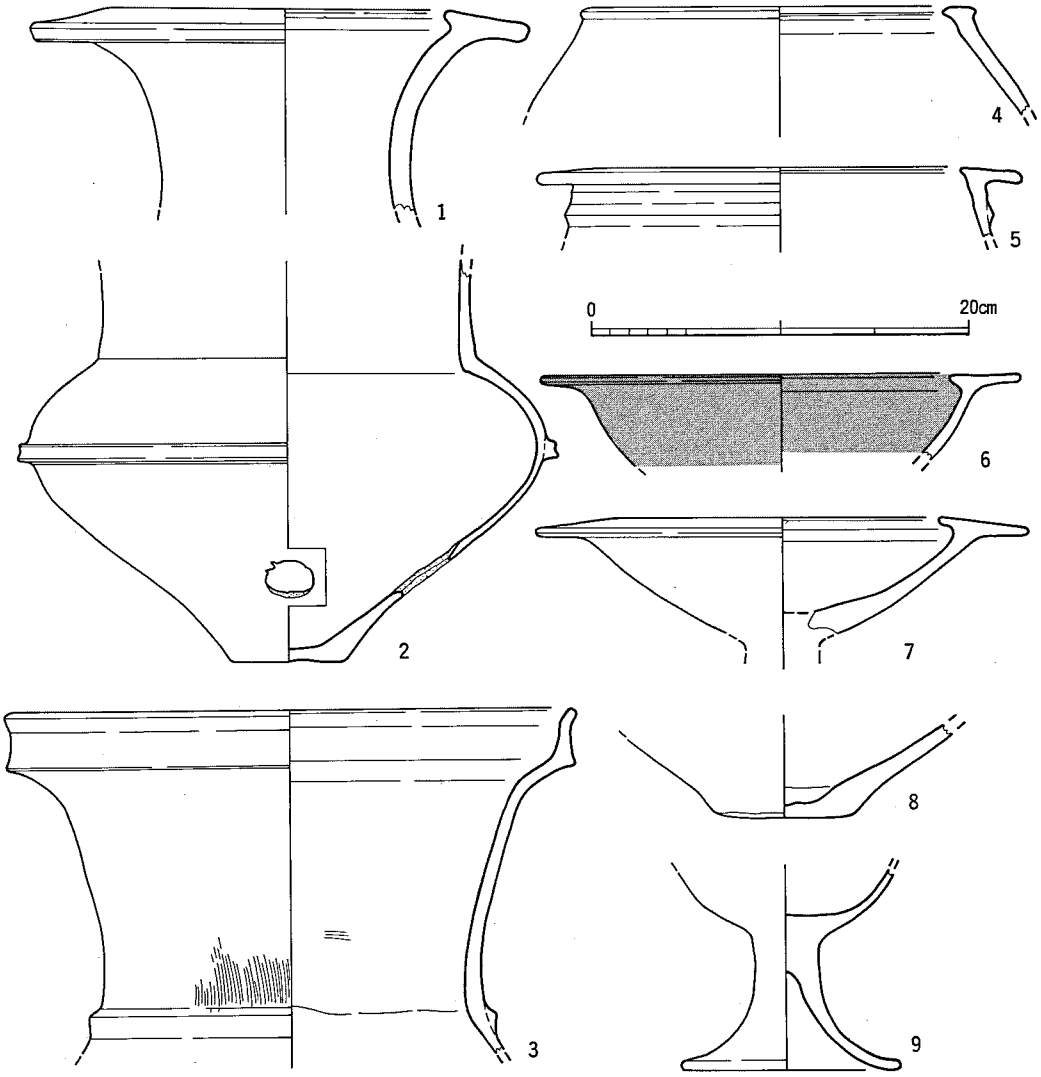


Fig.11　Ⅰ区第１号包含層出土土器実測図（1/4）

また、その墓地の規模は、表採や、近世墓墓壙内に混入の甕棺片の量をも勘案しても、そう大規模な墓地ではなく、大きく見積もっても30基以内の小規模で短期間に営まれた墓地と考えられる。なお、後に述べるⅠ区第１号包含層は、この甕棺墓地に伴う祭祀土器群と考えられる。

B　包含層出土の遺物

Ⅰ区の西斜面中央の谷状の部分に、弥生土器の包含層が認められた。(Fig. 5図中のC－1、PL. 5・6) 8×8ｍの範囲の緩斜面で、黒色土の旧地表面の上に暗黄～赤茶色の土層があり、その中に弥生中～後期の土器が含まれていた。

おそらく、この上方に住居あるいは祭祀土壙等があったものと推測できる。

これをⅠ区第１号包含層と名づけ、以下、出土遺物について報告する。

出土遺物 (Fig. 11・12, PL. 41)

壺（1～4・8）1は鋤先状口縁壺で、2は口唇状凸帯を付ける開口壺で、丹塗り磨研土器となろう。胴下位に祭祀に用いられた、焼成後穿孔がある。3は複合口縁壺。4は無頸壺か。8は大型壺のレンズ状となる底部片で、後期のものと考えられる。

甕（5）口径19.6cmで口縁下に三角凸帯を付ける中型甕である。口縁内端の突出は顕著ではなく、逆Ｌ字口縁の形態を残す。内外面とも磨滅して調整は不明。焼成良好で淡黄橙色を呈する。

高杯（6・7）鋤先口縁の2種である。6は、復元口径25cmで、やや深めの器形となる。全面磨滅しているが、一部に丹塗り痕がみられ、内外面ともに丹塗りが施されていたと考えられる。焼成は良く、地色は褐色をなす。7は、口縁上面が外傾する類で、復元口径26cmとなる。焼成良く橙茶色をなす。磨滅著しいが、おそらく丹塗り土器であったと思われる。

脚付鉢（9）復元底径11.6cmの、小型の脚付品である。椀形の鉢となると思われるが、壺形のものが載る可能性もある。全面磨滅して調整は不明である。焼成良好で、明褐色をなす。

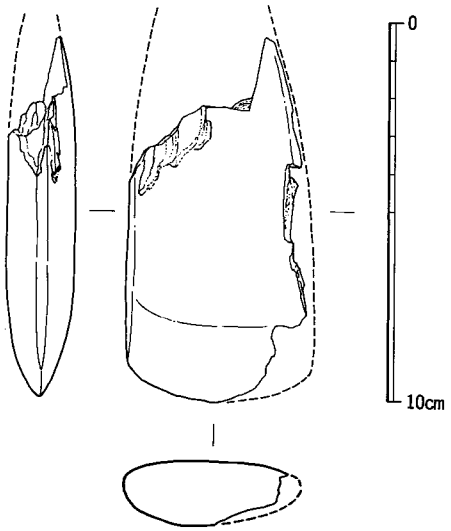


Fig.12　Ⅰ区第１号包含層出土石斧実測図 (1/2)

以上の弥生土器は、5・6が中期中葉、1・2・7・9が中期後葉、3は後期終末期に比

定できる。つまり、甕棺墓の時期とも符合する祭祀土器が主であると考えられる。

磨製石斧（Fig. 12, PL. 41）両刃で全面磨製の小型石斧である。現存長9.6cm、幅5.0cm、厚さ1.7cmで、全体に風化が極めて著しい。緑泥片岩製かと思われるが、表面が黄色化し、表面だけ薄く皮のように残る部分さえある。側面は小さく面取り状をなす。縄文期のものかと思われる。

更に、Ⅰ区最頂部から西側の急斜面下方に、黒色の帯状部が認められた。（Fig. 5図中のC－2、PL. 6）土師器甕と石斧の他は細片のみで図示できないが、古墳時代初頭の包含層と判断できた。このことから、Ⅰ区最頂部には現状では痕跡すら残らないが、古式古墳がかつて営まれた可能性が考えられる。おそらく低墳丘の石材を用いない主体部構造をもつものであったと思われる。

この包含層をⅠ区第2号包含層と名づけ、以下に出土遺物を報告しておきたい。

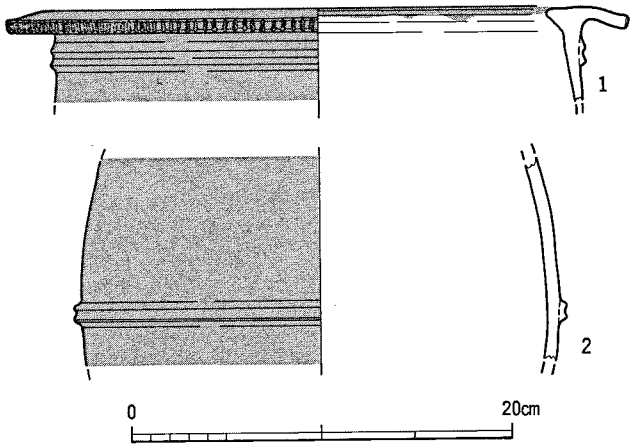


Fig.13　Ⅰ区第2号包含層出土土器実測図（その1）(1/4)

出土遺物

弥生甕（Fig. 13－1・2）口径32.6cmのT字口縁丹塗り甕である。口縁上面は外傾し、端部には刻目を巡らす。口縁下には2連の低い三角凸帯を付ける。胎土精良で、焼成良く、地色は橙茶色をなす。内外面ともに磨滅著しいが、ごく一部に丹塗り痕が残る。2は、樽形状の胴部となるもので、底部の広い類となろう。中位に口唇状に近い凸帯を付ける。復元径は異なるが、1と同一個体である可能性もある。これらは、弥生中期中葉後半～後葉のものであり、甕棺墓地に伴う祭祀品と考えられる。

土師器甕（Fig. 14－3, PL. 41）口径17.6cm、器高20cm、胴部最大径19.6cmを測る中型品である。器壁の薄い球形胴に、外傾する口縁をつける。口唇内面は小さくくぼみ、全体に器表は磨滅している。胴内面下半はナデて指頭圧痕がかなり残り、外面下半には細かいハケが部分的に残る。胎土に細・小砂粒を多く含み、雲母片・赤褐色粒もかなり含む。焼成良好で、橙褐色をなし、外面底部付近は二次火熱を受けて赤変している。また、外面胴部中位～底部にかけては

煤が付着している。この土器は布留新期の古式土師器で、この上方に低墳丘古墳等の存在が推測されるところである。

石斧 (Fig. 15, PL. 41) 急斜面の黒色土包含層出土品で、刃部、側面などの部分的な研磨を施した石斧である。全長13.1cm、最大幅5.7cm、最大厚さ2.1cmを測り、表面体部は原材の自然磨面のままである。緑泥片岩かと思われる河原石状の原材の、いわゆる皮の部分を横ハギして使用している。表面は灰白色に風化している。側面はごく細い幅で研磨して、面取り状をなす。全体にやや反り気味になり、各特徴からみて、縄文後期の所産と考えられる。

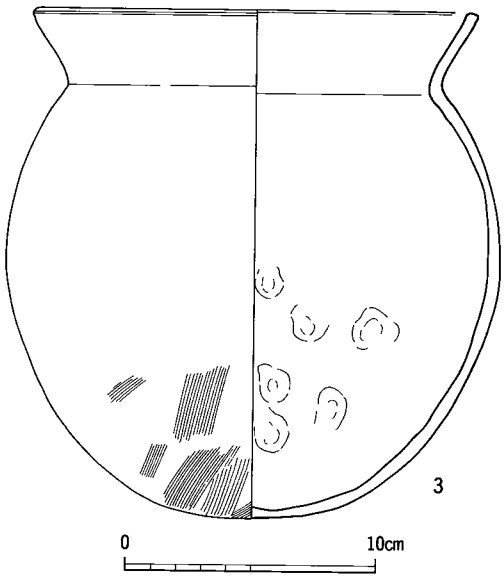


Fig.14　Ⅰ区第2号包含層出土土器実測図（その2）(1/3)

各遺構混入の弥生土器

(Fig. 16)

ここでは、以上に報告した弥生各遺構・包含層出土遺物の他に、他時期の遺構に混入したものや、表面採集の土器を報告しておきたい。

甕 (1・4・5) 1は、第19号近世墓墓壙内に混入した中型甕で、口径32.8cmを測る。口縁内端が突出し、胴上半でふくらみをみせる器形をなす。焼成良く、黄褐色をなす。口縁外下面に煤が付着する。

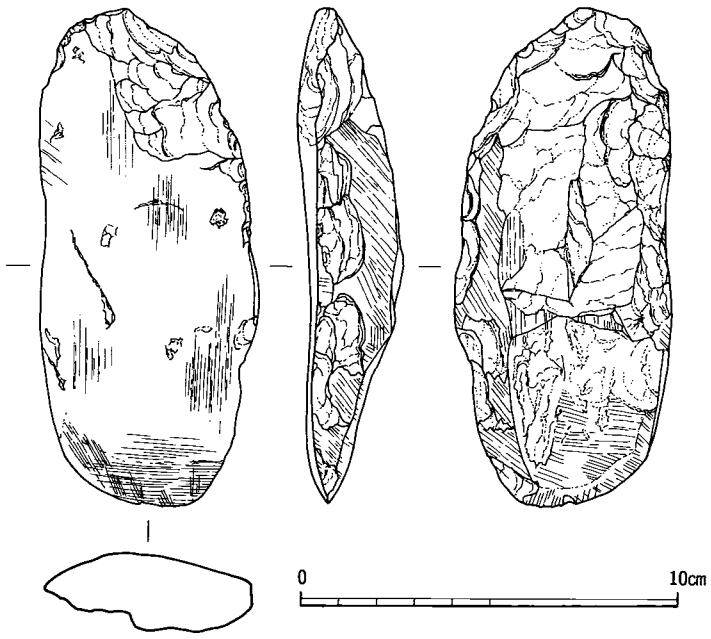


Fig.15　Ⅰ区第2号包含層出土石斧実測図 (1/2)

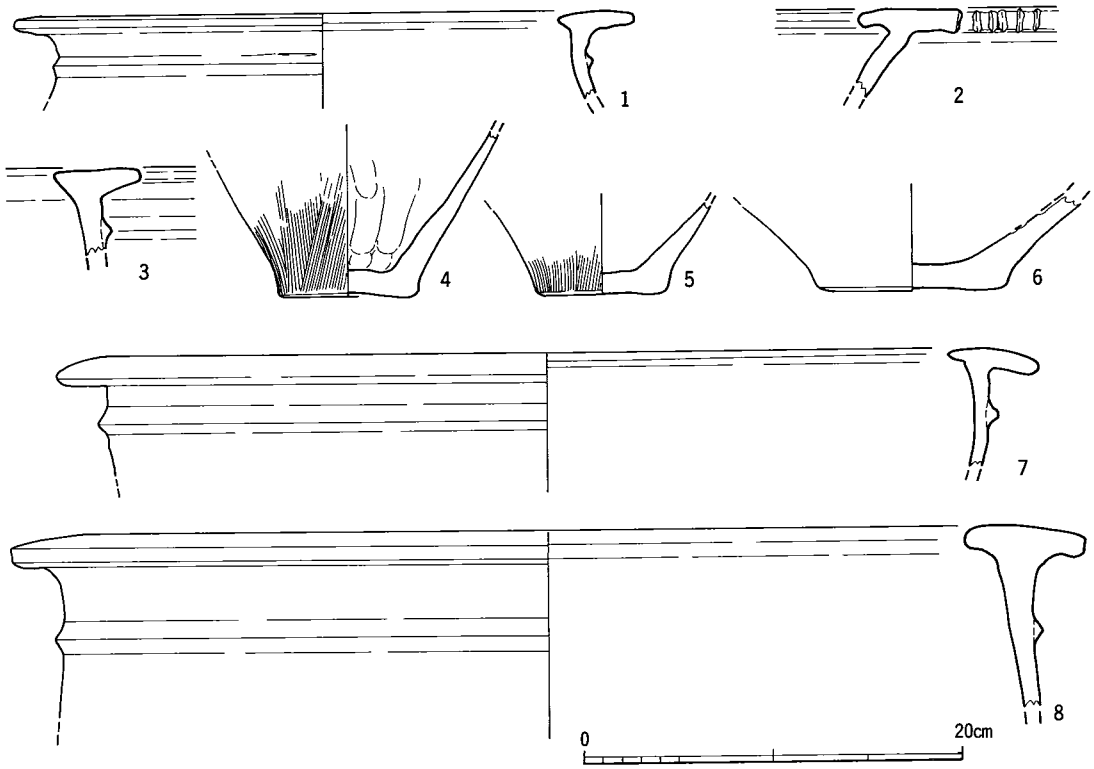


Fig.16　各遺構混入弥生土器実測図（1/4）

小児甕棺に転用されたものと考えられる。4は、北東側のⅡ区北側のテントを設置していた谷で採集した底部片である。わずかな上げ底となり、外面には縦ハケが施される。内面は強い指ナデ上げ痕が残っている。5は、P－120出土の底部片で、外面には縦ハケが施される。焼成良好で褐色をなす。

甕棺片（3・6・7・8）3は、第1号近世墓から出土したもので、推定口径60.8cmと大型の甕棺片となる。焼成良く、淡橙褐色をなす。6は、Ⅰ区北半の自然流水の痕跡と思われる第1号溝から出土した底部片である。内外面ともにナデており、その形態からも壺棺の可能性が考えられる。胎土に細・小砂粒をかなり含み、赤褐色粒も目立つ。焼成良く、橙褐色をなす。7は、Ⅰ区の最頂部、即ち近世墓地群中の包含層から出土したもので、復元口径51.8cmとなる。器壁はやや薄手で、上棺用の鉢形の土器となろう。胎土に細・粗砂粒を若干含み、焼成良く、橙褐色をなす。口縁上部に黒斑部がみられる。8は、第4号近世墓墓壙混入品で、復元口径56.8cmとなる大形棺である。口縁上面は外傾しており、外面に低い三角凸帯を付ける。

壺（2）Ⅰ区の自然流水の痕跡である第2号溝から出土したもので、内側へ長く突出した鋤先口縁の開口壺である。かなり大口径となりそうで、棺に使用されたものと推定される。口縁外端面に刻目を施す。焼成良く、茶褐色をなす。中期後葉の所産であろう。

Ⅳ　古代の遺構と遺物

試掘調査の際、Ⅱ区の中央尾根つけ根あたりの西斜面で、わずかな高まりが数ケ所認められ、古墳の可能性を考えて各々トレンチを入れた。その時、土師器の細片を多く含む厚さ５cmの暗

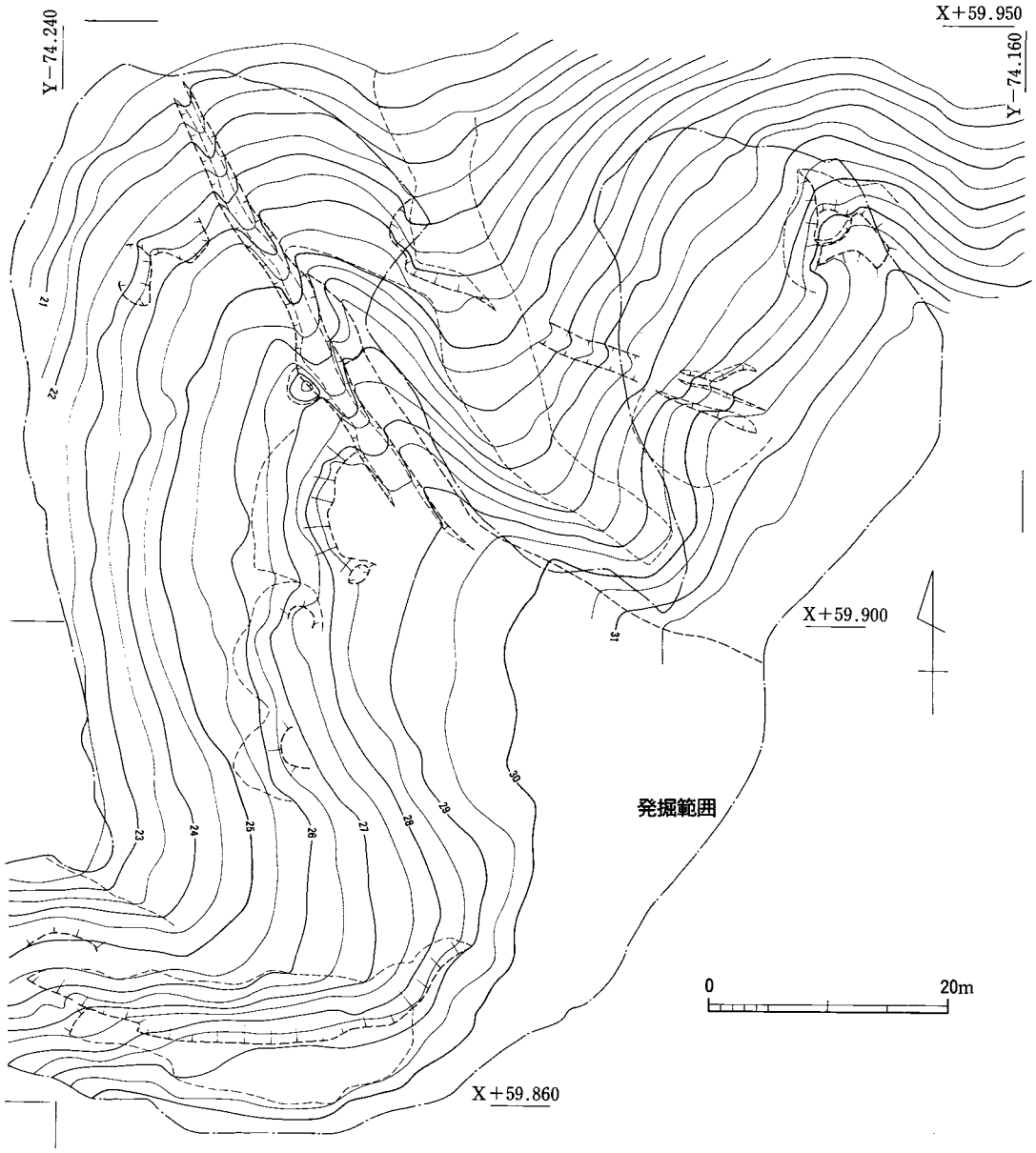


Fig.17　Ⅱ区現況地形図（1/600）

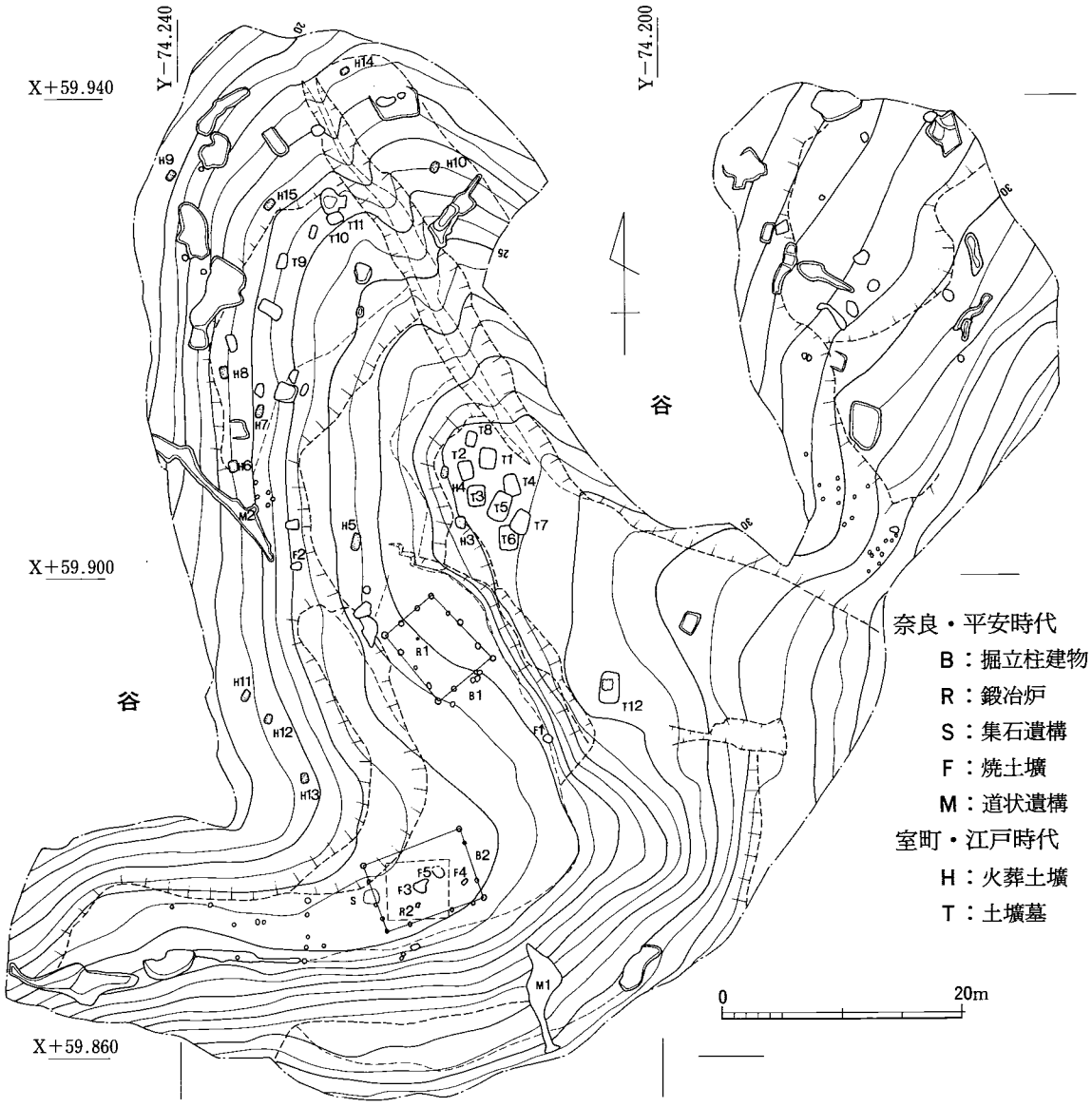


Fig.18　II区遺構配置図（1/600）

褐色の整地層を発見した。それは水平に拡がりを見せ、往時、大がかりな斜面カットの造成工事を行って、遺構面を作っていることが予想された。ちょうど第1号掘立柱建物の部位にあたるところであった。この部分は思いきって、重機により旧造成面まで、斜面の流入土を排除した。その結果、意外なほど豊富な遺構と遺物が出土した。

その総数は以下のとおりである。

掘立柱建物	2棟（他に柱穴多数）
鍛冶炉	2基
焼土壙	5基（推定炭焼壙2基を含む）
集石遺構	1基
道状遺構	2個所

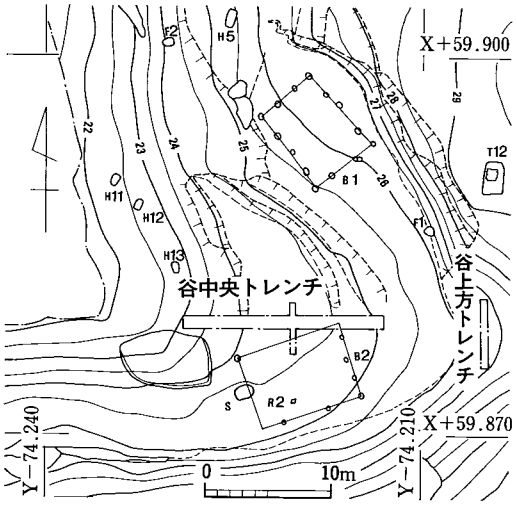


Fig.19　II区谷部下層旧地形図（1/600）

A　掘立柱建物

ここでは、掘立柱建物2棟分を詳述する前に、是非ともその遺構面となる一大造成工事について記しておかねばならない。

II区中央尾根の西斜面あたりは、大きな谷（現在の水田）から枝分かれした小さな谷の奥にあたり、小谷をはさんだ北側にも小さな尾根があり、西風や冬の厳しい北風から全くさえぎられた好位置である。現在でも寂しいほどの静けさに包まれている。

この斜面を、谷頭を中心にV字の範囲にカットして平坦面を造成しているのである。その規模は、平坦面の山側で、谷頭部位から西へ長さ44m、北へ30mに及び、第1号掘立柱付近で幅10m、谷頭付近で幅15mほどとなる。現状で確認し得た平坦面は550m²に及ぶ。カットの高さは、第1号掘立柱建物の裏側付近で2.5～3mとなり、第2号掘立柱建物の裏側付近で3～4mに及んでいる。現代ならば重機によりたやすく切り盛りできる程度であるが、奈良～平安初のその当時の手作業による重労働を考えると、どうしてもこの場所に工房を設けなければならない強い必然性があったのだと思われる。その必然性は、山の燃料の入手しやすさであり、精神集

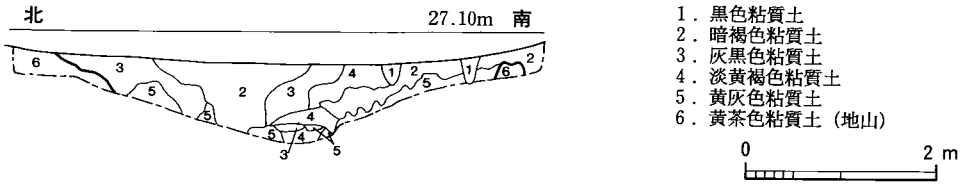


Fig.20　II区谷上方トレンチ土層実測図（1/80）

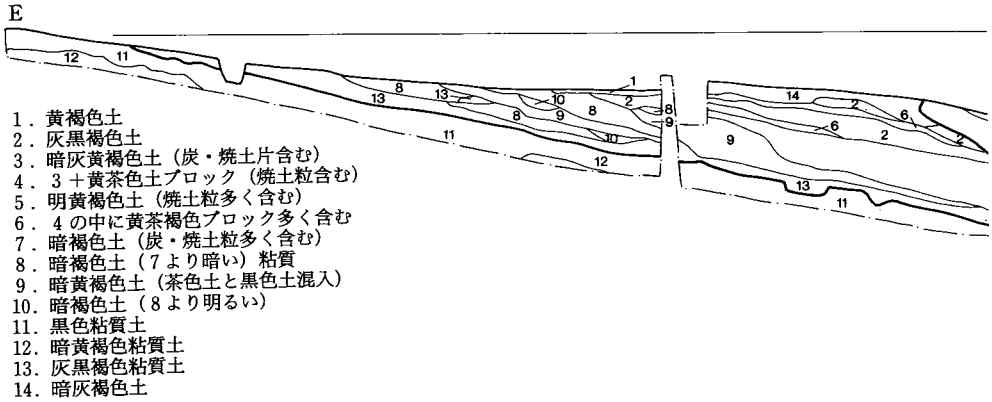


Fig.21　II区谷中央トレンチ土層実測図（1/80）

中できる山奥の静寂さでもあったかもしれない。人里離れた場所であることは、通常の単なる野鍛冶ではないように思われる。

谷の中央にトレンチを入れて、造成の有様を観察してみた。(Fig. 20・21参照）地山の上には黒色の自然堆積層があり、谷下方へゆくに従って厚くなる。無遺物層である。その上に暗褐色土を主とした整地層がみられるが、水平に整地はしておらず、すべて斜め下方へ各土層が流れている。これには奈良時代にさかのぼる土器類が多く包含されている。更にその上には真砂土を主とした整地盛土が、谷下方へ平坦面の面積を拡げるように大きくかぶせられている。平安初期の遺物をかなり含む。

以上のように少なくとも2回の造成工事を行っており、2回目のものは拡張工事である。このそれぞれに対応する遺構が存在した筈であるが、山側の地山面に掘り込まれたものは、土層の上からはどちらの時期に相当するのか判別できない。ただ、鍛冶炉やそれに伴う掘立柱建物のような主要な検出遺構は、最終整地後に設けられたものが多い。

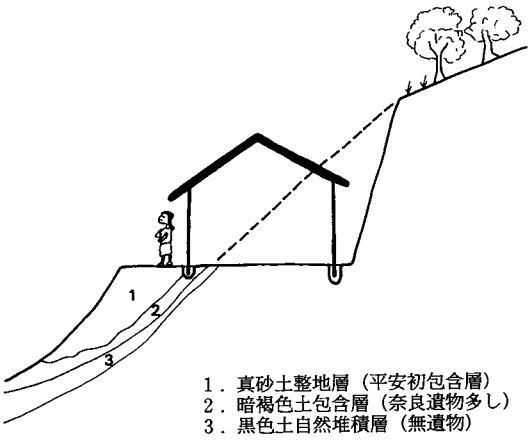
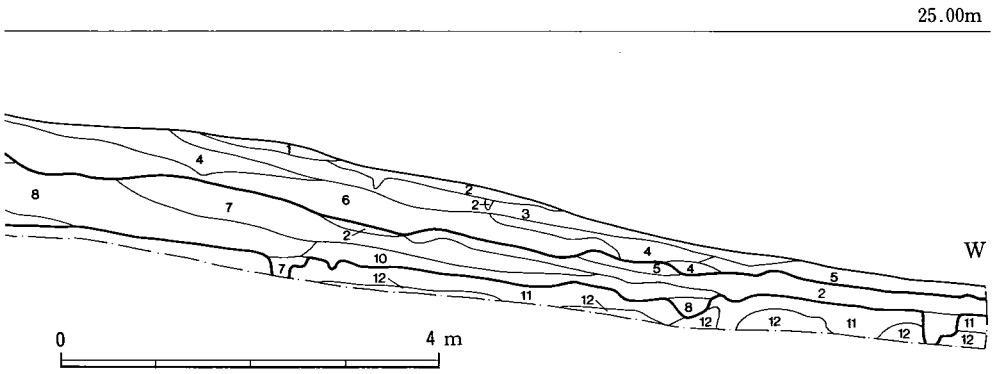


Fig.22　II区斜面造成地断面模式図

第1号掘立柱建物（Fig. 24, PL. 9）

造成面の北端近くが、深くてしっかりした柱穴の集中部分となる。図面上では実際穴が多すぎて、建物の復元は不可能に近いようにみえるが、現地において判断した時点では、その深さなどから、意外にすっきりと建物を推定することが



できた。

基本的に南北棟で、４×２間の掘立柱建物である。全体に7.4×5.6～5.1ｍの規模となり、やや歪つである。柱筋は桁行方向でうまく通らない部分もある。柱間心々距離は、大旨６尺を基本としているようであるが、５～８尺近くまで、かなりバラバラである。ただ、相対する辺では、柱間を揃えようとする意図がうかがわれる。柱穴の深さも50cmをこえるしっかりしたものもあるが、かなりバラつきもみられる。

重要なことは、中心よりやや北西寄りに第１号鍛冶炉が位置することである。炉は広く掘りこまれた壙が埋まった上に設けられており、除湿等の配慮がなされている。鍛冶工房としての上屋を考えると、炉との位置関係や、あまり規格性を気にしない柱の配置の状況などから、この第１号掘立柱建物をそれにあててもよいと思われる。ただ、第２号鍛冶炉を伴う第２号掘立柱建物の工房が、この工房と同時併存したかどうかは不明である。たとえ両者の時期が異るとしても、年代的にほとんど差が無いので、続いて移動したものと考えられる。

図のＢ－Ｄ辺の東側、つまり、山際には柱列に沿うように、浅いだらだらした溝がみられ、雨落ち、或いは崖際の排水等の工夫がなされたことがうかがわれる。

出土遺物（Fig. 25）

須恵器杯蓋（１）釦状撮を付ける類で、天井外面全面を回転ナデ調整している。胎土精良で焼成堅緻、灰色をなす。

須恵器杯（２）灰色～黄灰色をなす須恵器の生焼け品で、復元口径13.6cm、器高3.3cm、底径3.3cmを測る。胎土精良で、体部は直線的に外傾する。

土師器杯（３～６）３は、口径13.4cm、器高3.7cm、底径7.3cmで、底部ヘラ切り、スノコ圧痕がみられる。体部内外面横ナデ、底内面は中央のみナデツケる。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を若干含み、焼成良好で、茶褐色をなす。４は、口径13.4cm、器高4.0cm、底径8.2cmを測る。底外面はヘラ切りで、中央に板圧痕がみられる。体部が直線的に開く類で、胎土に細・小砂粒

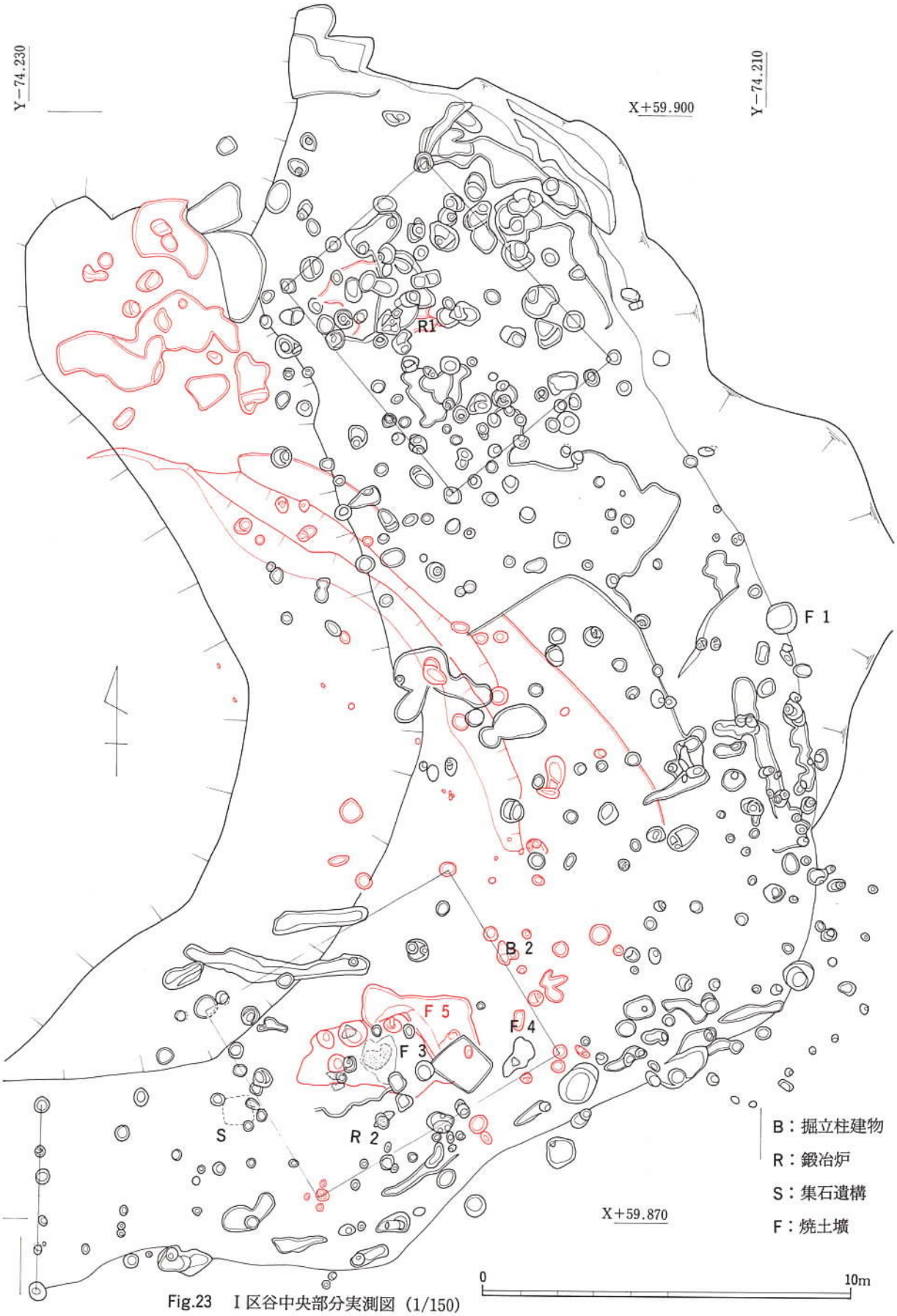


Fig.23　Ⅰ区谷中央部分実測図（1/150）

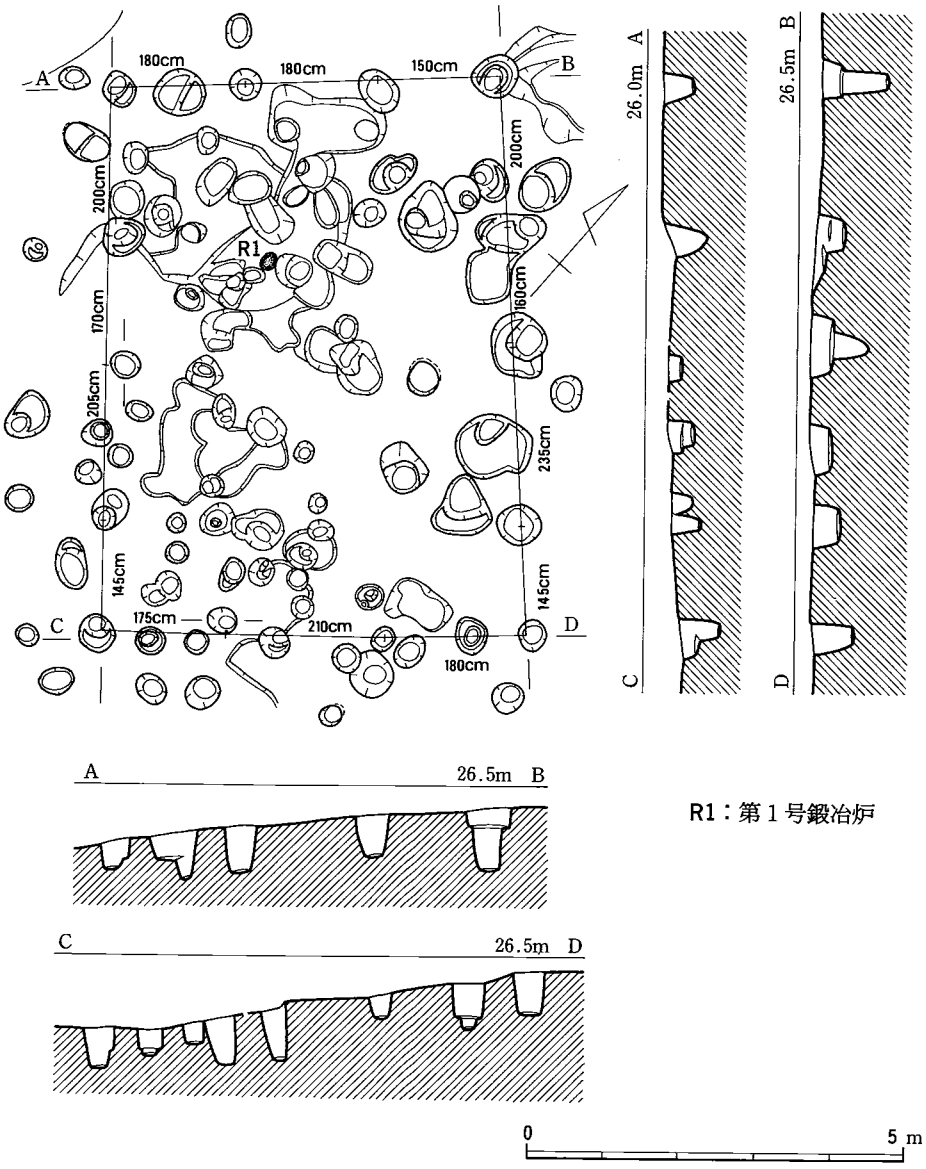


Fig.24　第１号掘立柱建物実測図（1/100）

をかなり含む。焼成良好で茶褐色をなす。５は、口径13.0cm、器高4.3cm、底径7.3cmを測る。底外面はヘラ切りで、板圧痕がみられる。胎土に細・小砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色をなす。６は、復元口径12.4cm、器高4.1cm、底径6.4cmを測り、底部はヘラ切りで、板目圧痕がみられる。内面上半に油煙痕が多く付き、灯明皿として用いられている。焼成良く、淡茶褐色をなす。

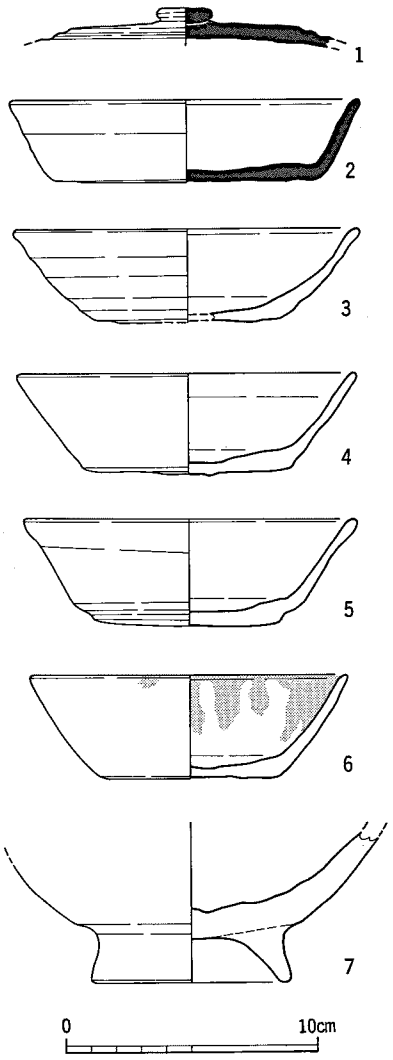


Fig.25　第１号掘立柱建物周辺地山直上出土土器実測図（1/3）

土師器壺（７）太く外方へ踏んばった高台を付ける壺下半片で、高台径7.9cmを測る。内外面横ナデで、底内面のみ、ナデツケている。胎土に細・小砂粒を多量に含み、焼成良好で淡黄橙色をなす。

以上の出土遺物は、第１号掘立柱建物の立っている造成面テラスの、山寄りの地山直上出土品で、必ずしも、この建物そのものの時期を示すものではない。ただ、その上限を知り得る土器群ではある。土師器杯の口径が13.4～12.4cmで、平均して13cm以上の大口径となる類で、８世紀代におさまり得る。須恵器もあわせて考えると、８世紀後半を中心として末までの幅で考えることができる。

第２号掘立柱建物（Fig. 26, PL. ８・９）

斜面につくられた造成面の最も谷奥にあたる部分に位置する。ちょうど第２号鍛冶炉及び第３・５号焼土壙を囲むように建てられている。

基本的に４×３間の東西棟であるが、地形に規制されて、建物方位はかなり西に振れている。また、西辺梁行部では４間となるなど、不統一の面もみられる。

柱間心々距離は６～７尺を基本とするが、実際には４～８尺まで、かなりバラつきがみられる。なお、北辺のＡ－Ｃ間は、すでに整地層が流れてしまって、柱穴がとんでしまったものと考えられる。

また、図に細い破線で示したラインは、北辺と西辺で柱穴が並び、別の建物の可能性が考えられるものである。ただ、東辺と南辺が続かず、一応断念せざるを得ない。柱穴は小さく、６尺柱間を基本として、一部に７尺もみられるものである。

この第２号掘立柱建物は、5.8×7.6ｍと規模は第１号掘立柱建物とほぼ同じで遜色は無いが、柱穴は小さめで、浅いものが多い。いくらかこちらの方が、見劣りがする建物であったのでは

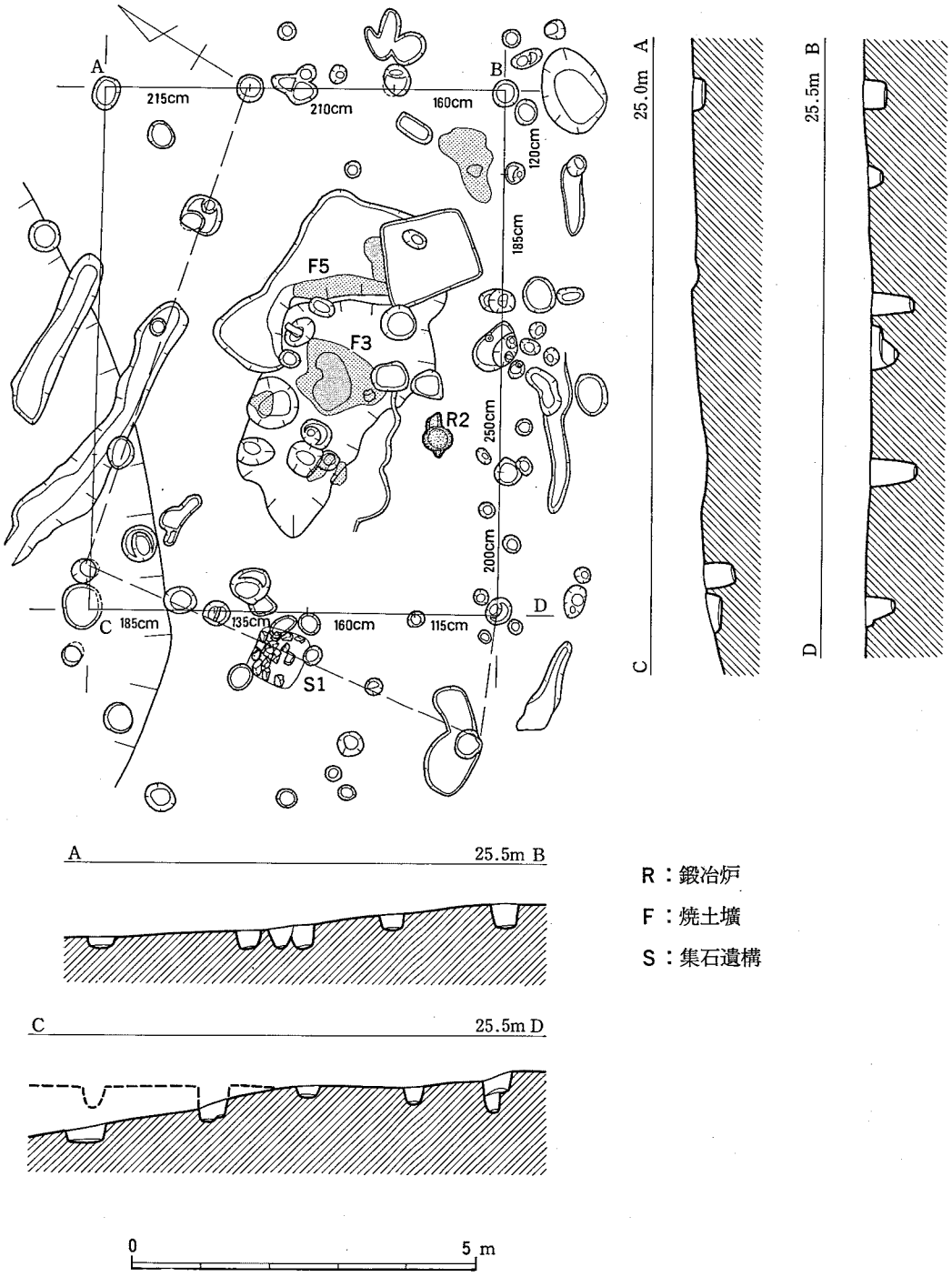


Fig.26　第２号掘立柱建物実測図（1/100）

ないかと思われる。そういう意味では、建築面積をほぼ同規格とするこの両者が、同時併存して、役割分担をしていた一連の工房群であったと推定することも充分可能である。更に想像をたくましくすれば、第2号掘立柱建物で基礎的な鍛造工程等の荒仕事を行ない、第1号掘立柱建物で柄付けや外装・研ぎなどの仕上げ工程を行ない、また住まいを兼ねていたと考えることもできる。それは、また、第1号鍛冶炉周辺では第2号炉周辺で多量に発見されたような鍛造剝片や鉄滓等が極端に少ないことからも、考えられることである。

また、この建物の西辺中央に、入口の敷石と考えられる部分があることは、集石遺構の項で詳述する。更に、建物の南辺沿いの崖際直下に細い溝が切れぎれに続くのは、建物の雨落ち溝と認めてよかろう。

この建物の南裏側斜面に道をつけて、燃料確保の運搬路としたと判断したが、これは道状遺構の項で詳述する。また、建物の西方6mの位置に柱穴列がみられ、柵乃至垣根の存在が指摘され、この建物の屋敷地の範囲を示すものと考えられる。これも集石遺構の項で詳述したい。

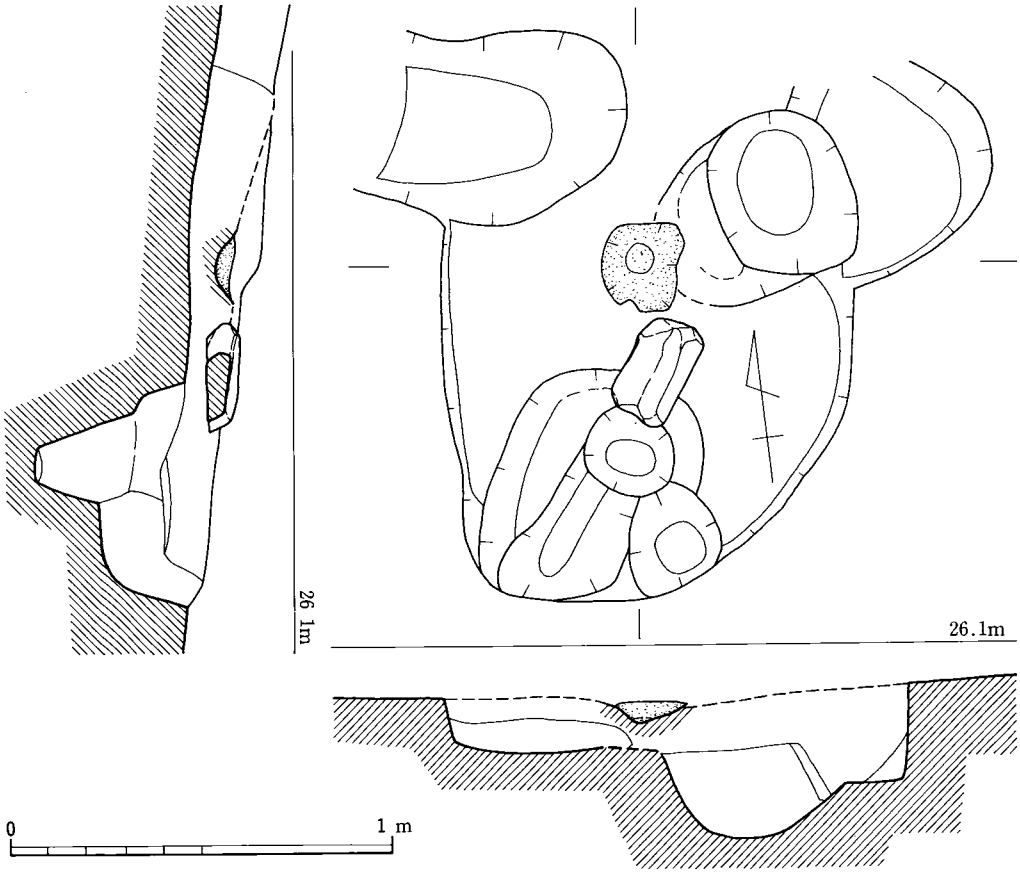


Fig.27　第1号鍛冶炉実測図（1/20）

以上のようにこの第２号掘立柱建物については、付帯周辺遺構とともに、かなり有機的にその原像が浮かび上がってくる。ただ、工房としての最大の性格である、何を作っていたのか、という点に関しては、今ひとつ解明できていない。これが最大の、画竜点睛を欠くところである。これに関しては、鍛造剝片や鉄滓等の自然科学的分析に期待したいところである。

B　鍛　冶　炉

Ⅱ区中央尾根の西側谷の谷頭部分の斜面をカットして造成した平坦面には、奈良～平安初の各遺構が密集する。小柱穴が圧倒的に多いのだが、この造成面の性格を考える上で、土師器・須恵器の杯類の多さからみて、生活臭の強いものであることがまず感じられる。次に、越州窯系青磁や、緑釉陶器類が整地層中からいくらか出土していることや、塼仏の貴重な発見などから、抹香くさい仏教関係堂塔の存在も感じとられる。しかし、それほど大規模なものではないことは明らかで、主体となるのはあくまでも前者の生活臭に関る遺跡内容であろう。

この中で、最も明確にできるのが、鍛冶関連遺構としての鍛冶炉や、鍛造剝片の出土、焼土壙や炭焼土壙の存在である。前項で述べた掘立柱建物も、ほぼ間違いなく鍛冶作業場を含めた工房関係上屋である。

このような諸施設のうち、鍛冶工房を最も特徴づける鍛冶炉については、前原町内では初発見でもあり、良好な残存状況であった。うち第２号鍛冶炉は切り取り作業を行い、将来的に展示できるように伊都歴史資料館の方へ運んだ。

第１号鍛冶炉（Fig. 27, PL. 10）

斜面を造成した平坦面の最も北端に、第１号掘立柱建物を中心とする柱穴が多数密集し、その中央付近に、第１号鍛冶炉が位置する。第１号掘立柱建物との関係でみると、その中央よりやや北側へ寄った位置となる。

鍛冶炉本体は、24×21cmの範囲が深さ５cmほどにくぼんで、その表面が黄灰～灰黒色にガチガチに焼けている。その南隣には29×17cm、厚さ７cmの花崗岩が置かれていた。また、炉の北側からは土師器甕片が

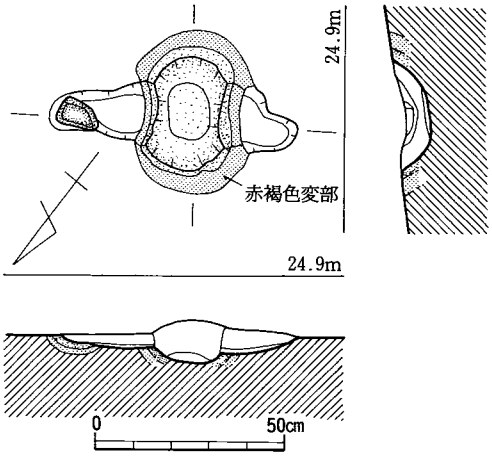


Fig.28　第２号鍛冶炉実測図（1/20）

出土し、遅くとも奈良末期までのものと判断し得た。炉の下は12cmほどで地山となるが、その間は炭細片を全体に含んだ花崗岩風化土が、東西110cm、南北150cmの範囲に認められた。炉の南・北西・東側にはそれぞれ深い穴があり、明らかに炉よりも下層のものである。つまり、深い穴が埋まって後に、炉を設置するために深さ18～12cmの浅く広い壙を掘り、すぐに埋め立てて中央に炉を構築したと解釈できる。一度炉の下を掘ったのは、湿気抜きの意図が考えられよう。このような工法は、近世たたらの構築等に大がかりに導入されているもので、ここでは、掘りくぼめた面で空焼きをしたものか、あるいは炭片を意図して混入させたもの等の工夫を施したものであろう。

第２号鍛冶炉（Fig. 28, PL. 10・11）

斜面を造成した平坦面の南側、丁度谷頭の位置にあたる部分から検出された。第２号掘立柱建物のほぼ中央の南寄りの位置になる。この周辺は、炉の北側から北東側にかけて、焼土面のひろがる第３～５号の焼土壙や、鍛造剝片を多量に出土したピットなど、鍛冶に関係する遺構が集中しており、これらは総合して有機的に関係を有していると考えられる。この相互関係については、第３～５号焼土壙の項で詳述したい。

鍛冶炉本体は、南北長30cm、東西幅21cm、深さ11cmの小さなくぼみである。その表面は黄白～灰黒色でガチガチに焼けており、更にその外側５cmの厚さの範囲では地山が暗赤色に変化している。本体そのものの上面からの形態は中央がえぐれた分銅形をしているが、そのえぐれ部分から東西に更に溝状部分が延びている。東へは29cm延びて、その先端近くは本体と同じように堅固に焼けている。西へは21cm延びている。これらの両側のくぼみは、鞴羽口の設置場所と考えられ、鞴２本設置の貴重な例である。

C　焼　土　壙

Ⅱ区の造成整地面の縁辺部と、第２号鍛冶炉付近から、壁の焼けた穴や焼土部分等が５個所検出されている。明らかに２種に大別できる。第１は、穴を掘り込んでおり、壁が焼けて、中に炭がある第１・２号焼土壙の類であり、第２号は特に炭焼きに用いられた可能性がある。第２は、第３～５号の鍛冶炉周辺の焼土及び浅く広めに掘りくぼめられて壁が焼けた類である。前者と後者は明らかに性格が異り、特に後者は鍛冶関連のものであることは明らかである。

第１号焼土壙（Fig. 29, PL. 13）

第１号掘立柱建物の南東側にあたる斜面カット部下端部に位置する。幅65cm、長さ68cmのや

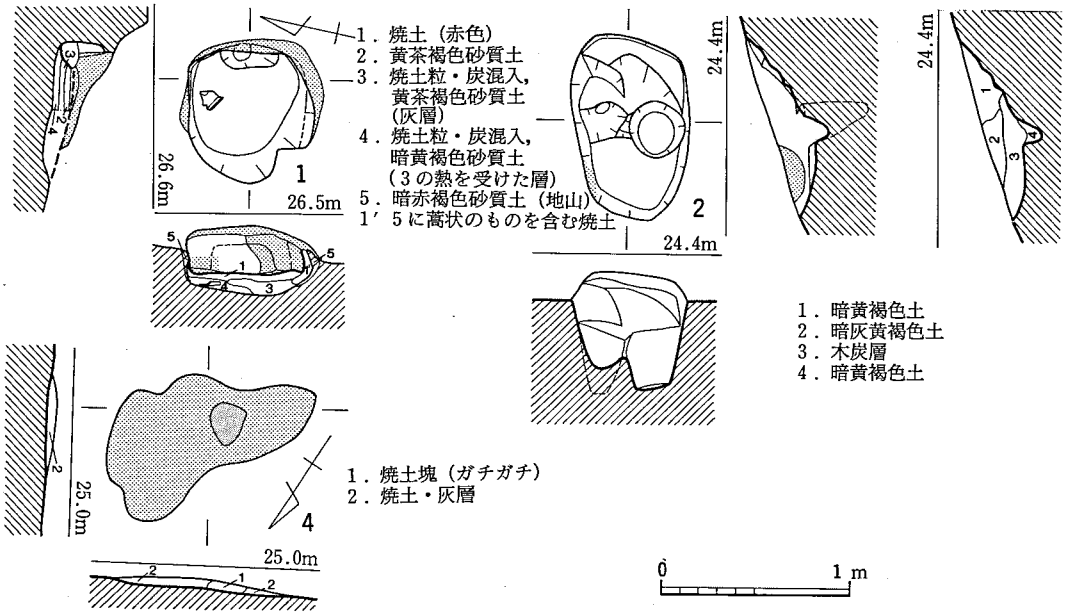


Fig.29　第1・2・4号焼土壙実測図（1/40）

や角ばった平面形の穴を掘り、奥壁側を更に長方形に掘りくぼめている。周壁は奥壁の長方形くぼみ部を除いて、暗赤褐色土を貼りつけている。南側壁では藁状のものを含んでおり、スサ入り粘土を貼ったものと考えられる。周壁と底面は赤く良く焼けており、底面は焼土面下に灰層があり、複数回の使用を物語っている。また、焼土層下より土師器甕片が出土しており、カマド的な用途も考えられる。ちょうど切り取った急斜面直下にあたることや、わざわざスサ入り粘土を貼っていることなどから、単なるごみ焼穴等のものではなく、きちんとした施設であると考えられる。大澤正己氏来訪の折に見ていただいたら、第2号焼土壙と同様に、炭焼き窯と考えてよいとの意見を得た。現状では、鍛冶炉の存在などから、この解釈がより正確なものかもしれない。

出土遺物

土師器甕（Fig. 30）焼土下の床面から出土したもので、時期を知り得る好資料である。口径24cmであまり張らない中型の器種で、口縁内面に稜をつくる。口縁はあまり肥厚せず、ゆるく外反する程度である。口縁

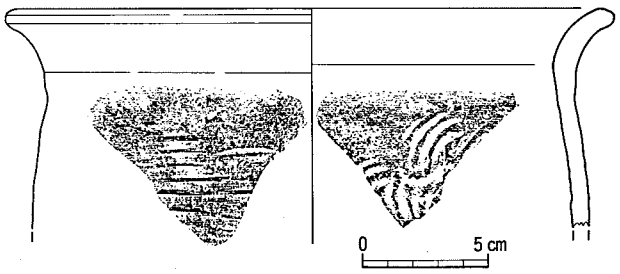


Fig.30　第1号焼土壙出土土器実測図（1/3）

内外面は横ナデ、胴外面は横位の幅３～５㎜の幅広い平行条線状叩き、内面は青海波あて具痕を残す。胎土に細小砂粒を多く含み、焼成良好で茶褐色をなす。外面には煤が付着している。須恵器の調整技法を有する土師器であるが、内面に稜線を残す点などは、未だ８世紀代の特徴を有する。ただ、外面の粗い平行叩き目は新しい様相であり、９世紀代にずれ込む可能性もある。ここでは、幅をもたせて、８世紀後葉～９世紀初頭の所産と考えておきたい。

第２号焼土壙（Fig. 29, PL. 14）

第１号掘立柱建物の北西斜面中途、第２号道状遺構の上端付近に位置する。長軸を等高線に直交するように掘り込んでいて、吹き上げる谷風（西風）を利用する意図がみられる。長さ96㎝、最大幅60㎝を測る。底面の中央の２個所に深い穴を掘り込んでおり、杭を２本立てたことがわかる。断面の土層図に見る如く、最下の炭の層がこの２本の柱穴に入っていないところから、焼成時ではなく、この土壙掘り込み当初時に使用され、焼成使用時には抜き取って埋められていたと考えられる。あるいは天井部を持った構造で、天井構築時に支えた杭の痕跡なのかもしれない。ただ、天井の崩落土塊等は検出されなかったので、確定はできない。

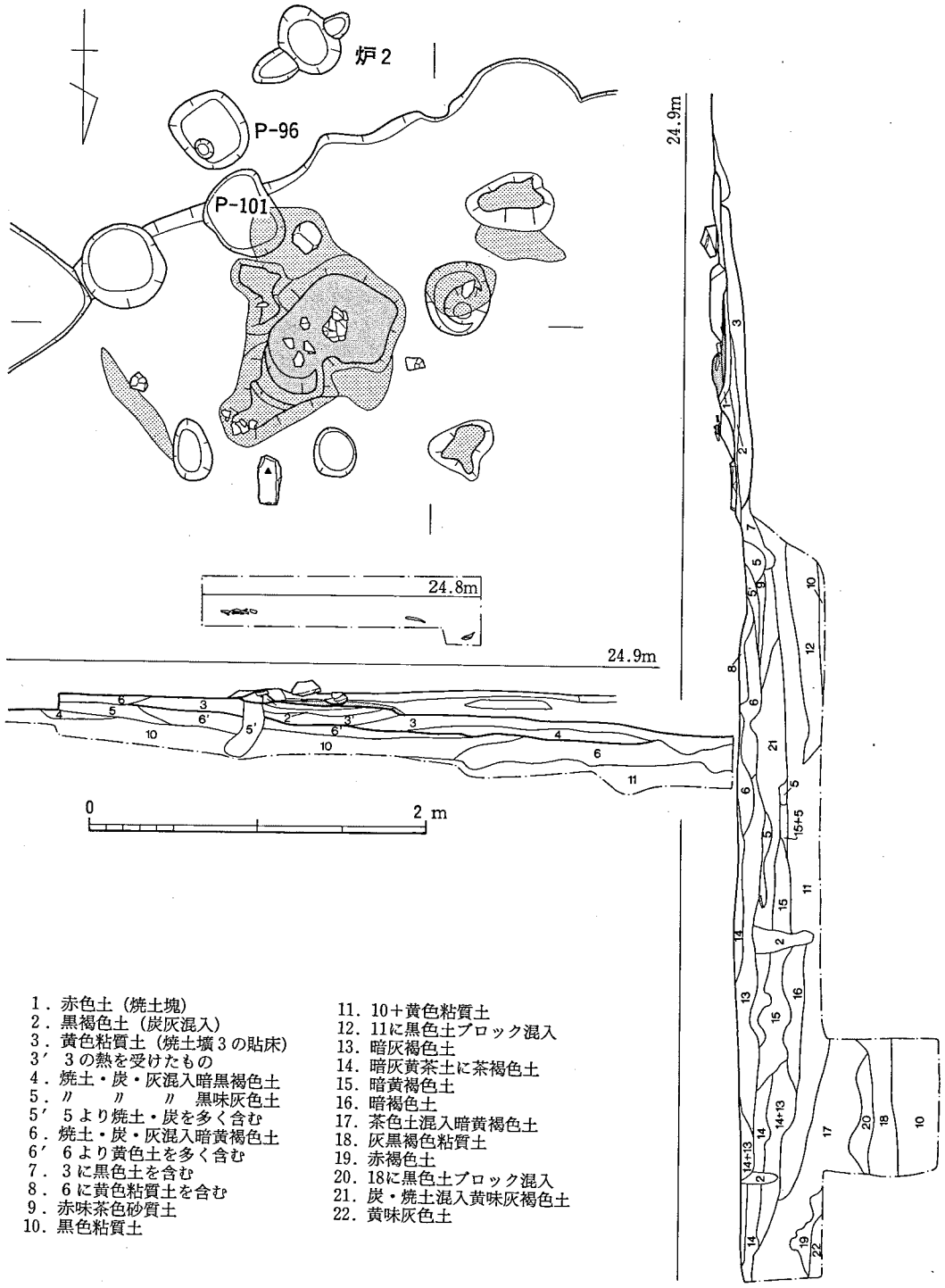
下層に純粋な炭だけの層が12㎝前後の厚さで堆積しており、壁の一部分は赤く焼けている。底面は焼けていない。大澤正己氏来訪の折に、見ていただいたら、鍛冶炉に使用する炭の窯に違いないとの折り紙をいただいた。近年各地の遺跡の調査で、同種の遺構の発見例がふえており、このような小規模の穴でも炭が焼けるのだという御意見に、新たな視点を得た感を強くした次第であった。従来、山中の焼けたり炭の入っていたりする穴は、火葬墓であるとか、不明土壙として片付けていたが、この種遺構を今後改めて再検討する必要があると痛感する。

出土土器は無いが、埋土の状況などから、奈良～平安初頭の時期と想定される。

第３号焼土壙（Fig. 31・32, PL. 14～16）

第２号掘立柱建物のほぼ中央で、第２号鍛冶炉の北側に接して、焼土が広く分布しており、それが全体に浅い掘り込みの中で存在している状況が第３号焼土壙の現状である。図の土層断面にみる如く、かなり細かい整地層の上に、太線で示した範囲の東西長さ310㎝、南北幅180㎝の浅い掘り込みがみられ、その上に黄色粘質土をかぶせて貼り床としている。黒色土系の包含層の整地層の中でこの貼り床部分だけが黄色土でとりわけ目立った部分となっている。

上層と下層の遺構に分かれるが、下層面は、上記の黄色土の貼床をはがした後の遺構面であり、焼土の位置が完全にずれている。すなわち、下層面では第５号焼土壙とした、浅いくぼみ状の焼けた部分があって、その落ちこみは、東西に不整形にのびており、上層における焼土はこの西南にずらして形成されている。下層遺構で主なものは、第５号焼土壙のほかに、西端付近に小ピットがいくつかみられるが、浅くて、明確な柱穴としてまとまりをみせる類のもので



1．赤色土（焼土塊）
2．黒褐色土（炭灰混入）
3．黄色粘質土（焼土壙3の貼床）
3′ 3の熱を受けたもの
4．焼土・炭・灰混入暗黒褐色土
5．〃 〃 〃 黒味灰色土
5′ 5より焼土・炭を多く含む
6．焼土・炭・灰混入暗黄褐色土
6′ 6より黄色土を多く含む
7．3に黒色土を含む
8．6に黄色粘質土を含む
9．赤味茶色砂質土
10．黒色粘質土
11．10＋黄色粘質土
12．11に黒色土ブロック混入
13．暗灰褐色土
14．暗灰黄茶土に茶褐色土
15．暗黄褐色土
16．暗褐色土
17．茶色土混入暗黄褐色土
18．灰黒褐色粘質土
19．赤褐色土
20．18に黒色土ブロック混入
21．炭・焼土混入黄味灰褐色土
22．黄味灰色土

Fig.31 第3号焼土壙（上層）実測図（1/40）

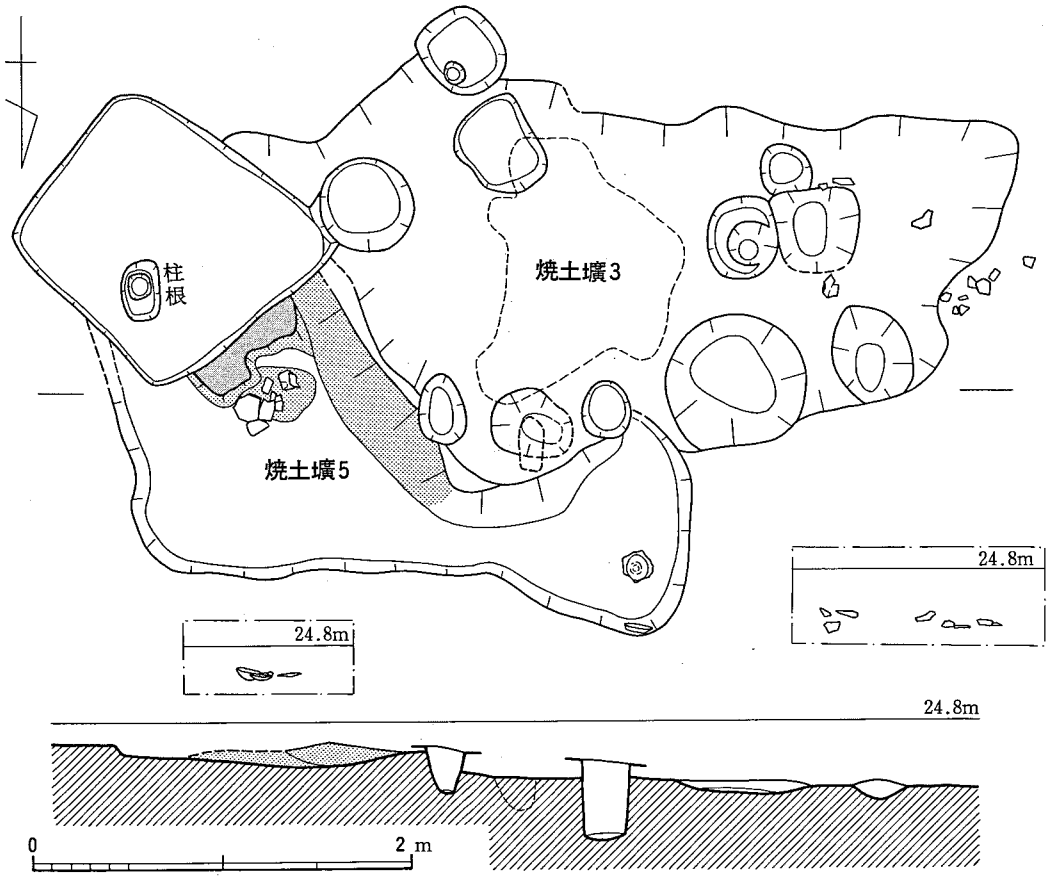


Fig.32　第３号焼土壙（下層）実測図（1/40）

はない。また、東端近くに小柱穴があり、その中には直径12cmほどの柱痕も認められるのだが、周辺にこれと組み合わさるような同種ピットはみられない。

上層は、図に示すように、焼土群というとらえ方でまとめることができる。特に、中央の大きな焼土は、上面がガチガチに焼けており、その直上には土器が数ケ所に残されている。貼床である黄色粘質土より一段高くなっており、意図的に構築された可能性が高い。第２号鍛冶炉がこの焼土中心から約160cmほどしか離れていないことも、この焼土の性格が鍛冶作業に密接に関わるものであったことを物語っている。

この第３号焼土壙の、まず全体については、整地が丁寧できめ細かいことや、黄色土貼床までしていることから、鍛冶工房内における、主たる作業エリアであったと考えられる。つぎに、上層における中央の焼土については、周辺に花崗岩が３点みられることなどから、南側の鍛冶炉以外の火をたく場所としてのカマド的な構築物があったものか、或いは、鍛造そのものの場

所としての、鉄砧を据えるためにその基盤を焼き固めたものなのか、いずれかであろう。

なお、中央焼土の北側に、長さ28cm、幅13cmで上面が平坦な長方形の花崗岩が置かれていた。（上層の図の最も下方の石。▲印）現地にて、鉄砧石ではないかとの指摘を得たこともあった。確かにこの石は、平坦面を水平に据え置かれたような状態で検出されたが、筆者にはにわかに信じ難い。第1に、第2号鍛冶炉の中心から250cmも離れていること。第2に、石材が花崗岩で、大きさも、大槌の振りおろしに耐え得るものとは到底思えないからである。以上のことから、現状では、小製品のみを作る専用鉄砧ならいざしらず、通常の小鍛冶工房の鉄砧と判断するのは尚早と考えられる。

さらに、土器類が、上下層各面に伴なって出土しており、時期決定の好資料を提供してくれた。また、この焼土壙の南側のP－96から、鍛造剝片が多量に出土したため、この周辺を50cm方眼で区切って、その土を採取し、水洗、選別を行った。その結果等を含めて、後項（42頁）で報告しておきたい。

上層出土遺物（Fig. 33）

須恵器杯蓋（1・2）1は、擬宝珠撮を付ける類で、天井外面中途には回転ヘラ削り痕を残す。他は回転ナデで、胎土精良、焼成堅緻で灰色をなす。2は、復元口径14.7cm、器高1.2cmで、

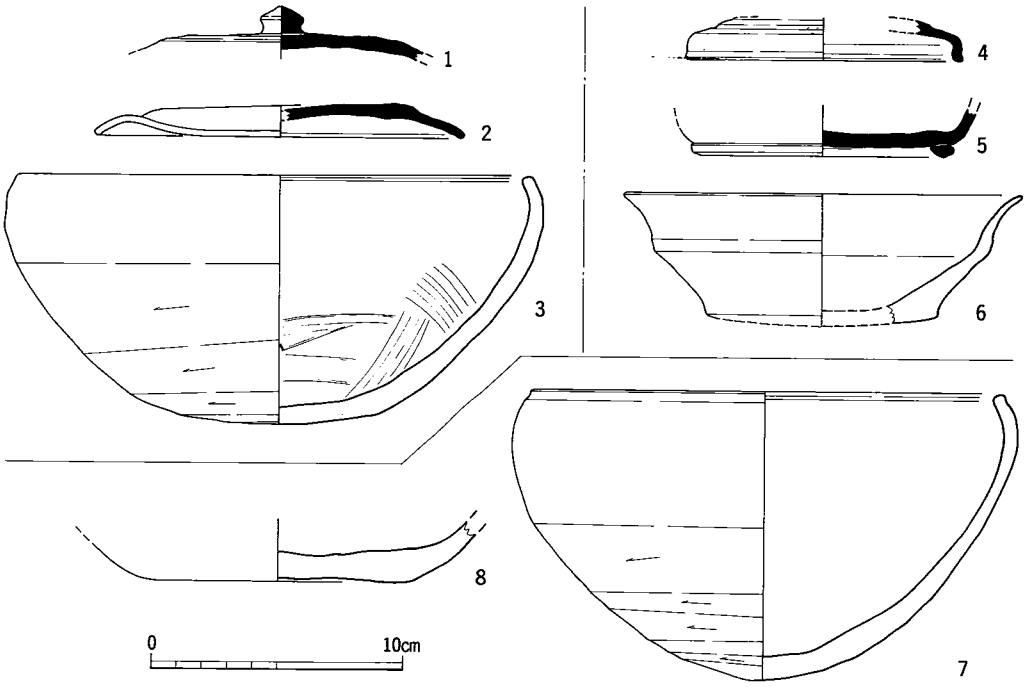


Fig.33　第3・5号焼土壙出土土器実測図（1/3）
（1～3：第3号焼土壙上層，4～6：第3号焼土壙下層，7・8：第5号焼土壙）

全体が焼き歪みをなす。撮は無く、口縁は丸くおさめ、その内側の屈曲等全くみられず、鳥嘴状口縁のおもかげを残さない。天井外面は広く無調整風の粗雑な面をなし、内面中央部も広くナデツケている。胎土に細・小砂粒をいくらか含み、焼成堅緻で内外面ともに灰かぶりをなす。

土師器鉢（3）口径20.1cm、器高9.9cm、最大径21.2cmの内湾する器形をなす。基本的に鉄鉢形土器の退化形態と考えられ、第5号焼土壙出土の7と比べるとそれが明らかである。口縁～体部上半の内外面は横ナデ、外面下半はヘラ削り、内面下半はヘラ工具使用の粗いナデ状の調整を施す。胎土には細砂粒を多く含み、焼成良好で明茶褐色をなす。外面には煤が付着する。

下層出土遺物（Fig. 33）

須恵器蓋（4）復元口径11.0cmで、壺類の蓋となろう。短く折れ曲がった口縁をなし、現存部では回転ナデを施している。胎土に細砂粒を若干含み、焼成堅緻で内面黒色、外面は暗灰～黒色をなす。

須恵器高台付杯（5）高台径10.5cmで、低いが外方へ踏んばり気味で内端で接地する高台を付ける。体部と底部の境目は丸味をもつ。底部内面と外面中央はナデツケを施す。胎土精良で、焼成堅緻、青灰色をなす。

土師器鉢（6）口径15.6cm、器高5.2cm、底径9.1cmの異形小型鉢である。体部中途で屈曲して更に大きく開く。調整は磨滅して不明である。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒をかなり含み、焼成良好で淡茶褐色をなす。

以上の出土土器を見ると、上・下層の時期差が明確である。上層の土器は、2の蓋の退化した形態と、3の丸底となる鉄鉢形の退化形態から、9世紀代に下降する可能性も考えられる。幅を考慮して、この第3号焼土壙の最終面を8世紀末～9世紀前半に比定しておきたい。

一方、下層の出土土器を見ると、下層面と連続する第5号焼土壙の時期と共通するようである。即ち、5の高台付杯や、6の異形鉢、第5号焼土壙の7の鉄鉢形須恵器を忠実に模倣した土師器などから、8世紀前半～中頃が下層面の時期と考えられる。

第2号鍛冶炉周辺鍛造剝片分布状況（Fig. 34, Tab. 5）

第2号鍛冶炉検出の際に、北東隣のP-96をも掘り下げたが、この埋土中にキラキラ光る青黒い小剝片を多量発見した。早速電話で大澤正己氏に問い合わせると、それこそ鍛造剝片に違いないということで、その土を全部水洗して選別した。その結果、P-96埋土中だけで、693gという多量の鍛造剝片を得た。その後、大澤氏に現地指導を受けた際に、この周辺を50cmメッシュに区分けして、それぞれの土を持ち帰り、選別したらどうかとの指導を得た。その理由は、その分布状況から鍛造を行った場所、つまり、鉄砧（かなとこ）の位置が判断できるだろうということであった。それで、その意向に沿って、作業を進めた。

まず、南北・東西各方向に5mの範囲を設定し、50cm方眼に切り、各区毎に土を採取した。

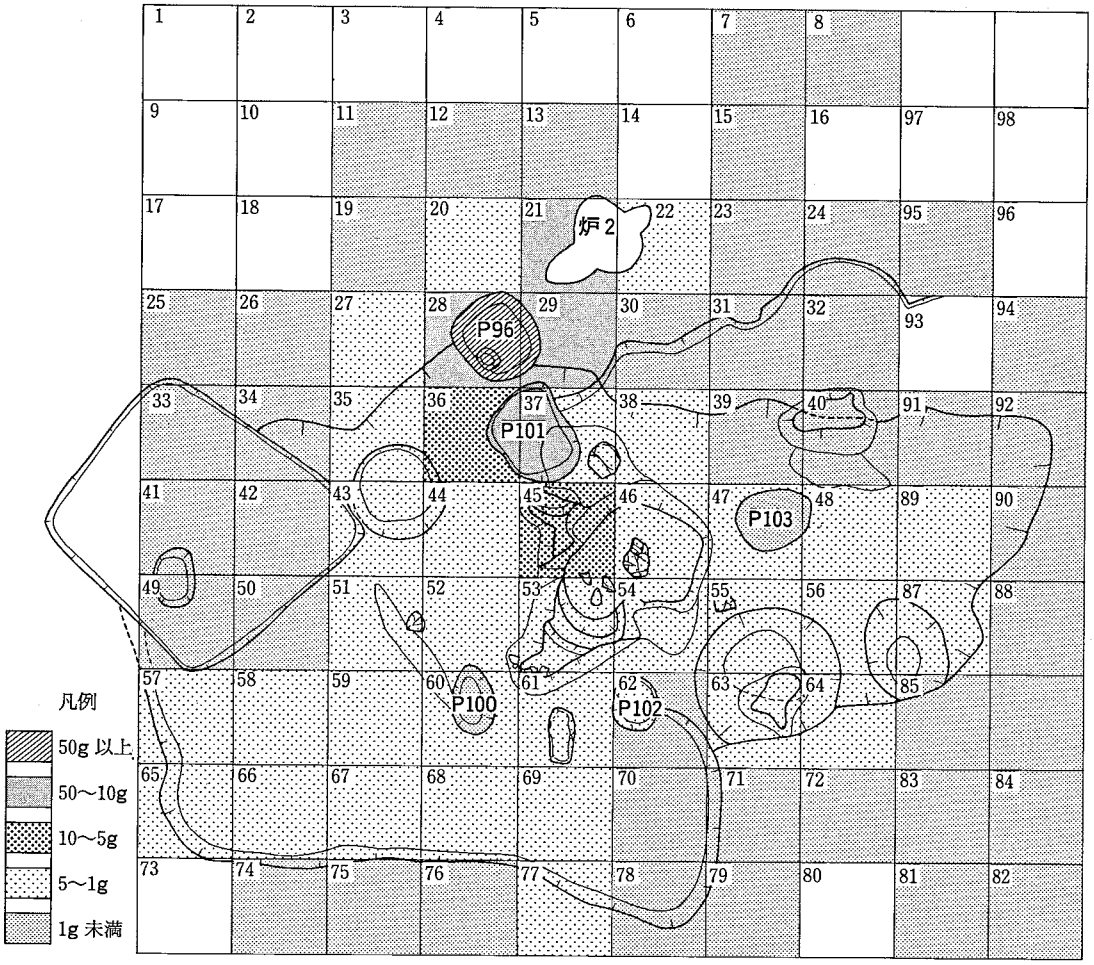


Fig.34　第２号鍛冶炉周辺鍛造剝片出土状態（1/40）

ただ、各々の採取土量は異る。これは、第２号鍛冶炉周辺（図のNo.３～29、95～98までの範囲）では、すでに遺構面（ほとんどの場所が地山面）まで下げていたために、採取土量は少なくなり、反対に第３号焼土壙から北側は、下層の整地層まで下げたために土量は多くなったことによる。

採集した土は、現場横の水路の水を使って水洗し、上ずみを流し、残ったものを乾燥させ、磁石でもって砂粒と鉄分を選別した。磁石にくっついてきたものは、地山土（花崗岩風化土）に含まれる砂鉄も多量にあった。この時点で、鍛造剝片の微細なものと砂鉄粒を選別しあぐねて大澤氏に相談したところ、細かいメッシュのふるいで選別したらどうかとのことであったの

Tab. 5 第2号鍛冶炉周辺鍛造剝片採集一覧表　　単位 g

No.	重さ	備考	No.	重さ	備考	No.	重さ	備考	No.	重さ	備考
3	0		29	11.0	鉄滓少	52	2.8		75	0.8	
4	0		30	0.7		53	3.4		76	0.9	
5	0		31	0.6		54	1.9		77	2.5	
6	0		32	0.5		55	1.8		78	0.7	
7	0.3		33	0.1		56	1.4		79	0.3	
8	0.1		34	0.5		57	1.5		80	0	
10	0		35	1.5		58	3.0		81	0.4	
11	0.1		36	6.1		59	4.5		82	0.3	
12	0.1		37	4.5		60	3.2		83	0.7	
13	0.1		P101	32.2	鉄滓多	P100	0.4		84	0.4	
14	0		38	1.9		61	1.4		85	0.9	
15	0.1		39	0.8		62	0.9		86	0.5	
16	0		40	0.1		P102	1.5		87	1.1	
18	0		41	0.1		63	1.0		88	0.4	
19	0.3		42	0.1		64	1.7		89	1.6	
20	1.2		43	2.1		65	2.2		90	0.2	
21	10.3	鉄滓少	44	4.5		66	2.7	鉄滓少	91	0.6	
22	1.3		45	6.8	鉄滓少	67	2.2		92	0.5	
23	0.3		46	2.8		68	1.8		93	0	
24	0.1		47	1.4		69	4.0		94	0.3	
25	0.1		P103	0.9		70	0.7		95	0.1	
26	0.2		48	2.5		71	0.3		96	0	
27	1.2		49	0.5		72	0.9		97	0	
28	21.7	鉄滓少	50	0.7		73	0		98	0	
P96	693.0	〃 多	51	2.0		74	0.7		計	874.5	

で、その方法をとることにした。

標準ふるいの0.3㎜のもの（SIEVE No. 3、OPENING 0.300㎜、WIRE DIAM 0.208㎜、MESH 50）を用いて砂鉄を除去した。その結果、図・表に示すとおり、意外と広い範囲に分布していることがわかった。

分布状況をみてみると、鍛冶炉の南側と東西両端側では極端に少なく、北側へは次第に少な

くなっていることがわかる。集中部分は何といっても、炉の東北側のP-96・P-101を中心とする範囲である。鍛造の作業を想定してみよう。しゃがんで、片手に鉄鉗（かなばし）を握り、鍛冶炉に手を伸ばす位置が炉から70～80cm程離れており、それを鉄砧上に移動させるとしても直角方向以内が作業能率上妥当なところであろう。炉から1m以上離れた位置に鉄砧があることはなかろうと思われる。以上の観点に立てば、やはり鍛造剝片の集中するP-96からP-101のあたりに鉄砧がおかれていたと考えられるのである。P-96が近すぎて熱すぎるというならば、P-101のあたりであろう。炉とP-101の各中心間がちょうど1mほどとなる。

なお、炉の北側の第3号焼土壙とした広い焼土部分の理解には苦しむが、その他の施設としては、炉の北東2mの位置に1辺1.2mの浅めの穴（P-97）があり、焼入れ用の水溜枡と想像できる。

この鍛造剝片採取範囲の他にも、いくつか土を選別してみたので、報告しておきたい。まず第1号掘立柱建物の中に在る第1号鍛冶炉周辺についてであるが、ここはすでに完掘していたので、鍛造剝片の検出は期待していなかった。実際に3個所の土を選別してみたが、西側の土からは24.6gの鍛造剝片を得ることができた。東側の2個所については、ほとんどが地山に近い状況であったためか、全く検出できなかった。しかし、少くともこの炉が鍛冶炉であったことを確認し得たのは大きな成果であった。この西側に鉄砧が置かれていたのであろう。

次に、鍛冶関係遺構とは全く離れた位置での土を採取してみた。Ⅰ区中央尾根先端の第9・10号土壙墓のあるあたりの杭25横の土と、造成面上の西寄りの第2号掘立柱建物の西側にある杭28から2m北側の地点の土とを採取した。これは双方とも、全く鍛造剝片は検出できなかった。真黒い砂鉄のみが目立った。

選別中に感じたことであるが、砂鉄が特に目立って、この地山土の軟弱な花崗岩風化土中にかなりの量が含まれていることが推定できた。このような奥深い谷あいの山中に鍛冶工房を設けた理由には、既述の如く燃料の確保ということにあわせて、ひとつには、谷水を利用しての山砂鉄採取目的もあったのではないかと想像する次第である。

第4号焼土壙（Fig. 29, PL. 16）

第3号焼土壙の東側、つまり、工房跡と考えられる第2号掘立柱建物内の東南隅付近に位置する。結論から言えば、第3・5号焼土壙と同類の、鍛冶作業に関する一連の焼土のひとつとされよう。

南北に、長さ120cm、東西最大幅70cmの間に、灰の混じった焼土層が厚さ6cmほど検出された。その中央付近20cmの範囲内は特に堅固に焼けている。出土遺物も無く、具体的性格はつかみ難いが、上述の如く、鍛冶関連のものであることは疑いなかろう。

第５号焼土壙（Fig. 32, PL. 35）

第２号掘立柱建物の中央やや東寄りの、第３号焼土壙下層の東南端にある。落ち込みとしては、東西に320cm、南北に170cmほどの不整形の浅い掘り込みであるが、焼けた部分は150×80cmほどの範囲のみである。壁は南西側が焼けているが、底面の一部にガチガチに焼けた面が検出された。

この焼土壙も、具体的な性格はわからないが、第３号焼土壙の下層にあたることから、いずれにしろ、鍛冶関連の所産であろうと思われる。

堅く焼けた部分の北側から土器が出土した。

出土遺物（Fig. 33）

土師器鉢（７）口径18.7cm、器高11.4cm、最大径20.0cmとなる鉄鉢形須恵器の忠実な模倣品である。口縁外端部がわずかにへこむくせがみられ、底部は尖底となる。口縁内外面は横ナデ、体部外面下半はヘラ削り、内面のほとんどは丁寧なナデ調整を行っている。胎土に細砂粒・雲母片・赤褐色粒を少量含み、焼成良好で褐色をなす。

土師器甕（８）平底風となる日常煮沸甕の底部片である。底部内外面ともにナデている。胎土に細砂粒・金雲母・角閃石を若干含む。焼成良好で橙褐色をなす。

以上の土器は、８が甕として古相を示しており、７の鉄鉢形土器がその須恵器の年代観とほぼ同時期と考えられるとすると、第３号焼土壙下層面と同じ８世紀前半～中頃と比定できる。

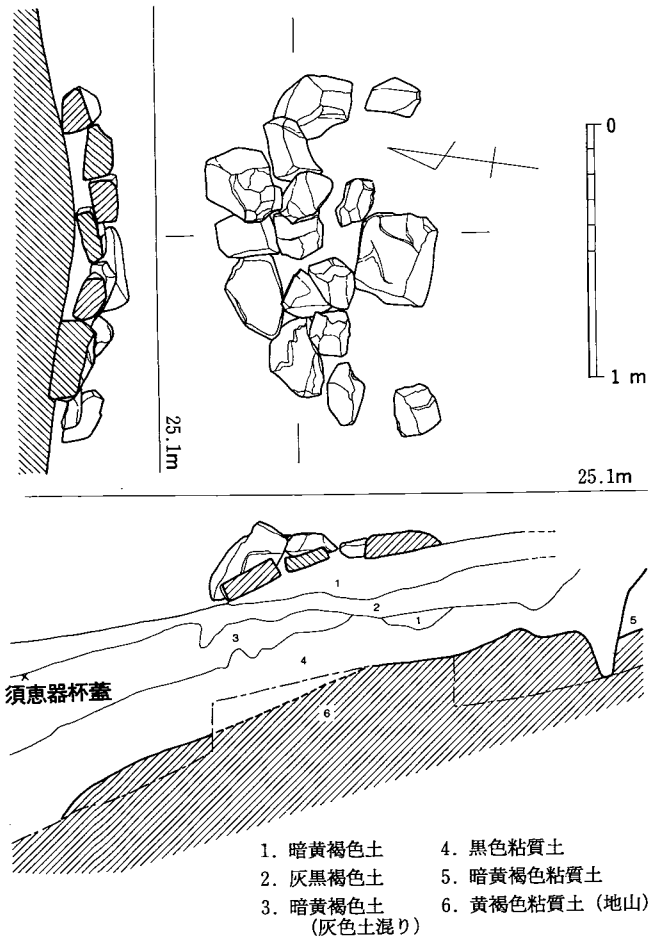


Fig.35　第１号集石遺構実測図（1/30）

D 集石遺構

Ⅱ区谷奥の造成面上に塊石を集めた部分が検出されたが、精査にも関らず、その性格は明確にできなかったので、とりあえず集石遺構と名付けてここで報告しておきたい。

第1号集石遺構（Fig. 35, L. 17）

第2号掘立柱建物の西側に接した外側にあたり、35～20cm大の塊石を集めている。石材はすべてもろい花崗岩で、焼けてはいない。東西に140cm、南北に90cmの範囲に、大旨平らな面を下にして、石を集めて覆ったという感じで、きちんと敷きつめたというものではない。また、一部に2段に石が重なる部分もあるが、外側の石のうちで、基壇状に縁石としてきちんと据えられたものはひとつも無い。更に、土層断面図に見るごとく、この集石の下は、造成による整地層がみられるだけで、遺構は全く認められなかった。

この地点の整地層自体が地山の傾斜に従って、北へすべて傾斜しているのに対して、石の下面は揃ってはいないが、上面をある程度水平に揃えようとした様子がうかがわれる。石自体がこの付近では全く見られない場所であることから、ちゃんと意識して構築したものであることは確かである。

また、土層の2と3の境目付近から平安初頭の須恵器杯蓋片が出土したことから、この集石遺構の上限がそこにおさえられる。そして、集石直下の土が、第3号焼土壙の貼床であった黄色粘質土と関連する暗黄褐色土であることから、鍛冶工房の時期とほぼ同じと考えてよいと思われる。

その性格としては、位置が第2号掘立柱建物（鍛冶工房）西辺のちょうど中間に外接することから、谷から登ってきて建物の入口に入る位置での石段、あるいは踏石と考えられる。

もしこの西の妻側を入口とすれば、これから更に西へ約6mの位置に検出された杭列（垣根、板塀）との間が意味を持ってくる。この杭列は南北方向に90～120cm間隔に5穴並んでおり、ちょうど第2号掘立柱建物の西側の屋敷地を区切るような位置にある。これより西は造成面も狭くなり、西風をさえぎる意味でもこの塀は良い位置にある。この塀と建物との間の約50m²の空間が、入口前面のニワであり、外の作業場としても生活空間の一部として認識されていたであろう。

出土遺物

杯蓋（Fig. 36）須恵器で、口径12.7cm、器高1.1cm強となる扁平な器形となる。鳥嘴状口縁はかなり退化して、内面の屈曲はわずかなへこみとなって残るにすぎない。残存部は内外面ともに回転ナデ、胎土に細砂粒若干含み、

Fig.36 集石遺構より下層出土土器実測図（1/3）

焼成堅緻で灰色をなす。小ぶりで扁平な器形や退化した口縁等から、9世紀初頭まで降る可能性が考えられる。

E　道状遺構

Ⅱ区の斜面中途の造成地については、すでに詳述しているが、この平坦面に行くためには、下の谷から登るにはかなりの急斜面で、雨の後などにはすべってとても登れるものではない。尾根線づたいにぐるりとまわって、直下の造成面に降りるにも、これまた谷から登る以上に絶望的に崖状となっているのだから、まずあきらめるしかない。

このような場所で、造成面の上下各方向を結ぶものとして、2ケ所の黒色土の帯状部分が検出された。具体的に階段や、全容が残存しているわけではないので、あくまでも決定的とはいえないが、取りあえず道状遺構と称して報告しておきたい。

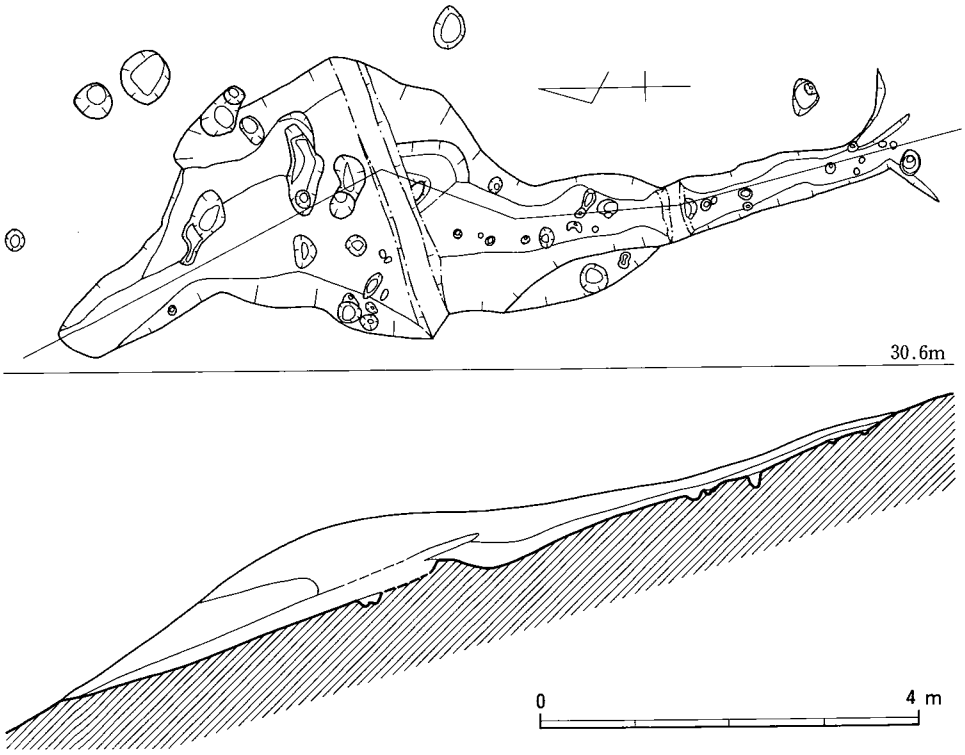


Fig.37　第1号道状遺構実測図（1/80）

第１号道状遺構（Fig. 37, PL. 17）

第２号掘立柱建物の南側、つまり、裏側の尾根線から急斜面にかけて、黒色土の溝状部分が検出された。最大幅280㎝、最小幅40㎝、長さは9.5ｍに及ぶ。南端はちょうど尾根線上で、その反対側の南斜面へは続いていないことを確認している。

図に示すごとく、主軸線は中途で折れ曲がっており、急斜面での山道の状況をよく表している。またその底面には、小さな穴が多くみられ、自然の流れや木根痕のほかに、杭を打ち込んでの階段等の工作も施されたかとも思われる。

いずれにしろ、この道状遺構の位置は、自然の流路となるような谷頭とも離れており、明らかに人為的な掘り込みによると考えられる。そして、尾根筋づたいに行き来するような用途、例えば、燃料としての木材の伐採のための山道として、至近距離をとって尾根上までの急斜面にあえて道を付けたと考えられる。

この遺構中から、細片の土器破片はいくらか出土したが、図示に耐え得るものは無い。時期的にみて、少なくとも中世以降のものは混入していない。よって、この第１号道状遺構は、位置関係からみても、下の造成面の鍛冶工房を中心とした各遺構と有機的に結びついた同時期の所産であろうと推定されよう。

そして、その用途は、鍛冶生産活動に必須である燃料を求める重要な山道であったと位置づけられよう。

第２号道状遺構（Fig. 18, PL. 2）

個別図には示さなかったが、遺構配置図の中で、Ⅱ区中央尾根の西斜面の第２号焼土壙や、第６号火葬土壙の西隣に位置する。

かなりの急斜面に対して、等高線と約30度の角度をとって、斜めに登っている。最大幅150㎝、最狭幅50㎝で、長さ14.4ｍにおよぶ。底面は浅く平らであるが、階段等の諸構造の痕跡は認められない。

黒色土の埋土中からは、土器の細片がかなり出土しているが、図示できるものは無い。遺構の位置や第１号道状遺構の状況などからみて、造成面の各建物・遺構に伴う平安初頭前後の所産であろうと推定される。

この道状遺構の性格としては、谷から斜めに登って、造成平坦面に至ることを目的としてることから、日常生活道として、水を含めた生活物資の搬入及び生産原材料の搬入、生産品の搬出をも行った、一般的な意味での出入口であったと言えよう。これは、特殊な性格としてとらえた第１号道状遺構とは、全く異なるものとされよう。

後世、おそらく中世末～近世初頭に、このⅡ区中央尾根線に沿って、浅い掘り切り状の山道が作られるまでは、造成平坦地に至るには、これらの道状遺構の利用しかなかったのであろう。

各柱穴出土遺物（Fig. 38・39）

ここでは、既に述べてきた、奈良～平安期の各遺構や整地層出土の遺物以外の小ピット出土の遺物について報告したい。造成面には、図にみる如く、数百の小ピットが検出されており、細片も含めるとほとんどの穴から土器片が出土している。穴の大部分は整地層に掘り込まれたものであり、掘りすぎて整地層中の土器が出土したものも多い。だから、厳密な意味での柱穴の上限を示す遺物としては把え得ない性格を有している。ただ、この造成面での各ピットは、

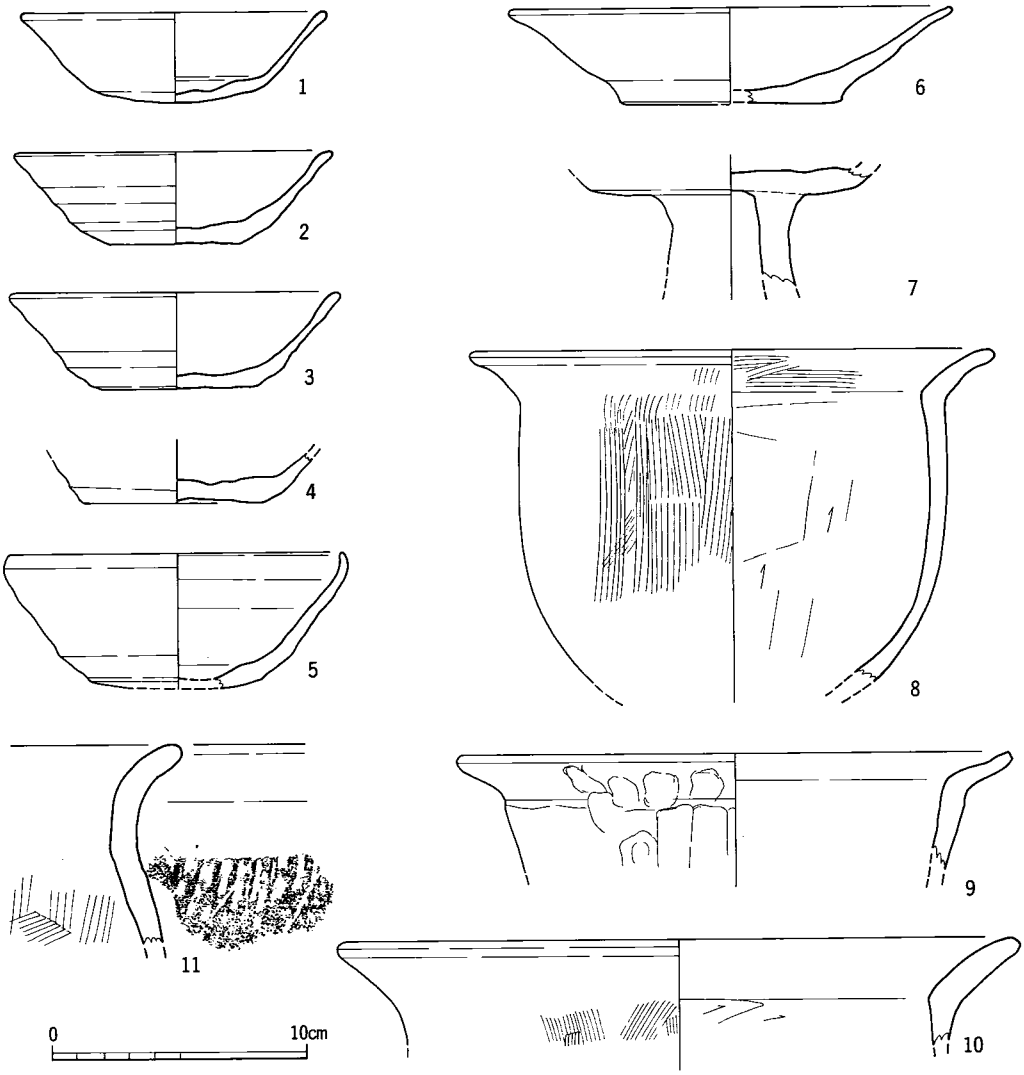


Fig.38　II区各Pit出土土器実測図（1/3）

少くとも平安中期以降のものは皆無といってよい。ということは、この頃にはすでに斜面上方からの土砂の流入により、ほとんど埋没しつつあったと判断できる。ここでは、各ピット出土遺物のうち、図示に耐え得るものだけを報告しておきたい。

土師器杯（1～6）1は、P－81出土品で、口径12.0cm、器高3.6cm、底径6.6cmを測る。体部上半でやや外反し、底部は丸味をもつ。全面磨滅して調整は不明であるが、底外面はヘラ切りによるものであろう。口縁内側の一部に油煙が付き、灯明皿に使用されたものと思われる。2は、P－16出土品で、口径12.3cm、器高3.6cm、底径5.2cmを測る。体部上端で外反して開く傾向をみせ、底部はヘラ切りによる。体部内外面は横ナデ、外面下端はヘラ削りがみられ、底内面はナデツケている。細砂粒と雲母をかなり含み、焼成良好で、橙～灰色をなす。3は、P－22出土品で、口径12.7cm、器高3.9cm、底径5.8cmを測る。これも2と同様、体部下端にヘラ削りを施している。底部はヘラ切りで、胎土に細砂粒を多量に含み、赤褐色粒も目立つ。焼成良好で、茶色をなす。4は、P－168出土品で、底径7.0cmを測り、内底面はナデツケている。底部ヘラ切りで、胎土に細・小砂粒をかなり含み、焼成良好で内面は黒褐色、外面は黄橙色をなす。5は、P－84出土品で、復元口径13cm、底径6.6cm、器高5.4cmである。口縁が内湾する異形品で、器表は磨滅するが、底部はヘラ切りによると思われる。胎土に細砂粒・雲母・赤褐色粒を若干含み、焼成良好で茶褐色をなす。6は、P－103出土品で、口径17.3cm、器高3.9cm、底径8.2cmを測る。大口径の皿状の異形品で、奈良期のものと思われる。口縁内端がわずかにへこみ、器表は全面磨滅して調整は不明であるが、底部はヘラ切離しによるものと思われる。胎土に細砂粒を多量に含み、焼成良好で淡黄褐色をなす。以上の土器のうち1～3は奈良末～平安初期のものと考えられる。

土師器高杯（7）P－123出土品で、通常の須恵器形の高杯と異り、脚付鉢となるのかもしれない。杯部外面から脚部内外面は横ナデを施している。胎土に細砂粒と雲母・赤褐色粒を若干含み、焼成良好で橙茶色をなす。

土師器甕（8～11）8は、P－23出土品で、復元口径20.7cmを測る小型甕である。頸部内面に稜をつくり外反するが、口縁の肥厚はほとんどみられない。胴部外面上半は粗い縦ハケ、下半はナデ、口縁内面には粗い横ハケが施される。胴部内面は稜までヘラ削りが施されて、古い様相を残している。外面下半には煤が付着している。胎土に砂粒を若干含み、焼成良好で、内面は暗褐色、外面は黄褐色をなす。9は、P－139出土品で、復元口径21.6cmを測る。口縁外端は面をなし、内側の稜も丸味をもつ。胴～口縁外面にはナデの時の指頭圧痕が残り、他内面まで丁寧にナデている。外面には煤が付着する。胎土に細砂粒をやや多く含み、焼成良好で内面は褐色、外面は黒褐色を呈する。全体に平安期に降る様相をみせている。10は、P－39出土品で、口縁がやや肥厚し、内面に稜をつくる。口径27.0cmで、胴部内面は横位のヘラ削り、外面はやや細かい縦ハケを施す。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で、淡黄橙色をなす。11は、P

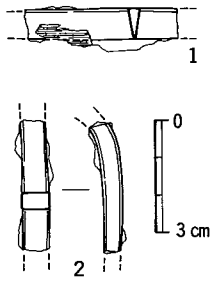


Fig.39　各柱穴出土
鉄器実測図（1/2）

－73出土品で、頸部内面に全く稜をつくらず、胴内面にはハケを施している。胴外面は縦位の太い平行条線状叩きを施している。外面には煤が付着している。胎土に砂粒を多く含み、焼成良好で、褐色をなす。以上の土師器甕のうち、8・10は古い様相を残しており、奈良期のうちにおさまる。9・11は大小の器種の違いはあるが、いずれも9世紀代の所産であろう。

鉄器（Fig. 39）1は、P－39出土の刀子片で、現存長4.1cm、幅0.8cm、厚さ0.25cmとなる。一部に木質が付着しており、鞘に収めていたものと思われる。2は、P－25出土の不明鉄製品で、現存長3.5cm、幅0.8cm、厚さ0.4cmとなり、先端が曲がりつつある。その形状から、鑷子かとも考えられる。

F　整地層出土の遺物

Ⅱ区中央尾根の西斜面における造成地の形成状況については、掘立柱建物の項で詳述した。この造成面整地作業の各段階で、各整地層にかなりの量の遺物が含まれている。特に谷頭を中心とした斜面には量が多い。

雨が降るたびに土器片が一面に顕われるという具合で、かなり生活臭の強い状況を観取できた。中には、塼仏や緑釉陶器片、平瓦片等出土しているが、量は少なく、具体的に仏堂等の所在を指摘できるまでは精査に至っていない。このような性格の堂塔が存在したとすれば、第1号掘立柱建物の南側付近の柱穴群がそれにあたるのであろうか。

また、この包含層中から、無視できないほどの弥生時代遺物が出ていることも気にかかる。磨製石斧や打製石鏃、日常土器の出土は、この斜面に竪穴式住居等の生活遺構の存在を示すに充分である。また、少量ではあるが甕棺片が出土していることも、Ⅰ区尾根上における甕棺墓地とは異なるグループの小甕棺墓地が営まれていたことを示してくれる。

以下、まず、整地層の概要を整理し、奈良～平安期の各遺構の年代観を示したのち、個々の遺物の報告に移りたい。

整地層遺物の出土状況

ここでは、既述した第1号掘立柱建物周辺の地山直上出土土器についても述べ、その後に整地層の多量の遺物について記述してゆきたい。

まず、地山直上出土土器は、第1号掘立柱建物のテラス部分の山側の真砂土地山直上出土品で、かならずしもこの造成面テラスの当初期を示すという意味ではない。ただとり上げた土器

をみる限り、土師器杯の口径は13.5cm前後と大きく、8世紀後半～末におくことができる。

次に、第1号掘立柱建物の立つ面の谷寄りの整地した部分の包含層からは、新旧の土器が出土しており、8世紀中頃～後半のものと、9世紀代に降るものとがある。

杭30付近整地層出土としたものは、ちょうど谷中央部分で、第1号と2号の建物の中間にあたる部分のものである。8世紀中頃～末を中心として多量あるが、9世紀前半まで降るものもいくらか含まれる。塼仏もこの部分で出土したものである。また、整地層下層としてとり上げたものも、これとほぼ同じ包含層出土品であり、8世紀中頃～後半を中心とする。

杭28北側黄褐色土包含層出土品としたものは、第2号掘立柱建物の北斜面にあたり、第3号焼土壙の貼り床である黄褐色土が流れたものである。この部分では、高い高台付の土師器椀が大量に出土し、緑釉陶器の出土もみられた。

以上のことから、第1号掘立柱建物およびその周辺は、8世紀後半～末の遺構、第2号掘立柱建物および第2号鍛冶炉周辺の遺構は、8世紀中頃に当初期があり、今回検出した第3号焼土壙などの最終遺構は、9世紀初頭～前葉のものと推定できる。第2号掘立柱建物側のテラス面の方が、より長い期間使用されていたことがわかる。

以下、各遺物について報告してゆきたい。

須恵器（Fig. 40・41）

杯蓋（1～8）　1～3は大型器種の蓋である。1・2は谷中央トレンチ、3・4・8は杭30付近包含層、5は谷中央包含層、6は整地層下層、7は杭28北斜面包含層出土品である。1と8の天井外面はナデ調整で、他はすべて回転ヘラ削りを施している。7の内面は硯に転用されて墨が残っている。4の口縁は鳥嘴状とならない。7・8の端部も丸っこくなってきている。5～7は、口径13.8～13.4cmの中型器種で、8は、口径11.4cmの小型器種である。天井内面はすべてナデツケが施される。1・5・8は、焼き歪がみられ、1ではつまみの位置がずれている。第3号焼土壙出土品にも焼歪みの著しいものがみられ、この近辺に窯が存在していたことも考えられる。

高台付杯（9～16）　9は第1号掘立柱建物谷側の包含層出土品で、高台径10cmとなる。胎土精良であるが、白灰色をなす生焼け品である。底部から斜めに上がった位置に屈曲部があり、7世紀後葉代の古い様相を示す。10は、杭30付近包含層出土品で、口径14.4cm、器高4.1cm、高台径10.6cmを測る。体部は、わずかに傾く程度で、高台は短いが外方へ踏んばる形態を残している。底外面にヘラ沈線がみられるが、ヘラ記号ではなさそうである。外面は灰かぶりで黒色をなす。11は、整地層下層出土品で、口径13.4cm，器高4.2cm、高台径9.2cmを測る。内端で接地する高台を付け、体部外面は灰かぶりして黒色をなす。12は、杭30付近黄褐色土包含層出土品で、復元口径14.0cm、器高3.7cm、高台径8.8cmを測る。体部がかなり外傾し、体部外面は

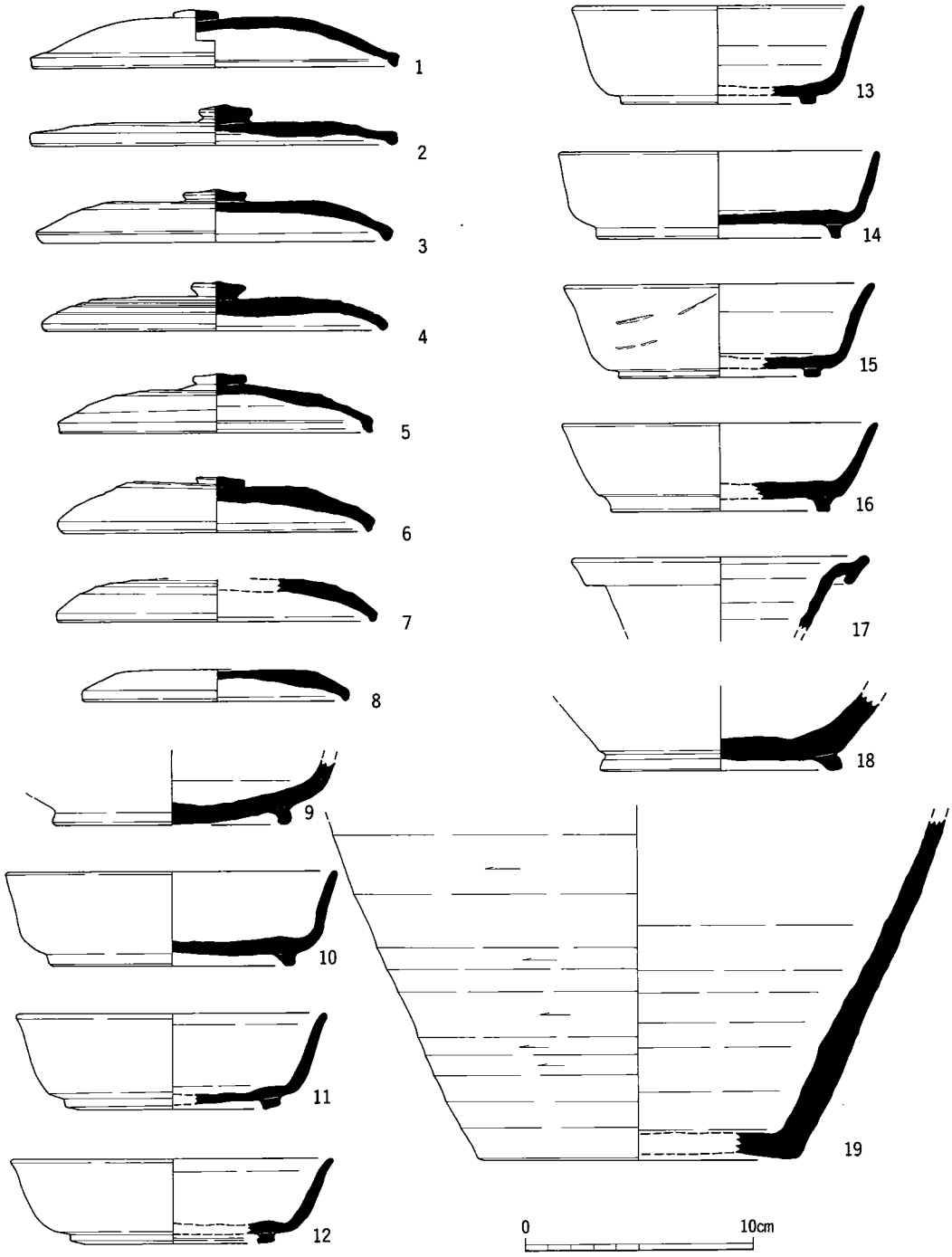


Fig.40　整地層出土須恵器実測図（その１）(1/3)

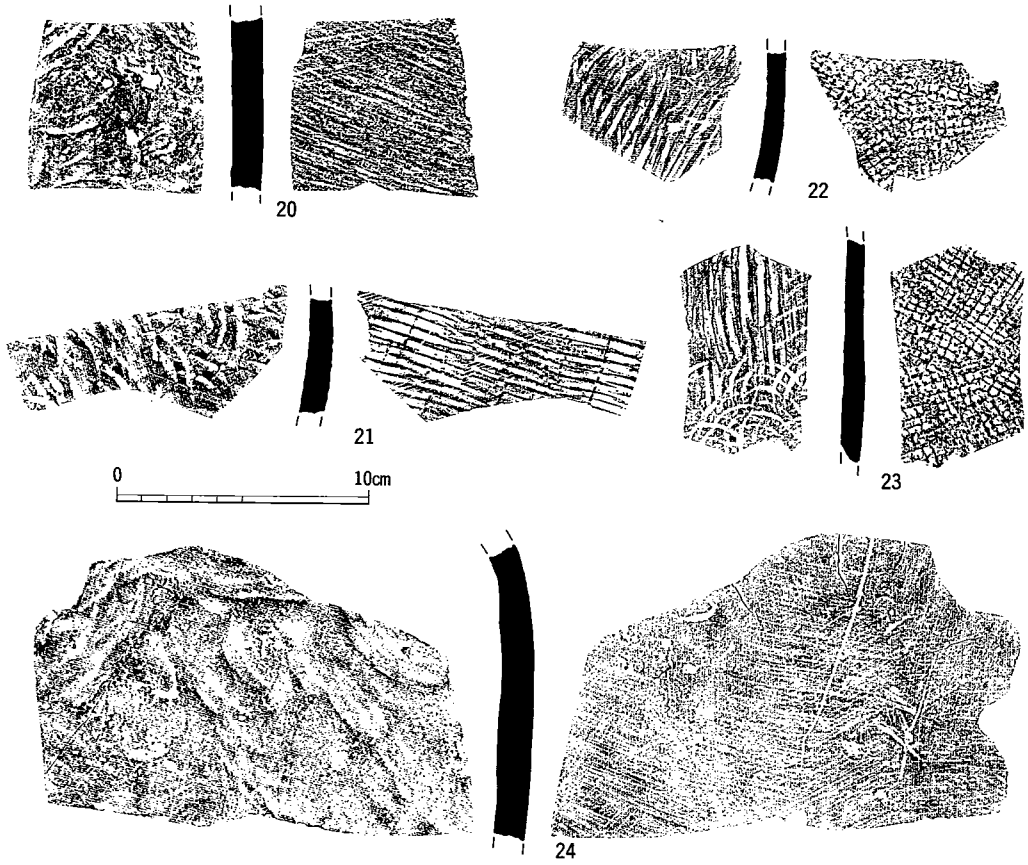


Fig.41　整地層出土須恵器実測図（その２）(1/3)

灰かぶりして黒色となる。13は、整地層下層出土品で、口径12.8cm、器高4.3cm、高台径8.6cmとなる。体部は焼き歪んでおり、焼成やや甘く、暗緑灰色をなす、14は、杭30付近包含層出土品で、復元口径14.1cm、器高3.8cm、高台径10.7cmを測る。胎土に小・粗砂粒を若干含み、外面は灰かぶりして灰～黒色をなす。15は、整地層下層出土品で、復元口径13.6cm、器高4.1cm、高台径8.8cmを測る。体部外面は灰かぶりして黒色をなす。低い高台で、体部上半で外反する。体部外面には、ヘラ工具先端痕がみられる。16は、谷中央トレンチ出土品で、復元口径13.8cm器高3.9cm、高台径9.6cmを測る。体部と底部の境に稜をつくり、体部はかなり外傾する。以上の高台付杯のうち、９は７世紀後葉、16は８世紀後葉であり、他は、８世紀中葉を中心とする時期のものである。

壺（17・18）　17は、杭30付近包含層出土品で、口径13.4cmとなる。全面回転ナデ調整で、口

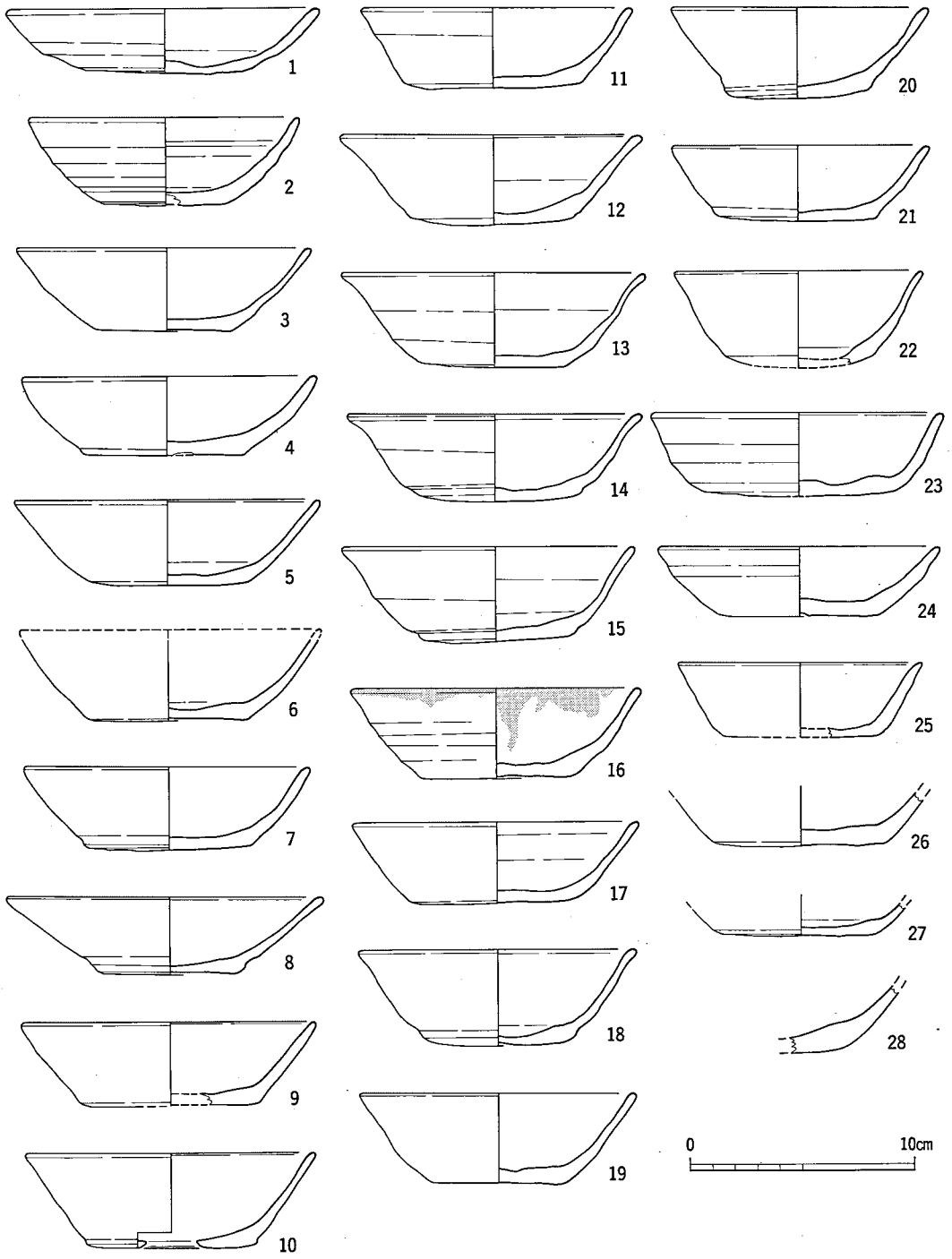


Fig.42　整地層出土土師器実測図（その１）(1/3)

縁下端の下垂に特徴がある。微砂粒をわずかに含み、内外面とも灰かぶりして灰～黒色をなす。内面には自然釉が付着している。18は、谷中央包含層出土品で、高台径9.6cmとなる。内外面ともに回転ナデを施し、底外面中央部のみナデツケがみられる。胎土精良で、焼成堅緻にして黒灰～ねずみ色をなす。低いが外方へ踏んばった高台で古い様相をみせる。

鉢 (19)　谷中央包含層出土の直線的に開く類の鉢で、復元底径14cmとなる。内面は横ナデで、体部外面は回転ヘラ削りで、下端近くはその上をナデている。底外面は粗雑なナデ調整がみられる。微砂粒を多く含み、焼成堅緻で、内面は黒灰色、外面は灰～黒色をなす。

甕 (20～24)　20は、杭30付近黄褐色土包含層出土品で、外面は細い平行条線状叩きを横位に施し、内面は青海波あて具痕を残す。細砂粒をかなり含み、焼成堅緻で暗灰色をなす。21は、杭28北斜面包含層出土品で、外面は灰かぶりして暗灰色、内面は灰黒色をなす。外面は条蓆状叩きを斜位に施し、内面は粗い青海波あて具痕を残す。胎土精良である。22は、谷中央包含層出土品で、外面は細かい格子目叩き、内面は縦位の平行条線状あて具痕を残す。胎土精良で青灰色をなす。23は、杭30付近包含層出土品で、22と同様の叩きをみせるが、内面下半には細めの青海波あて具痕が残される。細砂粒を若干含み、焼成堅緻で暗青灰色をなす。24は、杭30付近包含層出土品で、大型甕の底部片と思われる。外面は細かい刷毛状のもので粗く調整し、内面は円柱状あて具で突き締めた痕跡が顕著にみられる。

土師器 (Fig. 42～45)

杯 (1～31)　特に記しているもの以外はすべてヘラ切り底である。口径により13cm以上およびそれを前後するものと、口径11cm前後のものに大別できる。後者は深いもの (20～22・25) と浅いもの (29～31) に識別され、浅いものは時期的にずっと降るものと考えられる。さらに、32～35は、ヘラ切り底ではあるが、もっと浅くなっており、法量からは大宰府編年の10世紀後半以降の小皿発生期の「杯a」にあたる。ただ本遺跡では、これに伴うとされる、かなり丸底に近くなった形態の杯が全く見あたらないので、それほど新期の型式と考えにくいところがある。これにとどまらず、9世紀以降の糸島地方歴史時代土師器については、大宰府の変遷過程とはかなり異質なものがあり、地域性が出てきているといえる。閉鎖性を特色とする荘園制の発展過程にあたっていることも、一つの原因であろう。

口径13cm前後の大きい杯でも、細かく4つに分類できる。1・2のように全体に丸く内湾し、底部外面まで回転ヘラ削りを施す古相を示すもの。3～7のように体部が内湾気味に開くもの。8～11のように直線的に開くもの。12～15のように体部上半で外方へ反転して開くもの。これらのうち、口縁が外反するものはやや新しい傾向と考えられるが、全体としては、1・2を除いて他は時期差が無いと思われる。以下個別に特徴をかいつまんで報告しておきたい。

1は、杭30周辺包含層出土品で、復元口径13.5cm、器高2.6～3.0cm、底径7.0cmを測る。底面は回転ヘラ削り、体部内外面横ナデ、底内面はナデツケを施す。内面に油煙が付着して、灯

明皿として用いられたことがわかる。

2は、谷中央包含層出土品で、口径12.0cm、器高3.9cm、底径5.4cmの内湾する杯で、内面に油煙が付着する。体部外面下半から、底外面にかけては、ヘラ削りの上を丁寧にナデている。底内面にはナデツケがみられる。

3は、第1号掘立柱建物面の整地層中出土品で、復元口径13.0cm、器高3.7cm、底径5.9cmとなり、口径に比べて底径が小さい特徴がある。内外面磨滅して調整不明であるが、口縁内面に油煙が残っている。

4は、杭28北斜面包含層出土品で、口径12.8cm、器高3.5cm、底径7.1cmで、体部内外面は横ナデ、他調整は磨滅して不明である。焼成不良で、底部付近のみ橙茶色、他は黒～黒褐色を呈する。

5は、杭28北斜面黄褐色土包含層出土品で、復元径13.5cm、器高3.8cm、底径7.3cmとなる。全体に磨滅しており、調整は不明。

6は、杭30付近包含層出土品で、推定口径13.4cm、器高4.0cm、底径7.1cmとなる。器表はかなり磨滅しているが、内底面にはナデツケが施されている。

7は、杭30周辺包含層出土品で、口径12.5cm、器高3.7cm、底径7.2cmを測る。体部から底内面全面に横ナデを施している。内面には油煙が付着している。

8は、第1号掘立柱建物周辺整地層出土品で、復元口径13.9cm、器高3.4cm、底径5.8cmを測る。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成良好で、褐色をなす。底内面にはナデツケがみられる。図で見ると越磁の模倣的な感じがするが、明らかに土師器であり、体部の直線的な広がりからみて、いくらか意識して作ったかなと思われる程度である。

9は、谷中央包含層出土品で、復元口径12.8cm、器高3.7cm、底径7.0cmとなる。全面磨滅するが、内底面はナデツケているようである。焼成不良で橙茶色をなす。

10は、第1号掘立柱建物周辺整地層出土品で、復元口径12.8cm、器高4.2cm、底径7.6cmとなる。底面中央に径2cm内外の円孔が焼成後穿たれ、その周辺が黒色に変化している。油皿の上にこれを重ね、芯をこの穴から出して灯明皿としたものであろう。本遺跡出土の土師器杯・皿の類では内面に油煙のつくものがかなり多いが、その大部分は油皿の縁に芯を立てかけたものと考えられる。それ以外に、この例の如く穿孔したものを上に重ねて芯の固定を計ったものと、後に報告する如く、当初から下に受け皿を接合した、ひょうそくの祖形となるものとがある。これらの灯火器における諸状況をみると、この奈良末～平安初期前後が、灯火器改良の試行錯誤の時期で、日本の「あかり」史上、画期をなすものと考えられる。

11は、谷包含層出土品で、口径12.0cm、器高3.5cm、底径7.7cmとなる。底外面はヘラ切りで、板状圧痕が残る。

12は、第1号掘立柱建物整地層出土品で、復元口径13.3cm、器高4.0cm、底径7.0cmを測る。

胎土に細砂粒を多く含み、器表は磨滅する。

13は、谷中央包含層出土品で、口径13.3cm、器高4.2cm、底径6.4cmとなる。体部中途から外反して開く類で、底外面には板状圧痕が残る。

14は、杭28北斜面黄褐色土包含層出土品で、口径12.8cm、器高3.9cm、底径7.3cmとなる。全面磨滅するが、底部はヘラ切りと思われる。

15は、整地層下層出土品で、口径12.5cm、器高4.0～4.5cm、底径6.5cmを測る。全面磨滅しており調整は不明である。

16は、整地層下層出土品で、口径12.4cm、器高4.0cm、底径6.7cmを測る。口縁内面と底部に油煙がこびりついている。

17は、杭30周辺包含層出土品で、口径12.6cm、器高3.6cm、底径7.2cmを測る。内外面ともに器表は磨滅しており、調整は不明。

18は、第1号掘立柱建物周辺整地層出土品で、復元口径11.9cm、器高4.2cm、底径5.5cmを測る。体部内外面から底内面まで横ナデを施す。

19は、杭30付近包含層出土品で、復元口径12.2cm、器高4.0cm、底径5.6cmを測る。全面磨滅しており、底部が小さい類である。

20は、第1号掘立柱建物周辺整地層出土品で、口径11.4cm、器高3.8cm～4.3cm、底径6.0cmを測る。体部は調整不明であるが、底外面は丁寧にナデている。

21は、谷包含層出土品で、口径11.4cm、器高3.3cm、底径7.2cmとなるやや小ぶり品である。底外面はヘラ切りで、板状圧痕がみられる。

22は、谷包含層出土品で、復元口径11.1cmとなる。器高は4.4cm近くになる深いものであるが、径が小ぶりの類である。内外面調整不明。

23は、谷包含層出土品で、復元口径13.0cm、器高3.7cm、底径9.1cmとなる。口径に対して底径が大きい異類品であり、須恵器模倣の形態とも思われる。体部内外面とも横ナデ、底内面はナデツケ、体部外面下端から底外面はヘラ切りののち丁寧にナデており、板状圧痕がみられる。

24は、第1号掘立柱建物周辺整地層出土品で、復元口径12.2cm、器高3.2cm、底径7.0cmとなる。内底面にはナデツケがみられ、全体に器壁が厚い。浅い部類である。

25は、第1号掘立柱建物周辺整地層出土品で、復元口径10.7cm、器高3.3cm、底径6.7cmとなる小型品である。器表の全面が磨滅しており、調整は不明。

26～28は、いずれも第1号掘立柱建物周辺整地層出土品で、26・28は大型品となろう。28は内面に油煙が付着している。

29は、谷包含層出土品で、口径12.1cm、器高2.5cm、底径6.9cmとなる浅い器種である。内外面ともに調整不明である。

30は、杭28北斜面黄褐色土包含層出土品で、口径11.1cm、器高2.9～2.7cm、底径7.2cmとなる。

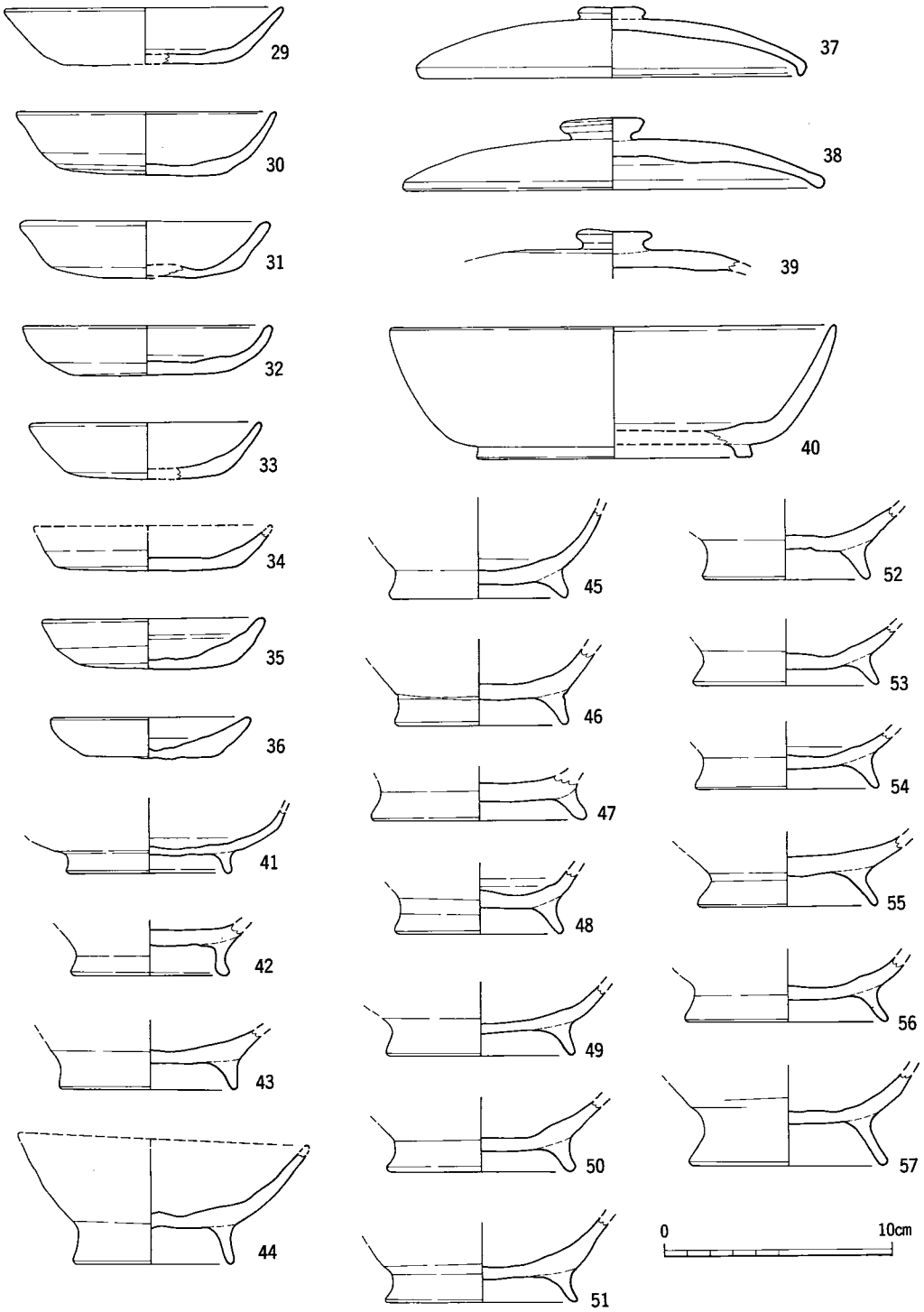


Fig.43　整地層出土土師器実測図（その２）(1/3)

体部外面下端からヘラ削りを施している。径は小さいが、体部は内湾気味であり、古い類となるのかもしれない。

31は、第1号掘立柱建物周辺整地層出土品で、復元口径10.9cm、器高2.5cm、底径4.0cmを測る。内面一部に油煙の痕跡がみられる。

小型杯（32～36）32～35は法量が、大宰府第43次調査の観世音寺僧房井戸ＳＥ1083出土杯ａと近似しているところから、杯と別に分類した。しかし、この10世紀後半～11世紀前半とされる土器群とは、技法・器形的にも異り、口縁端が外へ折れて丸底の杯に近くなった形態の椀類が本遺跡では全く伴わないこともあり、もっと古い9世紀代の異用途としての器種ではないかと考える。

32は、第1号掘立柱建物周辺整地層出土品で、口径10.8cm、器高2.1～2.3cm、底径6.8cmとなる。体部は丸く内湾気味となり、焼成軟質で茶色をなす。器表磨滅して調整不明。

33は、谷中央包含層出土品で、復元口径10.0cm、器高2.5cm、底径6.8cmとなる。全面磨滅し、焼成悪く、黒褐色をなす。

34は、谷包含層出土品で、推定口径10.3cm、器高1.9cm、底径8.0cmを測る。全面磨滅しており調整はわからない。

35は、杭30付近包含層出土品で、口径9.8cm、器高2.2cm、底径6.8cmを測る。体部内外面横ナデ、内底面にはナデツケがみられる。体部外面下半はヘラ削りを施す。内面には油煙の付着がみられる。

36は、谷中央包含層出土品で、口径8.7cm、器高1.8cm、底径5.5cmの小皿である。全面磨滅して調整不明。ヘラ切り底であるが、この器種は1点のみであり、時期は明確にできない。

杯蓋（37～39）いずれも撮を付けた須恵器模倣の土師器である。37は、整地層下層出土品で、鳥嘴状口縁の形態を残すもので、口径16.6cm、器高3.2cmを測る。器表は全面磨滅する。38は、杭30周辺包含層出土品で、端部を丸くして略化している。口径18.0cm、器高3.2cmで、器表の調整は不明。39は、谷中央包含層出土品で、器表は全面磨滅して調整はわからない。以上の杯蓋は、撮付須恵器の盛行する時期と考えられるから、奈良期を降るものではなかろう。

高台付杯（40）　杭30付近黄褐色土包含層出土品で、復元口径19.3cm、器高5.7cm、高台径11.9cmを測る。須恵器模倣の大口径の土師器で、短くわずかに外方へ張る高台を付ける。器表は全面磨滅する。少くとも奈良後半期の所産であろう。

高台付椀（41～57）41・44は第1号掘立柱建物周辺整地層出土品、42・43・46・47・49～51は杭28北斜面黄褐色土包含層出土品、45・48・52～54・56・57は谷包含層出土品、55は杭30付近包含層出土品である。高台の形状で大旨3類に分けられる。短かくて外方へあまり張らないもの（41～43）、それほど長くはないが外方へかなり踏ん張るもの（45～51）、長くて外方へ強く張り出すもの（52～57）などに分けられる。大宰府の編年にあわせれば、9世紀後葉を中心と

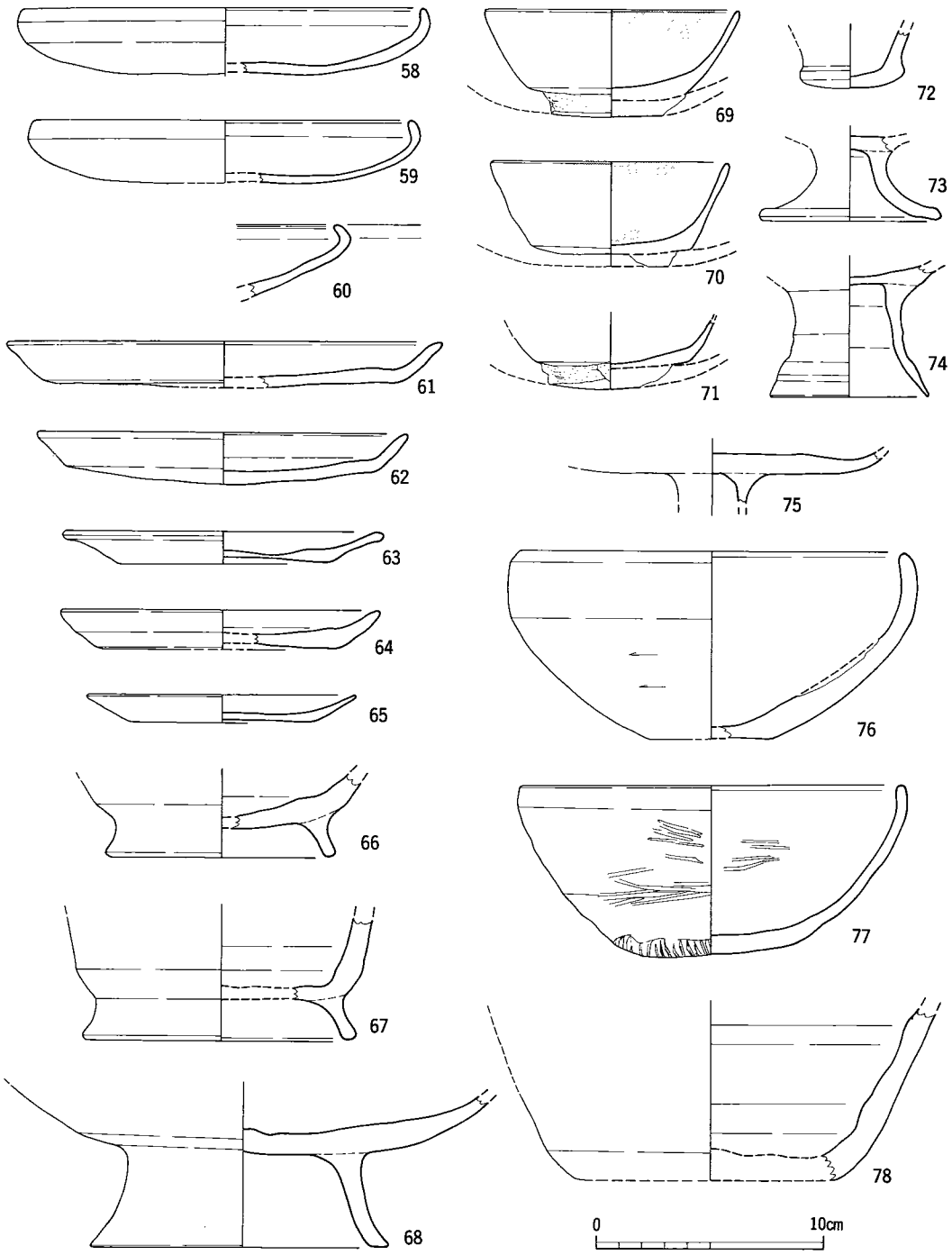


Fig.44　整地層出土土師器実測図（その３）(1/3)

した時期となろうが、全体に本遺跡例では底部が丸味をもつものが少なく（45など）、大宰府第35次ＳＫ678出土品よりも古くもってゆけそうである。ただ、高台の高いのが目立ち、大宰府より、むしろ久留米市の筑後国府周辺出土例に近いと考える。これらのことから、この高台付椀の一群は、９世紀前半～中頃にさかのぼる可能性が考えられる。

皿（58～65）58～60は明らかに７世紀後葉の所産であり、58・59は整地層下層、60は谷包含層出土品である。58は、口径17.4cm、器高2.7cm、59は口径16.3cm、器高2.8cmを測る。いずれも胎土精良で、器表は磨滅している。61は、口径19.1cm、器高2.1cmで、杭30付近包含層出土品である。底面はヘラ削りを施す。62は、杭28北斜面包含層出土品で、口径16.2cm、器高2.3cm、底径13.7cmを測る。底外面は回転ヘラ削りを施す。63は、谷包含層出土品で、口径14.0cm、器高1.5cm、底径9.2cmを測る。器表は全面磨滅して調整不明。64は、杭28北斜面黄褐色土包含層出土品で、口径14.0cm、器高1.8cm、底径10.6cmを測る。底部はヘラ削りと思われる。65は、第１号掘立柱建物周辺整地層出土品で、復元口径11.6cm、器高1.3cm、底径8.0cmを測る。器表は全面磨滅している。

壺（66・67）高台の付いた壺で、66は杭30付近包含層出土品で、内外面横ナデを施す。67は谷中央包含層出土品で、胴部はあまり外傾せずに立ち上がる異類である。直口の鉢状の形態となるかもしれない。内面は横ナデ、他は磨滅して調整不明。

脚付皿・高杯（68・73～75）各々器種は異り、68・74が谷中央包含層、73・75が杭30周辺包含層出土品である。68は、大型の脚付の皿乃至鉢である。長い高台を付け、胎土精良で、皿部内面は丁寧なナデ、外面の高台付け根付近はヘラ削り、高台内外面横ナデ、他はナデている。73は、小型の脚部で、胎土精良、全面磨滅して調整不明である。74は、脚部径6.9cmで、全体に薄手であまり拡がらない異類である。器表の調整は不明。75は、通常の高杯の形態であるが、杯部径は小さくなりそうである。これも全面磨滅して調整はわからない。以上のうち68の大型類と、74の異類は、本遺跡から東北東へ３kmの波多江遺跡１号竪穴住居出土品中に類例がみられ、ともに当地域に独自の器種である可能性がある。

受皿付灯明皿（69～71）　所謂ひょうそくの祖形をなす器種である。受皿の形態は残念ながらわからないが、油皿に深めの杯を用いている。69は、杭30付近包含層出土品で、油皿口径11.4cm、深さ3.4cmを測る。口縁内面には油煙がこびりついている。70は、杭30付近包含層出土品で、胎土精良、焼成良好で明茶褐色をなす。油皿口径10.2cm、深さ3.6cmとなる。内面には油煙がこびりついている。71は、杭28北斜面包含層出土品で、胎土精良、焼成良好で橙茶色をなす。この、ひょうそく祖形は、油皿の器形からみて、８世紀末から遅くとも９世紀中頃までのものと考えられる。

鉢（72・76～81）　72は、杭30付近包含層出土品で、胎土精良、橙色をした小型品である。内面は丁寧にナデている。76は、整地層下層出土品で、口径17.0cm、器高8.2cmを測る。外面

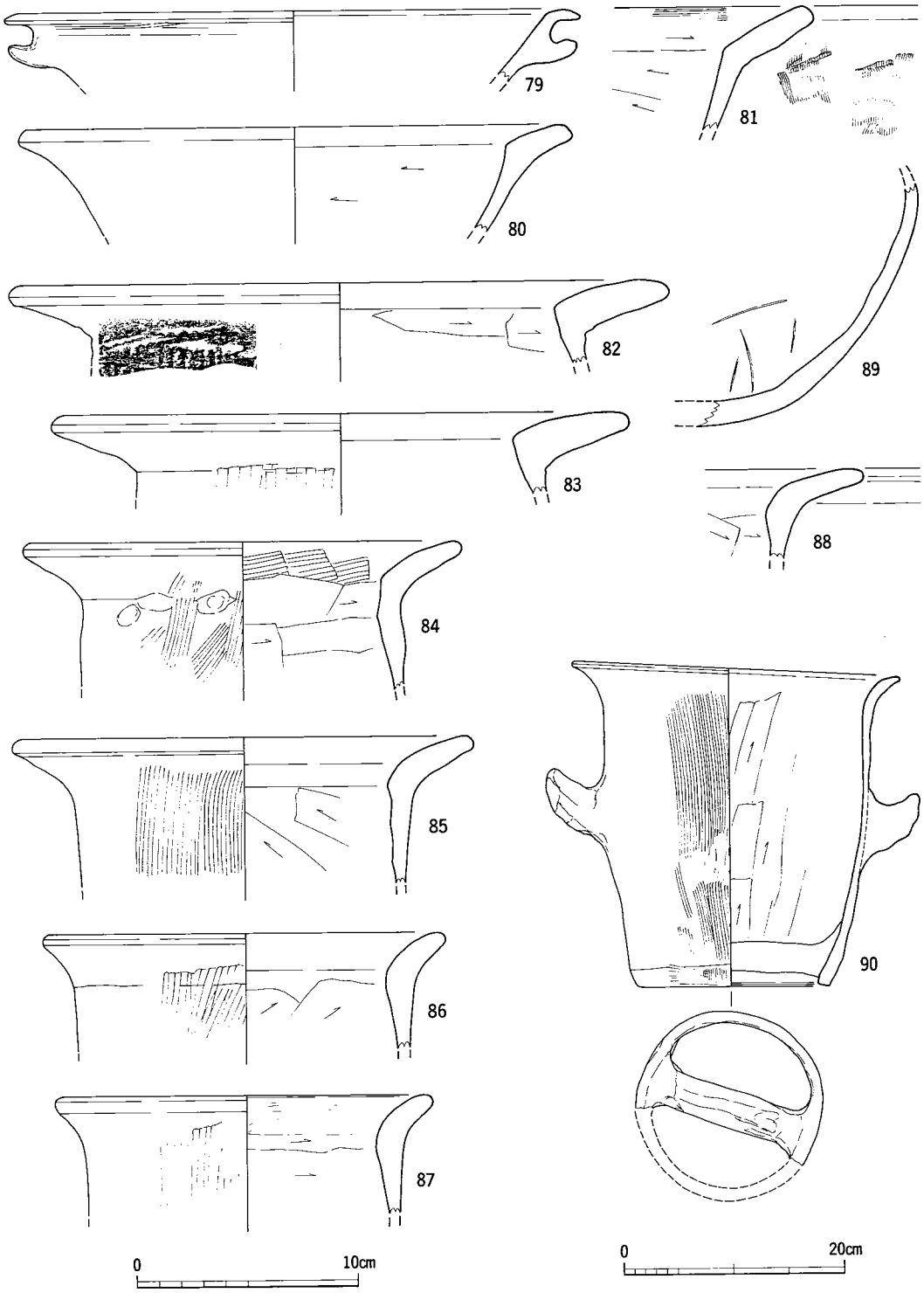


Fig.45　整地層出土土師器実測図（その４）(1/3，90のみ1/6)

体部下半はヘラ削りが施されている。77は、76と同様の内湾した鉄鉢形須恵器模倣の退化形態である。杭30付近包含層出土品で、口径16.7cm、器高7.6cmを測る。体部内外面ともに横位ヘラ磨きかと思われ、外底面は板で叩いたような圧痕がみられる。体部外面には一部に漆の残っているところがあり、本来、全体に塗られていたものと思われる。78は、杭30付近包含層出土品で、平底状の直口鉢となると思われる。内面横ナデ、外面一部に煤が付着している。7は、谷中央トレンチ出土品で、口径26cmを測る。小さな把手を付けたもので、やや深めの鉢となろう。80は、第1号掘立柱建物周辺整地層出土品で、復元口径24.2cmとなる。口縁は肥厚し、内面に稜をつくり、胴内面は横位のヘラ削りを施している。外面には煤が付着している。81は、谷包含層出土品で、内面の稜以下はヘラ削り、外面には細かいハケ目を施す。以上の鉢のうち、80・81は8世紀前半、他は8世紀後半～9世紀初頭前後と考えられる。

甕（82～89）82・83は明らかに7世紀後葉の特徴を残すもので、強く屈折して外へ開く口縁につくる。いずれも杭30周辺包含層出土品で、外面には煤が付着する。82の外面には縦位の粗いハケが施される。84・85・88・89は、杭28北斜面黄褐色土包含層出土のもので、頸内面には強い稜をつくらず、口縁もあまり肥厚しない類である。内面はまだヘラ削りを施しており、8世紀後葉を中心とする時期のものである。

甑（90）整地層下層出土のもので、口径29.8cm、器高28.8cm、底径17.3cmとなる。内面はヘラ削り上げ、外面は縦ハケを施す。中央に一本棒を接合したロストル部は、把手方向と若干ずれている。8世紀中頃前後の所産であろう。

その他の出土遺物

黒色土器（Fig. 46－1・2，PL. 47）　1は内黒土師器高台付椀で、谷中央包含層出土品である。口径14cmで、器壁が部厚い。全面磨滅して調整不明であるが、高台は直行する短かめのもののようである。2は、杭30周辺包含層出土品で、浅い皿状の器形となろう。胎土精良で、内外面ともいぶして丁寧なヘラ磨きを施している。外面の底近くはヘラ削りである。

緑釉陶器（Fig. 46－3～5）3は、杭28北斜面黄褐色土出土品で、須恵質緑釉椀である。胎土精良で、焼成堅緻、ねずみ色の胎に淡緑色の釉がかかっている。4は、杭30付近包含層出土品で、須恵質緑釉皿である。復元口径15cmとなり、胎土精良で、灰色の胎の上に淡緑灰色の釉をかけている。5は、谷中央トレンチ出土品で、釉の部分は全く残らないが、胎土や器形からみて軟質緑釉陶器と判断した。底部は越磁の器形を模倣しており、胎土は精選されて白色を呈し、軟質で器表は磨滅している。

灰釉陶器（Fig. 46－6）杭28北斜面黄褐色土包含層出土品で、低い高台を付け、釉は体部のみ、つまり図の断面の右割れ部から5mmほどの内外面のみにかけられており、他の内外面は高台も含めて全部露胎である。高台径7cmで、胎土精良で焼成堅緻、明灰色に焼き上がっており、釉は淡緑灰色である。

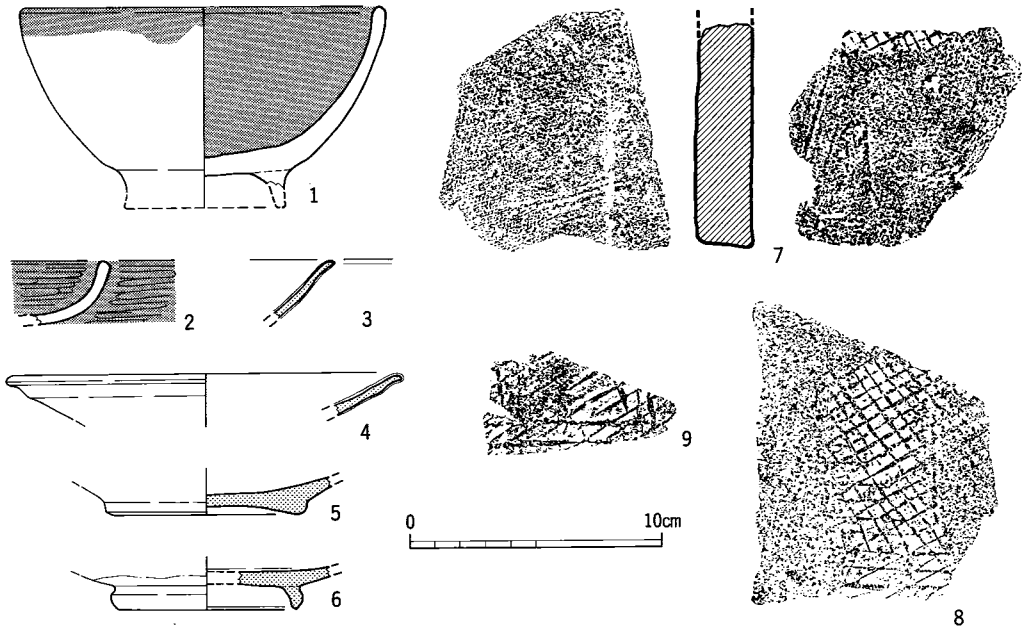


Fig.46　整地層出土緑釉他実測図（1/3）

瓦（Fig. 46－7～9）すべて平瓦の同一個体であるが接合しない。谷中央トレンチ出土品で、焼成堅緻で暗灰色の須恵質に近い。凸面は端部が乱れる正格子の叩きをかなりナデ消している。内面も布目を端部近くはナデ消している。胎土に砂粒を多く含む。瓦の点数が少いので、瓦葺建物は考えにくいが、近辺では類以例が無く、今後の当地域での古代寺院等の発見に俟つこととしよう。

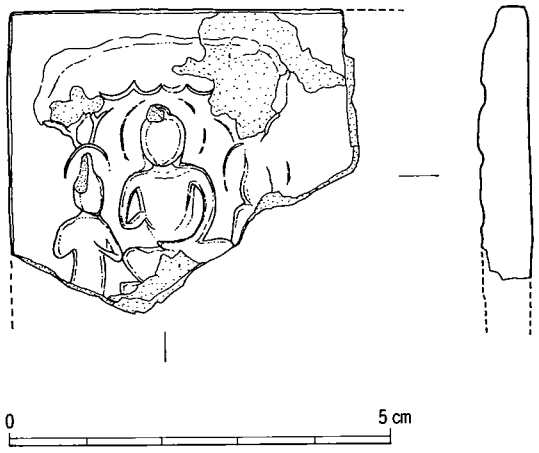


Fig.47　整地層出土塼仏実測図（実大）

塼仏（Fig. 47）　谷中央包含層出土品で、現存上下長4.0cm、左右長4.6cm、最大厚さ0.7cmである。上辺と左辺は当初の縁辺であるが、右辺側へはまだ続いている。三尊形式の類で、両側に脇侍を配している。胎土精良であるが、焼成は所謂生焼けで、表面は黄茶～灰黒色をなす。胎は灰

緑色で、全体に極めてもろく、表面が剝げかかっている。共伴遺物は、奈良中期から平安初期まである。また、本遺跡での寺院等存在の可能性は薄い。本遺物についての詳細は後の八尋和泉氏の玉稿（131頁）を参照されたい。

鉄器（Fig. 48）　片端がやや曲がり気味となった不明鉄製品である。現存長2.7㎝、幅0.6㎝、厚さ0.5㎝で、断面はほぼ正方形に近い。用途等見当がつかない。

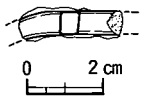


Fig.48　整地層出土鉄器実測図（1/2）

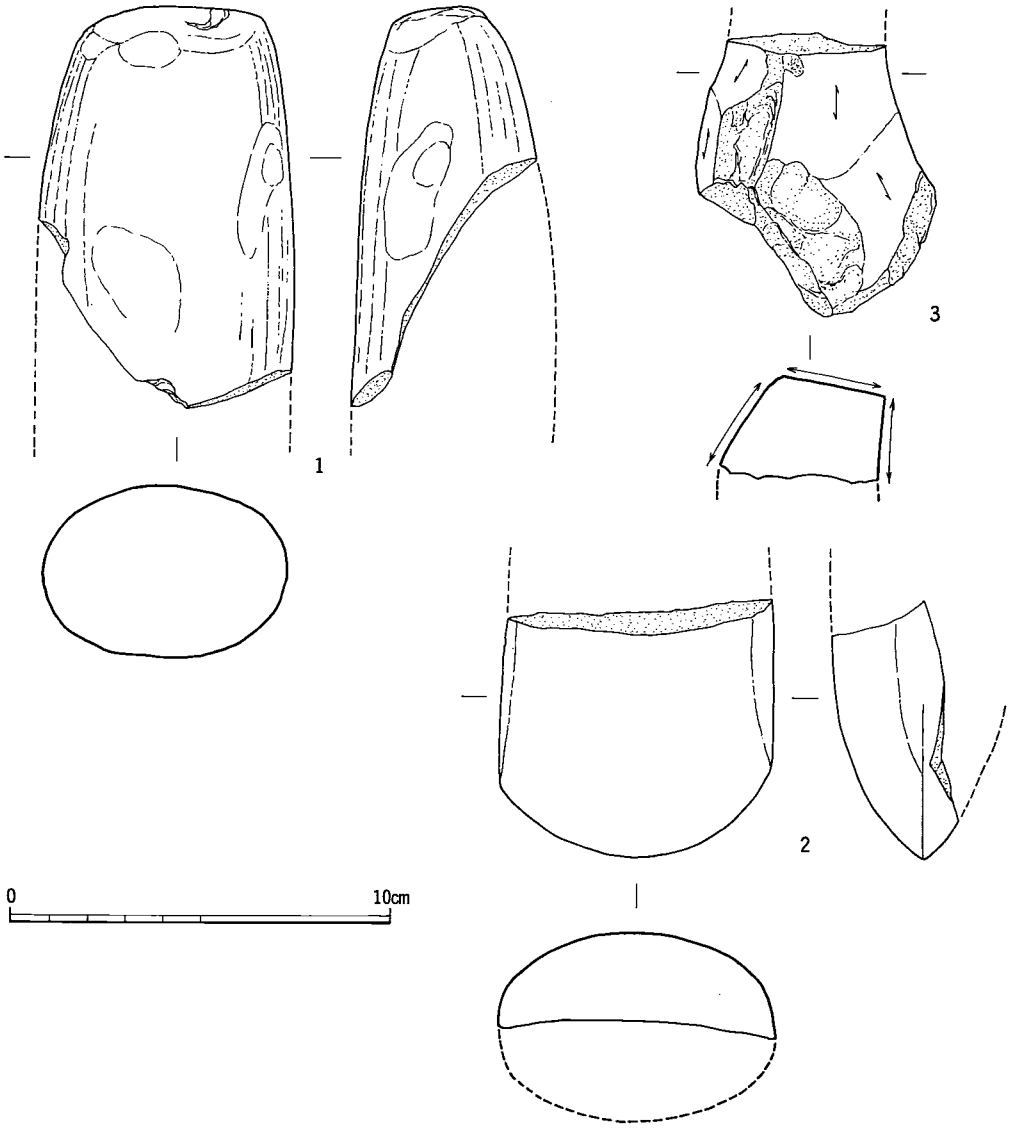


Fig.49　整地層出土磨製石斧・砥石実測図（1/2）

磨製石斧（Fig. 4，PL. 48）1は、今山産玄武岩製太型蛤刃石斧の基部片で、現存長10.6cm、最大幅6.8cm、厚さ4.5cmとなる。表面は灰色に風化している。2も同石材使用の同種石斧刃部付近片である。刃縁は丸く弧をえがき、最大幅7.3cmを測る。1と2は同一個体の可能性が強い。

砥石（Fig. 49－3）　現存長7.4cm、最大幅6.2cm、厚さ2.7cmの粗砥である。上半及び縦半分を欠いており、本来は中程がくびれた長方形であったと思われる。砂岩製で、良く使い込まれている。本来、平安初期の小鍛冶に伴うものと考えると、貴重な意味を持つ。ただ、砥石そのものは、この1点しか出土していない。

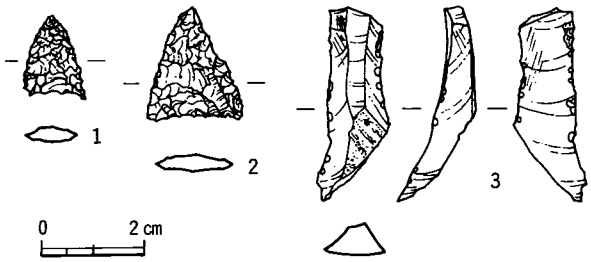


Fig.50　整地層出土打製石鏃等実測図（2/3）

打製石鏃（Fig. 50－1・2）　1は、全長1.6cm、幅1.2cmの小ぶりの三角形鏃で、漆黒色の良質の黒曜石製である。2は、全長2.2cm、幅1.9cmの三角形鏃である。不純物をかなり含み、縦に筋が入る黒色の黒曜石を使用している。いずれも弥生期の所産であろう。

使用剝片（Fig. 50－3）長さ3.7cm、幅1.2cmの石刃状剝片である。表面に自然面を残し、両側縁をわずかに使用する。上端折断面は新しく後世のものである。わずかに不純物のまざる黒曜石製である。

V　中・近世の遺構と遺物

当遺跡の現況は、広葉樹の雑木山林であったが、尾根線を走る山道の両側、つまり尾根上のほとんどは近～現代墓地であった。一部に江戸時代紀年銘の墓石が放置された一画があったが、それ以外の墓地はすべて改葬されて、大きな穴がいたる所に掘られていた。

Ⅰ区の北半では、当初改葬の痕跡が認められなかったので、多くの検出された墓壙が中世のものと考えて掘り下げた。しかし、その大半は改葬を受けており、そうでないものも、寛永通寶などの出土から、古いものでも江戸期の墓壙であることがわかった。その中に、2基だけ火葬した小土壙が発見され、他地区でもこの種遺構の存在が推定された。

Ⅱ区の中央尾根先端部の好地に、試掘の際に土壙墓が集中することを確認し、その斜面までを全面剝ぐことの契機となった。その結果、かなりの急斜面にずらりと並ぶ火葬土壙13基の発

見は特筆すべきものであった。戦国～江戸初期の葬法を知る上で、また、わずかな時期の違いで同じ尾根の先端および斜面に土葬が行われた事実の理解も、非常に興味深いところである。

中・近世の遺構の総数は以下のとおりである。

火葬土壙　15基

土壙墓　　12基

（Ⅱ区のみ。Ⅰ区の多数の近世墓はほとんど改葬を受けており、この数に含めていない。）

A　火葬土壙

長さ１ｍ前後、幅70cm前後の寸詰まりの長方形の壙を掘り、底に１～６個の塊石を据え、遺体を荼毘に付した遺構を火葬土壙と称する。火葬骨は拾って、別の所に納骨しており、火葬「墓」とは呼べない。人里離れた谷奥を火葬所と定め、火の通りを良くするために斜面中途に、同じぐらいの等高線に沿うように連続して営まれる。

Ⅰ区北端近くの第１・２号火葬土壙をＡ群、Ⅱ区中央尾根先端の土壙墓群の西側に位置する第３・４号をＢ群、その西側の急斜面の第５～８号をＣ群、尾根先端方向の斜面に位置する第９・10・14・15

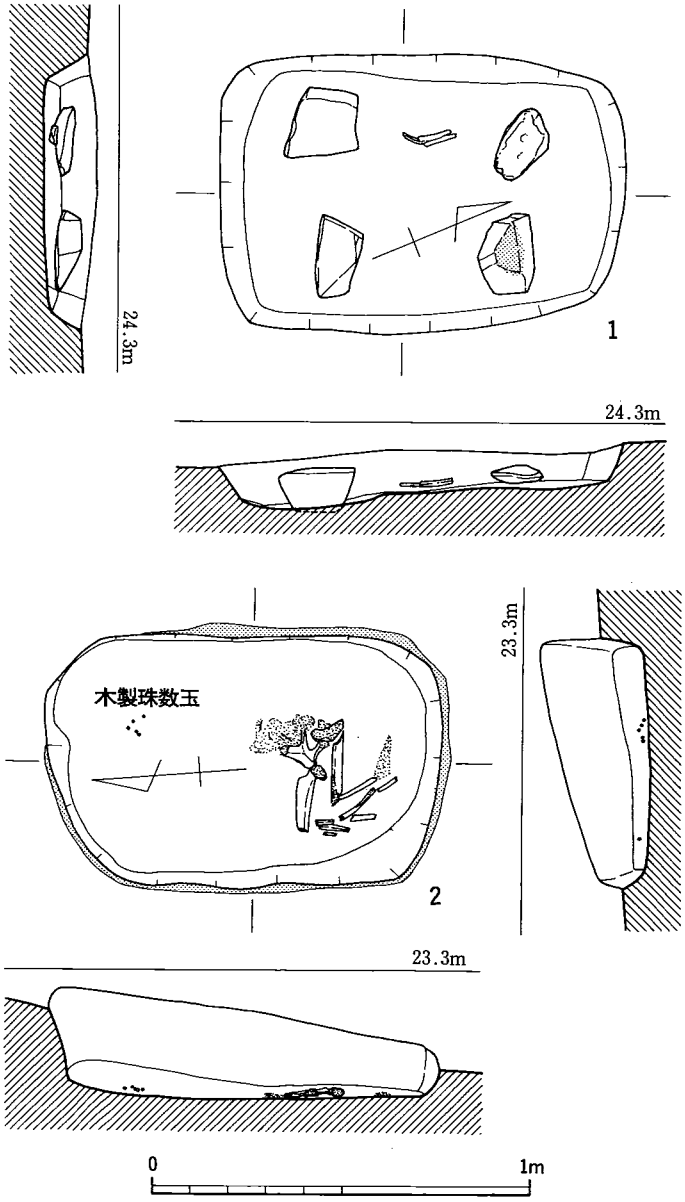


Fig.51　第１・２号火葬土壙実測図（1/20）

号をD群、第1号掘立柱建物の南西下の谷頭に近い斜面にある第11～13号をE群とする。

第1号火葬土壙（Fig. 51, PL. 19）

Ⅰ区の鞍部状尾根上の、改葬済み近世墓群の北端に位置する。長さ107cm、幅73cm、現存深さ16cmで寸詰まり長方形の平面形を呈する。4隅に各1個の花崗岩を置き、そのうち北東の1個の上面は焼けて赤変している。壁や底はわずかに焼けている程度である。底面に炭が多く残り、焼骨片はわずかに残るのみである。供献の土器類は無い。

第2号火葬土壙（Fig. 51, PL. 19）

第1号火葬土壙の南西14mの尾根斜面に位置する。長さ105cm、幅67cm、深さ28cmで、主軸はほぼ南北方向のN 6°Eを示す。火葬骨の残り具合から推定すると、頭位を北に向けて顔を西面させた横臥屈葬と考えられる。底の台石は置かれず、そのせいか、壁と底面は極めて堅く焼けて赤～赤黒色に変色している。

底全面に炭が多量に堆積し、火葬骨も南半を中心にかなり残存している。骨盤付近から大腿骨や脛骨等の下肢部分がかなり残る。木製数珠玉9個が黒色に炭化して、北端付近から出土した。

出土遺物

数珠玉（Fig. 52, PL. 48）図示した7個のほかに、取り上げ時に崩れてしまった細片が2個体分あり、都合9個を確認したが、当然数珠の一連分あったものと思われる。木製品が炭化したもので、表面はすべて炭状になり、内部は未だ木質状を残している。全体に極めてもろく、指でちょっと押さえるだけでくずれる。平均の長さ5.3mm、直径4.6×3.9mm、孔径1.1mmの大きさで、すべて同種と思われる。扁平にひしゃげたものが多いが、現状でのもろさを考えると、土圧によるものかとも考えられる。

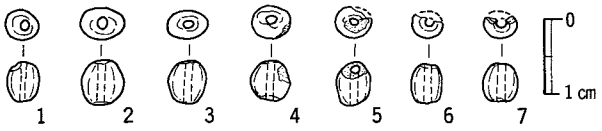


Fig.52　第2号火葬土壙出土数珠玉実測図（実大）

Tab. 6　第2号火葬土壙出土数珠玉計測表

（単位 mm）

No.	長さ	直　径	孔径	備　考
1	5.5	4.2×3.9	1.0	
2	5.8	5.1×4.0	1.1	扁　平
3	5.5	4.9×3.8	1.1	扁　平
4	5.0	5.0×4.0	1.2	
5	5.1	4.5×4.0	1.0	部分欠
6	5.0	4.2×—	1.0	半　欠
7	5.0	4.3×—	1.0	半　欠
平均	5.3	4.6×3.9	1.1	

第３号火葬土壙

(Fig. 53, PL. 20)

Ⅱ区中央尾根先端の土壙墓８基が集中する一族墓地の西に接して２基の火葬土壙が検出された。この２基は一族墓を意識して、尾根端際に避けて営まれているようにも見えるが、両者の火葬と土葬という基本的葬法の違いからみて、直接に両者が対応するということはなかろう。ただ、若干の時期差もあり、同一族とするに無理はない。

長さ110cm、幅90cmの穴を掘り、北寄りの片方に大きな砂岩と小さな花崗岩を据える。砂岩の表面は焼けて黒色をなす。南半分はかなり削平を受けており、図中底面の南方への下がりは、掘りすぎによるものである。よって、壙底の台石は、北側のみにあったのではなく、南端寄りにも存在したと推定できる。壁や底面はほとんど焼けていないが、炭化材は多量に残っていた。底に一面に細材を敷きつめていたことがわかる。焼骨は部分的に少量残るのみである。

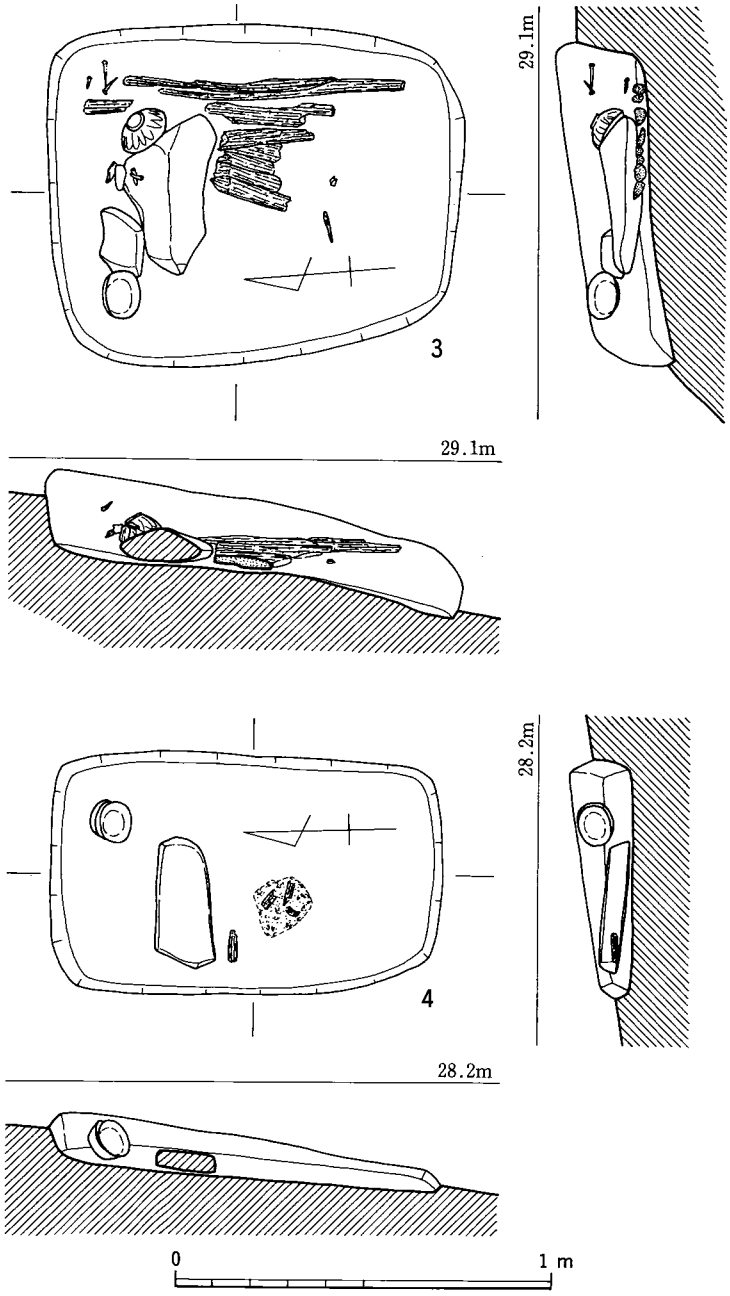


Fig.53　第３・４号火葬土壙実測図 (1/20)

鉄製角釘が３本北東隅から出土した。供献品として、台石の東側から青磁碗１個と、その反対側から土師器杯２個が重ねられた状態で出土した。（中間）

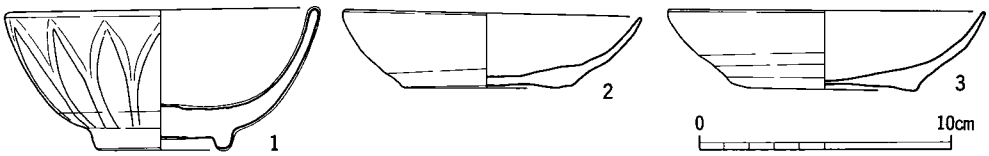


Fig.54　第３号火葬土壙出土土器実測図（1/3）

出土遺物

青磁碗（Fig. 54-1, PL. 48, 巻頭 PL. Ⅱ）高台脇から外方に広がりながら内湾気味に立上り、内底部が広い器形。高台は断面は逆台形で内面を浅く削る。丸彫りによって外面は蓮弁文、内底面には中心に右廻りの渦巻きと圏線を施している。施釉は総掛けで、高台内は蛇の目状に削り釉剝ぎしている。焼成は良好で厚く掛かった釉はくすんだ青味緑色を呈する。口径12.45cm・器高5.5cm・底部高台径5.4cmを測る。年代は上田秀夫氏編年（80頁註）によると14世紀後半～15世紀前半となる。（日高）

土師器杯（Fig. 54-2·3, PL. 48）２点とも同工の底部糸切り品である。口径12.5～11.8cm、器高3.2～2.87cm、底径7.3～6.6cmで、体部は薄くひき伸ばされ、内湾気味となる。体部外面下半は強いナデにより稜線が数本できる。体部内外面は横ナデ、底部内面はナデツケている。胎土に細砂粒を若干含み。雲母も目立つ。焼成良好で褐色～茶褐色をなす。この２点は、第９号土壙墓出土土師器と同類で、火葬土壙と土壙墓との接点を示すものかと思われる。

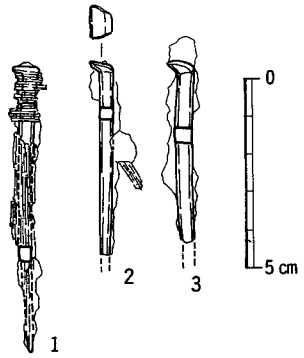


Fig.55　第３号火葬土壙出土鉄釘実測図（1/2）

鉄釘（Fig. 55, PL. 48）３本出土しているが、２・３は下半を失ってしまった。１は、全長7.5cm、頭の長さ0.7cmを測り、身の断面は正方形に近い。釘頭側1.2cmの幅とそれ以下の杢目の方向が直交し、木棺に使用されたものと考えられる。２・３も当初、わずかに木質が付着していた。釘の頭はいずれも、叩いて薄くしてから曲げたもので、上面からみると台形を呈している。２は、いくらか断面が長方形気味である。

第４号火葬土壙（Fig. 53, PL. 20）

第３号火葬土壙と同じ尾根上先端に位置する。長さ104cm、幅64cmの長方形を呈し、主軸方位がほぼ南北のＮ２°Ｅを示す。中央より北寄りに平たく長い花崗岩を据えている。壁や底面はほとんど焼けておらず、炭がいくらか残る程度であるが、石は部分的に火熱を受けた痕跡を残す。焼骨片は粉状でごくわ

ずか残るのみで、採取不能であった。

北東隅近くに、土師器杯が2枚重なった状態で、供献されたものが出土した。掘り方の南西半側が大きく削平されているので、あるいは台石がもう1個あった可能性も考えられる。

出土遺物

土師器杯（Fig. 56, PL. 48）口径11.3～10.9cm、器高2.9～2.8cm、底径7.5～7.3cmとなる。体部内外面とも横ナデ、底外面は糸切りによる。体部は短く外傾する。胎土に細砂粒と雲母を若干含み、焼成良好で橙茶～淡茶褐色をなす。

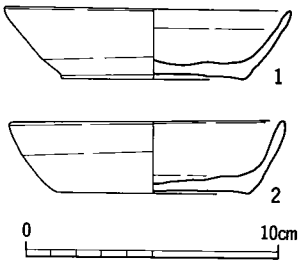


Fig.56　第4号火葬土壙出土土器実測図（1/3）

第5号火葬土壙（Fig. 58, PL. 21）

尾根先端の第3・4号と、その西下方の急斜面にある第6～8号との中間の標高25.5mに位置する。群としては、1基だけ離れてはいるが、同じ斜面に位置するという点で、とりあえずC群に含めておく。

長さ142cm、幅68cmの長楕円形の平面形をなすが、南半が大きく削平されており、実際には南側の石のあたりまでの110cm前後の長さであろう。底には北東隅に砂岩1個を、南東寄りには小さい砂岩1個を据えている。いずれも火熱を受けて黒～赤色変している。しかし、壁や底面はほとんど焼けていない。炭はかなり残っているが、焼骨は北西寄りの皿の下付近に下顎骨がかなり残るが、他部位はほとんど残していない。

供献品としては、西南部に灰緑色釉の李朝青磁皿1枚と土師器特小皿1個体分、東北部に土師器特小皿2枚が重ねられた状態で出土している。

出土遺物

土師器小皿（Fig. 57-2～4, PL. 48）口径7.2～6.8cm、器高1.8～1.5cm、底径5.2～5.0cmの特小皿である。底部糸切りで、体部内外面～底内面は横ナデを施す。胎土に細砂をわずかに含むが、かなり精選されており、焼成良好で茶褐色～褐色をなす。同器種の第11号火葬土壙墓出土品と比べて、体部が短くてその結果口径が小さくなっている。（中間）

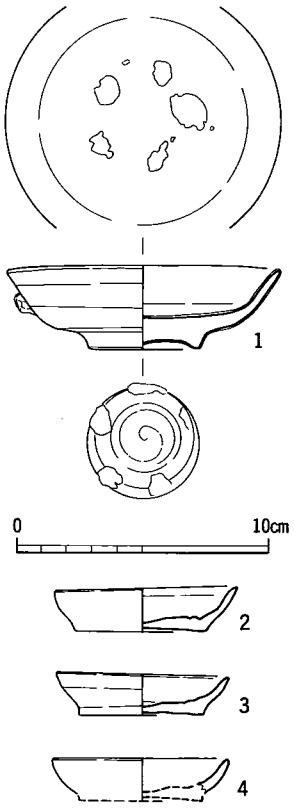


Fig.57　第5号火葬土壙出土土器実測図（1/3）

青磁碗（Fig. 57-1, PL. 48, 巻頭 PL. Ⅱ）腰部から屈曲して直線的に口縁となる器形。高台は外面は鈍く斜めに削り、内面は中心がずれて畳付が三日月形に浅く削り目を残して粗く削る。

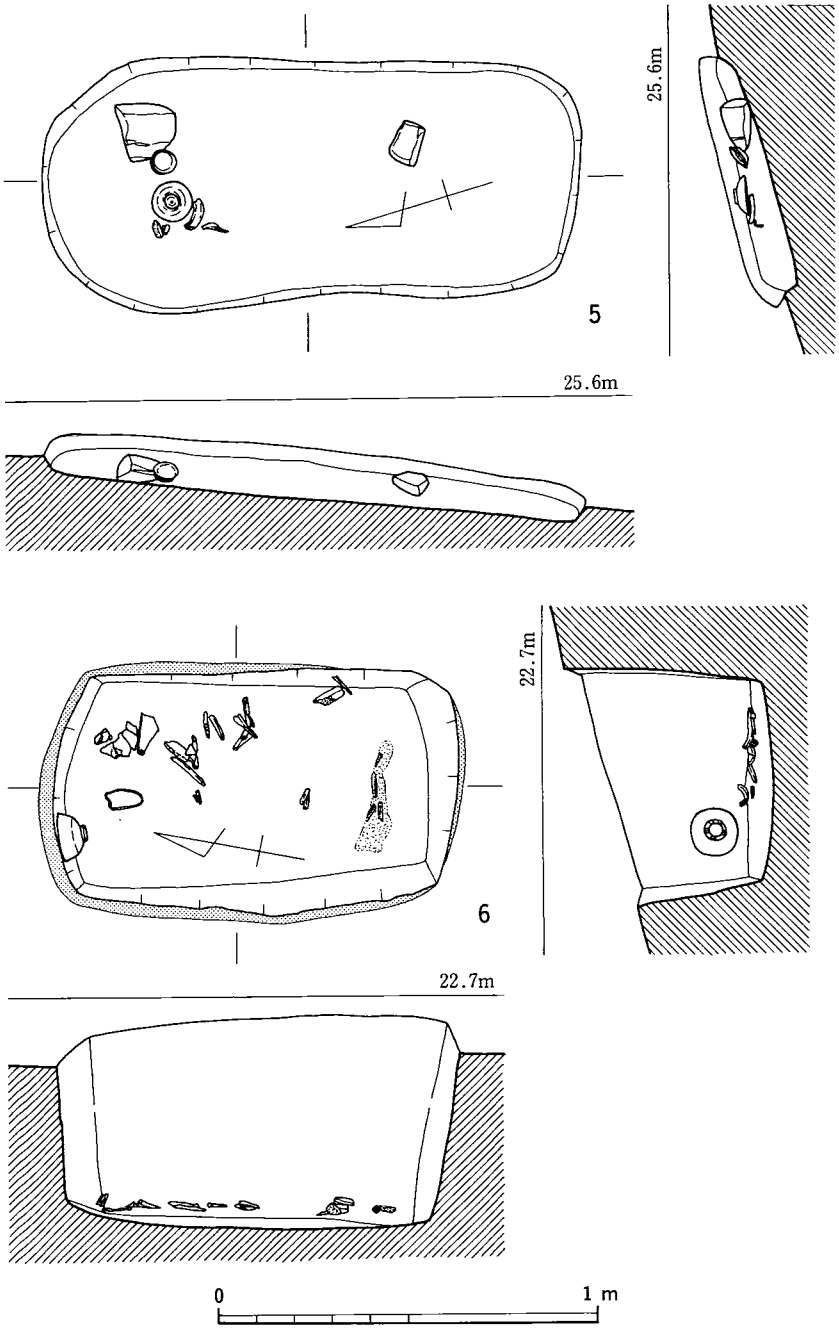


Fig.58　第５・６号火葬土壙実測図（1/20）

施釉は総掛けであるが内外面に小さな火間が見られる。内底・畳付部には重ね焼き時の目土痕が5ヵ所に残り、また胴中位には下位皿の口縁部破片が付着している。焼成は良く緑灰色を呈す。胎土には微細な鉄粒を多く含む。ロクロの回転は成形は右廻り、削りは左廻りである。口径10.85cm・器高3.3cm・底径4.4cmを測る。李朝青磁の粗製品で、年代は15世紀～16世紀のものであろう。 (日高)

第6号火葬土壙 (Fig. 58, PL. 21)

標高22.5mの急斜面に、主軸を等高線に平行にして掘り込まれている。長さ107cm、幅65cmの寸詰まり長方形を呈し、他例に比べて深い。この深さは、単に残存度の良し悪しによるものか、あるいは台石が全くないことに関係するのかよくわからない。壁はすべてガチガチに堅く焼けて、赤茶色に変色している。底面も部分的に焼けている。また、壁には全面に、幅11cmの掘削の際の工具痕が上下方向に粗々しく残されている。

焼骨は、北東寄りに肩甲骨が残るが、全体としてはそれほど残らない。北壁の西寄りに、口縁をぴったり壁に付けた状態で、濃灰色釉の李朝青磁碗が1個出土した。 (中間)

出土遺物

青磁碗 (Fig. 59, PL. 49, 巻頭 PL. Ⅱ) 高台脇から内湾気味に立上り、腰部から屈曲して直線的に外方に広がる器形。高台は口径に比して小さく、内外面は鈍く粗く斜めに削った撥形で、畳付端部には削り屑が付着し、内面には削り目が残る。施釉は総掛けであるが、外面口縁下に火間があり、口唇部には釉剝げが見られる。内底・畳付部には重ね焼き時の目土痕跡が6ヵ所に残る。焼成はやや不良で、半身は生焼け気味で失透の青味灰色を呈す。胎土には細砂粒と微細な鉄粒を多く含む。ロクロの回転は成形は右廻り、削りは左廻りである。口径13.4cm・器高6.55cm・底径4.55cmを測る。李朝青磁の粗製品で、年代は15世紀～16世紀のものであろう。 (日高)

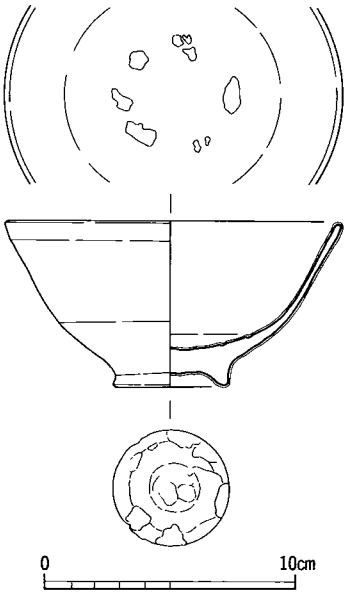


Fig.59 第6号火葬土壙出土磁器 実測図 (1/3)

第7号火葬土壙 (Fig. 60, PL. 22)

第6号火葬土壙の北4mの急傾斜面に位置し、等高線に平行に掘り込まれている。長さ90cm、幅50cm、深さ45cmと残りは良好である。全体の平面規模としては小ぶりのタイプである。壙底に3個の花崗岩・砂岩を配置し、棺台石としている。

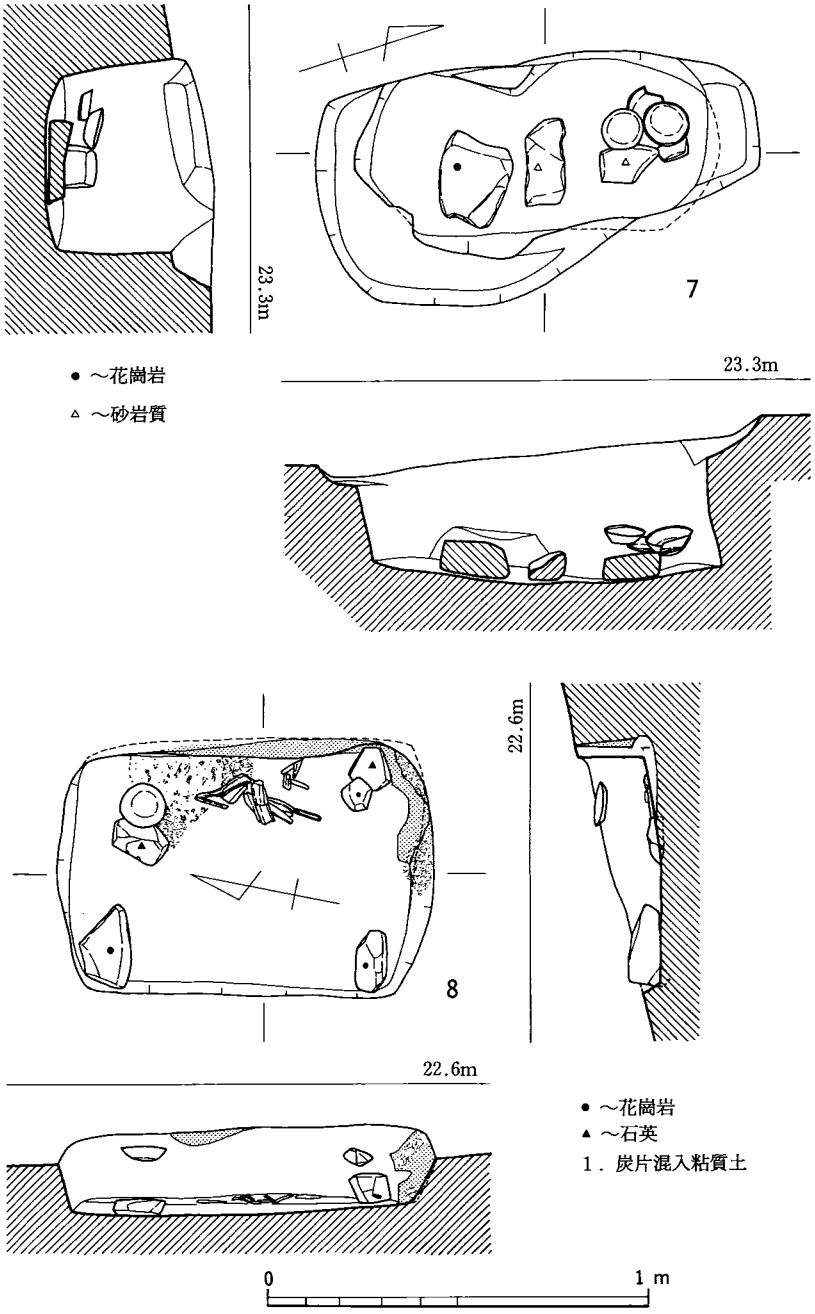


Fig.60　第７・８号火葬土壙実測図（1/20）

壁上半のうち東半分、つまり、斜面の上位側が焼けている。石の上面も加熱により赤く変色している。

火葬骨は丁寧に拾われてしまって、ほとんど残存していない。北側に土師器杯３個が供献されていた。

出土遺物

土師器杯（Fig. 61, PL. 49）口径11.8～11.0㎝、器高3.2～2.8㎝、底径7.5～7.2㎝を測る同工の手になる３点である。口縁を小さく丸くつくり、その内側をへこませる特徴的なくせがみられる。底外面は糸切りを施し、体部内外面は横ナデを行なう。体部外面下端が削りあるいはナデにより稜線をつくるのも特徴的である。胎土に細砂粒を多く含み、雲母、赤褐色粒も目立つ。焼成やや不良で、茶色をなすのも他と異なる。この手の土師器は以上述べた如く、特徴的であり、今後、周辺遺跡出土例が増加する中で、おさえられるひとつの型式となる可能性が強い。

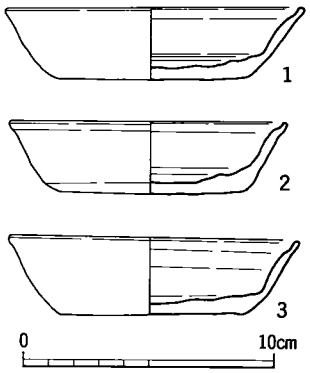


Fig.61　第７号火葬土壙出土土器実測図（1/3）

第８号火葬土壙（Fig. 60, PL. 22）

第７号火葬土壙の北隣４ｍの急斜面にあり、長軸を等高線に平行に掘られている。長さ100㎝、幅64㎝の寸詰まり長方形プランをなす。壙底の四隅に、花崗岩・石英の小塊石を配置し、棺台石とする。底面は焼けていないが、壁の東側上端と南側はよく焼けて赤変している。

焼骨は東壁寄りに少量残されている。炭も底面にいくらか残存する。土師器杯１点が、北東隅の底面から15㎝浮いた状態で出土した。

出土遺物

土師器杯（Fig. 62, PL. 49）口径11.7㎝、器高2.5～2.1㎝、底径6.4㎝の糸切り底土師器である。体部が大きく開き、体部外面に強いナデによる稜線が認められる。体部内外面ともに横ナデ、底内面はナデツケている。胎土に細砂粒をかなり含み、雲母片、赤褐色粒も目立つ。焼成は良く、褐色をなす。

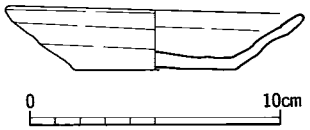


Fig.62　第８号火葬土壙出土土器実測図（1/3）

第９号火葬土壙（Fig. 63, PL. 23）

Ⅱ区中央尾根の最先端、谷部から３ｍ余高い斜面最下位に近いところに位置する。主軸方位がＮ29°Ｅと、他例に比べて南北方向からずれるが、これはひとえに等高線に平行位を保っていることによる。これは第14・15号も同様で、火葬土壙の場合は、頭位北という規制ではなく、火のまわりのために風の吹き上げを利用して、長軸を等高線に平行するという工夫を最優先し

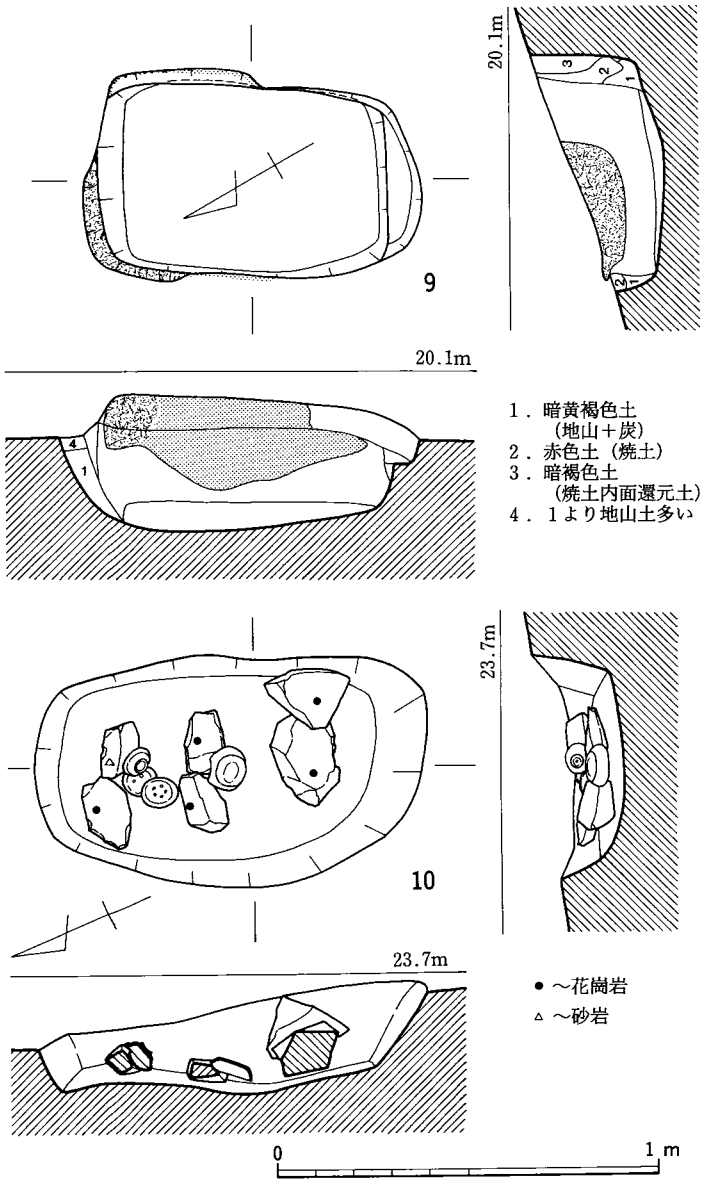


Fig.63　第9・10号火葬土壙実測図（1/20）

たことがわかる。

長さ75cm、幅50cmの小ぶりな長方形壙を掘っており、台石は無い。壁はかなりガチガチに焼けている。炭は多量残存していたが、火葬骨はごく微量残るのみであった。焼けた壁面より外側の下半には、断面土層に示すとおり、炭片の混じった土がほぼ全周にみられ、理解に苦しむところである。炭片が混じるということは、事前に一度空焼きして、周壁崩壊土を再び貼り付けたものかとも考えられる。

供献土器等の出土は無い。

第10号火葬土壙

（Fig. 63, PL. 23）

Ⅱ区尾根先端の斜面中途に位置する。長さ103cm、幅61cmの略長方形プランを呈する。底面には花崗岩や砂岩を2個ずつ3列に計6個配置して棺台としている。壁や底面はいくらか焼けている程度であるが、石はすべて上面が黒～赤色に焼けて変色している。炭片も多く残っていたが、火葬骨は骨粉状でわずかに残存するのみであった。

供献土器類は、中央部分より土師器杯1点、北寄りの石間から乳白濁色に発色した李朝青磁小皿3点が出土した。

（中間）

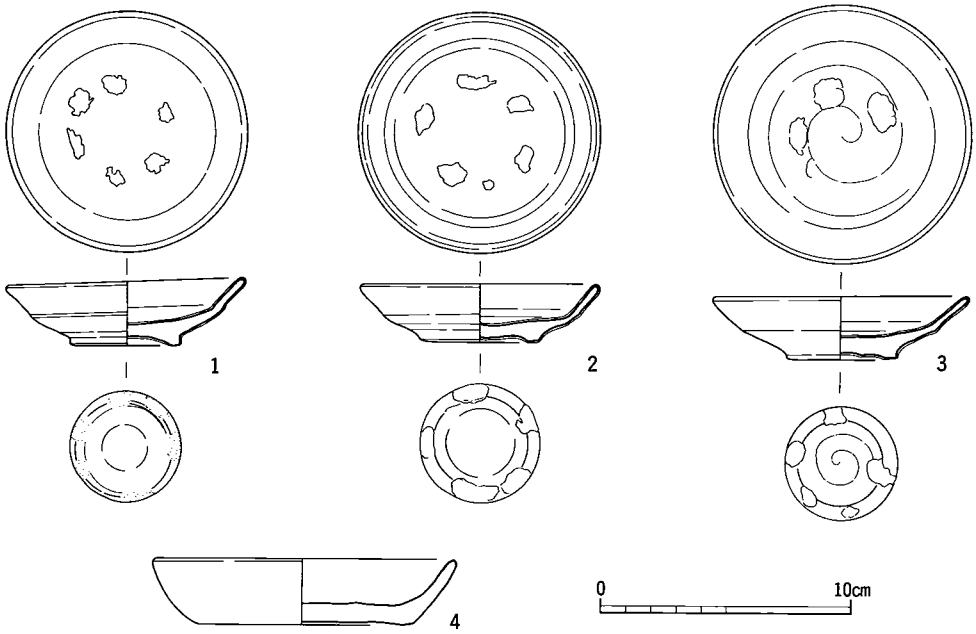


Fig.64　第10号火葬土壙出土土器実測図（1/3）

出土遺物

青磁皿（Fig. 64-1～3，PL. 23，巻頭 PL. Ⅲ）1の胴は腰部で屈曲し直線的に外方に広がる。高台は内面を浅く斜め、畳付を平坦に粗く削る。内底中央は僅かに窪む。内外器面には成形時の回転ナデによる砂の移動キズが目立つ。施釉は総掛けである。内底・畳付部には重ね焼き時の目土痕が6ヵ所に残る。焼成はやや不良で酸化炎焼成で白磁風に薄赤味黄白色を呈する。胎土は細砂粒を多く含む。ロクロの回転は成形は左廻り、削りは右廻りである。口径9.5cm・器高2.3cm・底径4.7cmを測る。

2は、1に類似する器形だが、腰部の屈曲部に稜がつき内面には沈線が巡る。高台は釉が掛かり分かり難いが、外面は削らず内面のみ浅く削っている。畳付外端部には胎土が軟らかい時に自重で出来るはり出し状のものが見られ、また中央部には径3.8cmの浅い沈線が巡る。焼成は不良で生焼けで白味黄褐色を呈す。口径9.55cm・器高2.55cm・底径4.4cmを測る。

3は、1に類似する器形だが、腰部の屈曲部に稜がつく。高台外端部は2と同様で畳付面は削っている。切れないヘラで削ったためであろうか。

第5・6号火葬土壙出土の各青磁と胎土・技法が同様の李朝青磁の粗製品で年代は15世紀～16世紀のものであろう。(註)　（日高）

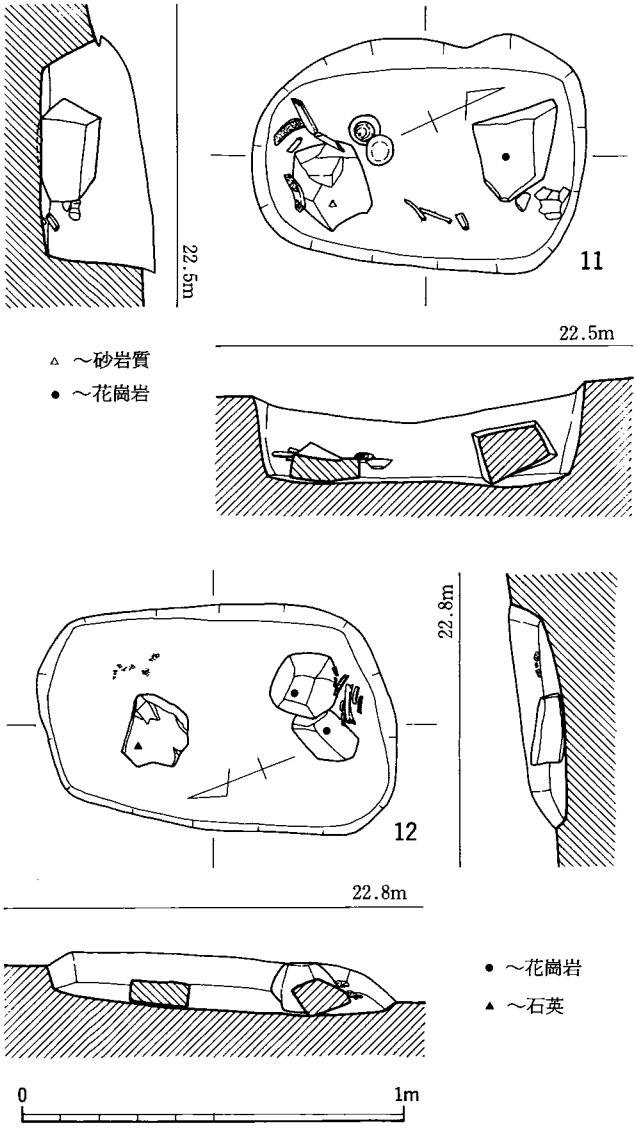


Fig.65　第11・12号火葬土壙実測図（1/20）

註）貿易陶磁に関しては横田賢次郎氏の御教示をいただいた。記して深謝いたします。

上田秀夫「14～16世紀の青磁椀の分類」貿易陶磁研究 No. 2　1982

土師器杯（Fig. 64-4, PL. 49）口径11.7cm、器高2.6cm、底径8.4cmとなる。底部は糸切りで、体部は厚く、端部は丸くおさめる。胎土に細・小砂粒や雲母片を若干含み、焼成良好で、明褐色をなす。

第11号火葬土壙

（Fig. 65, PL. 24）

Ⅱ区中央尾根の西側はるか下の、谷頭に近いところに、第11～13号火葬土壙の一群（E群）が検出された。それらのうちの最下位の北端に位置する。長さ89cm、幅60cmの楕円形を呈する。底面に砂岩と花崗岩の塊石を両端に置いて台石としている。壁は上半が焼けてカチカチになっている。炭も多量に残っていたが、火葬骨は北東隅に頭骨片が、南端に下肢骨片が少量残るのみであった。石は2個ともに上面が赤く焼けている。中央のやや南寄りに土師器小皿2点が供献されていた。

出土遺物

土師器小皿（Fig. 66, PL. 49）口径8.1～7.9cm、器高2.0～1.7cm、底径5.3～5.0cmで、底面糸切りとなる。体部を薄く引き伸ばした特小皿の類で、第5号火葬土壙出土の同器種のものよりも径がひとまわり大きいタイプとなる。胎土に細砂粒を若干含み、焼成良好で茶褐色～橙褐色

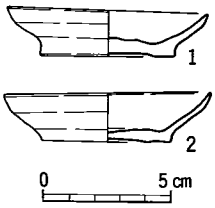


Fig.66　第11号火葬土壙
出土土器実測図（1/3）

を呈している。体部内外面ともに横ナデで、底内面はナデツケを施している。

第12号火葬土壙

(Fig. 65, PL. 24)

第11号火葬土壙の南西隣2mの位置にある。長さ93cm、幅60cmの不整長方形プランを呈し、深さ15cmと残りは良くない。底面は焼けていないが、壁はいくらか赤黒く変色している。南端に2個の花崗岩、北寄りに石英の塊石1個を配置して棺台石としている。石の上面は黒く焼けている。

火葬骨は、北東寄りで骨粉状に僅か、南端に少量残されていたのみであった。供献土器等は出土していない。

第13号火葬土壙

(Fig. 67, PL. 25)

第12号火葬土壙の南隣5mの位置にあり、最も谷頭にあたる。長さ90cm、幅52cmで、

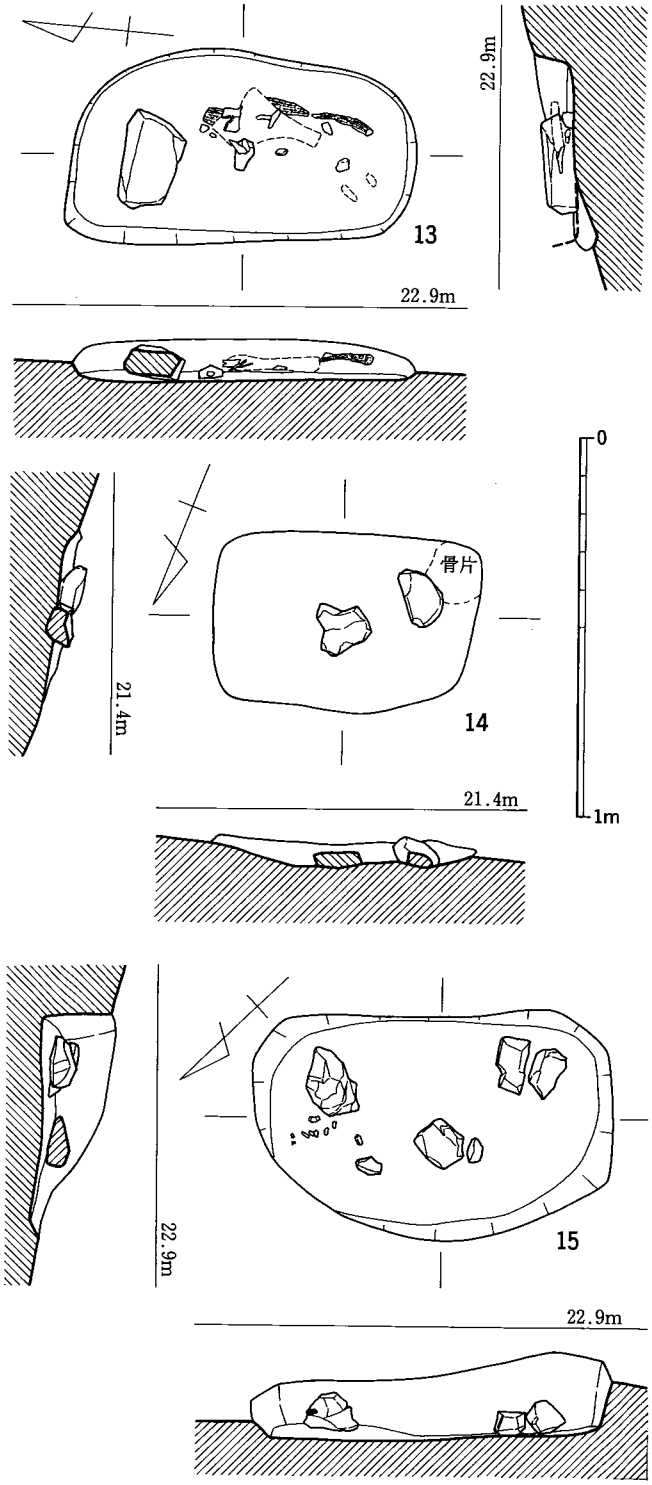


Fig.67　第13・14・15号火葬土壙実測図（1/20）

深さ11cmと残り悪く、特に西壁側は完全に削平を受けている。底面には、北端に花崗岩1個を置いているが、遺構の残り具合からみて、南端にももう1個棺台石を置いていた可能性も強い。炭片も若干残るが、火葬骨は小骨片あるいは骨粉状にわずかに残るのみである。

土器等の供献品は検出できなかった。

第14号火葬土壙（Fig. 67, PL. 25）

Ⅱ区中央尾根の最北端の、谷に近い斜面に所在する。長軸をN69°30'Eの等高線に平行にして作られている。残りが良くないため、検出時では長さ70cm、幅47cmと小さいが、もっと大きかった可能性もある。底面には2個の石が据えられていたが、上面が大きく削平されているため、他にも数個存在したことも推定される。

ほとんど焼土面しか残っていないが、焼骨片が南西隅からわずかに出土した。炭片もいくらかみられたが、供献土器等は残っていなかった。

第15号火葬土壙（Fig. 67, PL. 26）

Ⅱ区中央尾根先端近くの、第9～11号土壙墓群のすぐ下方の斜面に位置する。主軸が等高線と平行になるように営まれている。長さ95cm、幅60cmの不整長方形プランをなす。底面に花崗岩を4個置き、その上面は部分的に焼けて黒色に変色している。底面は中央付近のみ部分的に焼けているが、壁はほとんど焼けていない。炭片はいくらか残るが、焼骨片はごくわずか残存するのみである。北寄り中央付近から、土師器小皿片が出土した。

出土遺物

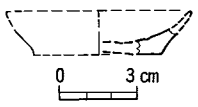


Fig.68　第15号火葬土壙出土土器実測図（1/3）

土師器小皿（Fig. 68）底部周辺の小片であるが、強いて図化してみた。底部糸切りで、復元底径5.0cmをなす特小皿である。胎土はわりと精選され、焼成良好で茶褐色をなす。その形態から、第11号火葬土壙出土のものより、第5号火葬土壙出土のものに似ており、時期的に同時期となるものであろう。

B　土　壙　墓

中・近世墓は、近・現代墓とともにこの遺跡内の尾根上の各所にみられるが、墓石の残っていたものは、ほぼすべて改葬されてしまっていた。Ⅰ区北半の、調査当初には改葬等の痕跡が認められなかった範囲で検出された方～長方形の土葬墓のいくらかは、後世の攪乱等受けていなかったが、出土遺物が皆無で、時期の決め手を欠く。これらは近世墓と推測はできるが、こ

Tab. 7　火葬土壙一覧表　　(単位 cm)

No.	平面形	主軸方位	長さ×幅	深さ	台石	焼骨の残り具合	供　献　品	群	時　期
1	長方形	N 22° 30′ E	107×73	16	4	少量	なし	A	
2	略長方形	N 6 ° E	105×67	28	0	下肢骨かなり	木製数珠玉 9	A	
3	略長方形	N 5 ° E	110×90	25	2+ α	少量	青磁碗 1 、土師杯 2 、釘 3	B	15C後半
4	長方形	N 2 ° E	104×64	17	1	微量	土師杯 2	B	16C初～前葉
5	略長方形	N 17° E	(142)×68	14	2	下顎·頭骨片少量	李朝青磁皿 1 、土師小皿 3	C	16C中頃
6	長方形	N 10° 30′W	107×65	57	0	肩甲骨等幾らか	李朝青磁碗 1	C	16C中頃
7	略長方形	N 17° E	90×50	45	3	ごく微量	土師杯 3	C	15C後半
8	長方形	N 11° W	100×64	23	4	少量	土師杯 1	C	15C末～16C前半
9	長方形	N 29° E	75×50	36	0	微量	なし	D	
10	略長方形	N 23° E	103×61	25	6	微量	李朝磁器小皿 3 、土師杯 1	D	16C中頃
11	略長方形	N 25° E	89×60	30	2	頭骨片·他幾らか	土師小皿 2	E	15C後半
12	略長方形	N 21° 30′ E	93×60	15	1+2	少量	なし	E	
13	略長方形	N 5 ° 30′W	90×52	11	1	微量	なし	E	
14	長方形	N 69° 30′ E	70×47	7	2	微量	なし	D	
15	略長方形	N 43° 30′ E	95×60	22	4	微量	土師小皿 1	D	16C中頃？

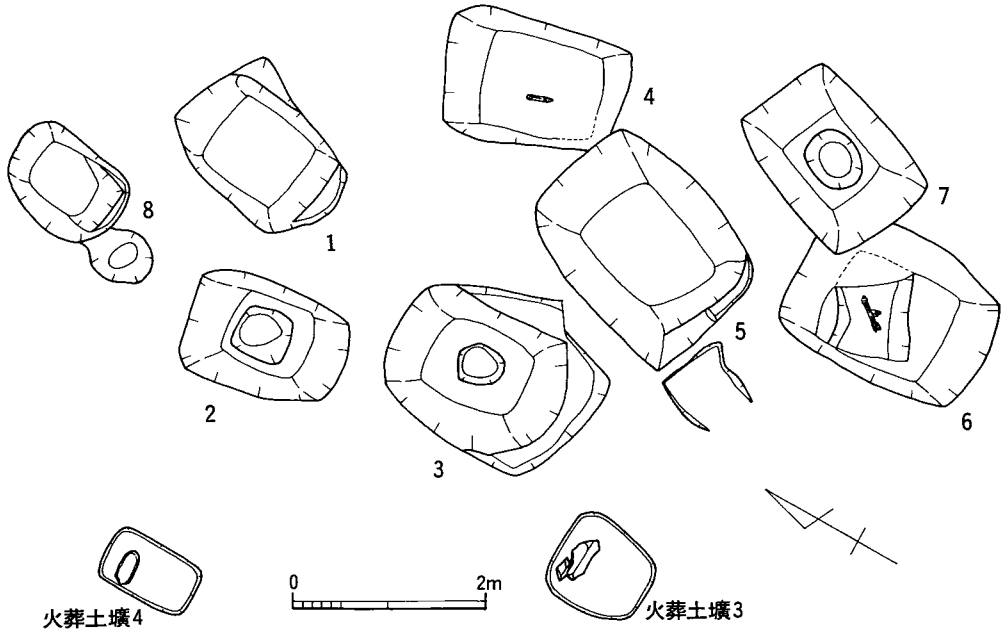


Fig.69　II区土壙墓集中部分遺構配置図 (1/80)

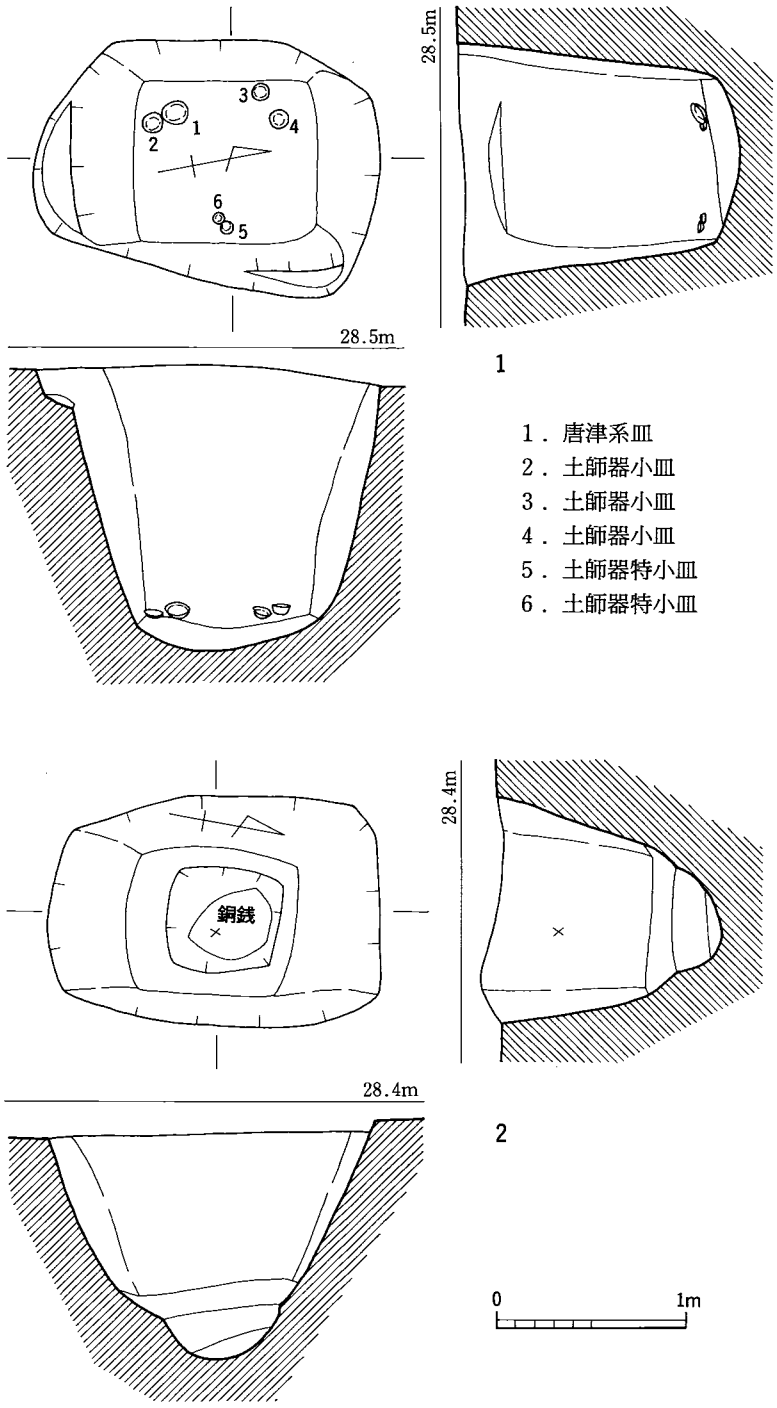


Fig.70　第１・２号土壙墓実測図（1/40）

こでは除いておく。また同地域で第１号火葬土壙の南隣に土壙墓が切り合って集中する部分があり、寛永通寶等の六道銭をかなり採集したのだが、掘り下げた結果、ほぼすべてが既に改葬を受けていたことが判かったため、これらもここでは除くことにした。

ここでは、Ⅱ区中央尾根にて検出した土葬によるものを土壙墓として記述することにしたい。丸い桶を用いる所謂早桶と推定されるものが多く、北斜面の一群は伸展葬或は横臥屈葬と考えられるもので構成される。

大きく３群に分けられる。尾根の付け根近くの最高位に一基だけぽつんと作られている第12号土壙墓。これは墓壙の大きさ深さとも群を抜いており、さらに、石積基壇を上部構造として持っており、その上に墓石等の墓標が存在していたことは疑いない。次に、第12号土壙墓の北方15ｍの尾根先端に群集する第１～８号の家族墓地がある。いずれも寸詰まり長方形で、恐ろしいほど深い。更に、北斜面の中位には第９～11号の長方形ないし、長円形のプランの一群がある。尾根上のものと葬法が異なるため、時期差が考えられる。また、同じ斜面に位置する火葬土壙と占地が類似するところから、年代的にも両者は近いのではないかと推定されよう。以上の土壙墓は、同じ尾根線上とその先端斜面に占地することから、同一氏族による墓地で、その各々の占地の差は、時期のずれによるものと考えられる。

第１号土壙墓（Fig. 70, PL. 27・28）

Ⅱ区中央尾根の先端の狭い平坦地に、第１～８号の土壙墓が群集する。このうち深い大型の類の中で最も北側、即ち、尾根先端寄りに位置する。墓壙上面の長さ164cm、幅130cm、深さは150cmに達する。下端は95×86cmの方形をなすが、底面は平らではなく、中央へと丸くくぼむ。供献土器類が原位置を保っているとすれば、それらが墓壙底の壁沿いにみられることから、底径50cm前後の桶を埋置した後、その外側に供献土器類を差し入れたものと推定できる。遺骨は全く残存していなかった。（中間）

出土遺物

陶器皿（Fig. 71-1, PL. 50, 巻頭 PL. Ⅲ）高台脇から内湾気味に立上り口縁部が僅かに外反する。内面胴中位には稜線が巡る。高台は外面を直、内面は丸味を持って斜めに削り、畳付は外

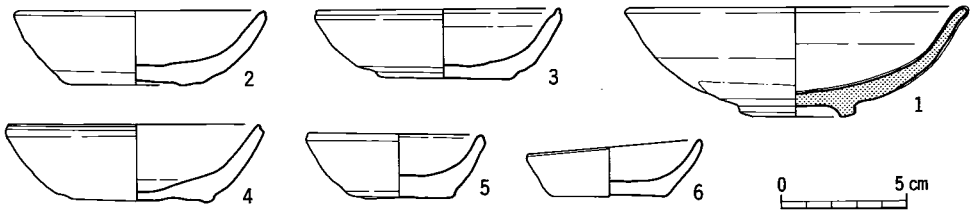


Fig.71　第１号土壙墓出土土器実測図（1/3）

を低く斜めに削る。削り面はちりめん皺が目立ち、削り時のロクロ回転は左廻りである。藁灰釉を内面から外面腰部まで施釉するが、外面の一部には釉が切れている火間が見られる。焼成はやや不良で外面半身は風化して石灰状になっている。胎土はきめ細かく微細な砂粒を僅かに含み、露胎部は赤味黄灰色～黄灰色を呈する。口径13.6cm・器高4.3cm・底径4.6cmを測る。年代は胎土の特徴からみて、岸岳唐津系山瀬窯（佐賀県東松浦郡浜玉町）で焼かれたものと思われることから、年代は16世紀末であろう。（日高）

土師器杯（Fig. 71-2～4, PL. 50）口径9.8～9.5cm、器高3.1～2.6cm、底径5.5～5.3cmを測る。3点ともに明らかに同工の手によるものである。底外面は糸切りで、口縁外端が小さくへこむくせがある。体部は厚ぼったく、内湾気味に開く。これらの器形は極めて特徴的である。3・4は体部内外面～底内面まで横ナデを施し、2の底内面はナデツケている。胎土に細砂粒をかなり含み、雲母片も目立つ。焼成はやや軟質風であるが器表の残りは良く、淡黄褐色～茶褐色をなす。この墓出土の土師器は、後に述べる特小皿についても、胎土と焼成が他の火葬土壙出土土師器と一見して明らかに異なる。かえって焼成温度が高く、良質なのかもしれない。口径・器高等も異なり、ぐっと小さくなっており、まさに近世の所産という感じがする。この両者の間に大きな画期を見出すことができる。

土師器小皿（Fig. 71-5·6, PL. 50）5は、口径6.8cm、器高2.5cm、底径4.1cmを測る。底外面は糸切りで、口縁外端はわずかにへこむ。器壁は厚く、体部内外面～底内面は横ナデを施す。各特徴が2～4の杯と全く同じで、同工の手によるものと考えられる。胎土に細砂粒を若干含み、雲母もかなり含む。焼成良く、茶褐色をなす。6は、かなり全体に歪むが、口径6.9cm、器高1.7～2.3cm、底径4.6cmを測る。底部は糸切りで、体部内外面ともに横ナデ、底内面はナデツケ、体部外面最下部も別に指でナデている。胎土に細砂粒をいくらか含み、雲母片も多い。焼成良く、褐色を呈する。この2点は、他の同器種例の如く、外方へ薄くひき伸ばす類ではなく、小さく内湾気味に立ち上がる類である。2～4の杯と同様、全く異質な一群として、近世的要素を示すものとされよう。

第2号土壙墓（Fig. 70, PL. 26）

上述の第1号の西南に隣接する。墓壙上面の長さ176cm、幅120cmと、上面での規模は他の大型墓壙とひけをとらないが、深さが120cmと、比較的浅い。壙底は中央が更に大きく、丸くくぼみ、底径50cm前後の桶を埋置した痕跡と考えられる。遺骨は残存していないが、上面から40cm下の中央付近埋土中より洪武通寶1枚が出土した。

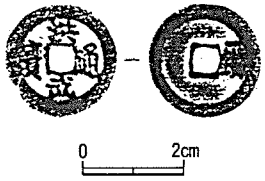


Fig.72 第2号土壙墓出土銅銭拓影（2/3）

出土遺物

銅銭（Fig. 72, PL. 49）直径2.3cmの洪武通寶である。全面

に淡青色に緑青を吹くが、残りは良い。裏面右側に字がみえるが読めない。埋土上半出土品であるため、当墓に伴うかどうかは明確でない。

第3号土壙墓（Fig. 73, PL. 26）

第2号土壙墓の南に隣接する。長さ194cm、幅168cmの上面墓壙規模をなすが、深さは132cmと比較的浅めである。底面は105×86cmと方形をなすが、中央部分が更に丸くくぼんでいる。これも、桶を埋置し、遺体そのものの重量で、極めて軟弱な花崗岩風化土（いわゆる“姫真砂（ヒメマサ）”と当地方で呼称されている）が押圧されたものと考えられる。遺骨及び供献品等は全く残されていなかった。

なお、この第3号土壙墓と北側に隣接する第2号土壙墓は、主軸方向が若干ずれるが、墓壙の深さや、底面のくぼみの存在などに共通する点がみられる。これらの上面に墓標があったとすれば、それらはちょうど西面した左右1対の夫婦墓であったのかもしれない。

第4号土壙墓（Fig. 73, PL. 26）

尾根先端群集土壙墓群の、ほぼ中央東端に位置し、第5号土壙墓に南西隅を切られる。墓壙上面は長さ194cm、幅130cmで、深さ224cmと最も深い部類に入る。底面は全面に丸くくぼんでおり、桶使用と考えられる。供献土器類は出土しなかったが、底部から約20cm強浮いた部位に、腐食著しい大腿骨片のみがかろうじて残存していた。

第5号土壙墓（Fig. 74, PL. 26）

第3号土壙墓の南東、第4号土壙墓の南西側に隣接する。北東隅で第4号土壙墓を切る。墓壙上面は長さ224cm、幅176cmとこの一群の中では最大の大きさとなる。深さは176cmで、底面は全体に丸くくぼみ、桶を使用したかと思われる。遺骨及び供献土器等は全く残存していない。

なお、この南東に隣接する第7号土壙墓とは、主軸方位も一致しており、いずれも他の第4・6号土壙墓を切って、新しい部類に入っている。これらのことから、この2基は、この群中でのより新しい時期に設けられた1対の夫婦墓であった可能性が考えられる。

第6号土壙墓（Fig. 74, PL. 26）

第5号土壙墓の南側に隣接して、長軸方向をほぼ南北にとっている。北東隅を第7号土壙墓に切られる。墓壙上面の長さ220cm、幅は158cm、深さ188cmと大型の部類に入る。底面は中央部が大きくくぼんでいる。最底面から約25cm浮いた位置から、大腿骨片数点が出土したが、残りは良くない。供献土器等は出土していない。

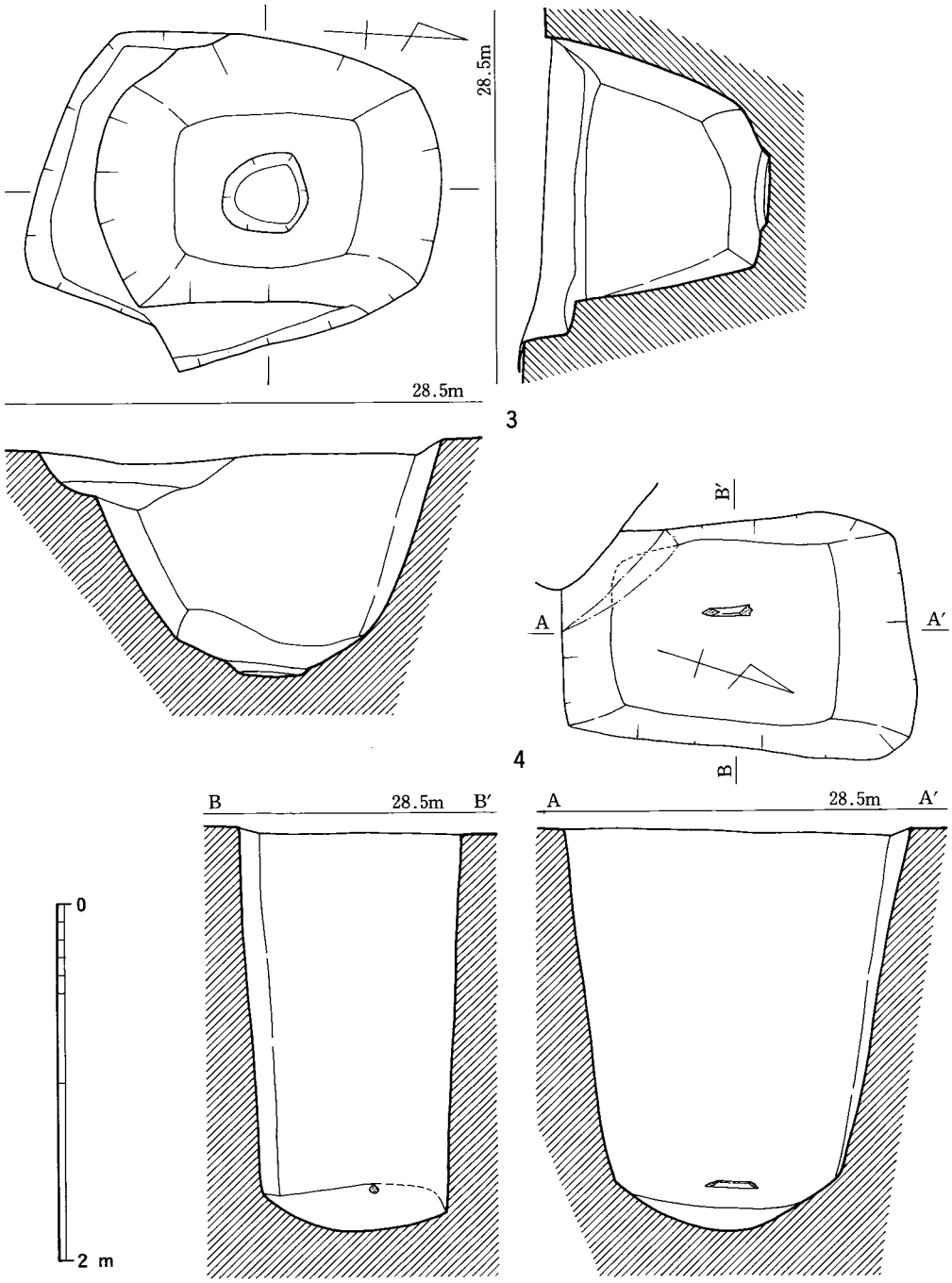


Fig.73　第３・４号土壙墓実測図（1/40）

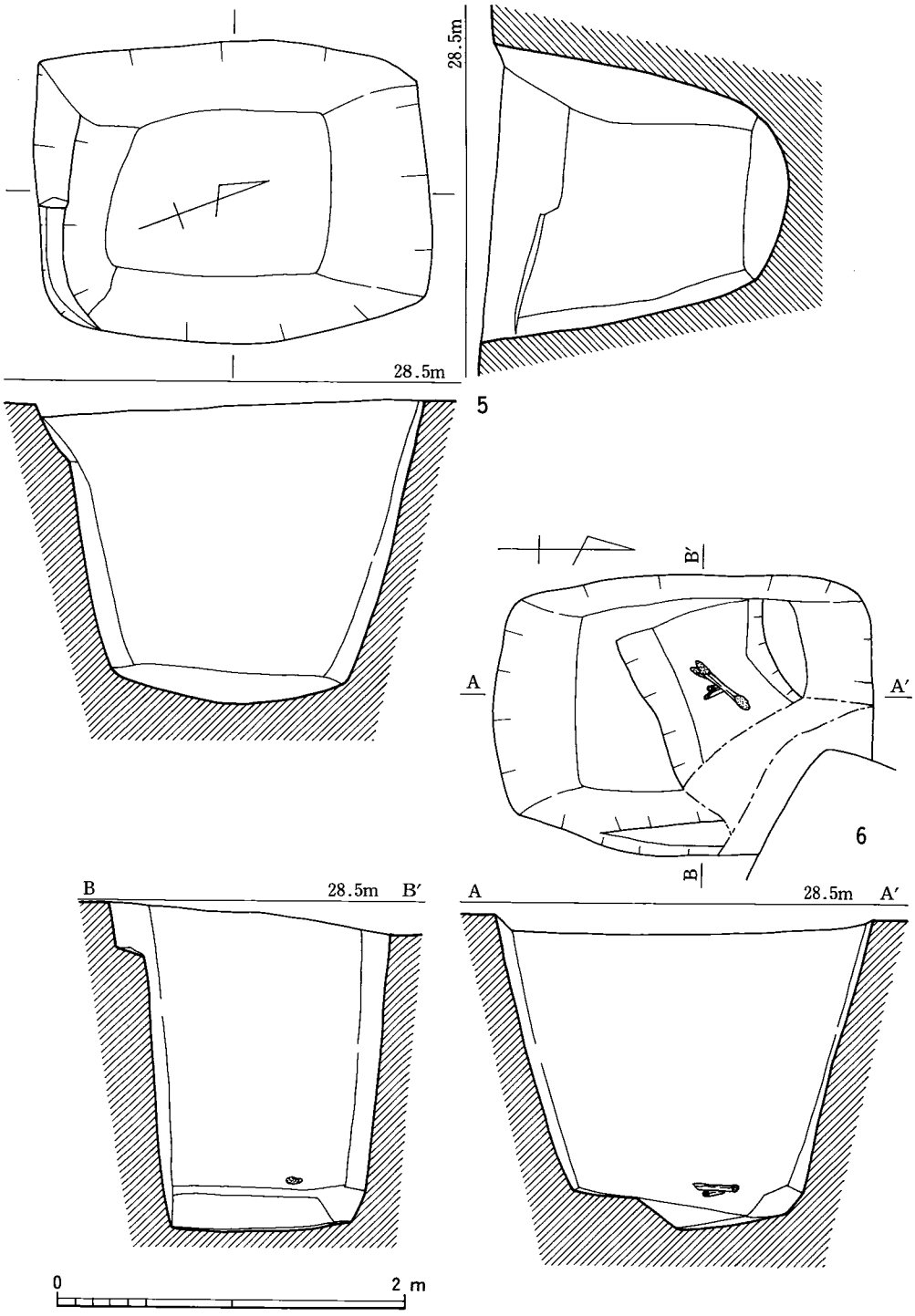


Fig.74　第５・６号土壙墓実測図（1/40）

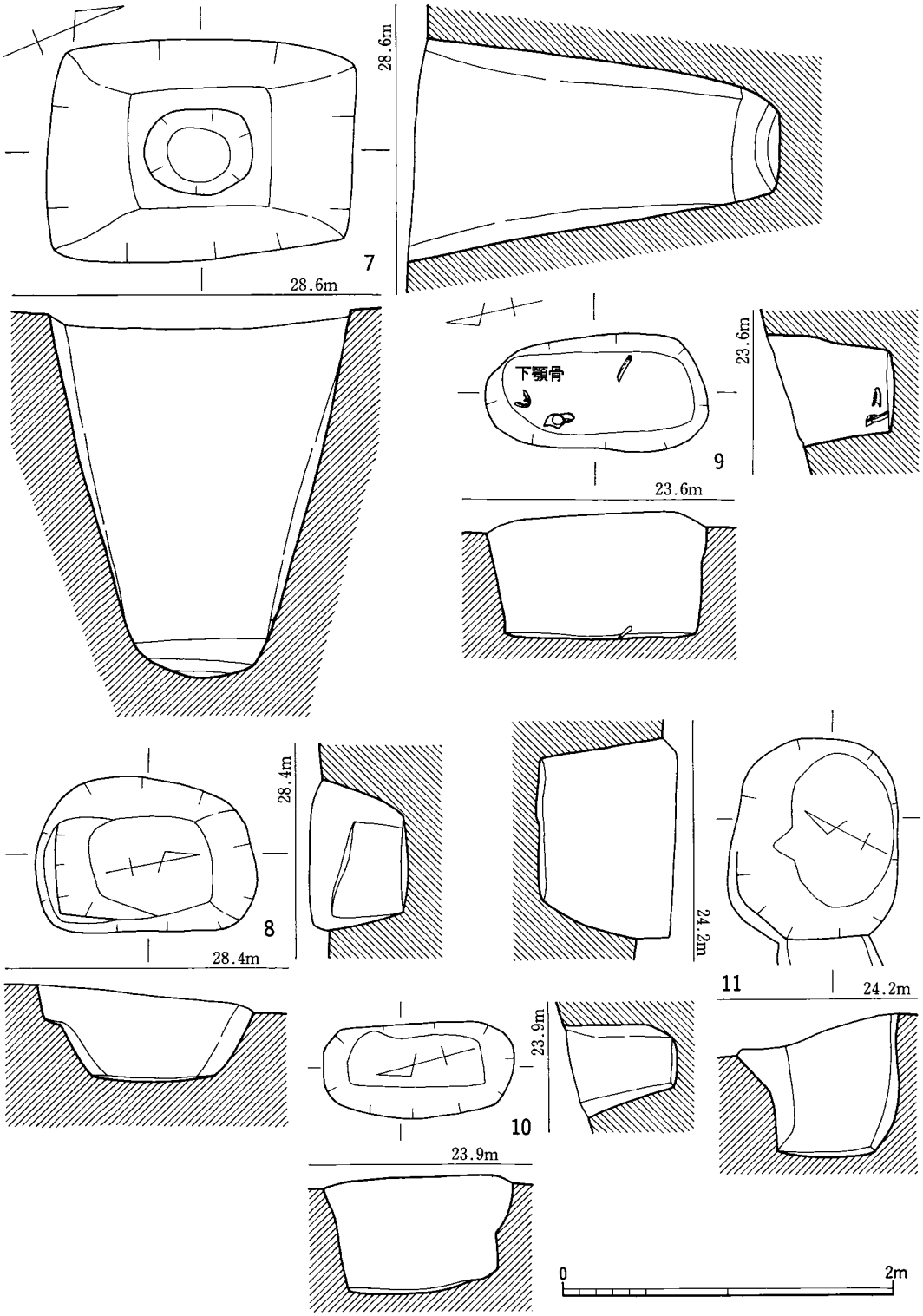


Fig.75　第７～11号土壙墓実測図（1/40）

第７号土壙墓（Fig. 75, PL. 26）

第６号土壙墓の北東側に位置し、第５号土壙墓と主軸を同じくしてその東南側に、対となってつくられている。第６号土壙墓を西南隅で切っている。墓壙上面での長さは186cm、幅136cmで、壙底までは224cmと恐ろしいほど深い。底面は狭いが、中央部が丸くくぼんでおり、底径50cm内外の桶を使用していたと考えられる。深いにも関らず、遺骨は全く残存していなかった。供献土器等も検出できなかった。

第８号土壙墓（Fig. 75, PL. 26）

尾根上先端の群集する土壙墓のうち、最先端に位置する。上端で長さ130cm、幅92cmで、深さ60cmとなる。規模・深さともに小さく、この群中ではこの１基のみ異例である。しかし、主軸方向が他とほぼ一致していることなどから、土壙墓と判断したい。あるいは、小児用であったのかもしれない。遺骨および供献土器等は検出されなかった。

第９号土壙墓（Fig. 75, PL. 27·28）

これまで既述した第１～８号土壙墓群と占地を異にして、尾根線方向の斜面中途に３基の土壙墓が発見された。等高線に沿って３基が並んでおり、同一斜面に営まれている火葬土壙群と同様の傾向を示している。これらのうち、西端のものが第９号土壙墓である。

長さ135cm、幅72cm、深さ76cmの細長い墓壙である。底面は平らで、北端から５cm強浮いて下顎骨のみ出土した。歯も全部そろっている。中央よりやや南の東壁側に大腿骨片が残存していた。遺骨の残存状況から、膝を立てた仰臥屈葬ではないかと考えられる。中央北寄りの西壁際に土師器杯２点が供献されていた。

出土遺物

土師器杯（Fig. 76, PL. 49）口径13.2～12.0cm、器高3.2～2.5cm、底径6.7cmを測る。底部糸切りで、体部を薄く内湾気味にひき伸ばしている。体部内外面ともに横ナデ、底内面はナデツケを施す。体部外面最下端部は両者ともに別に指でナデている。胎土に細砂粒をかなり含み、焼成良好で、茶～褐色をなす。第３号火葬土壙出土土師器と同型式であり、時期的にも近いと考えられる。

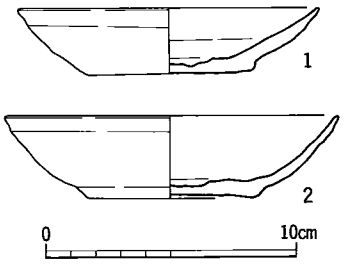


Fig.76　第９号土壙墓出土土器実測図（1/3）

第10号土壙墓（Fig. 75）

第９号と第11号の中間に位置し、長さ116cm、幅58cm、深さ70cmと細長く、規模は小さい。

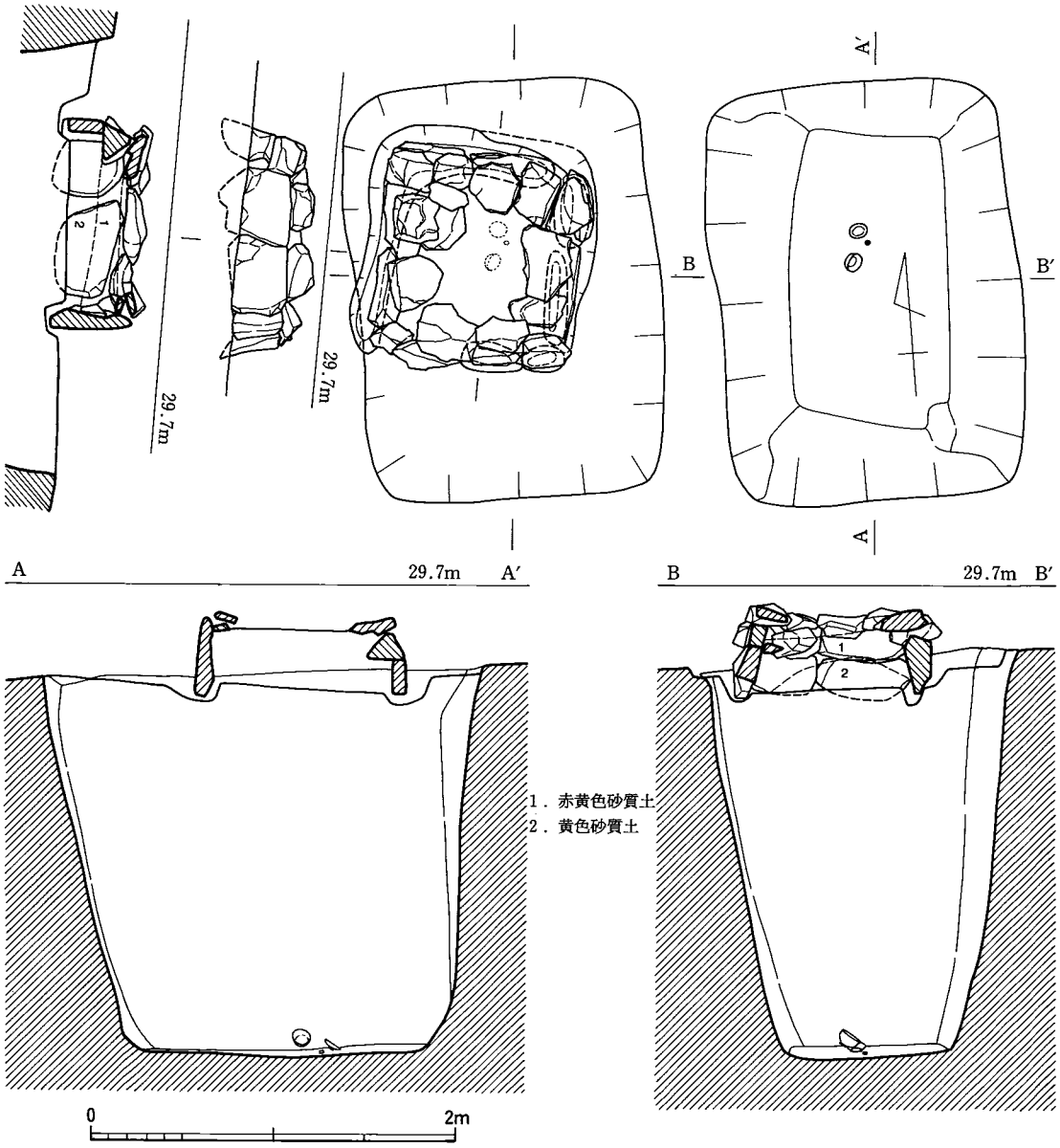


Fig.77　第12号土壙墓実測図（1/40）

底面の長さは90cm弱で、第９号と同じく仰臥屈葬であったと考えられる。北端部から歯が数点出土し、頭位を北にする意識は強かったと思われる。供献土器等は出土していない。

第11号土壙墓（Fig. 75）

第10号土壙墓の東側隣に位置する。長さ122cm、幅98cm、深さ86cmの楕円形プランをなす。長軸方向がN62°Eと、完全に等高線と平行に作られており、頭位北の規制よりも地形の制約に優先的に従っている。遺骨が全く残存しておらず、墓壙平面形も第9・10号とはタイプが異なるが、底面長さが93cmと近似しているところから、同様に仰臥屈葬であろうと推定される。供献土器等の出土も皆無である。

第12号土壙墓（Fig. 77, PL. 29·30）

Ⅱ区中央尾根上の付け根付近の西斜面寄りに、1基だけ孤高を保ってぽつんと営まれている。当初、石積の基壇部分のみを検出した。石積基壇は、120×110cmのほぼ正方形に組まれている。最下段には扁平な石材を横長に立て、その内側に土をつめながら、その上に1～2段の石積みを行い、上面をそろえている。石組内側には裏込め石と思われる作業もみられ、外側面を揃えて固定する意識があったものと思われる。内側からの出土遺物は無い。石材はすべて花崗岩を用いている。この上に墓石を立てていたのであろうが、近辺に全く見当たらず、この墓の主の素姓は知れずじまいである。

墓壙は、長さ230cm、幅168cmの寸詰まり長方形プランを呈し、深さ228cmとなる。最大規模のものであることは言うまでもないが、底面も160×88cmと群を抜いて広い。この程度の形態・規模の他遺跡での例によると、かき棒付き方形坐棺や長方形木棺も考えられるが、いずれの埋葬形態になるのか、ここでは判然としない。

遺骨も全く残存しておらず、埋葬姿勢も判断できない。底面からは、中央よりやや北寄りで、肥前産染付の蓋と碗のセットが出土し、更に6枚の所謂六道銭が銹合して発見された。これらの遺物は、丁度石積基壇の直下にあたっており、石積基壇が墓壙の中央ではなく、北へずらして構築されて

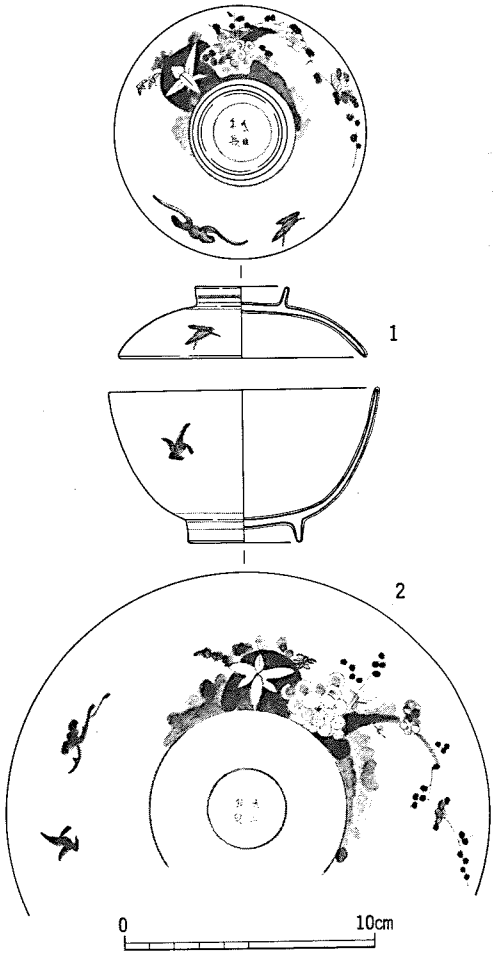


Fig.78　第12号土壙墓出土染付実測図（1/3）

いる理由がそこにあると考えられる。即ち、六道銭は死者に持たせるものであり、染付の薄手上質の蓋付碗も生前愛用のものを棺内に入れたものであると考えると、まさに棺の真上を意識して石積基壇を作ったと想定することができよう。この観点からすると、棺は桶であった可能性が強くなってくる。

出土遺物

六道銭（Fig. 79, PL. 50）6枚の銅銭が銹着して出土した。元祐通寶1枚、治平元寶1枚、寛永通寶4枚である。1の治平元寶（初鋳1064年）と2の篆書体元祐通寶（初鋳1086年）は宋銭である。3と4は、寛永銭初鋳に近い段階のものに近く、特に4は寛永14年（1637年）水戸領所鋳銭に似ている。5は、明暦5年（1656年）江戸鳥越所鋳銭に似る。6は、裏に「文」字があり、寛文8年（1668年）の江戸亀戸所鋳銭である。6は所謂「新寛永」の最初のものであるが、他の3～5は所謂「人字寛永」であって「古寛永」の類であることは間違いない。以上のことから、この遺構及び伊万里焼染付の年代の上限が、1668年におさえられることが判明した。（中間）

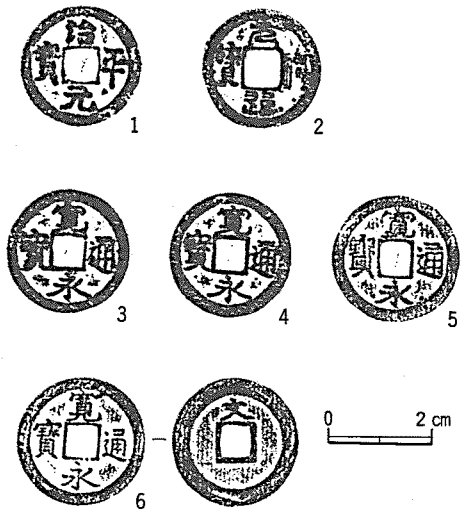


Fig.79　第12号土壙墓出土銅銭拓影（2/3）

蓋付染付碗（Fig. 78, PL. 50, 巻頭 PL. Ⅳ）肥前産磁器。身部は薄く高台脇から外方に開きながら内湾気味に立上る器形。高台は外面を直、内面を丸味をもって僅かに斜めに細くて高く削る。透明釉を総掛けし畳付部は削り釉剝ぎする。外面は高台に2条と高台脇に1条の圏線を巡らし、その上に梅樹・笹と空に雲・鳥を描く。高台内には1条の圏線内に大明年製の銘を施す。内底部には鉄粒が3点降っている。焼成は良くガラス質で白色を呈す。口径10.75cm・器高6.05cm・底径4.6cmを測る。蓋部は撥高台を有する内湾する皿形。透明釉を総掛け後にツマミ上面を削り釉剝ぎしている。装飾は身部と同様である。焼成が不良で黄味白色を呈する。ツマミ径3.7cm・器高2.8cm・口径9.9cmを測る。年代は大橋康二氏による肥前陶磁の編年（註）によると蓋付碗が出てくるのは元禄ぐらいからで一般化するのは18世紀の後半であるが、梅樹文の特徴からこの時期でも古い17世紀末～18世紀初頭と思われる。（日高）

（註）　肥前陶磁に関しては大橋康二氏の御教示をいただいた。記して感謝いたします。
大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」九州陶磁文化館　1984

土壙墓群採集石塔残片（Fig. 80）Ⅱ区中央尾根先端の第１～８号土壙墓の群集する墓地に伴うと考えられる石塔片について報告したい。

この群集する墓地の西斜面直下で、第３号土壙墓から３ｍ離れた裾部から石塔片が発見された。砂岩製で、最大径10.8cm、現在高11.2cmの大きさで、上半に退化した４弁の花台を刻んでいる。下半はわずかに枡形につくる。下端は笠石に挿入する部分を削り出しており、上端は欠損して、まだ上方へのびそうである。３～９重の多重塔あるいは宝篋印塔の相輪の最下部となろう。

第１～８号土壙墓に、このような石塔・墓石類を建ててたことが推測される訳であるが、江戸初期の一族墓であることも併考すると、被葬者一族は、この土地の有力氏族と考えることも充分可能であろう。

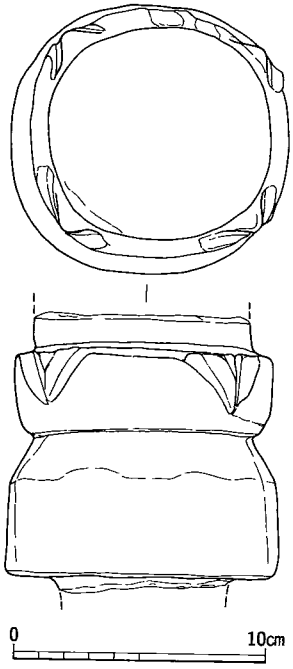


Fig.80　土壙墓群西斜面出土石塔残片実測図（1/3）

Tab. 8　中・近世土壙墓一覧表　（単位cm）

No.	平面形	主軸方位	長さ×幅	深さ	遺骨	副葬品、切合い等	葬法	占地	時期
1	寸詰り長方形	N10°30′E	164×130	150	なし	唐津皿１、土師杯３、小皿２	桶か	尾根先端	16C末～17C初
2	〃	N10°W	176×120	120	なし	洪武通寶１	〃	〃	
3	〃	N３°30′W	194×168	132	なし	なし	〃	〃	
4	〃	N18°W	194×130	224	大腿骨片	なし　５号より古	〃	〃	
5	〃	N21°E	224×176	176	なし	なし　４号より新	〃	〃	
6	〃	N１°W	220×158	188	大腿骨片	なし　７号より古	〃	〃	
7	〃	N23°E	186×136	224	なし	なし　６号より新	〃	〃	
8	〃	N10°30′E	130× 92	60	なし	なし	?	〃	
9	略長方形	N12°30′E	135× 72	76	下顎骨他	土師器杯２	仰臥屈葬か	斜面	15C後半
10	略長方形	N15°E	116× 58	70	歯	なし	〃	〃	
11	楕円形	N62°E	122× 98	86	なし	なし	〃	〃	
12	寸詰り長方形	N４°E	230×168	228	なし	染付蓋付碗、銅銭６、石積基壇	桶か？	尾根付根	17C末～18C初

C　近世墓地

当遺跡では、尾根頂部平坦面のすべてが、近世～現代墓地となっており、そのほとんどが改葬を受けていた。現状はその改葬による穴ボコボコと、墓石やその基礎石が散乱しているという状態であった。

ここでは、これらの近世～近代墓のうち、Ⅰ区とした遺跡西半部のものだけを報告しておきたい。大別して３種のものである。

第１は、弥生甕棺墓地と重複するⅠ区最頂部から、その北西斜面にかけての近世～近代墓地で、密集して３群（17～33号、34～42号、１～12号）をなし、発掘を試みたものである。ほとんどを完掘してみたが、改葬を受けており、その判断の時点で発掘を中止したものも多い。その攪乱された埋土中からは、寛永通寶をはじめとする六道銭もいくらか出土した。これらの多くは、寸詰まり長方形プランをなす深い墓壙の土葬墓である。おそらく桶棺であろう。中には甕を垂直に据えた近代墓もみられたが、その大半は改葬時に打ち割られていた。

第２は、Ⅰ区西北端付近に散在する土葬墓群で、改葬を受けた痕跡はない類である。第１・２号火葬土壙よりも北西側に位置し、２群に分かれる（15・16号付近と14号付近）が、いずれも斜面に位置する。寸詰まり長方形プランのものと、小さい長方形のものの２種に分かれ、いずれもそれほど深くない。また、出土遺物が全く無いのも特徴である。埋土等の状況などから近世乃近代墓であろうと思われるが、かなり粗末な薄葬の印象を受ける。地元の言い伝えで、行き倒れの人を葬った場所だということで、まさにこれらの墓がそうなのかもしれない。

第３は、Ⅰ区の弥生甕棺墓の北東側尾根上の大墓地の中で、未改葬の近世墓地である。斜面の一画の約８ｍ四方の部分だけ、墓石や供養石像が手つかずで残されていた。発掘の余裕が無く墓壙構造等は知り得ないが、全体に小さい自然石の墓石で、小規模のものである。これについては、個々に後述したい。

以上の３種の他に、第３の未改葬近世墓の西側上段の中央付近に、小型板碑が西面して立てられていた。またこの北西側に、頭山満が立てたと記されている高橋縫磨の墓石が残されていた。これらについても、個々に詳述したい。

既改葬近世墓出土遺物

銅銭（Fig. 81, PL. 51）所謂六道銭であるが、すべて改葬された墓壙内埋土中出土品であるため、各々の墓から出土した数が当初からの数でもないし、出土した墓に確実に伴うという保証があるわけでもない。とりあえず近世墓の番号に従って記述してゆきたい。

１は、第６号近世墓出土品で、天聖元寶（初鋳宋1023年）である。淡青色に錆をふいている

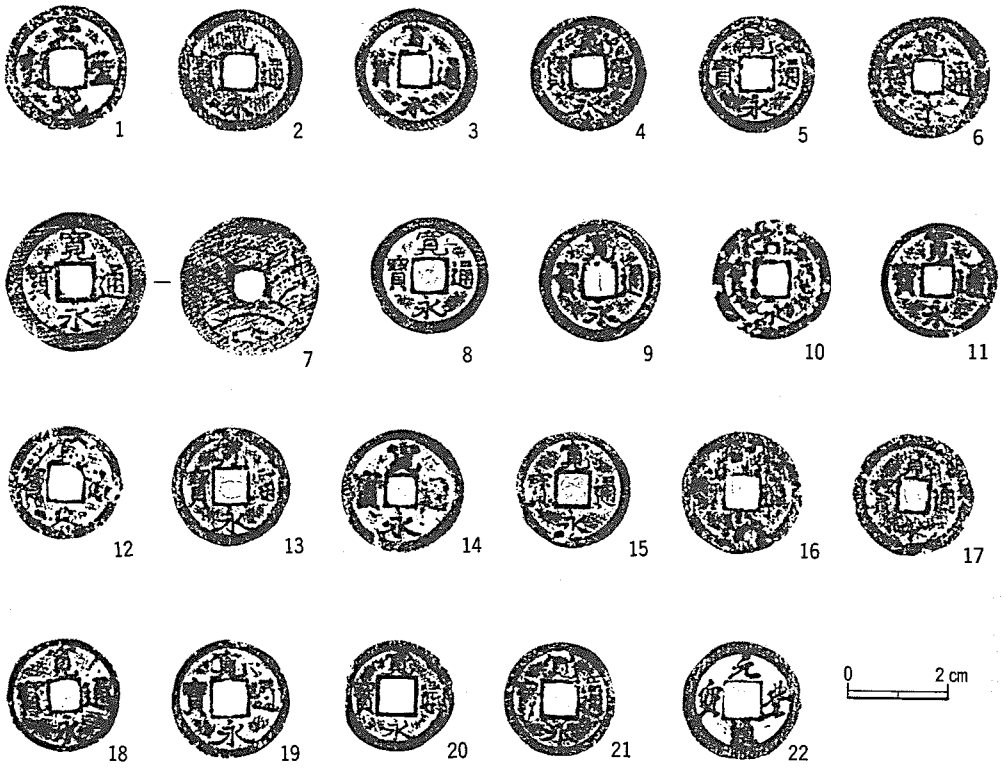


Fig.81　既改葬近世墓出土銅銭拓影（2/3）

が、残りは良い。

2～4は、第12号近世墓出土の寛永通寶で、「ハ」字となる新寛永銭である。上限が寛文年間であり、3点とも17世紀後半以降の所産と考えられる。4は、直径2.3cmと、ひとまわり小型品である。

5は、第13号近世墓出土の寛永通寶である。新寛永の部類に入り、17世紀後半以降の所産と考えられる。

6は、第19号近世墓出土の寛永通寶である。「人」字となる古寛永銭である。寛文年間以前のものであろう。

7は、第20号近世墓出土の所謂波銭の寛永通寶である。裏面の波の分類からみて、明和六年（1769年）江戸十万坪所鋳の四文銭と考えられる。この墓は最頂部にあたり、この一群の墓地は大旨新しい傾向がみられることと合致し、その上限を18世紀後葉としておさえられる。

8～10は、第26号近世墓出土の寛永通寶である。3枚とも「ハ」字の新寛永に属する。

11は、第33号近世墓出土の寛永通寶である。直径2.3cmと小型で縁が狭い特徴がある。裏面

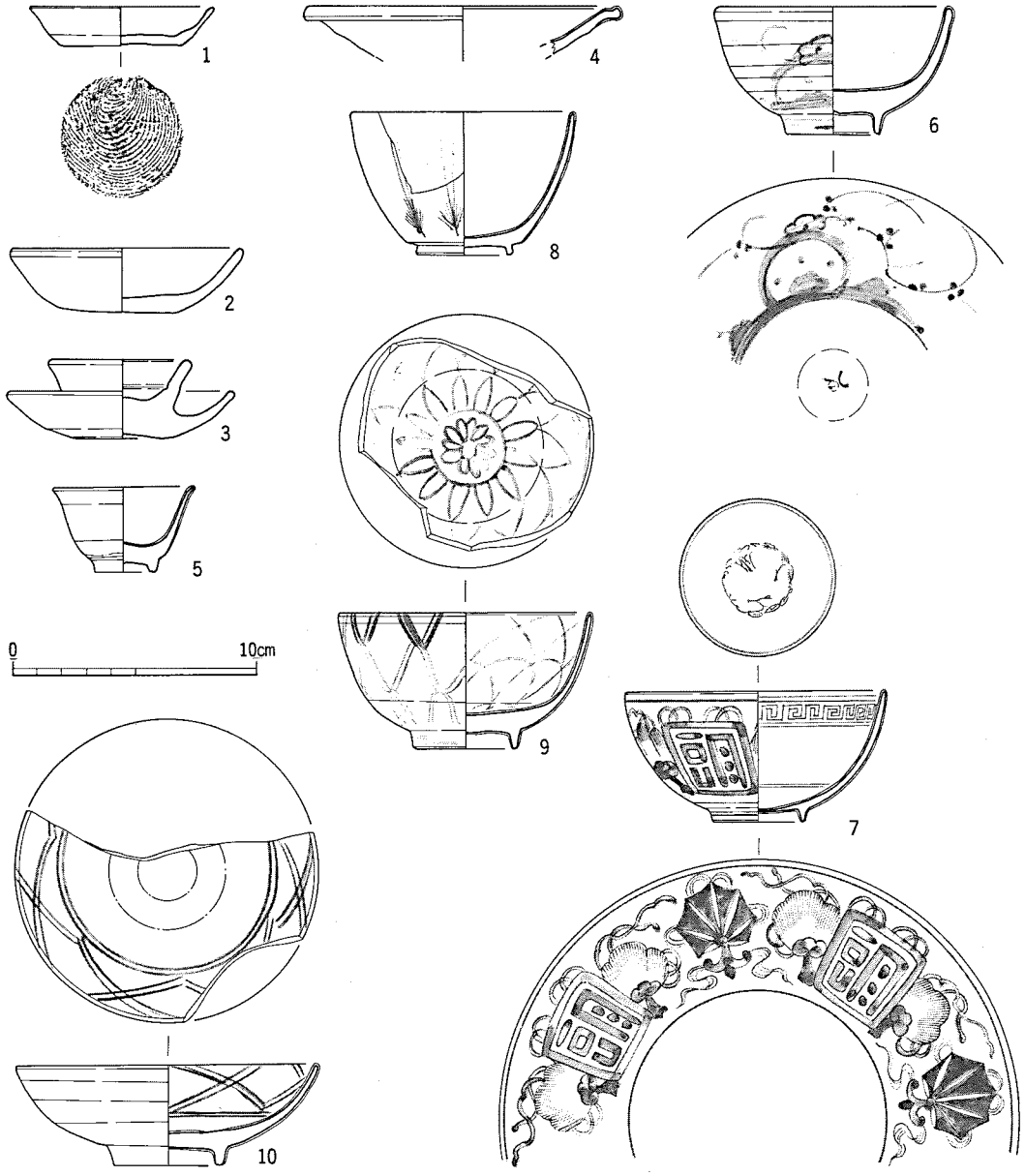


Fig.82　近世墓地出土の近世遺物実測図（1/3）

上端に、不明瞭ではあるが「長」ではないかと思われる字があり、諸特徴を含めて、明和四年（1767年）長崎所鋳銭と考えられる。

12～16は、第26号近世墓出土の寛永通寶である。拓本で示したこの５枚の他に、木棺片が付

着して銹の著しい鉄銭が１枚ある。文字は読めない。都合６枚となるわけである。なお、16は銅銭であるが錆がひどくて字は読めないが、おそらく寛永通寶であろう。他の４枚はいずれも新寛永である。鉄銭の初めが1739年であることから、ここではこれを上限としておさえられよう。

17は、第37号近世墓出土の寛永通寶である。新寛永銭である。

18～21は、第41号近世墓出土品である。いずれも新寛永銭である。18は、縁の狭いところは明和四年長崎所鋳銭に似るが、裏に「長」の字は無い。

22は、近世墓の墓壙内から出土したものではなく、最頂部の墓地群での表採資料である。元豊通寶の行書体で、宋銭（初鋳1078年）である。

以上の銅銭の出土傾向をみると、いくらか時期の差がみられるようである。即ち、第５～13号墓の一群での出土銭は、その上限が17世紀後半代で、他に比べると最も古い段階の墓地ではないかと思われる。山頂部の第17～33号墓は近代墓もあるが、出土銭からの上限が18世紀後半代で、第５～13号墓の墓地よりも新しいと考えられる。山頂部墓地のすぐ北側下の山裾にめぐる一群は、鉄銭をも持っており、山頂のものよりその始まりは新しいのではないかと推定される。

土師器（Fig. 82-1～3）１は、口径7.55㎝、器高1.6㎝、底径7.0㎝の糸切り特小皿である。Ｐ-８出土品で、薄手精製で、胎土精良である。焼成良好で淡橙褐色をなす。法量や胎土・作りの面から、本遺跡の火葬土壙・土壙墓出土の特小皿とは全く趣きを異にしている。むしろ、18世紀前葉の小郡市高松家墓地（註１）のものや、18世紀後葉の夜須町山の口近世墓（註２）のものに近似している。このことから、この土器は、18世紀前後の近世墓地に関わる遺物と判断される。２は、Ⅰ区北側の改葬済土葬墓である第５号近世墓出土品である。口径9.3㎝、器高2.6㎝、底径4.7㎝の糸切り底となる。口縁端部の一部に油煙がこびりついており、灯明皿であったことがわかる。胎土精良で、焼成良く、淡い茶褐色をなす。体部内外面とも横ナデ、底内面には１と同様ナデツケがみられる。器形的には第１号土壙墓出土の杯と同系統とみられるが、更に倭小化し、いくらか薄手になってきている。このことから17～18世紀代のものではないかと考える。３は、Ⅰ区最頂部西斜面中位のＰ-114出土の焼成土師質品である。受け皿を付けたひょうそくであり、口径5.8㎝、器高3.2㎝、受け皿部径9.3㎝、油皿部深さ1.5㎝となる。受け皿部内底面と油皿部内底面には白い釉が残っており、本来軟質焼成の施釉陶器と考えられる。受け皿部外面下端から外底面にかけては回転ヘラ削りを施し、他面は回転ナデである。油皿部口縁の一端に油煙痕がみられ、実際に使用されたことがわかる。胎土に若干細砂粒を含み、焼成は堅い土師質で、地色は橙褐色をなす。近世墓地の灯明に用いられたものであろう。

陶器皿（５）Ｐ-６出土の唐津風の皿で、復元口径13㎝を測る。胎土は微砂粒を若干含み、黄味がかった灰色をなす。くすんだ黄色の釉を内面と外面上端までかけている。（中間）

白磁坏（Fig. 82-5, PL. 51）第４号近世墓出土品である。肥前産磁器。高台脇から僅かに外方に開きながら立上り、口唇部が外反する。高台は断面を逆台形に内面は浅く削り、平面は中心がずれて畳付は三日月形になる。内底中心は僅かに円錐形に尖り、この部分に微細な鉄粒が降っている。透明釉を内面と外面高台脇まで施釉する。胎土は混入物も無く精良で、焼成も良く真白色を呈する。口径5.75cm・器高3.5cm・底径2.5cmを測る。これは胎土が上質であることから、有田周辺の窯で焼かれたものと思われ、高台無釉の特徴から、時期は1630年代～1650年代である。（日高）

染付碗（Fig. 82-6, PL. 51）第38号近世墓出土品で、肥前産磁器。内底部が平坦で広く、高台脇から僅かに開きながら内湾気味に立上る器形。高台は内面を直、外面を僅かに斜めに細くて高く削る。透明釉を総掛けし畳付を削り釉剝ぎする。この部分に目砂が付着する。外面は呉須で高台に２条・高台脇に１条の圏線を巡らせ、その上に雪の輪と梅樹を描く。内底部には大明年製を簡略した銘が入る。内底部には降った灰と鉄粒が付着している。焼成は良く割れ口はガラス質で白色を呈す。1/2破片のため復原口径9.85cm・器高5.2cm・復原底径3.9cmを測る。厚手の作りで通称くらわんか碗と呼ばれる雑器で、肥前波佐見窯で18世紀初～18世紀末に焼かれているが、これは18世紀中頃～18世紀末のものであろう。（日高）

染付碗（Fig. 82-7, PL. 51）第39号近世墓出土品である。肥前産磁器。高台脇から内湾気味に立上る、半球形の器形。高台は断面が逆台形を呈する。透明釉を総掛けし、畳付部は削り釉剝ぎする。外面は呉須で高台に２条と高台脇・口縁下に各１条の圏線を巡らし、その上に団扇と方形枠内に「朔」字と宝紐を描いた団扇宝文を施す。内面は口縁に２条の圏線内に雷文帯を巡らし、内底部には二条の圏線内に松竹梅を簡略化した文様を環状に描く。焼成は良く、割れ口はガラス質で白色を呈する。口径10.8cm・器高5.35cm・底径3.9cmを測る。時期は1820年代～幕末になる。（日高）

呉須絵碗（Fig. 82-8, PL. 51）近世墓地表採品で、関西系陶器。腰部に稜がつき、僅かに外方に広がりながら内湾気味に立上る猪口形。高台は低い撥形に削られている。内外面に白化粧土を塗り、外面には若松２本を呉須で描いている。化粧土・透明釉は生掛けで内面と高台まで掛け、削り剝ぎしている。胎土はきめ細く微細な雲母粒を多く含む。焼成はやや生焼け気味で釉調は灰黄色で露胎部は橙褐色を呈す。1/4破片のため復原口径9.2cm・器高5.85cm・底径４cmを測る。年代は18世紀後半～19世紀初頭であろう。（日高）

染付碗（Fig. 82-9, PL. 51）近世墓地での表採品である。肥前産磁器。内底部が平坦で広く、高台脇から僅かに開きながら内湾気味に立上る器形。高台は断面が逆台形を呈し、畳付部分が狭い。透明釉を総掛け後、畳付を削り釉剝ぎしている。外面は呉須で高台に２条の圏線を巡らし、高台脇から二重の網目文を施す。内面は口縁から内底にかけて網目文、中央に菊花を描く。焼成は不良でくすんだ黄色を呈し、呉須は僅かに発色している。1/3のみの破片であるが、復

原口径10.35cm・器高5.55cm・底径4.3cmを測る。二重網目の特徴から、時期は18世紀前半～18世紀中頃である。（日高）

染付皿（Fig. 82-10, PL. 51）近世墓地表採品で、肥前産磁器。高台脇から外方に広がりながら内湾気味に立上る器形。高台は断面が逆台形に削る。透明釉を総掛け後に内底部は蛇の目状に削り釉剥ぎし、外面は畳付を削り釉剥ぎを施すが釉が流れて目砂が付着している。内底外周に呉須で２条の圏線を巡らし口縁との間に格子目文を描く。焼成はやや生焼け気味で器面は淡灰色で呉須は薄く発色している。1/2破片。口径12.4cm・器高4.1cm・底径4.5cmを測る。肥前波佐見窯で焼かれたくらわんか皿で時期は18世紀後半であろう。（註３）（日高）

註１）「高松家墓地」九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告　16　福岡県教育委員会　1990

２）「大園遺跡」夜須町教育委員会　1989

３）肥前陶磁に関しては大橋康二氏の御教示をいただいた。記して感謝いたします。
大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」九州陶磁文化館　1984

近世未改葬墓地（Fig. 83, PL. 32～37）

前述の第３の部類の墓地で、発掘調査は行っていない。４基の銘のある墓石と、僧形、地蔵形の供養石像、及び方形切石台座のみ１基などの他に、自然石のみで無銘の墓石と思われるもの４基とからなる。

墓地の西側は上段の墓地との境の1.2mほどの崖となり、東側は谷へ落ちる急斜面となる。南北境は浅い溝状の落ちが掘られており、かつての雑木山と区別されている。墓地は、１辺８mほどの正方形をなす。墓石及び石像等はすべて西面して立てられている。

これらの墓石のうち、紀年銘のあるものは３基あるが、それらは西暦1730年～1748年の間であり、意外と短い。墓石の総数などとあわせ考えてみると、せいぜい半世紀以内の期間に営まれた一族墓地と思われる。俗名に氏姓

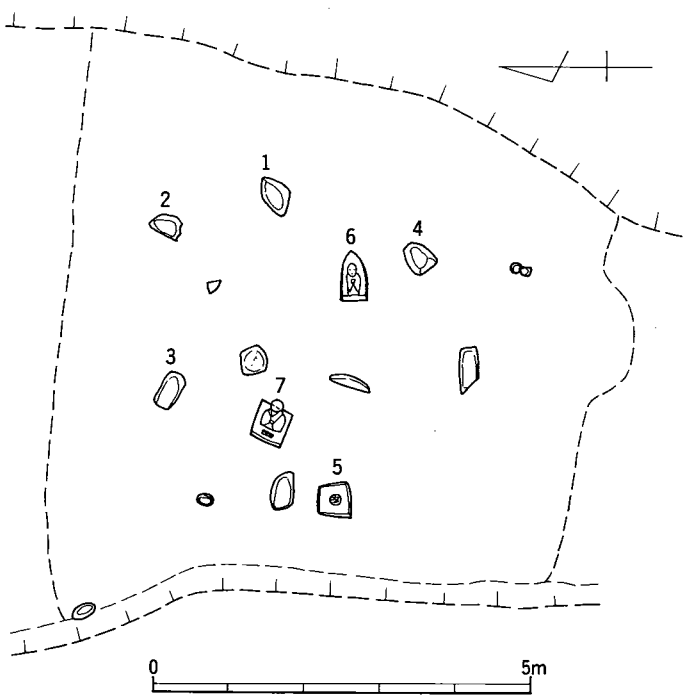


Fig.83　近世墓地墓石配置図（1/100）

が無いことからみて、武士階級ではなく、おそらく本百姓から庄屋の分家ぐらいまでの間の階層の墓地と考えられる。

以下、仮に番号を付して、個々の墓石・石像について報告しておきたい。

第1号墓石（PL. 34-2）

最も東側に位置するもので、花崗岩の自然石を用いる。「小三郎」は第2号墓の「三郎亡妻」の子にあたるものか。

銘「二月四日
　　小三郎」

第2号墓石（PL. 35-1）

北東端に位置し、花崗岩の自然石を用いる。寛延元年は西暦1748年にあたる。

銘表「寛延元年　　銘裏「三郎亡妻」
　　釋　妙心
　　十一月廿三日」

第3号墓石（PL. 32·33）

墓地の北側西寄りに位置し、花崗岩の自然石を用い、地表高50㎝、幅37㎝の大きさである。元文四年は西暦1739年にあたり、寛延元年（1748年）に亡くなった妻と対になるものか。

銘「元文四年
　　釋念西
　　正月十九日」

第4号墓石（PL. 35-2）

墓地の南東隅近くに位置し、花崗岩の自然石を用いている。享保十五年は西暦1730年にあたり、銘のあるものでは最も古い。

銘「享保十五年
　　釋西順霊
　　七月」

第5号墓石（PL. 32·33）

墓地の南西隅に位置し、方形切石の台座のみが残り、その上に石像の如き破片が、小さな高まり状に残る。第7号のような僧形石像が在ったのかもしれない。

第6号墓石（PL. 34-1）

墓地の中央やや東寄りに、表面を上にして倒れていた。高さ54㎝、幅30㎝の花崗岩作りである。両手を前であわせ、その上に球状の宝珠をのせている。地蔵形の立像である。銘は無く、その位置からみても、供養的性格をもつものであろう。

第7号墓石（PL. 33-2）

墓地の中央西寄りに位置し、花崗岩製の僧形座像である。一辺39cm、厚さ18cmの方形切石台座の上に、高さ35cm、幅28cmの石像をのせている。袈裟を付け、両手は前面で重ねており、細面の穏やかな表情である。みつめているとホッとする柔和さを持ちあわせている。像のすぐ前の台座上面には長方形の窪み部が彫り込まれ、線香立てとされている。

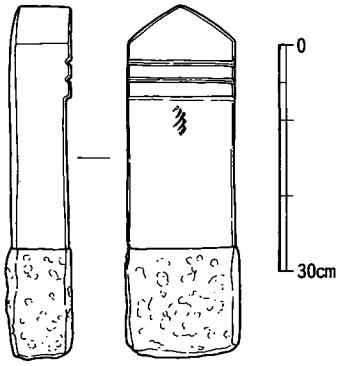


Fig.84　板碑概測図（1/10）

板碑（Fig. 84, PL. 36）

前記未改葬近世墓地の北西隅から北北西へ13mの位置に小型のかわいい板碑が1基残されていた。ちょうど近世～現代墓地の中央付近にあたり、周辺はすべて既に改葬を受けていたため、具体的にどの墓の供養とするものか等、全く性格はわからない。

全高46.5cmで、うち地中に埋まる未加工部分が14.5cmある。幅は14cm、厚さ8cmと超小型である。上端には2本の横方向沈線を施し、その下方で段をつくる。種子は彫りが浅く、かなり不明瞭で、どの字か判別できない。

砂岩製で丁寧な作りであるが、裏面にはノミ加工痕を残している。西面して立てられており、風化状況からも新しいものではなく、江戸期かと思われる。周辺には他の板碑が全くみられず、当初から、単独で墓地内に供養塔として据えられたものと考えられる。

高橋縫麿墓（Fig. 85, PL. 37）

前述の板碑の2.5m北西側に、墓石が1基だけぽつんと残されていて、記銘をのぞいてみたところ、頭山満が立てたと刻まれていたため、ここで報告することにした。

銘表「高橋縫麿之墓」

銘裏「明治三十年十月十六日卒

頭山満立之」

一辺41cmで厚さ25cmの方形台座の上に、高さ83cm、一辺25cmの方柱をのせる。花崗岩切石を用い、西面させている。高橋縫麿なる人物については、今回調べる余裕が無かったが、当地出身の玄洋社に関係した人であったと推定される。

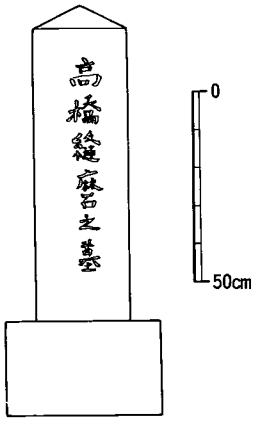


Fig.85　高橋縫麿墓石概測図（1/20）

1880年（明治13年）5月には玄洋社の結社届け出がなされ、箱

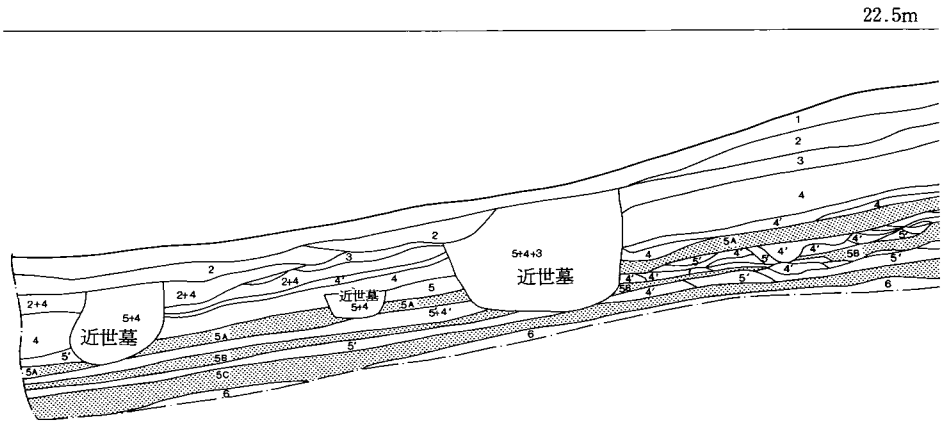


Fig.86　Ⅰ区北西端土層実測図（1/80）

田六輔、平岡浩太郎、頭山満などが活躍している。高橋縫麿はこれらと親交深かった同志、或いは、頭山満の愛弟子であったのではなかろうか。

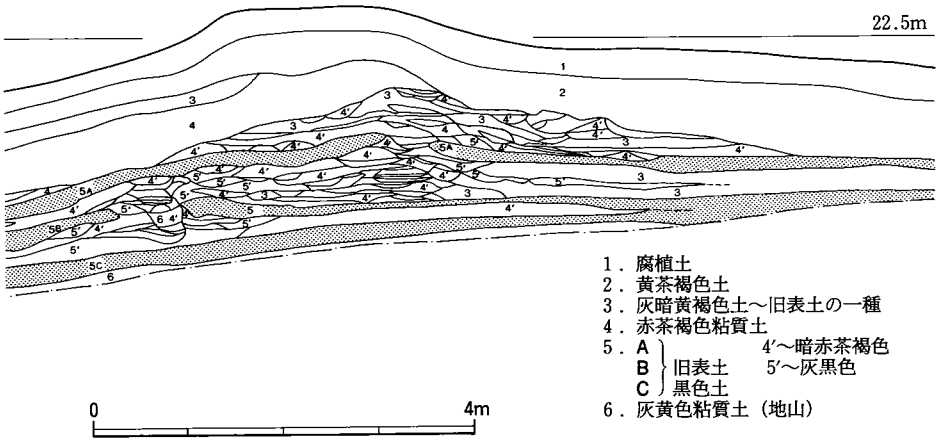
これについては、今後詳細な追跡調査を行い、判明し次第、機会をみつけて報告する所存である。

Ⅰ区北西端土層（Fig. 86）

遺跡の西側の尾根から西斜面にかけては、踏査時に甕棺片を採集したことから、弥生期の遺構の存在を予想していた。孟宗竹の林であったため、重機によりやや深めに表土を剝いだ。しかし、しっかりした地山面が見られなかったため、再度下げた結果、黒色土の旧表土とおぼしき土層にあたった。それで、その直下が地山に違いないとにらみ、その黒色土を更に剝いだが、それでも地山は出てこない。こういうことを３度くりかえし、結局、北西端部の尾根線直下で現地表面の256cm下からやっと灰黄色粘質土の地山が出てきた。土層図に示すとおり、３枚の旧表土が間層をはさんで存在していたわけである。

図の右頁側が現在の尾根部分で、その最高位の平坦部分幅160cmほどが山道となっている。その下120cmほどは、大まかな盛土というか造成のような堆積状況を示している。近世墓の断面が左頁側にみられるが、これは現表土直下から掘り込まれており、第１旧表土（５Ａ層）以上のこの粗い盛土は、近世以前の地業であることはまちがいない。

第１旧表土の直上から第３旧表土（５Ｃ層）までの間層は、厚さ３～15cmほどの密な人為的盛土がみられ、まさに版築そのものである。灰黒色土と赤茶褐色土の互層となっており、特に最高位を中心とした範囲に顕著である。この地業を何とみるか、意見は別かれようが、結論的に言えば、現段階では不明といわざるを得ない。まず、古墳の墳丘ではないかと考えたが、現



状の周辺の地形をみても、全くそれらしき雰囲気は無い。まして、土層図の左端はすぐに深い谷へと落ちており、その間に墳丘裾とおぼしき部分や、周溝等も認められない。第1旧表土と第2旧表土間の版築も説明できない。また。現状の尾根線がずっと南方まで、山道となっていることから、中世あたりの山城関係の土塁ではないかとも考えたが、これも土塁としたときの裾端部がはっきりしていないことなどから、明確な説明とはならない。

事実関係で明確なことを整理すると以下の如くなろう。第1に、第2旧表土が堆積した後に、人為的な盛土作業が行われたこと、更にその上に旧表土ができる長い時間をおいて後に、再びその上に前回と同様の版築地業を行なっているという、時間的経過があるということである。そこには、不連続の工程が明らかではあるが、同一個所を再度盛り上げなければならないという認識があった。つまり、何らかの時間を超えた同一目的が存在したという解釈が成り立つわけである。第2に、既述した如く、近世以前の所業であり、版築部付近では出土遺物は無いが、ずっと南側の第1包含層部分で、第3旧表土より上の赤茶色粘質土から、弥生中期の土器が出土していることから、これ以降の作業によるものと判断できることである。第3に、この断面部分より北側は用地範囲外で、調査できなかったが、北へ30mほどは、尾根線といっても所謂鞍部にあたり、同様の状況が続いている可能性は強い。しかし、これより南側は尾根線もすべて調査したが、ほんの5mほどで、この盛土の状況は消滅してしまって、それ以南には全く痕跡すら認められない。もし中世山城的なものであれば、より南の高い尾根上の方が土塁等には適当な筈であるのだが。

いずれにしろ、今回のこの土層断面が尋常でないことは確かで、結論は出せなかったが、今後バイパスの開発に伴って周辺が開発される機会に、是非とも解明されなければならないと考えている次第である。

Ⅵ　自然科学的分析

A　奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査

大澤　正己

概要

平安時代初頭に比定される奈良尾遺跡出土の鍛冶関連遺物（椀形状鉄滓破片、鍛造剥片、湯玉）を調査して次の事が明らかになった。

〈1〉鉄滓は、砂鉄系鉄素材の鉄器製作に際して排出された鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）に分類される。形状は、鍛冶炉の炉底に堆積した椀形状鉄滓である。

〈2〉赤熱鉄素材を鉄床（かなとこ）石上で連続鍛打した時点で剥落した酸化膜の鍛造剥片（スケール）が大量（874.5ｇ）に検出された。更に、当鍛造剥片が鍛冶炉の中で加熱溶融し、表面張力の関係から球状化された湯玉が共伴する。この両出土物は鍛冶作業を証明する重要考古遺物である。

〈3〉鍛冶炉２と隣接して、Ｐ－96ピットが検出された。ここより鍛造剥片と湯玉が集中（約８割の693ｇ）して出土するので、鉄床石の設置場所と認定できた。更に鍛冶炉と鉄床石の想定により鍛冶作業の横座（鍛冶主導の鉄鉗を使う親方）と向う鎚をふるう先手（Ｐ－101ピット）作業場所の復元まで可能となった。

以上の如く鍛冶工房での作業空間配置が想定できる遺構の検出は、築上郡太平村の土佐井遺跡[①]に続くもので貴重な成果と考える。

1　いきさつ

奈良尾遺跡は、糸島郡前原町大字多久に所在する、弥生時代中期から江戸時代にわたる複合遺跡である。このうちの奈良時代中期から平安時代初頭にかけての層位より鍛冶炉２基、焼土壙４基、伏焼き炭窯（鍛冶用小炭）等が検出された。

一方、遺物は、50cmメシュで分布把握で採取された874.5ｇの鍛造剥片と湯玉及び少量の鉄滓破片である。この出土遺物について、福岡県教育委員会より科学的調査の依頼を受けたので、鉱物組成と化学組成にもとづく調査を行ない、遺構との関連づけを行なった。

2　調査方法

2－1．供試材

Table. 1に示す。調査試料は鉄滓５点及び鍛造剥片、湯玉である。

2－2．調査項目

(1)　肉眼観察　　(2)　ビッカース断面硬度　　(3)　投影機撮影（５倍）

(4)　CMA（Computer Aided X-ray Micro Analyzer）調査　(5)　化学組成

Table. 1　供試材の履歴と調査項目

符号	試料	出土位置	計測値		調査項目				
			大きさ(㎜)	重量(g)	顕微鏡組織	ビッカース硬度	投影機撮影	CMA調査	化学組成
E-901A	鉄滓	P－96ピット	20×30×15	15	○				
E-901B	〃	〃	15×36×10	12	○	○		○	
E-901C	鍛造剥片と一部湯玉	〃	0.1～0.5×5～10	30	○	○	○		○○
E-901C1	湯玉	〃	3～4 φ	2コ	○		○		
E-901D	鉄滓	〃	25×18×10	10	○	○			○
E-901E	〃	Ⅱ区谷中央トレンチ	62×30×22	70	○				○
E-901F	〃	〃	23×22×27	25	○				○

注）Ⅱ区谷中央トレンチは鍛冶炉２やＰ－96ピットの北へ６ｍのトレンチ包含層。
　Ｅ－901Ｃ鍛造剥片の化学組成は２㎜メッシュのフルイ分けして両者の分析を行なった。

３．調査結果と考察

(1)　Ｐ－96ピット出土遺物

当遺構は、山の斜面を削平し、7.7×６ｍの掘立柱建物内で、南側寄り位置に設置された隅丸方形の40×44㎝の土壙である。鍛冶炉２に隣接し、当ピット内と、その周辺に鍛造剥片が集中するところから鉄床石設置場所と推定される。このピット内から鉄滓と共に鍛造剥片と湯玉が大量の693.0ｇ検出された。(Fig. 34　鍛冶炉２周辺鍛造剥片分布状況参照)

①鉄滓（Ｅ－901Ａ、Ｅ－901Ｂ、Ｅ－901Ｄ）

肉眼観察：いずれも鍛冶炉の炉底に堆積した小椀形状鉄滓の破片である。表皮は黒色から赤褐色を呈し、肌は粗鬆傾向にある。裏面は一部に高温で変色した青灰色炉材粘土を付着して円弧状を有する。表裏には木炭痕も認められる。破面は黒色緻密質で気泡は少ない。磁性は無い。

顕微鏡組織：Photo. １、２と３の１、２段目に示す。いずれも鉱物組成は、白色粒状結晶のヴスタイト（Wüstite：FeO）が凝集晶出し、その粒間にわずかの淡灰色盤状結晶のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が析出する。鍛錬鍛冶滓特有の晶癖である。

Photo. ２には、椀形鍛冶滓の厚さ方向全面の連続写真を示す。表層部６㎜程度は、やや小型凝集粒のヴスタイト（Wüstite：FeO）があり、その内側4.5㎜には板状ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が放射状に析出する。又、その内側の中央部、４㎜は、大型凝集ヴスタイト（Wüstite：FeO）域となり、底部側の5.5㎜はファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）のみの層となる。

Photo. ４の③は、Ｅ－901Ｄ鉄滓の底部に付着した鍛造剥片を示す。この鍛造剥片は鍛冶炉内の低温域での残留物で、これが高温溶融すると湯玉になる。しかし、該品は表面層に酸化（ヘマタイト：Hematite：Fe_2O_3）を受けた痕跡を残す程度の熱履歴に留まっている。鍛冶作業における鍛打と鉄素材加熱との繋がり、及び鍛錬鍛冶滓の生成ら有機性を表わす資料である。

ビッカース断面硬度：鉱物組成同定を目的として硬度の測定を行なった。試験は鏡面琢摩した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。

今回の硬度測定は、ヴスタイト（Wüstite：FeO）粒について行なった。E－901B鉄滓は、板状ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）に囲まれたヴスタイトと、中核部凝集ヴスタイトである。前者硬度値は、505Hv、536Hv、後者で553Hv、566Hvで大差ない。又、E－901D鉄滓は、508Hv、514Hvとなる。

ヴスタイトの文献硬度値は、450～500Hvで、測定値は、やや高目傾向を呈するが、三者間のバラツキはあまりない。

CMA調査：分析の原理は、真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後にとらえて画像化し、標準試料とX線強度との対比から元素定量値の得られるコンピューター内蔵器機である。本稿では、E－901B鉄滓の厚み方向中央部の凝集ヴスタイトと、放射状ファイヤライト析出ヴスタイトの2個所の分析を行なった。

E－901B凝集ヴスタイトの結果をTable. 3とPhoto. 6に示す。分析個所は、Photo. 6のSE（2次電子像）に示すヴスタイト粒内の茶褐色析出物らである。高速定性分析結果をTable. 3にある様に、鉄（Fe）、珪素（Si）、アルミ（Al）、チタン（Ti）、カルシウム（Ca）、マグネシウム（Mg）、ナトリウム（Na）らである。ヴスタイト（Wüstite：FeO）の鉄（Fe）と、ファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）の珪素（Si）が主体で、あとは、少量の随伴微量元素である。チタン（Ti）は強く現われて、鍛冶に供された鉄素材は砂鉄系であったと推定される。なおジルコニウム（Zr）16、バナジウム（V）14の存在は、糸島半島一帯に賦存する砂鉄使用と考えられる。

次に高速定性分析結果を視覚化した特性X線像をPhoto. 6に示す。白色輝点の集中度によって分析元素の存在を知る方法である。ヴスタイト結果には、鉄（Fe）に白色輝点が集中する。ヴスタイト結晶内の茶褐色析出物にはアルミ（Al）が検出される。これが鉄素材成分調整の精錬鍛冶滓（大鍛冶滓）の析出物であればチタン（Ti）—鉄（Fe）酸化物が検出されるのであるが、この場合はアルミ（Al）であって鍛錬鍛冶滓である。

一方、放射状ファイヤライトに囲まれたヴスタイトの分析結果を、Table. 4とPhoto. 7に提示した。高速定性分析結果の検出元素はTable. 3の凝集ヴスタイトに準じたものである。

又、特性X線像も近似していた。放射状淡灰色結晶のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）には、白色輝点が鉄（Fe）と珪素（Si）に表われて、この結晶がファイヤライトであることが検証できた。

化学組成：Table. 2に示す。試料は、三者の顕微鏡組織が同系だったので、E－901Dを代表させて行なった。該滓は、顕微鏡組織でみた様に、ヴスタイトが凝集晶出した組織であった

ので鉄分が多くガラス質成分は少ない。全鉄分（Total Fe）は60.44％で、このうち、金属鉄（Metallic Fe）0.797％、酸化第１鉄（FeO）は66.32％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）は11.60％の割合である。金属鉄の酸化物はほとんど含有されない。また、ガラス質スラグ成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）は逆に少なく、16.324％となる。

鍛冶に供した鉄素材が砂鉄系に由来するが、酸性砂鉄（真砂）で、かつ鍛錬鍛冶滓なのでチタン（Ti）分は少なく0.79％、バナジウム（V）0.10％である。

随伴微量元素は、おしなべて少なく、酸化マンガン（MnO）0.11％、酸化クロム（Cr_2O_3）0.15％、硫黄（S）0.042％、五酸化燐（P_2O_5）0.13％、銅（Cu）0.004％となる。鍛錬鍛冶滓の成分系である。

②鍛造剥片（Ｅ－901Ｃ）

肉眼観察：表皮側は青味を帯び、裏面は鉄錆を局部的に発する極薄剥片である。鍛造剥片の形状は不定形で５～10㎜角で厚みは0.2～0.5㎜程度である。鉄素材を鍛冶炉内で赤熱状態に焼いて鍛打した時に剥落した酸化被膜なので、鉄の酸化物で強磁性である。Photo.３の①②③にその外観を示す。

顕微鏡組織：Photo.３の⑥～⑪に示す。鉱物組成はヴスタイト（Wüstite：FeO）の凝集した組織と、一部は冷却速度の速いために微小結晶の晶出したものの２種類が存在する。⑩は湯玉である。こちらも凝集ヴスタイトと微小ヴスタイトが存在する。

ヴッカース断面硬度：Photo.３の⑫に鍛造剥片、⑬に湯玉の硬度測定結果を示す。両方とも近似した硬度値で435～490Hv である。文献硬度値に見合った値で、ヴスタイトと同定できる。

投影機撮影：Photo.３の④⑤に示す。研摩断面を５倍の倍率で撮影した。剥片中は、一部に気泡があるが、線状面を保持する剥片と判る。

化学組成：Table.２に示す。該品は剥片と粉末状が混在していたので、0.3m/mメシュの標準ふるいに通過したものと、しないものに分けて分析した。前者をＥ－901ＣＳ、後者をＥ－901Ｃとする。粉末状試料は、自然堆積の微量の砂鉄を含むのか二酸化チタン（TiO_2）が0.16％に大して0.64％と高目であるが、他元素には、あまり差異は認められない。

全鉄分（Tatal Fe）は70.8～71.17％、金属鉄（Metallic Fe）0.000～1.222％、酸化第１鉄（FeO）41.31～51.44％、酸化第２鉄（Fe_2O_3）42.31～55.85％と鉄分が圧倒的に多い。ガラス質成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）は、2.4～4.2％と極端に少ない。他の随伴微量元素も低減傾向で、酸化マンガン（MnO）0.03～0.06％、酸化クロム（Cr_2O_3）0.03～0.04％、硫黄（S）0.007～0.010％、五酸化燐（P_2O_5）0.03～0.06％、バナジウム（V）0.02～0.03％、銅（Cu）0.006～0.010％と純度の高いものとなる。

③湯玉

肉眼観察：青味を帯びた直径3㎜前後の球状で、なかには、ダレを残すものもある。磁性が強い。なお、表面に気泡が露出する。Photo.5の①④⑤参照。

顕微鏡組織：Photo.5に示す。②に示す正球状湯玉の組織を⑥～⑨に示す。いずれも微細結晶のヴスタイト（Wüstite：FeO）と、その粒間に淡灰色盤状結晶のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が析出する。

③の球状ダレを残す湯玉の組織は⑩⑪で前述した正球状湯玉組織と変わるところがない。これらは、鍛造剥片が鍛冶炉で溶融し、表面張力の関係から球状化し、急冷を受けているので、ヴスタイト結晶は微細化傾向にある。

(2) Ⅱ区谷中央トレンチ出土遺物

当トレンチは、鍛冶炉2の北へ6m、鍛冶工房掘立柱建物の南側柱にかかる位置である。出土遺物は鍛冶炉2の排出物とみなしてよい。出土遺物としては鉄滓2点について調査した。

①鉄滓（E－901E、E－901F）

肉眼観察：二者とも椀形鍛冶滓の破片である。表皮は赤褐色で肌は比較的なめらかである。裏面は反応痕をもち、木炭痕が認められる。

顕微鏡組織：Photo.4の④～⑥に示す。鉱物組成は、やや大粒の白色粒状ヴスタイト（Wüstite：FeO）と、淡灰色盤状結晶のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）、それに基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

化学組成：Table.2に示す。二者とも近似した成分系である。全鉄分（Total Fe）は、53.48～56.53％と前述したP－96ピット出土鉄滓E－901Dより鉄分は少ない。肉眼観察で赤褐色の鉄錆がみられた様に金属鉄（Metallic Fe）は1.6～2.4％含有され、酸化第1鉄（FeO）は50.58～66.32％、酸化第2鉄（Fe_2O_3）は3.59～17.93％である。ガラス質スラグ成分（$SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$）は、23％台と、やや多い目となる。

随伴微量元素は左程多くなく、二酸化チタン（TiO_2）0.26～0.68％、バナジウム（V）0.06～0.07％は、酸性砂鉄（真砂系）由来の鉄素材の鍛錬鍛冶滓の成分系を表わす。他成分の酸化マンガン（MnO）は0.08～0.11％、酸化クロム（Cr_2O_3）0.02～0.08％、硫黄（S）0.029～0.079％、五酸化燐（P_2O_5）0.13～0.37％、銅（Cu）0.004～0.014％となる。

P－96ピット出土鉄滓と該品らは同成分系とみなされる。

4 まとめ —鍛冶工房内の空間利用—

奈良尾遺跡では、掘立柱建物内に鍛冶炉2（20×30㎝灰黒色焼土化火窪）が検出された。炉は、建物の南側壁に近接するが横座の背面となるので作業空間としては無理はない。鍛冶炉は、

羽口装着の窪みを西側に、東側に鉄滓や灰の掻き出し口を設け、その東隣に鉄床石を設置したと推定されるＰ－96ピット（40×44cm隅丸方形土壙）が遺存する。このＰ－96ピットからは、鍛造剝片が遺跡内の約80％の693ｇが出土して鉄床石の位置を裏付ける。

また、Ｐ－96ピットの北側にＰ－101ピットが検出されて、向う鎚を振るう先手の作業場位置と想定できる。

鍛冶では、作業を主導管理する親方の横座と、その指示に従って向う鎚を振るう先手の最低２名を必要とする。横手は、鉄素材を金鉗で挟み、先手は横座に対峙して鎚を振るう。

横座は座位をとり、金鉗で、鉄素材→製品を鍛冶炉に出し入れするため、炉に手の届く範囲にその位置を定める。この場合の横座は右利きであったろう。この相対する２名の工人の外に送風操作の工人がもう１名必要となる。送風装置の鞴は皮鞴で箱鞴はまだ使用されていない（箱鞴：差し鞴は、気密性の保てる板材のカンナ出現からの産物で、平安初頭は皮鞴使用と考えられる）。

鍛冶工房内の床面上では、炉を掘り窪めて作り、鉄床石は床面から10～20cm前後上げた位置に打面を設ける。横座は座位、先手は立位もしくは立て膝の姿勢で向う鎚を振るう。鎚の柄が長い場合、垂直方向の空間を広げる設備としてＰ－101土壙が必要となり、先手の位置を明確に示す遺構となる訳である③。

奈良尾遺跡の鍛冶工房跡の作業空間配置利用は、職人尽絵④や民俗例、更には関東方面の発掘事例⑤に近似するものである。（Photo. 参照）

以上の如く、今回の発掘調査で、考古学的に検出された各遺構は、鍛冶作業の設備として復元できた。一方、椀形鍛冶滓と鍛造剝片や湯玉ら遺物の金属学的調査結果は、それら鍛冶作業設備を実証する裏付けデータになり得た訳である。

しかし、まだ今後に残された研究課題も多い。鍛冶に供された鉄素材の産地同定や、どんな鉄製品が製作されたのか不明である。だが、平安初期の鍛冶工房の作業場空間の復元が出来た事は成果の一つに数えられるだろう。

（平成３年２月22日）

注 ① 大澤正己「築上郡土佐井遺跡出土椀形鉄滓と鍛造剝片の金属学的調査」『土佐井地区遺跡』（太平村文化財調査報告書　第５集）太平村教育委員会　1990

② 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968

③ 小林公治「奈良・平安時代の鍛冶の復元的考察」『早稲田大学大学院文学研究科紀要　別冊15集』哲学・史学編　1988
上記文献を参照して拙稿は論を運んだ。

④ 『職人尽絵』鍛冶師　喜多院

⑤ 栃木県教育委員会「５．東野田遺跡」『一般国道４号（新４号国道）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の経過』（栃木県埋蔵文化財調査報告書　第95集）　1988

Table. 2　鉄滓・鍛造剥片・湯玉・砂鉄の化学組成

試料番号	遺跡名	出土位置	種別	推定年代	全鉄分 Total Fe	金属鉄 Metallic Fe	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K_2O)	酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分	造滓成分 Total Fe	TiO_2 Total Fe	注
E-901D	奈良尾	P96（鍛冶炉2の北東ピット）	鍛練鍛冶滓	平安時代初頭	60.44	0.797	66.32	11.60	11.10	3.86	0.55	0.48	0.290	0.044	0.11	0.79	0.15	0.042	0.13	0.14	0.10	0.004	16.324	0.270	0.013	(1)
E-901E	〃	Ⅱ区谷中央トレンチ	〃	〃	53.48	1.625	50.58	17.93	16.05	5.43	0.55	0.52	0.424	0.058	0.11	0.68	0.08	0.079	0.13	0.08	0.07	0.004	23.032	0.431	0.013	〃
E-901F	〃	〃	〃	〃	56.53	2.468	66.32	3.59	16.39	5.17	0.68	0.49	0.362	0.064	0.08	0.26	0.02	0.029	0.37	0.06	0.06	0.014	23.156	0.410	0.005	〃
E-901C	〃	P96（鍛冶炉2の北東ピット）	鍛造剥片	〃	70.80	1.222	51.44	42.31	2.84	1.04	0.11	0.14	0.062	0.046	0.03	0.16	0.03	0.010	0.06	0.07	0.02	0.006	4.238	0.059	0.002	〃
E-901CS	〃	〃	鍛造剥片（粉末）	〃	71.17	0.000	41.31	55.85	1.42	0.70	0.07	0.18	0.022	0.012	0.06	0.64	0.04	0.007	0.03	0.10	0.03	0.010	2.404	0.034	0.009	〃
F-891E	土佐井	土壙（鍛冶炉）3	鍛造剥片	13C後半	71.5	−	53.0	43.3	1.66	0.79	0.23	0.12	−	−	0.07	0.19	0.03	0.026	0.12	0.18	0.004	0.024	2.80	0.039	0.003	(2)
T-892D	〃	土壙（鍛冶炉）4	〃	〃	70.8	−	−	−	2.32	1.05	0.20	0.13	−	−	0.05	0.29	0.04	0.059	0.14	0.25	0.007	0.026	3.70	0.052	0.004	〃
B-902	博多59次		鍛造剥片	4C初	64.0	−	46.1	40.3	8.48	2.27	0.46	0.22	−	−	0.05	0.19	0.06	0.040	0.33	0.24	0.005	0.027	11.43	0.179	0.003	(3)
B-903	〃		湯玉	〃	26.69	−	17.10	19.16	47.64	8.57	1.38	0.40	0.12	0.04	0.07	0.29	0.05	0.037	0.35	0.43	0.008	0.035	58.15	2.179	0.011	〃
B-904	〃		砂鉄	現代	57.5	−	28.0	51.1	7.92	3.05	0.43	1.32	−	−	0.40	5.68	0.05	0.036	0.27	0.26	0.10	0.038	12.72	0.221	0.099	〃
E-881	石崎	1号炉（箱型炉）	砂鉄製錬滓	平安時代	39.2	−	28.9	23.92	16.16	6.04	3.54	1.41	−	−	0.35	4.59	0.29	0.031	0.026	0.71	6.30	Nil	27.15	0.693	0.117	(4)
E-883	〃	2号炉（火窪）	精錬鍛冶滓	〃	53.2	−	63.5	5.40	11.44	3.44	2.93	0.98	−	−	0.18	1.24	0.12	0.047	0.027	0.10	0.19	Nil	18.79	0.353	0.023	〃
E-884	〃	東北谷部	〃	〃	45.2	−	26.2	35.6	9.44	3.02	1.57	0.84	−	−	0.31	1.98	0.23	0.008	0.015	0.64	0.45	Nil	14.87	0.329	0.044	〃
E-885	〃	〃	〃	〃	49.7	−	34.1	33.2	7.66	2.51	2.10	0.95	−	−	0.27	1.88	0.17	0.018	0.017	0.63	0.36	Nil	13.22	0.266	0.038	〃
O-832	石崎曲り田	黒色包含層	鍛錬鍛冶滓	奈良時代後半	64.2	−	60.8	24.22	7.47	3.06	0.06	0.47	−	−	0.25	2.68	0.32	0.010	0.19	0.03	0.06	0.004	11.05	0.172	0.041	(5)
B-831A	御床松原	1号炉西側	精錬鍛冶滓	奈良～平安	49.6	−	35.5	31.5	16.52	5.74	6.46	1.21	−	−	0.27	1.53	0.35	0.023	0.25	0.20	0.23	0.002	29.93	0.603	0.031	(6)
B-833	〃	溝1覆土	〃	〃	59.9	−	60.4	18.48	10.88	3.29	3.95	0.86	−	−	0.23	1.10	0.19	0.031	0.16	0.07	0.22	0.002	18.98	0.317	0.018	〃
K-901	深江・塚田	4号鍛冶炉	〃	奈良時代後半	52.29	0.44	52.09	15.61	15.8	4.2	1.3	1.3	−	−	0.4	2.6	0.11	<0.01	0.2	−	0.10	0.002	22.60	0.432	0.050	(7)
K-902	〃	〃	〃	〃	45.94	0.43	49.00	10.62	22.6	5.2	2.2	1.3	−	−	0.3	1.8	0.17	0.01	0.1	−	0.08	0.002	31.3	0.681	0.039	〃
Q-902	波多江	1号竪穴住居跡	鍛錬鍛冶滓	平安時代	61.57	0.32	61.36	19.39	8.9	2.0	1.1	1.2	−	−	0.1	0.05	0.02	0.01	0.3	−	0.005	0.004	13.2	0.214	0.008	(8)
	築山古墳近く	表面採取	〃	不明	63.3	0.06	66.80	16.20	8.40	2.4	1.9	1.8	−	−	0.16	0.20	0.01	0.021	0.69	0.076	0.015	0.006	14.5	0.229	0.003	(9)
8C−811	八熊	1号製鉄炉	砂鉄製錬滓	奈良時代	52.1	−	54.9	13.48	16.95	6.95	1.71	1.08	−	−	0.41	3.49	0.18	0.065	0.49	0.04	0.29	Nil	26.29	0.505	0.067	(10)

注

(1) 大澤正己「奈良尾遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『奈良尾遺跡』（今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第13集）福岡県教育委員会　1991

(2) 大澤正己「築上郡土佐井遺跡出土椀形鉄滓と鍛造剥片の金属学的調査」『土佐井地区遺跡』太平村教育委員会　1990

(3) 福岡市教育委員会山口譲二氏担当4世紀初鍛冶工房。報告書準備中

(4) 大澤正己・山崎純男「鴻臚館跡出土の鉄滓について」『九州史学会研究発表要旨』九州大学 1988.12.11

(5) 大澤正己「曲り田遺跡出土の鉄塊・鉄滓・銅滓の金属学的調査」『石崎曲り田遺跡』Ⅱ（今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第9集）福岡県教育委員会　1984

(6) 大澤正己「御床松原遺跡出土の鉄滓調査」『御床松原遺跡』（志摩町文化財調査報告書　第3集）志摩町教育委員会　1983

(7) 大澤正己「二丈町深江・塚田遺跡出土鉄滓の分析調査」『塚田遺跡』（今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第7集）福岡県教育委員会　1982

(8) 大澤正己「前原町波多江遺跡出土鉄滓の分析調査」『波多江遺跡』（今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第6集）　福岡県教育委員会　1982

(9) 大澤正己「福岡県の古代製鉄」『福岡県考古懇話会々報』第3号　1975.12.1

(10) 大澤正己「八熊遺跡出土鉱滓・砂鉄の分析調査と考察」『八熊製鉄遺跡・大牟田遺跡』（志摩町文化財調査報告　第2集）志摩町教育委員会　1982

Table. 3　奈良尾遺跡出土鉄滓（Ｅ－901Ｂ－１）のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果

```
POS, NO.   HOLDER NO.   X (MM)   Y (MM)   Z (MM)   COMMENT (8 CHARACTER)
           [O: END]                                [C. R. : SAME]
   3          : 1       40,000   40,000   11,000    E-901B
                                                                          READY (PAGE) ?
POS, NO, 3

  COMMENT : E-901B-1
  ACCEL, VOLT, (KV) : 15
  PROBE CURRENT : 5,000 E-08 (A)
  STAGE POS, : X    40000    Y    40000    Z    11000                                                    18-APR-90
                CH (1) TAP                                  CH (2)   PET                          CH (3)   L1F
   EL     WL    COUNT                INTENSITY (LOG)   EL     WL    COUNT                INTENSITY (LOG)   EL     WL    COUNT                INTENSITY (LOG)
  Y-j     6.45    231   ※※※※※※※※※※※※※※   ○TI-K   2.75    214   ※※※※※※※※※※※※※＋   PB-1    1.18     69   ※※※※※※※※※※※
  SR-1    6.86    198   ※※※※※※※※※※※※※＋   BA-1    2.78     91   ※※※※※※※※※※※※※   PT-1    1.31     68   ※※※※※※※※※※※
  W-m     6.98    162   ※※※※※※※※※※※※※   ○CA-K   3.36    180   ※※※※※※※※※※※※＋＋   IR-1    1.35     69   ※※※※※※※※※※※
◎SI-k     7.13   1758   ※※※※※※※※※※※※※※※※＋＋＋＋   SB-1    3.44     61   ※※※※※※※※※※※※   ZN-K    1.44     52   ※※※※※※※※※※
  RB-1    7.32    132   ※※※※※※※※※※※※※   SN-J    3.60     35   ※※※※※※※※※※   CU-K    1.54     51   ※※※※※※※※※※
○AL-k     8.34    528   ※※※※※※※※※※※※※＋＋＋＋   ○K-K   3.74    139   ※※※※※※※※※※※※＋＋   NJ-K    1.66     37   ※※※※※※※※※※
  BR-1    8.37     90   ※※※※※※※※※※※※   CD-J    3.96     34   ※※※※※※※※※※   CO-K    1.79     43   ※※※※※※※※※※
  AS-1    9.67     36   ※※※※※※※※※※＋   CI-K    4.73     25   ※※※※※※※※※＋   ◎FE-K   1.94   8126   ※※※※※※※※※※※※※※※※
```

(1)E-901A

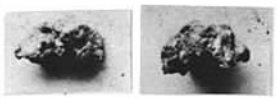
奈良尾遺跡

（P96：鍛冶炉2
北東隣ピット）

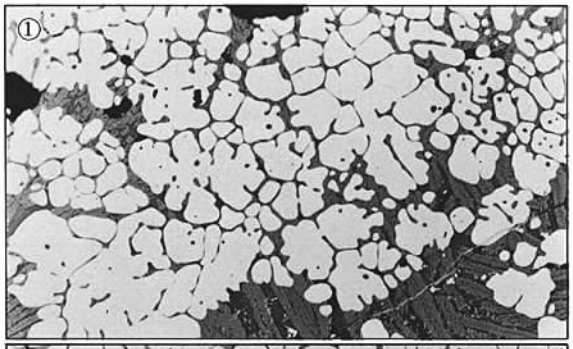
鍛錬鍛冶滓

×100

外観写真1/2.9



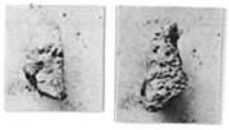
表側　　裏側



(2)E-901B

奈良尾遺跡（P36出土）

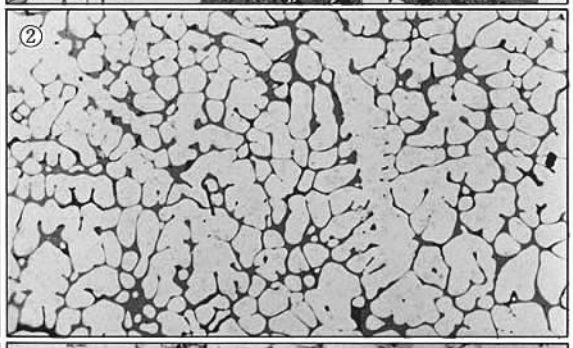
鍛錬鍛冶滓

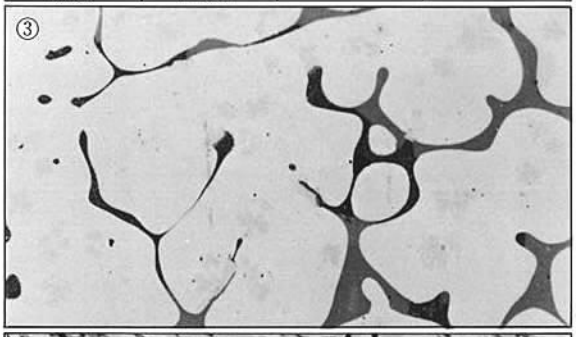


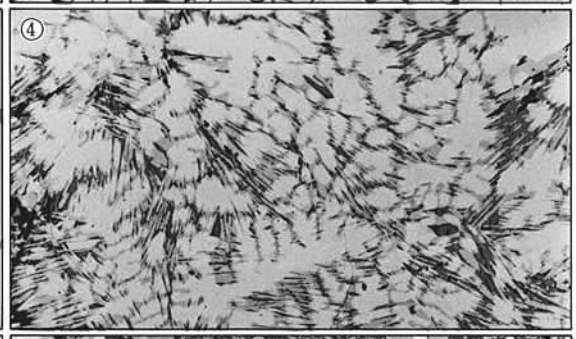
表側　　裏側

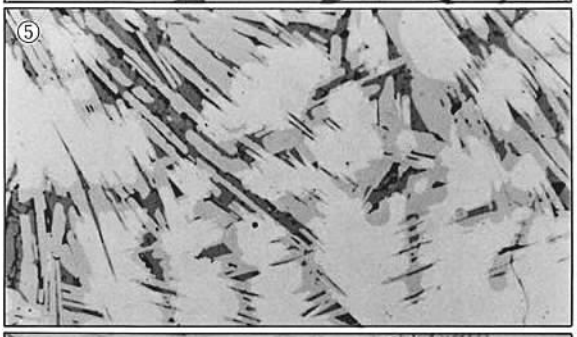
外観写真×1/2.9

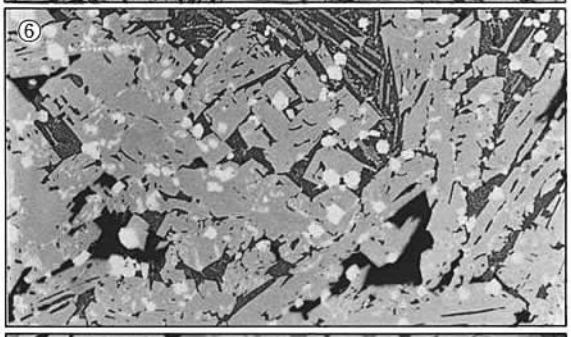
	②Wūstite ×100		
③Wūstite ×400	④W＋F ×100		
⑤W＋F ×400	⑥Fayalite ×100	⑦硬度値 505Hv536Hv 荷重200 g	⑧硬度値 553Hv566Hv 荷重200 g
⑦硬度圧痕 ×200	⑧硬度圧痕 ×200		

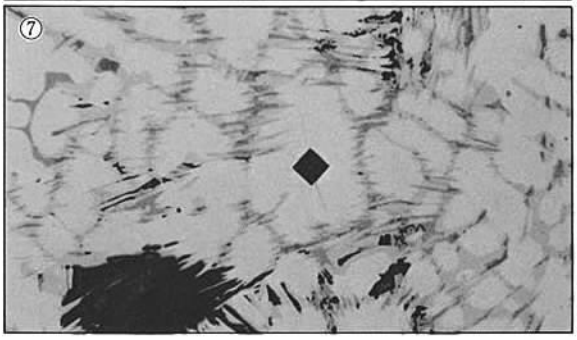












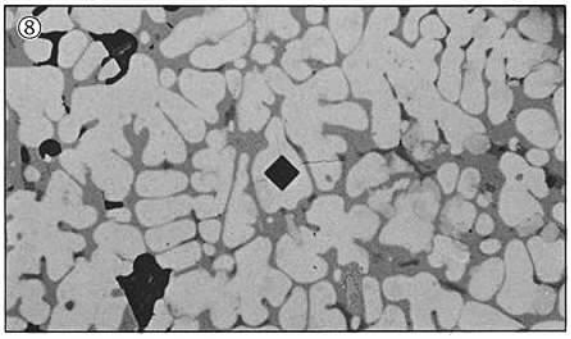


Photo. 1　鉄滓の顕微鏡組織と硬度圧痕

(3)E-901B

奈良尾遺跡

（P36出土）

椀形鍛冶滓断面

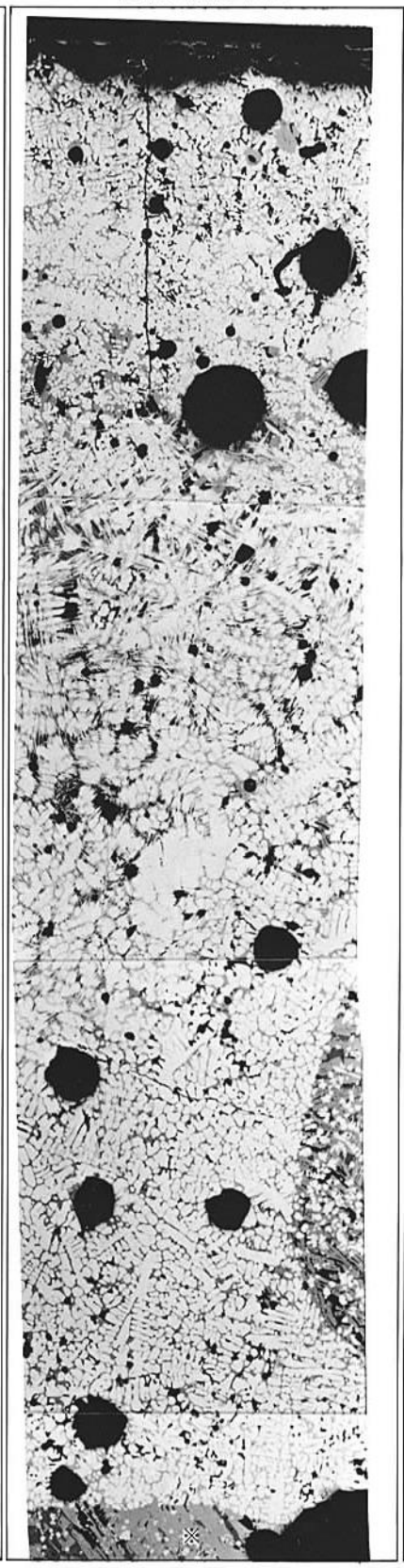
（Photo.1 の E-901B と同一サンプル）

×50

Photo.1 の④⑤⑦ 対応個所

Photo.1 ②③⑧ 対応個所

椀形鍛冶滓表面側



※

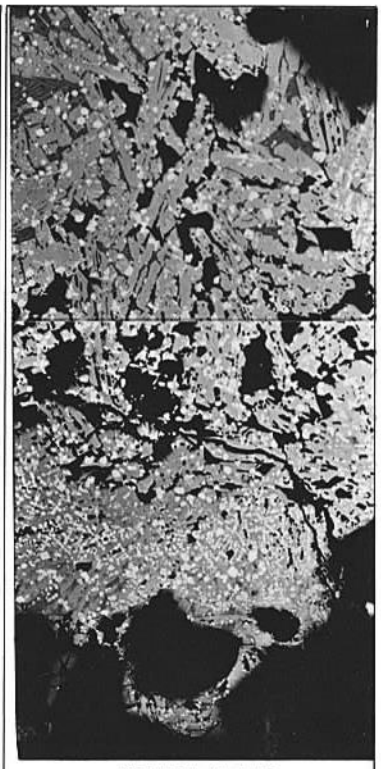


Photo.1 の⑥対応個所

椀形鍛冶滓底部

Photo. 2 椀形滓断面の顕微鏡組織（1/50）

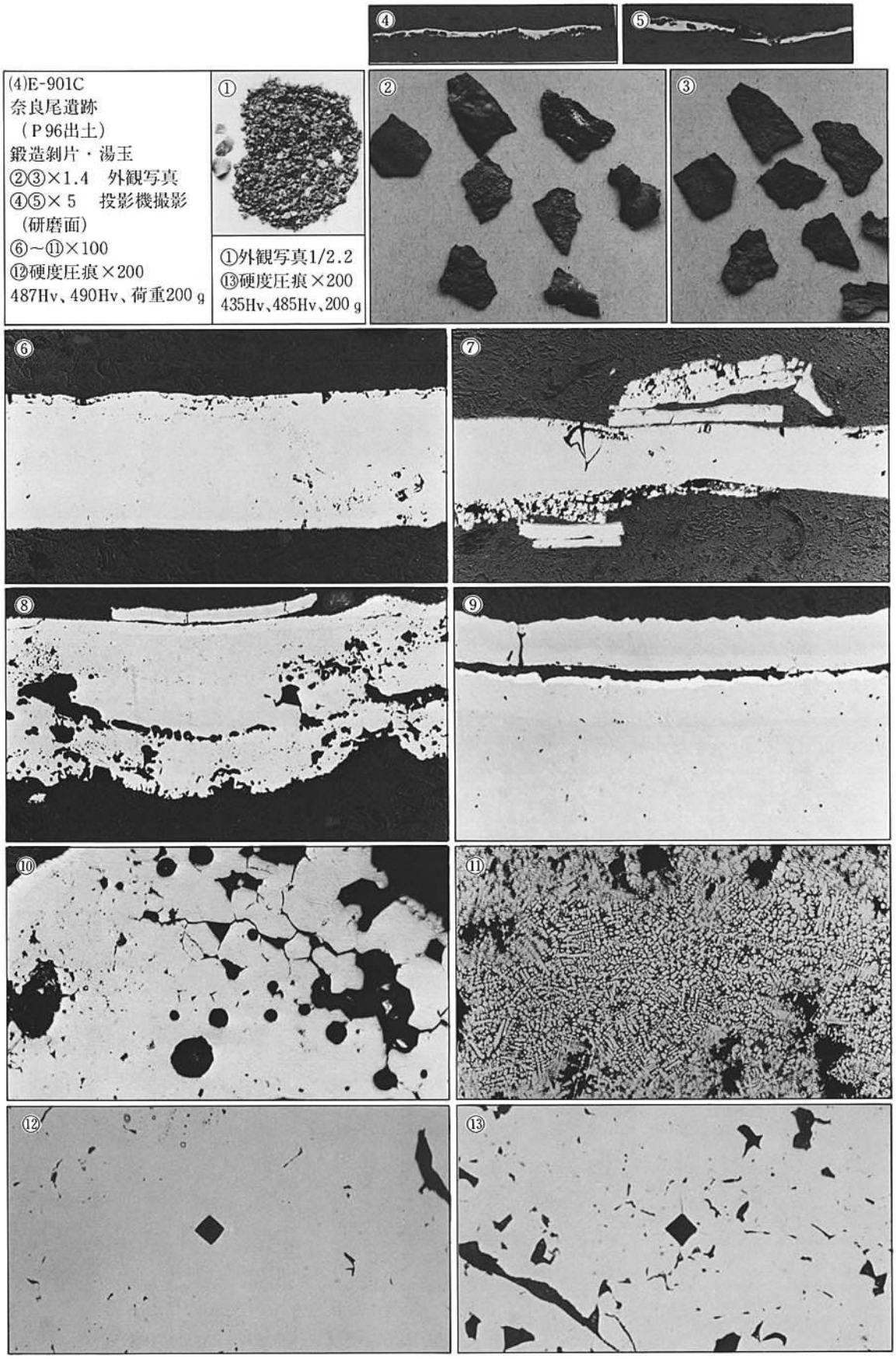


Photo. 3　鍛造剝片・湯玉の顕微鏡組織と硬度圧痕

(5)E-901D
奈良尾遺跡（P 36出土）
鍛練鍛冶滓

①Wüstite
＋
Fayalite
×100

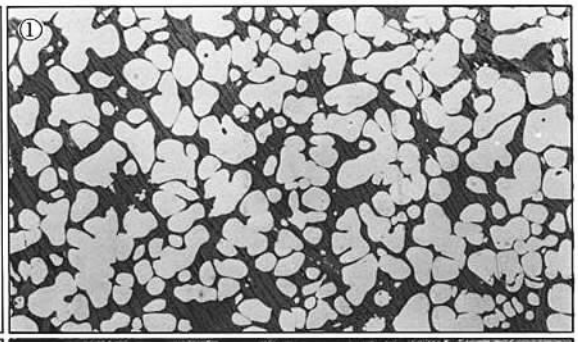
②硬度圧痕
508Hv、514Hv
荷重100 g
×200

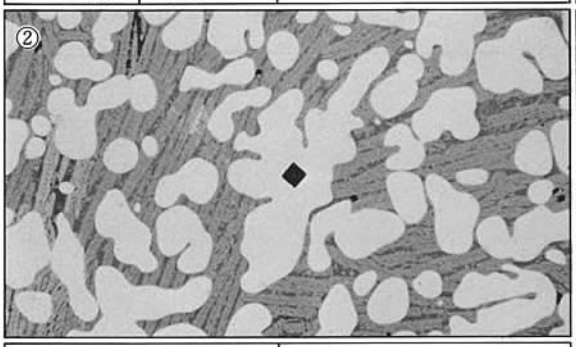
③鍛造剥片
椀形滓底部
付着.
×100

表側

裏側

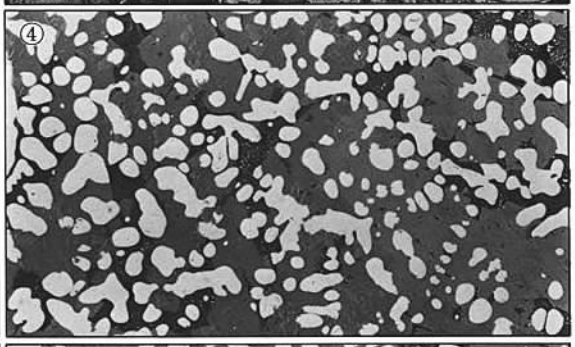
外観写真1/2.1





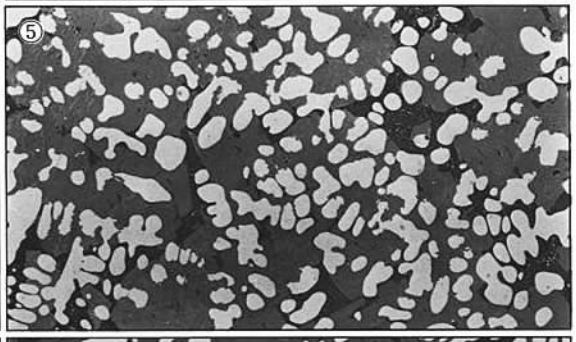
(6)E-901E
奈良尾遺跡
（Ⅱ区谷中央
トレンチ出土）
鍛練鍛冶滓
×100
外観写真1/2.1

表　側



同　上

裏　側



(7)E-901F
奈良尾遺跡
（Ⅱ区谷中央
トレンチ出土）
鍛練鍛冶滓
×100
外観写真1/2.1

表側

裏側

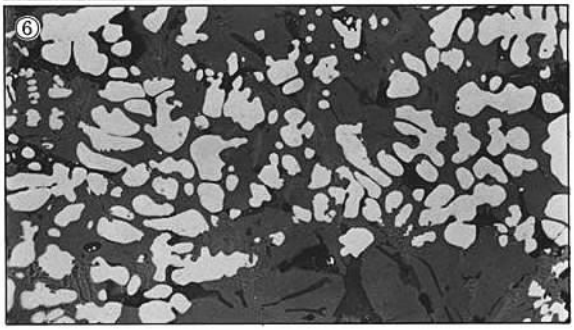


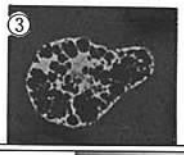
Photo. 4　鉄滓と付着鍛造剥片及び硬度圧痕

(8)E-901C 1
奈良尾遺跡
（P—36出土）
湯玉

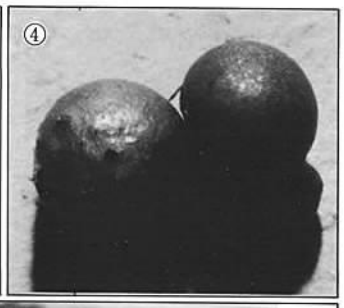
①

②

③



④

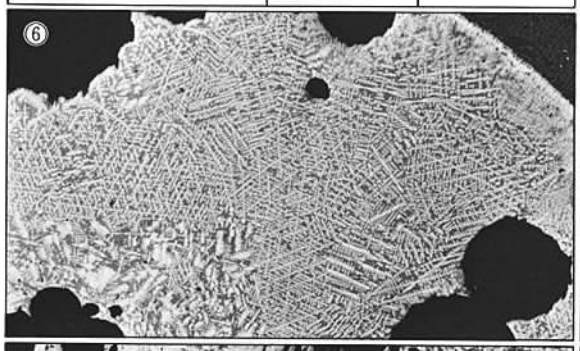


⑤

①湯玉外観×1.7
②③湯玉断面×5
投影機撮影
④×8 ⑤×20
実体顕微鏡

⑥Wüstite ×100	⑦Wüstite ×400
⑧Wüstite ×100	⑨Wüstite ×400
⑩Wüstite ×100	⑪Wüstite ×400

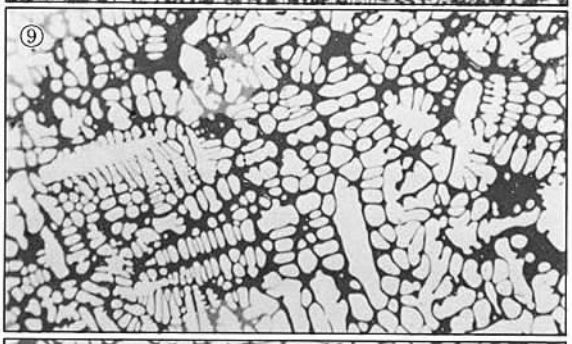
⑥



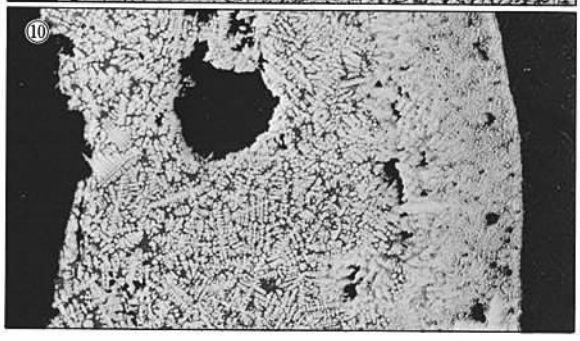
⑦

⑧

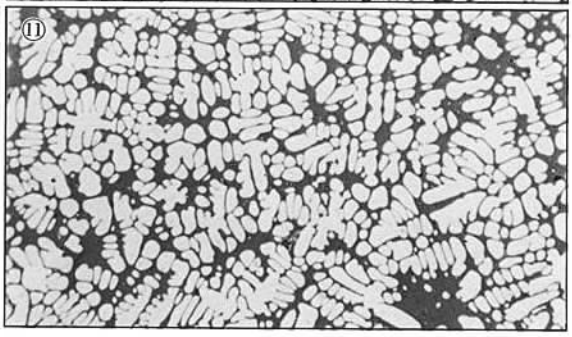
⑨



⑩



⑪



Photo・5　湯玉の顕微鏡組織

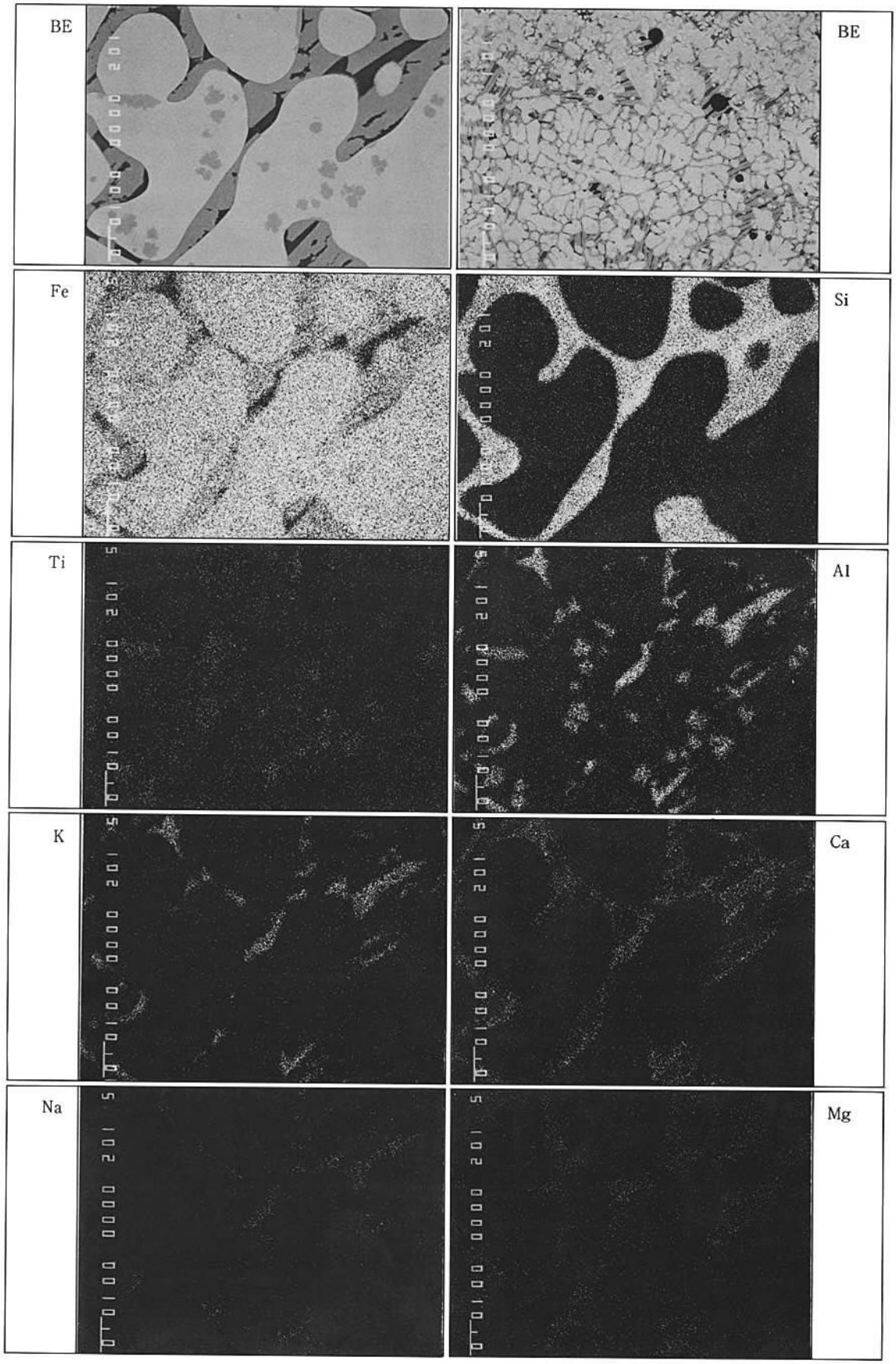


Photo. 6　奈良尾遺跡出土椀形鍛冶滓（E-901B①）の特性X線像（×700）

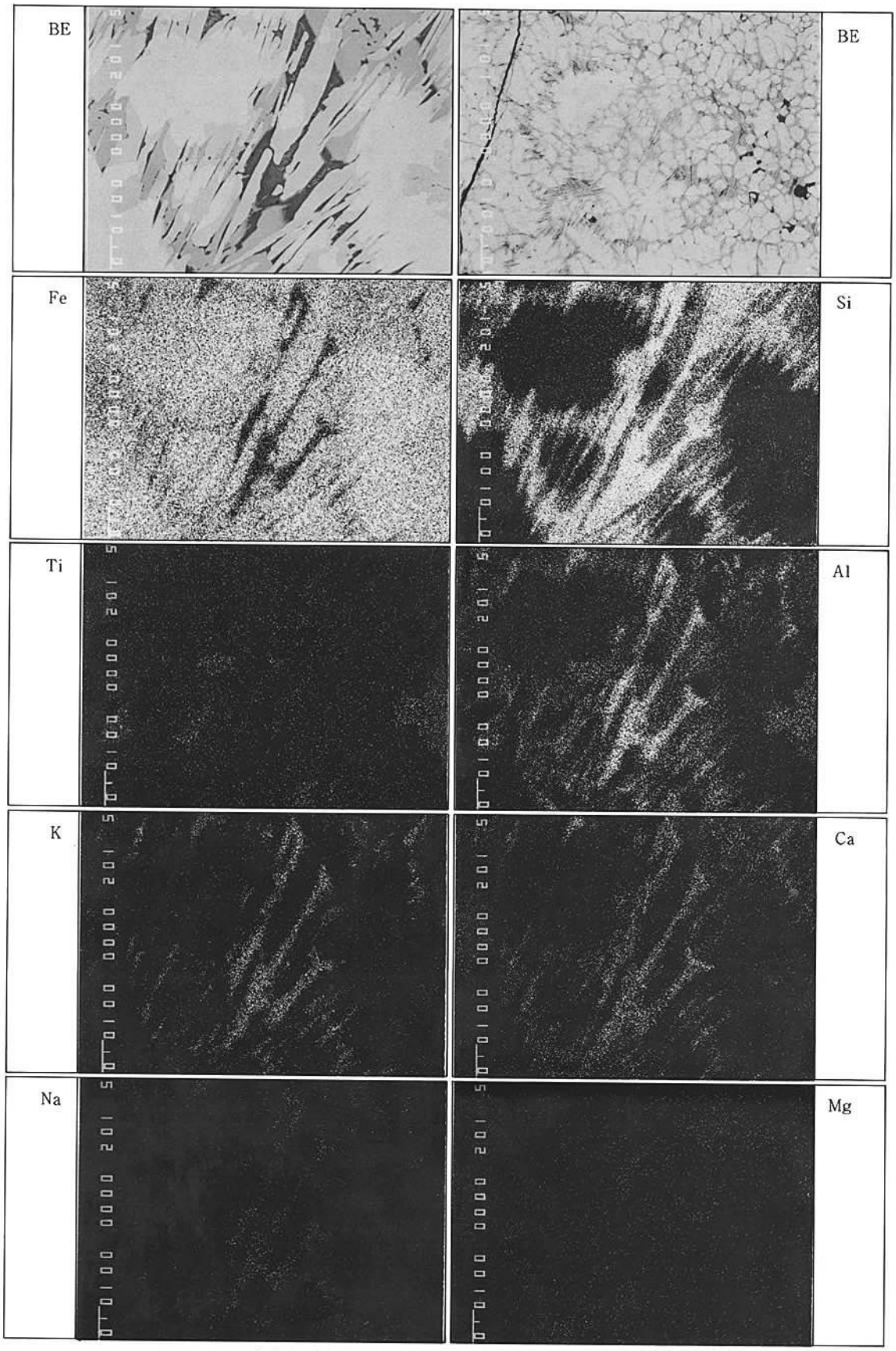
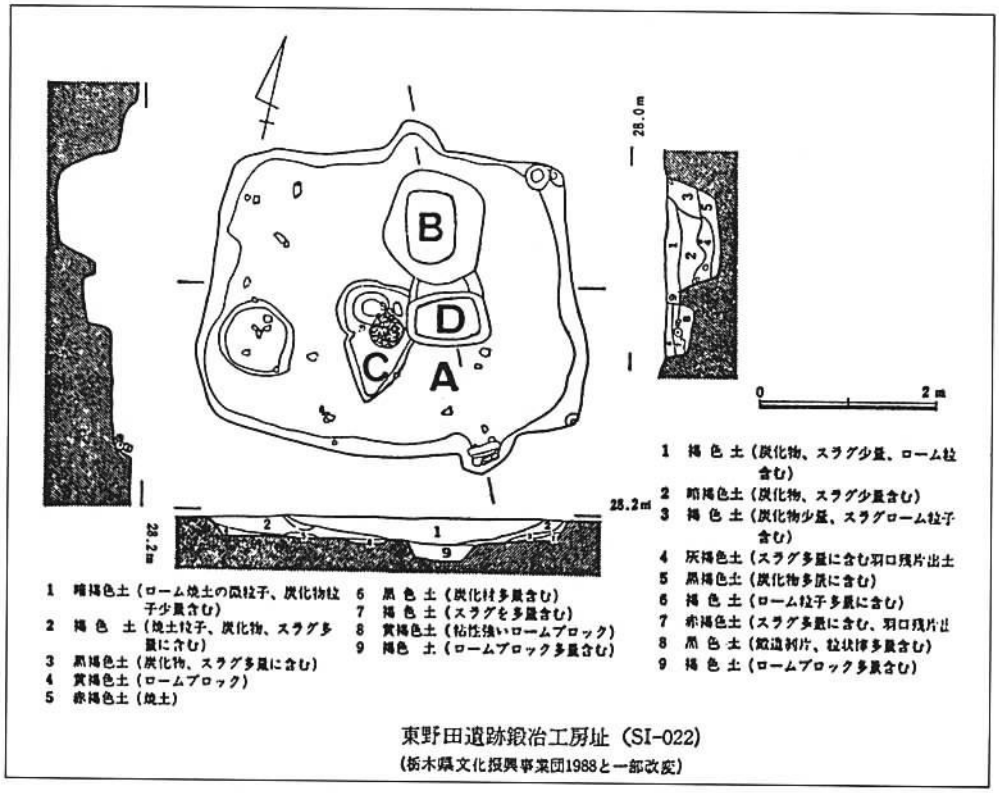
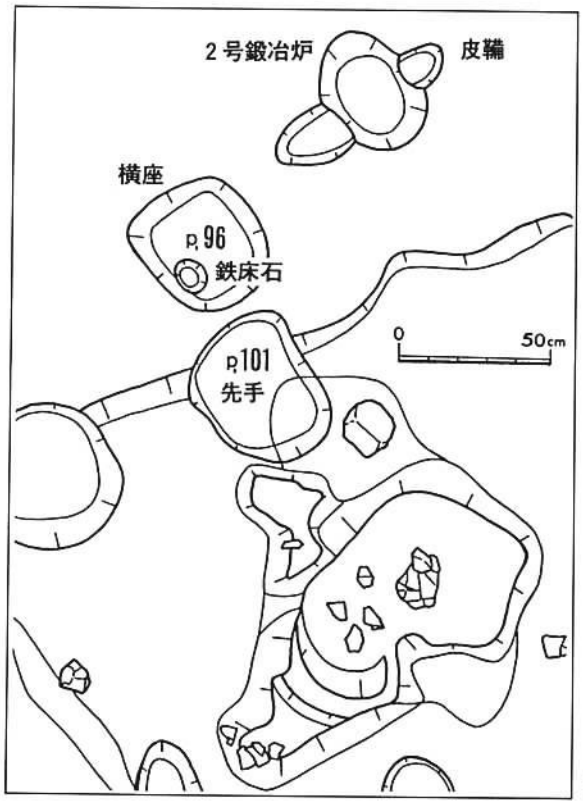


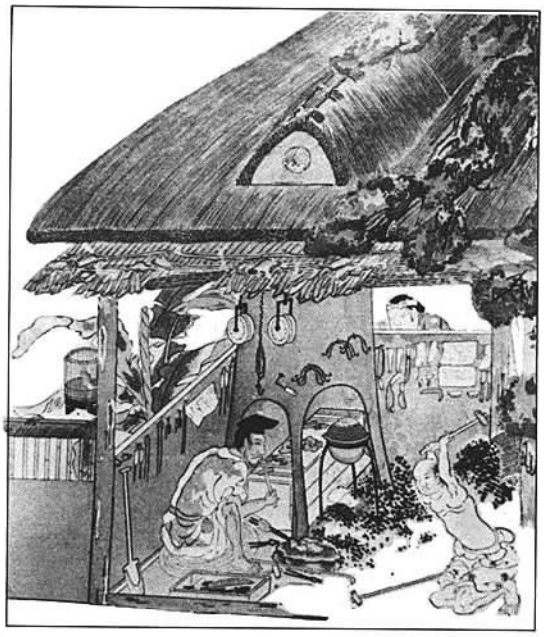
Photo. 7　奈良尾遺跡出土椀形鍛冶滓（E-901B②）の特性X線像（×700）



東野田遺跡鍛冶工房址（SI-022）
（栃木県文化振興事業団1988と一部改変）

A：横座　B：先手　C：鍛冶炉　D：鉄床石





職人尽絵「鍛冶師」（喜多院）

奈良尾遺跡鍛冶工房空間利用

Photo. 8　鍛冶工房空間利用の各例

Ⅶ 各　論

A　鍛冶関連遺構について

奈良尾遺跡においては、奈良～平安初期の斜面造成地からの遺構・遺物が多くを占めており、確実な遺構としては、鍛冶炉２基、建物２棟などが検出された。ここでは、これらに関して、本文中で示した諸見解を整理して、まとめとしたい。

立地　細長い小丘陵に挟まれた狭い谷を300ｍほど登ったところから、更に小さい谷に入り込んだ谷頭の斜面が奈良尾遺跡であり、おせじにも遺跡として絶好の占地をしているとは言えない所である。近年まで、山奥の静寂の地として、雑木山の中に累々と営まれ続けた墓地群としてのみ利用されていた。尾根線上の里道は、これら墓地への参り道にほかならなかった。

このような山中に、どうして小鍛冶が営まれていたのか。しかも８世紀中頃～９世紀後半頃までの100年余にわたる長期間、大々的な急斜面における造成工事をしてまでも。

この占地の理由は、ひとつは燃料確保、木炭生産（第２号焼土壙、38頁）の木材採取を目的として。もうひとつは、この一帯の丘陵が軟質の花崗岩風化土壌であり、この中に多量の鉄分を包含しており、この山砂鉄採取の目的（45頁）もあったのではないかということ。更に考えられることは、単なる野鍛冶であれば、こんな山奥につくる必要はないということ。つまり、その生産品に関る点であるが、精神集中できる山奥の静寂さが必要であった（27～28頁）のではないかということである。

鍛冶炉　検出したのは２基であったが、焼土部分の多さや、期間の長さを考慮すれば、もっとあったことも考えられる。いずれも、掘立柱建物内の中央よりやや片寄った位置にあり、鉄砧とともに鍛造工房として中心的施設であったことがわかる。

第２号鍛冶炉は、両端に袖状の突出部分を持ち、ふいご羽口を両方から突っ込む形態と考えられ、貴重な発見となった。これは本遺跡より南西へ５㎞の塚田遺跡（註１）の４号鍛冶遺構から、椀形滓に２個の羽口が融着した状態で出土しており、相通ずるものである。ただし、塚田例は大鍛冶（精錬鍛冶）であり（註２）、奈良尾例とは異なる。

また、全体に鉄滓の出土量は極めて少なく、鍛冶炉周辺出土のものは特に指先程度以下の小型のものに限られる。このことからも、ここは鍛造を主とした小鍛冶であったことが推定される。

鍛造剝片　第２号鍛冶炉北側に分布していた鍛造剝片の採集は興味深いものであった。鍛造作業をしたのであれば、鍛冶炉近辺に鍛造剝片があるはずだ、という当たり前の事実に改めて目の醒めた思いであった。と逆に、鍛造剝片を採集できれば、性格不明の炉状遺構が鍛冶炉であ

るという断定ができる見通しが立った。鉄滓があまり見あたらなくても、これで判断できる訳で、今後の調査に活用してゆきたいものである。

第2号鍛冶炉周辺土を水洗・選別して、鍛造剝片を採集した結果（43頁）は、炉の東北側1m以内に圧倒的に集中しているということであった。つまり、鉄砧（かなとこ）の位置が、炉からさほど離れない範囲に置かれていたことがわかった。

また、ガチガチの炉だけ検出され、鉄滓等が周辺に全くみられなかった第1号炉の西側採集土からも鍛造剝片がみつかり、鍛冶炉であることが確認された。

生産品　こんな山奥で何を作っていたのか。遺跡内からの出土鉄器は、小鉄片3点のみで、その本来の形状はわからない。砥石などが出土していることから、完全な製品にして出荷したのかもしれない。

立地の項で述べた如く、所謂、「村の鍛冶屋」とは違うのではないかと思われる。想像をたくましくすれば、刀鍛冶のような特殊な製品専門の工房であったことも考えられる。

Fig.87　鍛冶工房想像図

※　大澤正己氏の指摘によると，当時期には，未だ箱ふいごは無く，皮ふいごと推定されるとのこと。

出土土器は多量で、甕を含めて全体に生活臭の強いもので、ここで実際に生活していたことは疑い得ない。さらに、緑釉・灰釉陶器といった貴重品をも所有し、塼仏という極めて稀な珍品をも持ち得た住人を考えた場合、寺院等の遺構が想定できない現状では、単なる工人階層とは言えないものがある。

註1）橋口達也・中間・大澤正己「Ⅱ．塚田遺跡」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』第7集 福岡県教育委員会　1982

2）前掲書のうちの大澤正己「Ⅱ－3．二丈町深江、塚田遺跡出土鉄滓の分析調査」

B　火葬土壙について

火葬土壙とは

従来、火葬された痕跡を考古学的にみて、大まかに火葬墓と称されてきた。大きくわけて、火葬骨を蔵骨器或は穴に埋納した施設を称したものと、荼毘に付した場所（穴）をも一般的に火葬墓としてとり扱うことが多かった。しかし、近年、火葬所と墓との区別の意識が高まる中で、穴を掘った中に焼骨が残存していた場合を称して、火葬壙（註6）・火葬所（註9）・火葬施設（註5）・火葬土壙墓（註16）あるいは他の殆どは単に火葬墓と呼んできた。各々の研究者が火葬した場所と墓とを峻別しようという意識のもとになりつつある。

筆者の感覚としては、今回調査した奈良尾例での観察を基に、次のように規定しておこうと思う。

火葬土壙：荼毘に付すために穴を掘り、原則として1回のみ使用され、焼骨は拾骨されて他地の墓に収められた中世後半期の火葬施設

火 葬 所：ひとつの火葬施設を複数回以上使用した共同体共有の施設。現代で言う火葬場のイメージ。

また、火葬土壙などの個々の火葬施設が狭い場所に集中して、広い意味での火葬所の意識が明らかである場合（推定金光寺跡裏斜面など）も、そのまとまりを指して火葬所と呼んでもよいかと思われる。

火葬土壙は墓ではない。このことは、当遺跡で、かなり焼骨が残存していても、全骨格が残るものは無く、頭骨も部分的にしかみられず、歯は全く皆無であったことからも言える。他遺跡例でも、報告書で見る限り、火葬骨の残り易さを考えるとき、上記のような残り方が殆どであり、墓と見做し得るものは無い。土壙壁が焼けていないから火葬骨を納めた墓であるという報告も多々あるが、当遺跡例で見ると、底面や土壙壁下半部まで焼けているのは数少なく、そ

れでも上半壁は火熱の痕跡を留めている。つまり、火のまわりは上方へ強く、床面に炭が多いものに限って下半は焼けていない。この事実を知らずに、壙の上半が削平されてしまった床面すれすれの残りの悪い火葬土壙を調査した時、壁が焼けていないことを理由に、荼毘に付した場所ではないと報告したものが多いように思われる。

Tab. 9　15・16世紀火葬土壙地名表

遺構名	所在地	立地	平面形	長×幅cm	台石	供献品・遺物	時期・その他	文献
奈良尾1号	糸島郡前原町大字多久	山斜面	長方形	107×73	4			
〃 2号	〃	〃	〃	105×67		木製数珠玉9		
〃 3号	〃	〃	〃	110×90	2	青磁碗1、土師杯2、釘3	15c後半	
〃 4号	〃	〃	〃	104×64	1	土師杯2	16c初～前葉	
〃 5号	〃	〃	〃	(142)×68	2	青磁皿1、土師小皿3	16c中頃	
〃 6号	〃	〃	〃	107×65		青磁碗1	16c中頃	
〃 7号	〃	〃	〃	90×50	3	土師杯3	15c後半	
〃 8号	〃	〃	〃	100×64	4	土師杯1	15c末～16c前半	
〃 9号	〃	〃	〃	75×50				
〃 10号	〃	〃	〃	103×61	6	青磁小皿3、土師杯1	16c中頃	
〃 11号	〃	〃	〃	89×60	2	土師小皿2	15c後半	
〃 12号	〃	〃	〃	93×60	3			
〃 13号	〃	〃	〃	90×52	1			
〃 14号	〃	〃	〃	70×47	2			
〃 15号	〃	〃	〃	95×60	4	土師小皿1	16c中頃？	
筑後国府SX1051	久留米市合川町	低段丘上	〃	95×65	丸太3	土師杯1、小皿1	16c前半	1
日上A号	嘉穂郡穂波町大字椿	尾根上	〃	95×65	3	土師杯1	16c前半	2
〃 B号	〃	〃	〃	103×97				2
〃 C号	〃	〃	〃	155×115				2
〃 D号	〃	〃	〃	107×95				2
〃 E号	〃	〃	円形	104×97				2
〃 F号	〃	〃	長方形	100×60				2
〃 G号	〃	〃	〃	100×65				2
〃 H号	〃	〃	〃	?				2
〃 I号	〃	〃	〃	?				2
〃 J号	〃	〃	〃	90×60				2

遺構名	所在地	立地	平面形	長×幅cm	台石	供献品・遺物	時期・その他	文献
日上K号	嘉穂郡穂波町大字椿	尾根上	長方形	90×60				2
〃 L号	〃	〃	楕円形	105×85				2
〃 M号	〃	〃	〃	95×65				2
向山	鞍手郡鞍手町大字新北	段丘斜面	長方形	74×50		土師杯3	15c後半～末	3
剣塚1号	筑紫野市大字杉塚	丘陵上	〃	158×110		土師杯4、小皿9	15c末～16c前葉	4
〃 2号	〃	〃	〃	105×59	2		細竹を燃料	4
篠振ST026	太宰府市大字吉松	尾根上	隅丸長方形	105×45	2	成人骨と幼児骨混在	台石浮く（うち1つは粘土塊）、複使用	5
〃 ST029	〃	〃	〃	85×55				5
〃 ST030	〃	〃	〃	105×60	2＋木	土師杯1	15c初～16c初	5
〃 ST031	〃	〃	〃	102×67				5
〃 ST033	〃	〃	〃	140×35				5
〃 ST034	〃	〃	〃	125×85		土師小皿1	14c後半以降	5
〃 ST035	〃	〃	〃	約100×70		土師杯断片		5
〃 ST036	〃	〃	長円形	115×70		鉱滓片5点		5
〃 ST019	〃	〃	?	110以上×約70				5
大宰府(推定金光寺) SX3100	太宰府市大字観世音寺	寺裏斜面	長方形	110×70	3	土師杯3	15c代	6
〃 SX3101	〃	〃	〃	110×？		土師小皿2	15c代	6
〃 SX3102	〃	〃	〃	?		土師小皿1	15c代	6
〃 SX3103	〃	〃	〃	70×40	1			6
〃 SX3104	〃	〃	〃	110×70	3	（上層から土師杯3、青磁碗1）		6
〃 SX3105	〃	〃	〃	80×70	4		壁は粘土貼り	6
〃 SX3106	〃	〃	〃	200以上×？			14c中頃（長い類）	6
〃 SX3107	〃	〃	〃	190×100	4	青磁碗2	14c後半～15c前半（伸展状）	6
〃 SX3108	〃	〃	長楕円	260×70			2回使用	6
〃 SX3109	〃	〃	〃	270×50				6
〃 SX3110	〃	〃	〃	240×？				6
〃 SX3111	〃	〃	長方形	110×80		青磁碗1、香爐1、白磁皿1		6
〃 SX3112	〃	〃	隅丸長方形	100×70				6
〃 SX3113	〃	〃	〃	100×70	3			6
〃 SX3114	〃	〃	長方形	100×70	2			6
〃 SX3115	〃	〃	〃	150×60	4	青磁杯1（上層）		6

遺構名	所在地	立地	平面形	長×幅cm	台石	供献品・遺物	時期・その他	文献
大宰府(推定金光寺) SX3116	太宰府市大字観世音寺	寺裏斜面	長方形	?×60	1			6
〃 SX3117	〃	〃	〃	90×50	2		16c前半	6
トヲノ尾1号	粕屋郡篠栗町大字津波黒	丘斜面	隅丸長方形	91×69	2			7
〃 2号	〃	〃	不整形	144×66	2			7
〃 3－A号	〃	〃	楕円形	118×85	3			7
〃 3－B号	〃	〃	隅丸長方形	103×53	1			7
〃 4号	〃	〃	楕円形	96×74				7
〃 5号	〃	〃	隅丸長方形	103×54	4	銅銭4 (至道、治平、紹聖、永楽)	1406年以降	7
〃 6号	〃	〃	〃	110×50	1			7
〃 7号	〃	〃	〃	142×99	2	土師器杯片		7
〃 8号	〃	〃	〃	119×63	1、3	土師器片		7
〃 9号	〃	〃	〃	164×65				7
〃 10号	〃	〃	〃	123×60	4			7
干隈1号	福岡市早良区干隈	丘上・斜面	長方形	100×70	2			8
〃 2号	〃	〃	〃	98×63	2	土師杯1	台石の1は石塔台座切石、成人、16c前半	8
〃 3号	〃	〃	〃	85×51			成人	8
〃 4号	〃	〃	〃	88×57	1			8
〃 5号	〃	〃	隅丸長方形	74×60				8
〃 6号	〃	〃	〃	90×74				8
〃 7号	〃	〃	〃	103×62				8
〃 8号	〃	〃	〃	75×63				8
〃 9号	〃	〃	長方形	95×72			成人	8
〃 10号	〃	〃	〃	80×39				8
〃 11号	〃	〃	〃	84×50			組合せ木棺	8
〃 12号	〃	〃	〃	115×65				8
〃 13号	〃	〃	〃	82×59			以上古墳周囲	8
〃 14号	〃	〃	〃	102×59	1	土師皿1	16c前半	8
〃 15号	〃	〃	〃	102×60	2		成人	8
東郷高塚1号	宗像市日の里	丘陵上	隅丸長方形	95×60	4			9
〃 2号	〃	〃	〃	130×110 (110×60)			2段掘り	9
〃 3号	〃	〃	〃	75×40	2		以上前方後円墳周囲	9

遺構名	所在地	立地	平面形	長×幅cm	台石	供献品・遺物	時期・その他	文献
武丸原1号	宗像市大字武丸	丘陵上	長方形	95×80		土師杯6	16c前半	10
久保長崎1次	粕屋郡古賀町大字久保	台地縁	長方形	120×90		土師杯2、短刀(?)片1	15c末前後	11
〃 2次	〃	〃	?	?				12
茶屋原B区1号	北九州市八幡西区馬場山	段丘	隅丸長方形	80×65	2	土師小皿1		13
〃 2号	〃	〃	〃	82×58	4			13
〃 3号	〃	〃	〃	94×48	3	土師杯6、小皿5		13
〃 4号	〃	〃	〃	100×60	10			13
〃 5号	〃	〃	〃	90×56	2			13
〃 6号	〃	〃	〃	110×57	2			13
〃 7号	〃	〃	楕円形	98×58	4			13
〃 8号	〃	〃	隅丸長方形	98×75	4			13
〃 9号	〃	〃	〃	90×55	4			13
〃 10号	〃	〃	〃	84×51	3	土師杯3、小皿2		13
〃 11号	〃	〃	不整形	73×50	5			13
志波桑ノ本	朝倉郡杷木町大字志波	段丘上					19基あり。うち半数が台石あり。	14
狐塚南	〃 朝倉町大字入地	〃					台石あり	15
白岩8号	北九州市八幡西区香月	丘斜面	楕円形	114×73				18
本城南C地点	〃 本城	丘裾斜面	〃	110×100				19
朝田墳墓群Ⅲ区 43号	山口市大字朝田	尾根上	円? 形	76×62	1			22
〃 64号	〃	〃	長円形	170×57				22
〃 71号	〃	〃	不整形	118×98	1			22
〃 81号	〃	〃	長方形	120×64	2		中央に溝	22
養久乙城山 D－1号	兵庫県竜野市揖西町	斜面	長方形	125×83	複数	土師皿2、小皿1、鉄釘	15c末～16c	23
〃 2号	〃	〃	〃	125×85		土師皿、永楽銭		23
〃 3号	〃	〃	〃					23
福田片岡SX01	兵庫県竜野市誉田町	平野	隅丸長方形	120×60	3		15～16c、土盛し、標石あり	24

※文献番号は、後記註番号と同一

分布状況と占地

地名表に従って分布状況を見てみよう。火葬土壙のイメージの中に、台石を置くという習俗を強く持っているために、その類を含んだ火葬土壙群を主にとり上げた。単発的に発見された、台石の無い時期の不明確なものも多くあるが、ここでははずした。結果的に、筆者のフィールドである北部九州域が主眼となってしまい、他地域での見落し分も多いと思われるが、大筋は

変わらないと考えている。

北九州域から宗像・粕屋・糸島・早良・筑紫・朝倉にかけて多く分布している。典型例ではないが、床に丸太3本を置くものが久留米市国府跡で発見されている。山口市周辺にも若干見られ、兵庫県にも類似遺構があるが、播磨地方での普遍的なものかどうかはわからない。

15～16世紀における丘陵上～斜面の、長さ1m前後で寸詰まり長方形をなし、床面に台石を置く火葬土壙は、ほぼ旧筑前国内に分布の中心を持つと言えそうである。

その立地は、奈良尾のような急斜面や、日上（註2）・トヲノ尾（註7）・篠振（註5）・干隈（註8）のような丘陵上部の他に、推定金光寺跡（註6）のように寺院と目される裏の山斜面に群集するものもある。また、それほど高くない段丘上縁辺部にも営まれている。だが、基本的には、人里からそれ程離れてはいないが、静寂な山中や丘上でのものが多い。

また、干隈例や、東郷高塚（前方後円墳）（註9）、狐塚南（線刻を持つ大円墳）（註15）、剣塚（前方後円墳と円墳群）（註4）など、著名な古墳の周囲に形成されたものが多く、狭川氏によっても指摘されている（註5）。このような立地選択は、多分に塚信仰が基底に在ったためと思われる。これは当時期に始まったものではなく、古墳築造直後から古墳周辺埋葬がみられ、奈良～平安期を通じても連続している節がある。しかし、中世に至って墓地を古墳（塚）周辺に求める風潮が急激に高まったようである。高い墳丘を単に仏教的な塔のイメージに帰する理由付けのみでなく、もっとその発生について検討の余地があると思われる。

なお、干隈例で組合せ木棺状の類があるが、近年那珂川町山田西遺跡でも発見されており（註20）、また、秋根遺跡（註21）でも見られる。この両者は火葬墓ではないが、両地域のつながりが考えられる好例である。

造営年代と供献品

火葬土壙の時期決定は、副葬品の少なさと、出土した土師器杯類でも編年の未確立から、困難をきわめる。ただ、出土した各遺跡の土器をながめると、ほぼ15～16世紀の間におさまるようである。即ち、前代からの流れの中で追える杯や小皿とともに、小さな底部から大きく開く杯と倭小化した特小皿類が伴う時期である。

現在、古式と思われるのは推定金光寺跡例で、この中で、その変遷形態をも追える。報告に従って再録してみると、0～Ⅲ期（筆者呼称）に大別できる。0期は240～270cmとひょろ長い穴の上に棺を置き、通風を意図したもので14世紀中頃。Ⅰ期は、SX3107のように190×100cmの大きな長方形壙の底に台石を置き、伸展状で用いられたと思われるもので、14世紀後半～15世紀前半。Ⅱ期は、110×70cm程度の長方形土壙で、この遺跡では最盛期となり、15世紀代とされる。Ⅲ期は、90×50cmと更に寸詰まりで小型化したもので16世紀前半代とされる。以上のうちⅠ期からを火葬土壙と呼びたい。また、Ⅰ期とⅡ期の間に伸展状から屈臥状へと葬法自体

の画期が認められる。

この推定金光寺跡での傾向は大むね、他遺跡でも認められる。すなわち、奈良尾遺跡では、幅・長さともに大きい3号が出土遺物も最も古相を示し、15世紀後半代と思われるが、他は幅が狭くなり全体により新しくなる傾向がある。干隈遺跡では、100×60cm前後のものが多く、出土土器からみると、やはり16世紀に下るようである。

以上のことから、今回火葬土壙と称したものの殆どが100～90cm前後の長さで、幅が50～70cmのものが多いことから、或る程度、平面規模で大まかな年代を推定できるのではないかと思われる。よって、この火葬土壙の盛期は15世紀後半～16世紀中頃であると推定できよう。

出土遺物のうち、木棺の釘、着装していたと思われる数珠玉を除く供献品は、少量の青・白磁類と土師器杯・小皿類のみである。それも、供献品を持っている割合は、全体のわずか30%にすぎない。奈良尾遺跡例を除くと、25%となり、75%は無遺物となる。ちなみに奈良尾遺跡では60%の供献土器所有率となる。さらに、特殊な階層と思われ、青・白磁をも持つ推定金光寺跡の分と奈良尾分を除くと23%となる。全体に、供献品の少なさが目立つようである。

青(白)磁碗1個と土師器杯類を複数供献するあり方は、平安期からみられ、鎌倉～室町時代に定型化した伸展葬土壙墓に伴う習俗である。この制が奈良尾には残っている。この点では、火葬土壙が糸島地方では未だ一般民衆にはゆき渡っていなかったと言えるのかもしれない。

糸島地方の中世末土師器（Fig. 90）

奈良尾遺跡での火葬土壙や土壙墓の築造序、つまり、葬・墓制の変遷を明らかにしなければならない。ただ供献土器が編年の位置付け上不明確なため、若干検討を加えることとする。

奈良尾の供献土器は、出土遺構により各々差があり、一括に扱えな

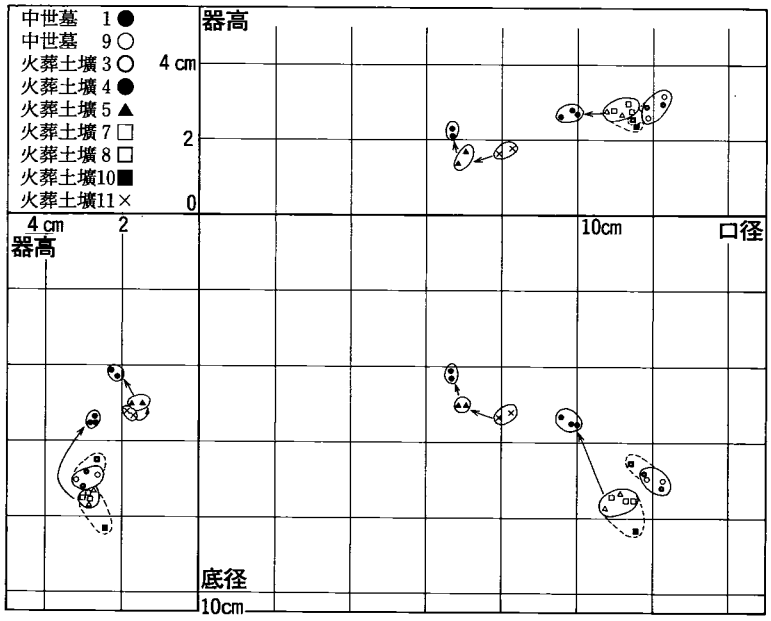


Fig.88 奈良尾遺跡出土土師器の法量（糸切底のみ）

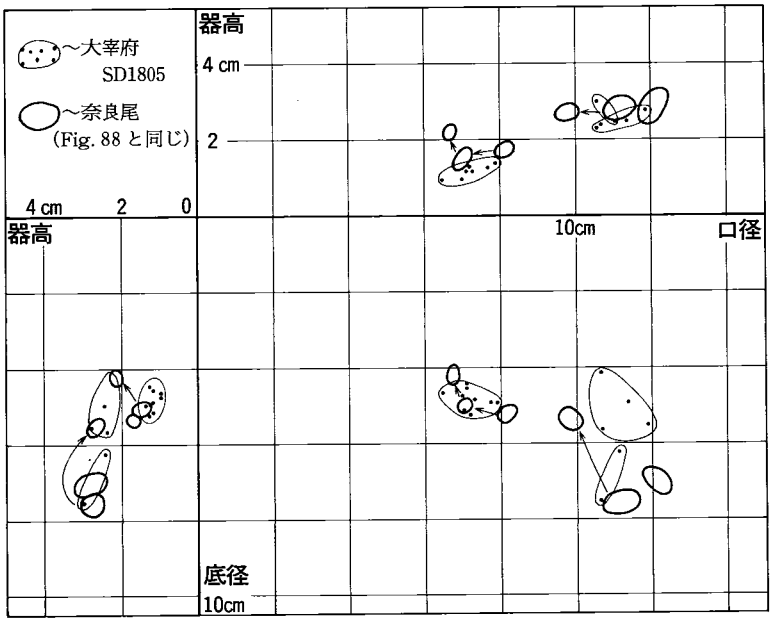


Fig.89　大宰府 SD1805（1501年）出土土師器法量と奈良尾のものとの比較

い。器種も各々対比できない部分がある。同一器種での形態・法量の違いは時期差であるという前提のもとに検討してみよう。

まず、第１号土壙墓出土品は、岸岳唐津系山瀬窯（85頁）産で16世紀末とされており、上限をそこに置ける。これに伴う土師器は、胎土・法量・技法ともに他遺構出土土師器と全く異なり、連続性は認められない。これに近い法量の土器は、隣の二丈町赤岸遺跡（註17）の石垣溝出土の一群（C・E・G(新)類～赤岸報告書中の分類）であるが、うち杯のC類は形態が異なり底径も大きい。形態は前代からの杯の形を踏襲しており、赤岸石垣溝出土の一群は奈良尾第１号土壙墓土器より一段階古式と考えられ、16世紀後半代に位置付けられよう。

次に、赤岸遺跡茶褐色土出土の一群（B・D・G(古)・F類）は、赤岸出土品中で石垣溝出土土器と連続した形態・法量を持つことから、先の石垣溝出土の一群よりも一段階古式に置かれる。16世紀中～後半代としておこう。杯・小皿・特小皿ともに連続した小径化の方向を示す関係となる。

更に、この赤岸F類は特異な器形であるが、奈良尾第５号火葬土壙出土品に類似する。ただ厚さや立ち上がりの形状が趣を異にするが、製作地のずれとすれば、ほぼ同類か、或は奈良尾例が時期的には古いと思われる。これに伴って、同じ李朝青磁を持つ隣の第６号火葬土壙も同時期と考えられる。ほぼ16世紀中ごろ前後と考えられる。

この第５号火葬土壙の特小皿と同器種が、第11号火葬土壙出土土師器で、後者の方が法量が大きいので、より古式としておきたい。更に、この第５号火葬土壙の特小皿は、薄く内湾気味に立ち上がらせる手法が、第３号火葬土壙出土土師杯にそっくりであり、器種は異なるが、同時期と考えられる。

第３号火葬土壙は、尾根頂部にあり、壙の規模も大きく、蓮弁を削り出す青磁碗を持っている。青磁碗自体は14世紀後半～15世紀前半（72頁）とされているが、若干の伝世があったと考えて、土師器杯から15世紀後半代と考えておく。土師器杯は文亀元年（1501）木簡が伴った大宰府ＳＤ1805出土の杯ｂ（Fig. 89）と比べ、法量が全体にやや大きく、１～２段階古式と考えられる。

第３号火葬墓出土土師器杯と同類が第９号土壙墓出土品である。法量もほぼ同じで、同時期と考えてよい。ただ、この両者は、土葬と火葬という根本的な葬送儀礼の違いがみられる。この同時性をどう考えるか問題である。この場合、尾根上先端でも第１～８号の密集した土壙墓群がみられるが、既に本文で述べたように、この一群は踞坐の姿勢で桶棺を使用したもので、一方、斜面中途の第９・10号土壙墓は伸展状態（膝は立てているかもしれないが。）の土葬で、同じ土葬でも決定的な違いがあり、前者が16世紀末以降、後者が15世紀後半となるのもうなづける。これらと火葬土壙との関係を示すと、次のようになる。

土葬（土壙墓９・10）	→	火葬（火葬土壙群）	→	土葬（土壙墓１～８・12）
伸　展　葬		（踞坐葬）		踞　坐　葬
―――→15世紀後半		15世紀後半～16世紀中頃		16世紀末―――→

よって、第９号土壙墓と第３号火葬土壙の同時性は、土葬と火葬の違いということも大切であるが、より、伸展葬→踞坐葬の大きな流れの中での画期として重要である。つまり、平安期からの伸展土葬墓の伝統が、大きな変革をとげつつあった接点として、両者が併存したものと理解できる。

次に、第８号火葬土壙出土土師器杯は、以上に述べた第３号火葬土壙・第９号土壙墓出土例の流れの中で追える。大内氏館跡Ａ－２類（註25）にかなり近似してきている。大宰府ＳＤ1805出土品に法量が近いが、底径がまだわずかに大きい。ただ、１点のみで如何ともしがたいが、一応幅を考慮して、15世紀末～16世紀前半ぐらいに置いておこう。

第７号火葬土壙出土の３点の土師器杯は、全体に茶色で、口縁内端を丸く突出させるくせをもっている。非常に特徴的な器形であり、もし他遺跡で出土するならば一目瞭然であろう。法量からみると、第４号火葬土壙出土品とともに、ひとつの群になり、大宰府ＳＤ1805出土杯ａと近似する。ただ、第７号火葬土壙出土の３点は精製品であり、より古式と考えたい。器形的にも、口縁が外反しており、第４号火葬土壙出土品と明らかに異なり、時期も後者は16世紀初～前葉に置かれる。

第10号火葬土壙出土の土師器杯は、口径が大きく浅めの器形であるが、李朝磁器小皿３枚を伴っており、第５・６号火葬土壙とほぼ同期に置かざるを得ず、16世紀中頃を前後する頃かと思われる。

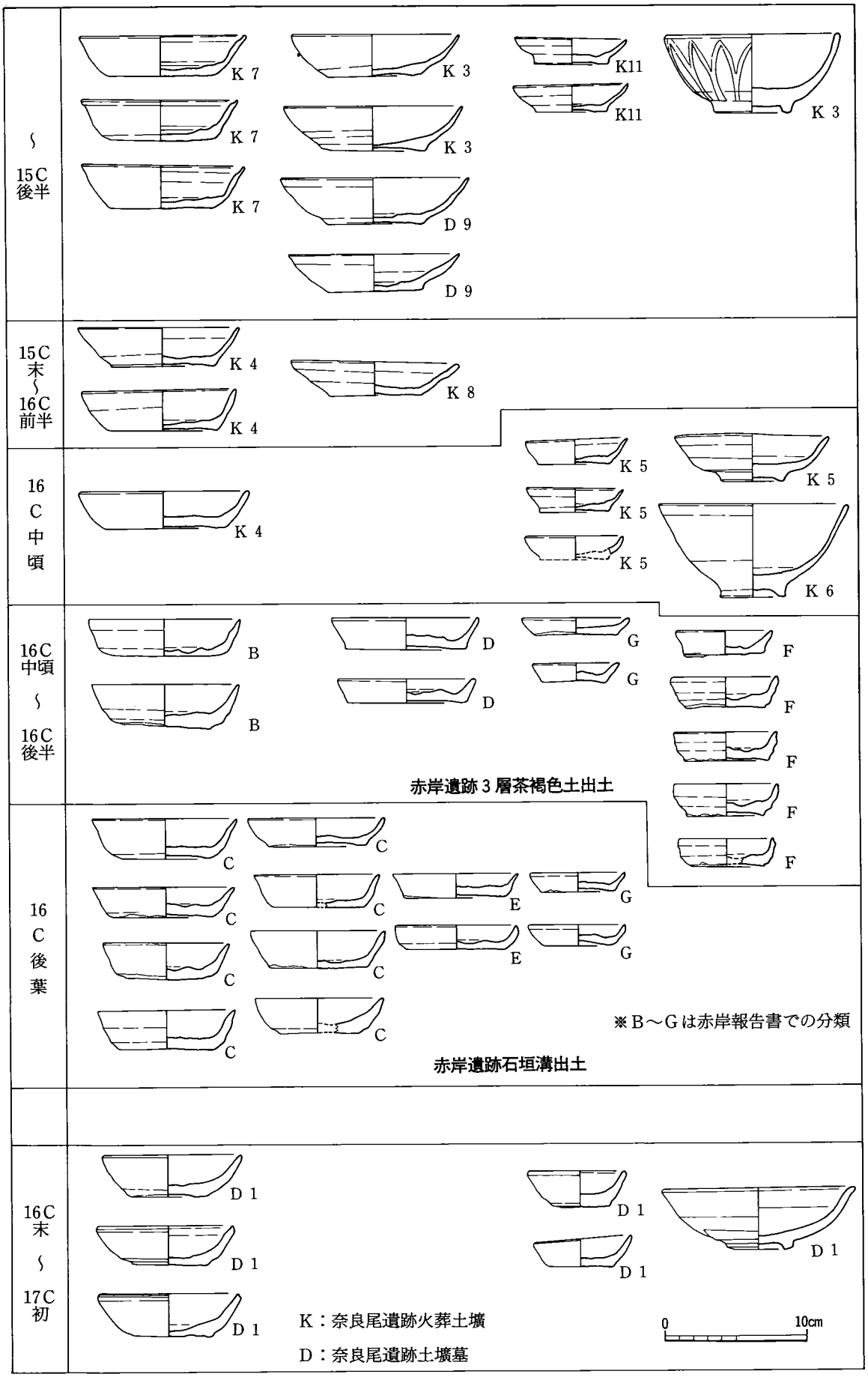


Fig.90　糸島地方中世末期土器編年表（1/4）

以上の各遺構出土土師器については、一応の年代観に従って編年表の作製を試みた。ただし、これはあくまでも私案としての叩き台であり、今後、この糸島地域での類例の増加に従って充実せらるべきものであり、また大幅な変更も予測せらるる処である。

また、各火葬土壙間の築造序であるが、この形態自体に、規模・形状に大きな変化はないことから、それ程年代差があるものとは思えない。15世紀後半～16世紀中頃までの100年を超えない程度であろう。これは、供献土器の各器種の形式をみれば明らかであり、各器種とも細分しても２～３型式にしか分かれないことを考えるとき、最大３世代分の火葬土壙群であると判断できるのである。その順序は、尾根頂部の第３号土壙が古く、次に急斜面中位に移り、その中位に並ぶものでも、端に位置するものがより新しいという関係となろう。

なお、糸島地方の中世末土師器としては、既述の如く、東五反田遺跡等で出土が知られており、その整理・報告書作製の段階での奈良尾遺跡出土品とのつきあわせに大きな期待を寄せていることを附記しておきたい。

註１）　松村一良「筑後国府跡」　昭和51・52・53年度発掘調査概報　久留米市教育委員会　1979
２）　宮小路賀宏「日上遺跡」　福岡県文化財調査報告　第48集　福岡県教育委員会　1971
３）　中間「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸⅡ」　福岡県教育委員会　1977
４）　中間「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸⅣ」　福岡県教育委員会　1978
５）　狭川真一・山本信夫「篠振遺跡」　太宰府市の文化財　第11集　1987　太宰府市教育委員会
６）　「大宰府史跡」　昭和62年度発掘調査概報　1988　九州歴史資料館　のうち第107次調査
７）　緒方泉「福岡東バイパス関係埋蔵文化財調査報告」　福岡県教育委員会　1990
８）　井沢洋一「干隈遺跡」　干隈遺跡調査会　1985
９）　原俊一「東郷高塚Ⅰ」　宗像市文化財調査報告　第21集　宗像市教育委員会　1989
10）　原俊一「武丸原遺跡」　宗像市文化財調査報告　第17集　宗像市教育委員会　1988
11）　松岡史「福間バイパス関係埋蔵文化財調査報告」　福岡県教育委員会　1973
12）　古賀町教育委員会が1990年秋に発掘調査を実施した。報告書近刊予定。
13）　上村佳典・山口信義「茶屋原遺跡」　北九州市教育文化事業団・北九州市教育委員会　1980
14）　小池史哲・井上裕弘・木村幾多郎「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査概報Ⅶ」　昭和61年度　福岡県教育委員会　1987
15）　小池史哲氏の御教示による。九州横断自動車道建設に伴って、福岡県教育委員会が調査した。14とともに報告書近刊予定。
16）　上野精志「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告ＸＸ」　福岡県教育委員会　1978
17）　中間「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第７集」　福岡県教育委員会　1982
18）　山手誠治「白岩遺跡」　北九州市教育文化事業団　1980
19）　前田義人「本城南遺跡」　北九州市教育文化事業団　1984
20）　筑紫郡那珂川町教育委員会が県道建設に伴い、1990～1991に調査した。報告書近刊予定。
21）　「秋根遺跡」　下関市教育委員会　1977
22）　河村和「朝田墳墓群Ⅱ・鴻ノ峰Ⅰ号墳」　山口県教育委員会　1977
23）　兵庫県教育委員会が昭和57年調査。「第13回埋蔵文化財研究会資料」より。
24）　兵庫県教育委員会が昭和56年調査。「第13回埋蔵文化財研究会資料」より。

25)　「大内氏館跡Ⅶ」　山口市教育委員会　1987

戦国期当地域の政治的背景（Tab. 10）

奈良尾遺跡の戦国～近世は、火葬の地、埋葬の忌地であった。そこに表われた考古学的各要素は、当時の社会の多くを知らせてくれると同時に、社会背景を念頭に置かないと、遺物ひとつとってみても正しい理解には継がらない性格のものである。ここの場合、ものの流通と葬法の拡がりという点を理解する上で、当地域の文献上からの政治的背景を整理しておきたい。

中世の糸島は、原田氏の盛衰史であった。具体的には、原田氏がいかにして自領の独立性を維持してゆくか奮闘した歴史であった。そのために一歩でも二歩でも周辺地域への拡大をはかり、大内や大友、島津、秀吉などの大勢力との均衡を常に配慮しながらも、古来の土豪としての力を存分に発揮して大いなる反抗をなす場面も度々あった。だが、近世に生き残れなかったという意味で、結果からみると、まさに中世的地方豪族の典型にほかならなかったのではないかと思われる。

表に示したのは、丸山雍成氏の論（註１）から抜粋して、原田氏の被支配関係のみをとり上げたものである。原田氏の事蹟には、例えば、数度の生の松原の合戦や、立花城攻略など、華々

Tab. 10　15～16世紀原田氏の被支配関係概略

西暦	年　月	歴史的事柄	支配関係
1396	応永三年	・大内義弘による菊池・少弐討伐により、大内勢力下に。	
1467	応仁元年	・応仁の乱の勃発によって原田種親上洛し、西軍山名宗全に協力。	大内支配下（約150年間）
1496	明応五年	・少弐政資が怡土郡に押寄せて高祖城を攻囲したとき、大内義興の来援によって危急を脱した。その後、原田興種は毎年周防山口へ参勤する。	
1553	天文二十二年四月	・原田隆種の高祖城落城。（陶・大友両軍により）	
1555	弘治元年三月	・大内義長、毛利元就によって山口を攻略され、豊・筑・肥の大内氏所領はすべて大友氏の支配下に入る。	大友支配下
1567	永禄十年九月	・原田隆種、大友幕下の西鎮栄を怡土郡長石村宝珠岳城に亡す。	反大友
1569	永禄十二年春	・大友宗麟と竜造寺隆信は和を講じ、原田了栄も再び大友幕下に入る。	大友支配下
1571	元亀二年冬	・このころから、原田了栄、反大友の意志を固める。	
1578	天正六年十一月	・大友宗麟が日向耳川の戦で島津義久の軍に大敗。	反大友
1579	天正七年冬	・柑子岳城が開城し、怡土郡・志摩郡すべてが原田了栄の手に。	反秀吉　島津に加担
1587	天正十五年六月	・秀吉により原田信種旧領（筑前怡土・志摩・早良三郡）没収。	

しいものも多いが、ここでは省いている。

応永年間から約150年間の大内氏支配下中はかなり安定した状況であった。特に後半には大内氏幕下として、信頼あつく、協力関係に近いほどであった。この15世紀初頭～16世紀中頃までの政治関係は、社会・経済的にも周防地域との交流をももたらしたと考えられる。15世紀末以降毎年原田氏が山口へ参勤した事からも、彼地の文物が多くもたらされたことは想像に難くない。

陶氏の下剋上と大友氏の勢力拡大によって、1555年以降大友氏の支配下に入る。ところが、原田氏にとって大友氏は根本的にウマがあわなかったようで、たびたび大友配下の城を攻め、反旗をひるがえしていた。

1578年、大友宗麟が島津勢の北進を止め得なくなると、反大友を明確にし、島津側に加担することになる。翌年には目の上のタンコブであった大友幕下の柑子岳城を開城させ、原田了栄の全盛期をもたらした。怡土・志摩・早良三郡を手中にし、それまでの辛苦がむくわれたかのようであった。

しかし、その後秀吉の全国制覇の勢いが及んでくるや、島津側についていた原田氏は、反秀吉の姿勢をとり、結局、1587年には原田旧領の没収の浮きめに会うことになる。永年に及んだ原田氏の糸島地方支配は、ここで事実上終止符を打つことになる。一族は肥後配下となり、二度と旧状を戻すことはなかった。

以上が原田氏被支配関係の大略であるが、その間で、奈良尾遺跡に関連することをみてみたい。元亀二年正月（1571年）、肥前松浦郡の岸岳城主草野鎮永と筑前怡土郡吉井城主吉井隆光が境界争いをし、吉井浜にて合戦を行っている。この草野鎮永は原田了栄の二男である。奈良尾遺跡第１号土壙墓出土の陶器が日高正幸氏によって16世紀末の岸岳唐津系山瀬窯（現在の佐賀県東松浦郡浜玉町）産と指摘されており（本書85頁）、原田本家との結びつきがはっきりあったことを示す好資料である。年代的にも符合しており、領主層のつながりが物流関係にも及んだことを知ることができる。

また、既に原俊一氏が指摘している如く（註２）、北部九州地域で出土する15～16世紀の、底部が小さく、体部が大きく開く杯は、大内家館跡出土品と同類で、16世紀中頃まで続いた大内氏支配の影響とみることもできる。奈良尾遺跡では、火葬土壙供献品にこれを見ることができる。ただ今後の作業として、厳密に大内支配下の土器を検討し、それ以外の地域の土器と峻別できるか比較してゆかねばならないだろう。

葬法についても上記と同様の視点が考えられる。即ち、個々に斜面に穴を掘って棺台石を置き火葬する手法は、表に見る如く、北部九州に多い様に思われる。葬法儀礼という根本的な生活習慣が根づくには、単に支配階層の交替や宗教的嗜好のみで、民衆にまでそう簡単に行きわたるとは思えない。その点では、火葬土壙という習俗が短期間の強圧的な大友支配期にではな

く、150年続いた大内支配期のより安定した社会の中で流布した可能性の方が強い。ただ、この種の小遺構が山の急斜面等に多くみられることから、発掘調査自体も進んでいないし、従来見落されがちであったことを考えると、そう簡単に大内支配域での習俗と断定することは時期尚早ともいえる。ここではとりあえず、可能性の指摘だけに止めておきたい。

さらに、1987～1988年に調査された東五反田・東下田遺跡（註２）では、東西55ｍ、南北40ｍの方形中世環濠居館跡が発見されている。奈良尾遺跡から西南西1.1㎞の至近距離に在る。古伝承によれば、原田氏の糸島での初代原田種直の居館跡といわれており、注目される。ただ、言い伝えの如く、原田種直の居館とすれば、建久元年（1190年）に怡土に移封されてきたわけであるから、12～13世紀の遺構となり、奈良尾遺跡の中世末火葬土壙群と全く時期が異なることとなる。この居館がいつまで続いたかが問題であり、それによっては奈良尾遺跡との関連も生まれてくるであろう。正式報告書の刊行が待たれるところである。　（中間）

註１）　丸山雍成「波多江地区史料調査報告」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第６集』下巻　福岡県教育委員会　1982

２）　前原町教育委員会によって、長野川流域ほ場整備事業に係る発掘調査の一環として実施された。報告書近刊予定。なお、同教委岡部裕俊氏には種々御教示いただいた。記して感謝したい。

C　三尊仏塼

奈良尾遺跡出土の塼仏は極めて小型で、摩滅や下半分の欠失もあって細部が明らかでなく、中尊や脇侍の全像容を明確にみることができないのはおしまれる。そして、出土地は寺院址との関連はみられないものの、伝世の同種塼仏に対する検討や、今後に寺院址からの発掘が期待される意味でも、誠に貴重な発見であったと言える。

本稿ではのこる塼仏のレリーフ形象をたどって観察し、後尾に塼仏一般の参考事項を付記しておこう。(66頁の Fig. 47，巻頭 PL. Ⅱ，巻末 PL. 47など参照)

法量

極めて小型で、しかも薄型の塼仏である。下方半分が失われていて、もとの大きさを知りえないが、現存法量では上辺が4.6㎝、残存最大縦は4.0㎝である。表裏とも表面の微細な粘土面は乾燥し収縮していて、厚みは中ほどの厚いところで６㎜から７㎜、周縁にいくほど薄くなり２㎜から３㎜くらいとなっている。

形象

三尊塼仏

この塼仏残欠の上部に、ふくらんで左右に広がっているのは天蓋であろう。他の三尊塼仏を参考にしながら観察すると、中央部だけが天蓋であるとすれば、左右の膨らみは唐草模様か供養の飛天か何かが表現されているかも知れないが、その形象をたどることは難しい。

天蓋と思われるものの下には、中央に仏体一軀と向かって左方に一軀がみられ、本尊と脇侍の配置である。向かって右にもう一軀の脇侍があったと思われ、三尊仏を構成していたものであろう。摩滅や欠損のため三尊の全容を識別できないのは残念であるが、この小型塼仏を「三尊仏塼」と名づけておきたい。

中尊

中央の中尊と思われる像には、頭部周縁を囲む凸点がみられ、頭光の表現であることがわかる。その頭頂にはふくらんだ肉髻部の表現がみられ、三尊構成からも中尊の尊容は如来形であろうと判断される。下半身のところで欠落部にかかり、足をくむ坐像か椅子に座す倚像かが明確ではない。通常の三尊仏塼にみる中尊は、結跏趺坐の形式よりも、椅子に坐して足をさげて蓮台を踏む倚像の形式が多いが、それらに比べてこの三尊仏塼の中尊は、膝の広がりから結跏趺坐の姿とみられる。

中尊の両手のしぐさは、右手は肘を折って胸前にあげ、左手は左腹前の膝上に安じて、掌を上に向けるようでもあるが、持物の有無は明確ではない。

右脇侍（向かって左の脇侍）

本尊の向かって左に尊容をみせるのは、立像の菩薩形（右脇侍）であろう。両手の肘を折って胸前にあげ、手先が摩滅していて手の様子が明確ではないが、両手を合掌しているように見える。合掌の手首の様子が少し離れて見え、何かを持つしぐさにもみえるが、これは脇侍菩薩が正面を向くのではなく、少し本尊側に体を捻っている姿勢になっているからであろう。下半身は欠落しているが、体を捻っていることから、蓮台に置く両足は、一方を立脚とし、片方を遊ばせて立つ姿であろうことが推察される。

左脇侍（欠落）

そして、向かって右の菩薩（左脇侍）と思われる一軀は摩滅と欠落によって見ることができないが、極めて微かに頭光の膨らみや肩部などの影をたどることができる。おそらく中尊中央線を対称軸として、左脇侍は右脇侍の相似形象を示すものと考えられる。

塼仏連続文の可能性

のこる塼仏の上辺と向かって左側は、直線状をみせて当初の縁を示し、方形塼仏の各辺を示している。下部は損壊の状況で、塼の縦の長さを知りえない。ところで問題なのは、右辺については当初の縁辺か、制作後に折れたものかのいずれとも判じえないことである。しかし、中尊を中心にシンメトリーに左右のバランスをみると、右辺が少し幅広く、現状では連続していたものが折れた状態ではないかと思われるふしがないではない。それ故、同じパターンを連続しながら繰り返して右へ、あるいは下部へ連らなっていた可能性を否定しえない。

如来形や菩薩形独尊での連坐や連立の同じパターン数個を上下に繰り返して、1ブロックを形づくる塼仏の例は少なくない。いわゆる六尊連立塼仏とか、四尊連座、十二尊連坐塼仏と名づけられているものである。しかしながら、三尊仏を連続させてブロックにしたものは、いまのところ伝世のものにも出土例にも聞かない。

制作の時代

この三尊仏塼は極めて小型薄型でレリーフも明確ではないため、尊容から様式的に制作時代を判断をすることには無理がある。しかしながら、通常の塼仏の制作時代については、奈良地方では白鳳時代（奈良時代前期）に集中していることは顕著な特色である。それに、北部九州には当時の畿内からの文化伝達はわりあい早かったことなどを考えると、当地方への仏教文化伝播についてもそれほど最盛時を隔てるものではないと考えられる。

この三尊仏塼については、幸いなことに、伴出遺物について奈良中期から平安初期のものといい、出土が攪乱された層からというのではないことは、幸甚であった。この三尊仏塼はきわめて小型の塼仏で、独尊では小型のものもあるが、三尊仏塼での小型は比較の類品に乏しく、

この遺品自身での様式や形式による時代判断は難しい。それ故、瓦の瓦当文あるいは仏像では塑像や金銅仏などの当時における地方への伝播などの、一般的な状況を考えて判断することになるが、制作は奈良時代を降るものではないと考えても大過ないものと思われる。

小塼仏の類例

この塼仏の法量については先にあげたが、きわめて小型の薄い塼仏ということである。このような小型の塼仏の存在を類例にみれば、独尊坐像のものではあるが次のようなものがあり、出土地と法量をあげておこう。

奈良県	山田寺址	独尊坐像	縦3.0cm、横3.0cm、厚さ3mm
		独尊坐像	縦6.4cm、横3.6cm、厚さ6mm
			2列2段の四個連坐塼
福島県	借宿廃寺址	独尊坐像	縦4.9cm、横3.3cm、厚さ1.4cm
三重県	額田廃寺址	独尊坐像	縦6.1cm、横7.1cm、厚さ3mm
長野県	桐林宮洞須恵窯址	独尊坐像	縦6.0cm、横4.0cm、厚さ5-7mm

しかしながら、小型の三尊仏塼の類例は乏しく、いちばん小さいものは、西琳寺塼仏として『天平の地寶』にあげられているものが知られる。これは破片であるが厚みは1.2cmで、大ざっぱに大きさを概略復元してみると、横が8cm強、縦約9cmから10cmほどと考えられる。奈良尾遺跡出土三尊塼仏は、三尊仏塼では今のところ最小のものと言うことになろう。

なお、塼仏の大型のものは川原寺裏山遺跡から大量に出土した三尊仏塼などで、縦は約23cmくらい、横が20cm弱、厚さが3cm前後というところである。

九州の塼仏出土例

九州以外の塼仏出土例については後尾に概略をあげるが、ここでは九州の出土塼仏について述べておこう。

九州の塼仏遺品は大分県宇佐市虚空蔵寺の塔址から出土しているものがよく知られていて、昭和29年と昭和48年の調査で、約100片の塼仏が確認されている。この塼仏は奈良市壺坂の南法華寺、いわゆる壺坂寺の小型塼仏の独尊倚像と同じ型で作られていることがわかっているものである。南法華寺の建立などのことを考えると8世紀初頭のことであり、制作の時も推察されるとともに、畿内文化と宇佐地域との直接的な連携さえ示唆する遺品となっている貴重な塼仏遺品である。

そして、最近のことであるが、同じ豊前国の豊前国分寺付近で塼仏が発掘されている。豊前国分寺の隣に位置する正道遺跡は、小さい谷を隔てて西に200mのところである。国分寺関連遺跡として住居址などが検出されているが、ここから昭和63年度発掘の時に、独尊倚像の塼仏

が発掘されている。大きさは縦6.7cm、横5.0cm、厚さ1.1cmであり、図様も大きさも宇佐市虚空蔵寺塔址出土の塼仏と同じである。国分寺や周辺の古代寺院に、虚空蔵寺でのように千仏的な貼装の使途があったと考えるとすれば、もう少し今後に発見数の増加を待たなければならない。当地での使用について今後に留保するとしても、宇佐市虚空蔵寺址からもたらされたものと考えるのが自然であろう。出土の層の確認から、何時までにはこの住居址にもたらされていたかについても、興味をつなぎたい。

九州では塼仏の出土は宇佐市虚空蔵寺だけであったが、豊前国府正道遺跡に虚空蔵寺と同形のものを得、本稿の三尊塼仏が福岡県糸島郡前原町奈良尾遺跡から出土し、出土遺跡は3ヶ所となった。

【塼仏参考】

塼仏の製作法

塼仏は磚仏あるいは甎仏とも書く。土製の盤状のものに仏菩薩の形象を浮き出させたものである。その製作法は、まず原型をつくり、その雌型（凹型）を作成する。その雌型に精土を押し込み、原型どおりの仏菩薩の形象をつくる。それを乾燥させ、素焼にして、金や銀の箔を置いたり彩色したりして仕上げるものである。

塼仏の伝播系譜

わが国の塼仏は、その源流をたどれば、中国の隋・唐のころの塼仏の影響により生まれたといえる。塼仏は古代寺院址から出土するが、当該寺院の創建年代から塼仏制作の時が推定され、仏像の時代様式を考える資料としても貴重な存在となっている。

わが国での塼仏の制作と使用を出土状況からみると、飛鳥時代寺院址には殆どみられず、また、天平時代にはいると急激に少なくなっていくといわれる。塼仏出土の寺院をみると、天智天皇在位後半から天武、持統、文武の各天皇在位の間、に建立されたと思われる寺院（橘寺、当麻寺、山田寺、壺坂寺など）で使用されたようで、奈良を中心に白鳳時代に集中していることがわかる。そして、国内へのひろがりは、畿内から地方へという一般的な仏教文化の伝播にのって、波及していったものと考えられる。

塼仏の出土例　―九州以外―

昭和49年3月から5月にかけての、奈良川原寺裏山遺跡の発掘で塑像、緑釉塼などとともに一千点にのぼるといわれる塼仏や破片を出土した。そのころ各地の塼仏出土も点検され、塼仏の出土遺跡数はほぼ60ヶ所といわれた。これも昭和52年半ばまで現在であり、その後、出土例は増加していると思われるが詳報を知りえない。

現在までの発見地をみれば、古代寺院址に多く、それも金堂、講堂、塔などの址から発見されている。出土の地域は圧倒的に畿内に集中していて、奈良県が遺跡数でも全体の約四分の一以上を占めていると思われ。出土遺品の質量ともに群を抜く存在である。奈良県についで大阪府（太平寺、西林寺、獅子窟寺、百済寺、禅寂寺、高井田廃寺など）、京都府（広隆寺、西山廃寺など）、三重県（夏見廃寺、額田廃寺、天華寺、鳥居古墳など）に多い。その周辺では滋賀県（崇福寺址）、兵庫県（伊丹廃寺）、和歌山県（神野々廃寺、佐野廃寺）、愛知県（北野廃寺）があげられ、北陸では石川県（能登国分寺）と福井県（野々宮廃寺、二日市廃寺）に出土している。東の方では、宮城県（陸奥国分寺）を最北として福島県（借宿廃寺）、長野県（桐林宮洞）、神奈川県（千代廃寺）にその例が知られている。

ところで、畿内からの九州への文化波及の間にある中国四国地方を見てみると、山陰地方では島根県（教昊寺）、鳥取県（斎尾廃寺）、山陽地方では岡山県（久米廃寺）、広島県（寒水寺）、四国では香川県（下司廃寺）に出土例がみられる。

塼仏の用途

塼仏の使用方法については、厨子に安置して礼拝の対象とされたものもあるが、塔や金堂、講堂などの壁面状の場所に千仏的な表現として貼りこまれたのであろうと考えられている。当初のままに遺っているところがないので、確実なところはわからないが、ちょうど法隆寺の玉虫厨子宮殿部の内部一面に打ちつけられた銅板の千躰仏がその良き参考となろう。このような千躰仏の表現として用いられるものに銅板の押出仏や刺繍の繍仏がある。押出仏は金属板を打ち出してつくり、繍仏は色とりどりの糸で刺繍して仏菩薩を表わしたものである。ともに費用のかかるもので地方寺院にはあまり遺されているものではないようである。むしろ、押出仏や繍仏の代用として塼仏が用いられたのであろうといわれている。（八尋和泉）

（参考文献）
奈良国立博物館監修『天平の地寶』昭和36年　朝日新聞社
奈良国立博物館編『飛鳥の塼仏と塑像』（展示目録）昭和51年７月３日－８月１日
久野健編『押出仏と塼仏』（日本の美術　No. 118）昭和51年３月　至文堂
宇佐市教育委員会編『法鏡寺跡・虚空蔵寺跡－大分県宇佐市における古代寺院跡の調査－』昭和48年３月
難波田徹「塼仏」（賀川光夫編『宇佐－大陸文化と日本古代史－』所収）昭和53年10月　吉川弘文館
網干善教「宇佐虚空蔵寺跡出土の塼仏について」（賀川光夫編『宇佐－大陸文化と日本古代史－』所収）昭和53年10月　吉川弘文館
賀川光夫「虚空蔵寺址の塼仏」　『考古学上よりみた上代の宇佐地方』（大分県文化財調査報告書５）
豊津町教育委員会編『豊前国府および正道遺跡』（豊津町文化財調査報告書　第８集）平成元年３月

D まとめ

多大な成果を得た奈良尾遺跡の発掘調査は、糸島地方における各時期の考古学的情勢の一端を塗り替え得るものであった。以下に、簡単に総括しておきたい。

1．弥生時代は、中期～後期にかけて、甕棺墓が発見され、小～中規模程度の墓地が予想できた。また、包含層から生活遺物も若干出土しており、竪穴式住居などの小集落の存在も推測された。

2．奈良～平安初期には急斜面を造成して、鍛冶工房が営まれていた。大澤氏によって工房空間利用の具体的状況の理解が示された。また、山奥での立地の状況から、通常の野鍛冶とは考え難い特殊性を予測し得た。

3．中世末の土壙墓・火葬土壙、近世の土壙墓など、従来明らかでなかった時期の葬制の流れが明らかになった。特に、多くの火葬土壙の発見と、その供献品の多さ、種類の多さには目を見はるものがあり、年代が推定できたことなど、特筆に値するものである。

4．近世・近代墓地については、既改葬が進んでおり、全体の調査はなし得なかったが、頭山満に関連する墓石等の発見など、今後の検討にかかる問題を多く残した。

5．出土遺物については、小型の三尊形式の塼仏が秀眉であり、他に類をみないタイプの発見に、今後の研究への期待がかかる。

6．奈良～平安初期の出土土器群については、詳細な糸島地方での検討を準備していたが、今回は割愛することにした。器形・技法・器種等で他地域と異なる面があることを以前から指摘してきたが、資料の蓄積に伴い、近いうちにとりまとめたいと考えている。

7．中世末～近世初頭の各遺構での陶・磁器、土師器のセットは、極めて貴重な資料となった。今後、近世陶磁器の研究者及び文献資料からのアタックが是非とも必要なことを痛感した。

以上のような、予想をはるかに超えた成果を得ることができた。最後に、大雪の中、みぞれのふりしきる悪条件の中で、最後までがんばって下さった発掘作業員の皆さまに、心から御礼申し上げます。

PLATES

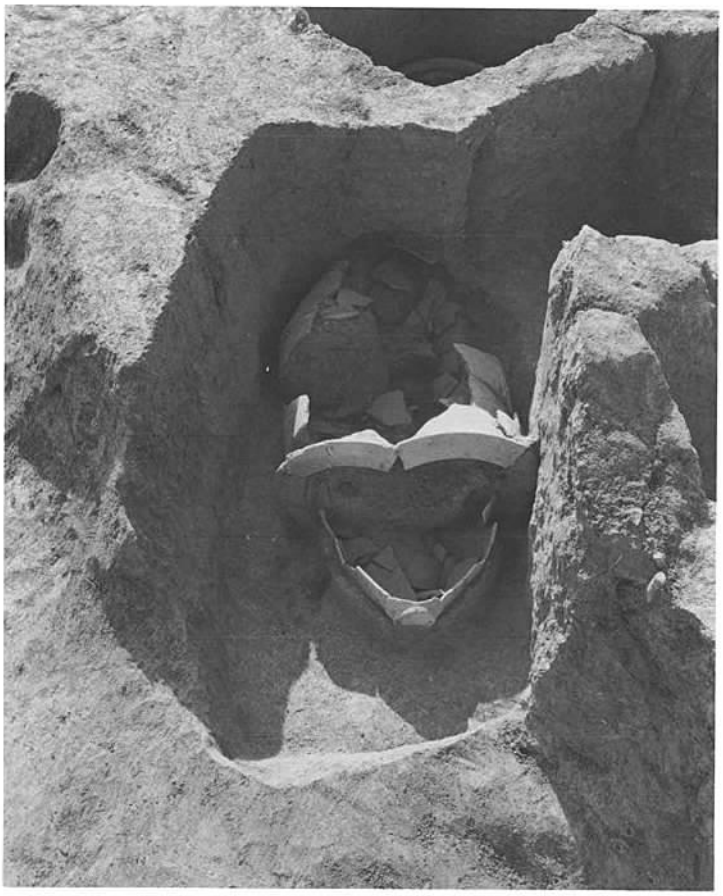
奈良尾遺跡全景（北西から）
左側は日向峠から高祖山（怡土城）、右端は雷山山塊

(1) Ⅰ区全景
(東から)

(2) Ⅱ区全景
(上空から)

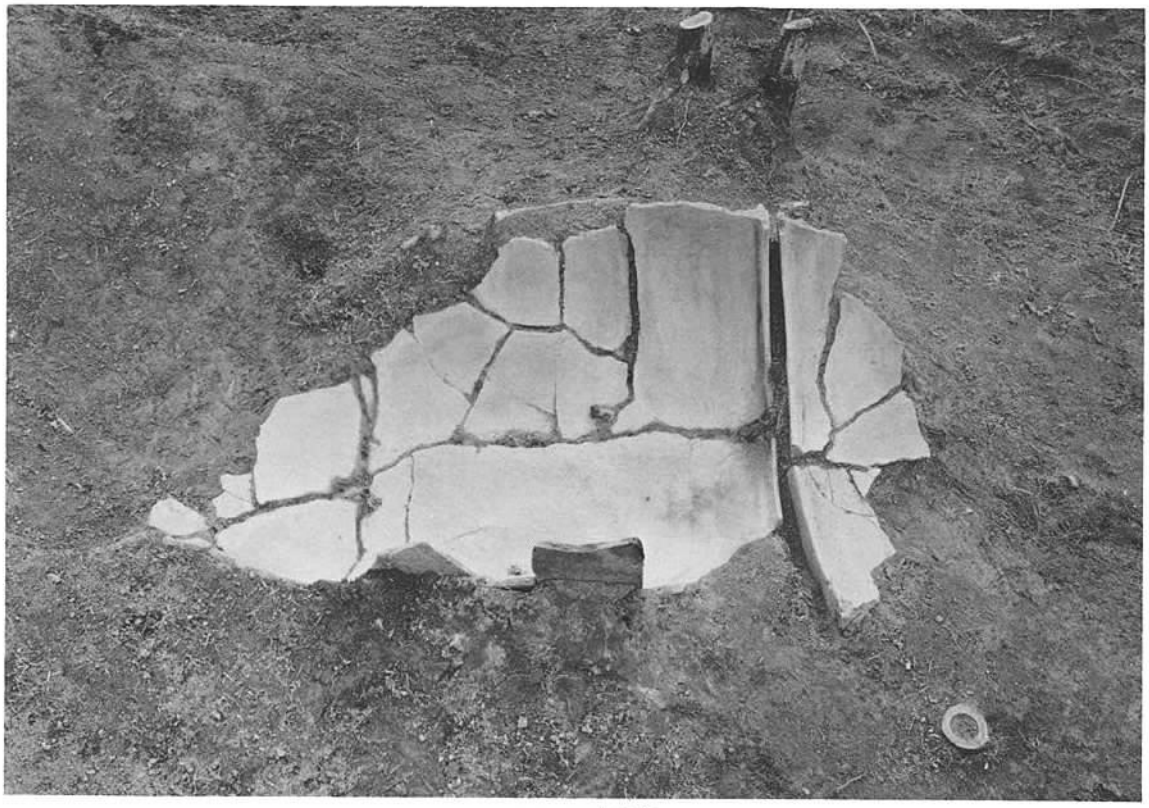
(1) 重機による谷の試掘

(2) 遺構検出作業開始



(1) 第１号甕棺墓

(2) 第２・３号甕棺墓



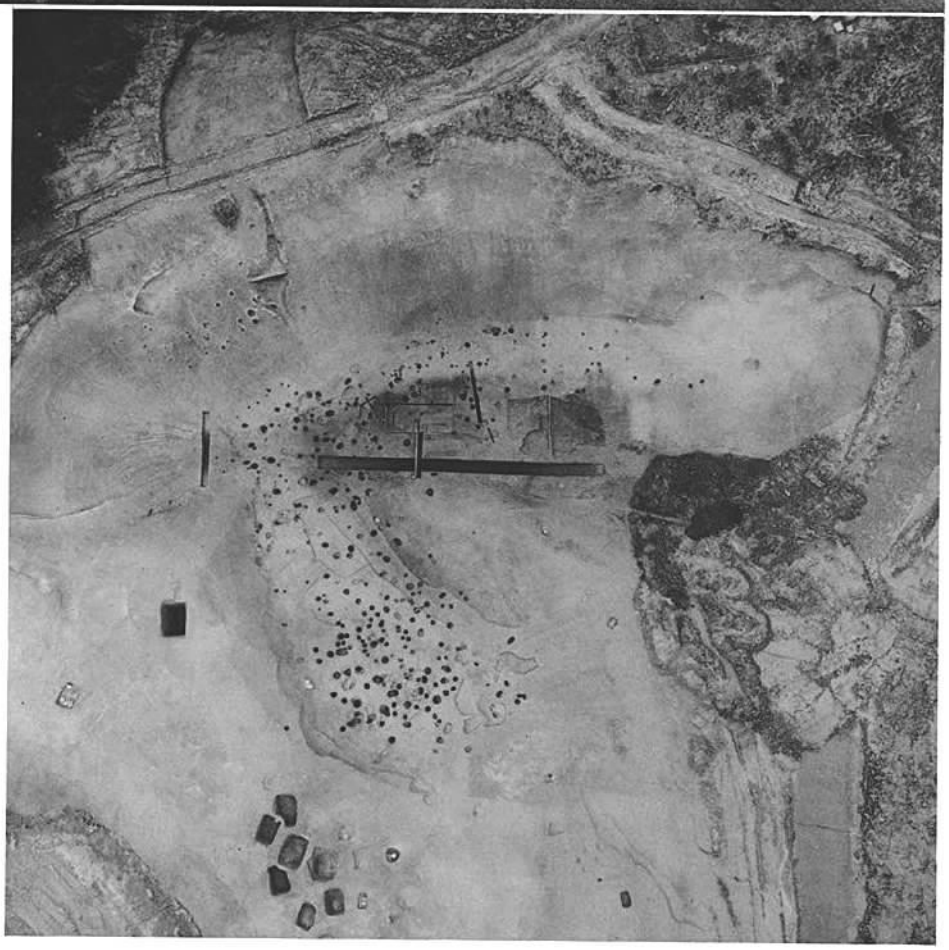
(1) 第4号甕棺墓

(2) Ⅰ区第1号包含層（北から）

(1) Ⅰ区第１号包含層（西から）

(2) Ⅰ区第２号包含層（西から）

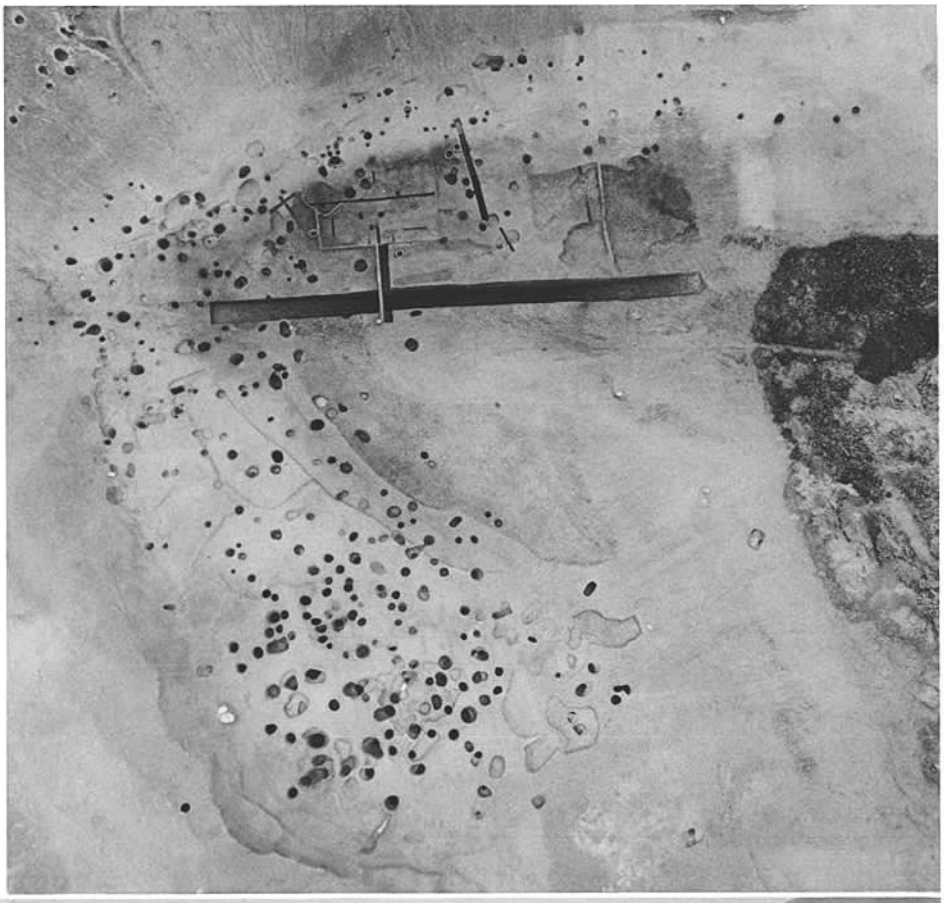
(1) Ⅰ区第2号
包含層土器
出土状態



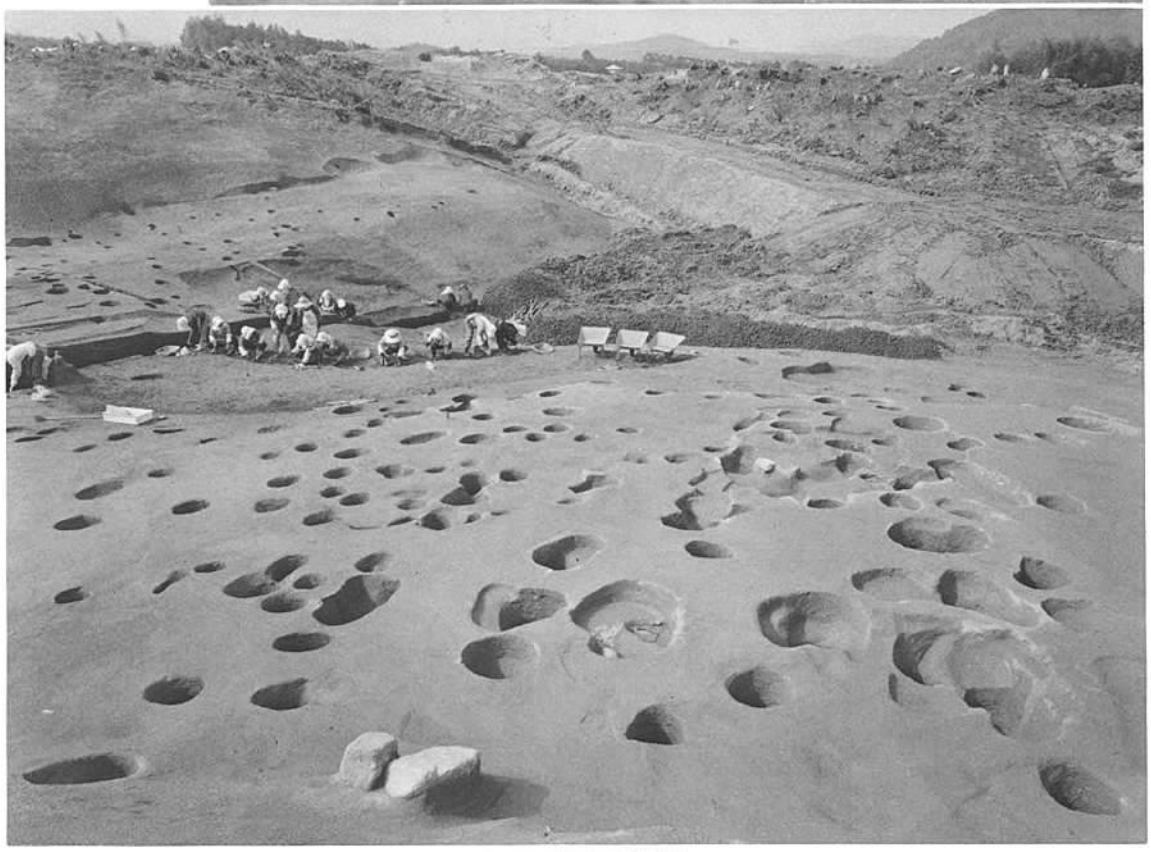
(2) Ⅱ区西半部
遺構全景

(1) Ⅱ区西半部
遺構全景（西から）

(2) Ⅱ区西半部
遺構全景（北東から）

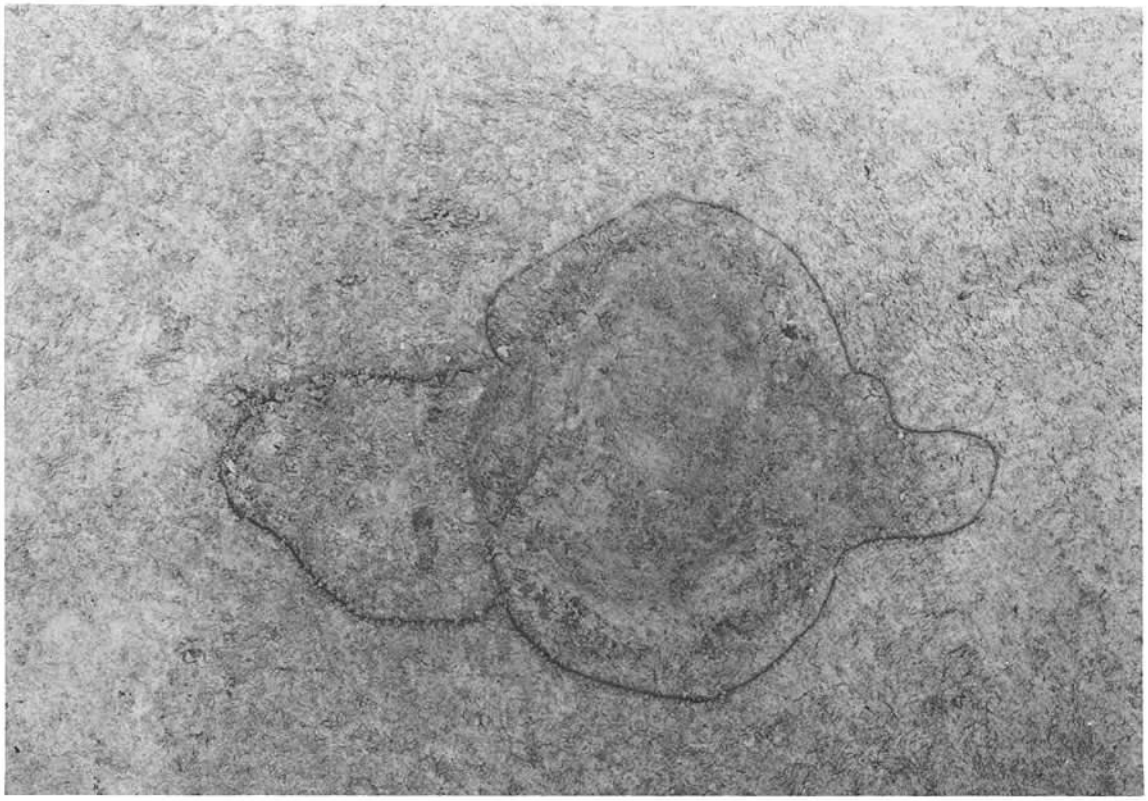


(1) Ⅱ区造成面
遺構全景



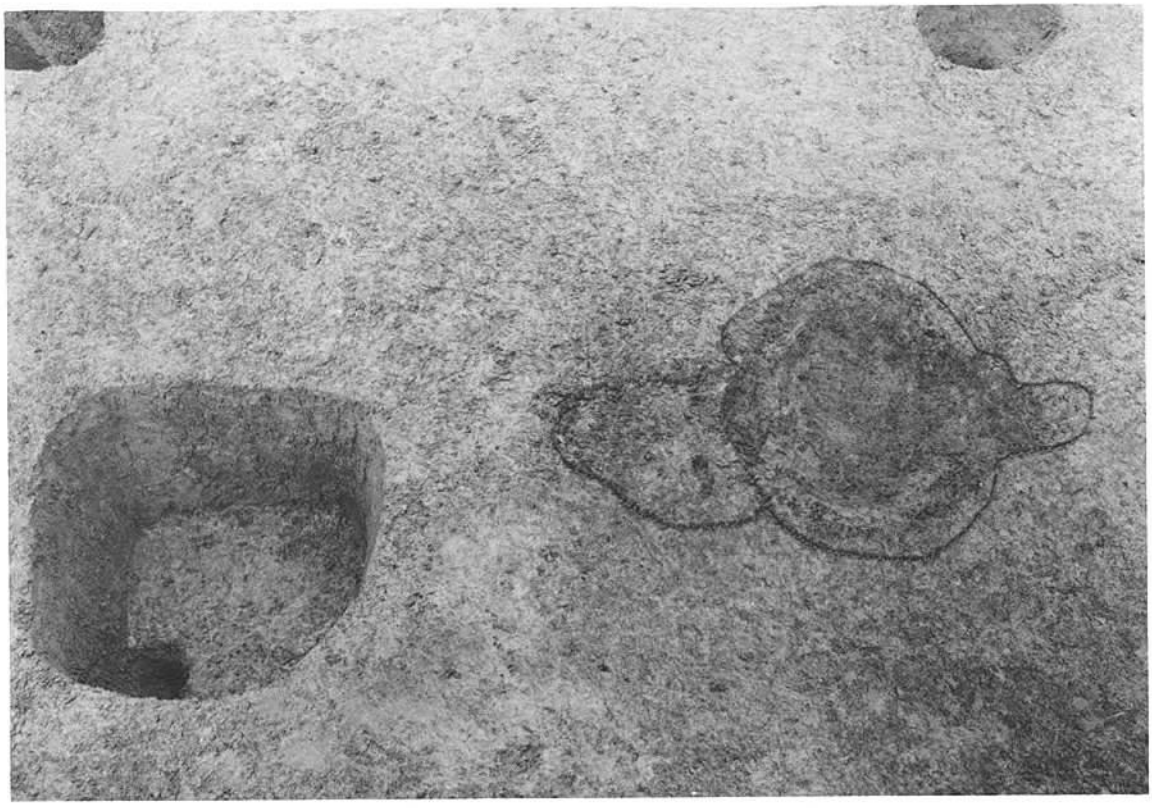
(2) 第1号掘立柱建物

(1) 第1号鍛冶炉



(2) 第2号鍛冶炉

(1) 第2号鍛冶炉切り取り作業



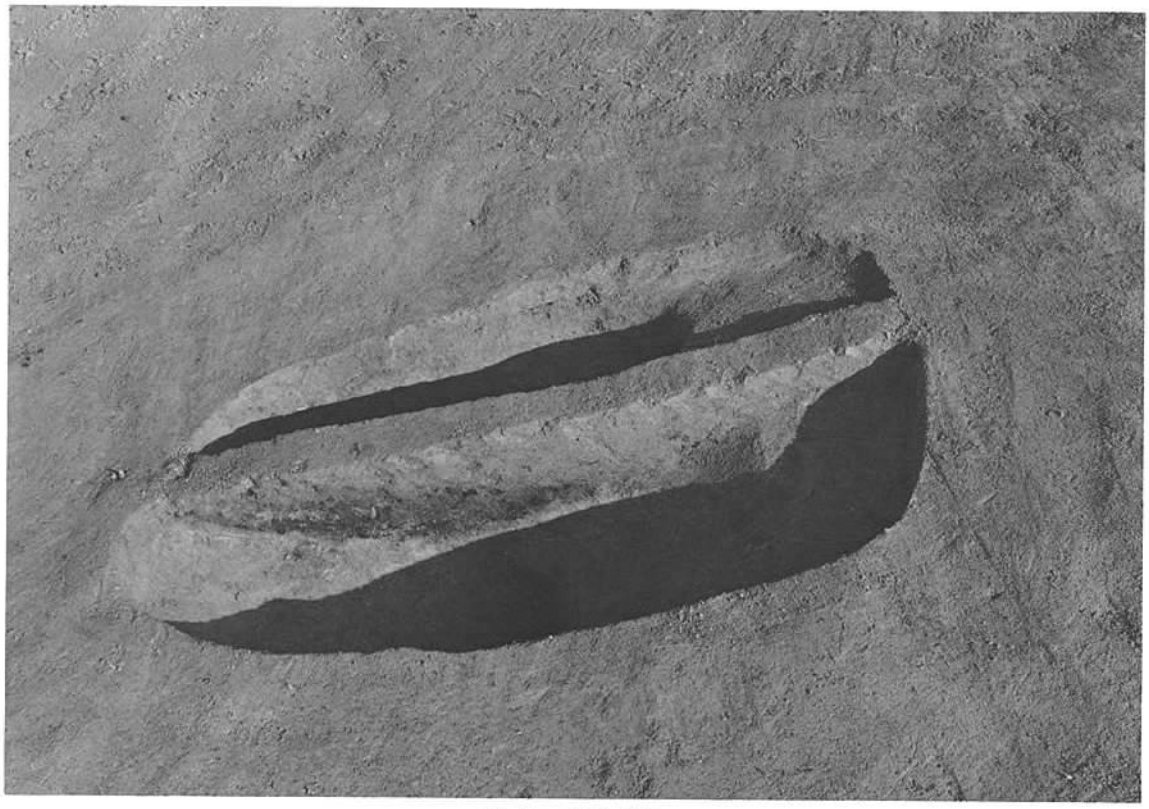
(2) 鍛造剝片を多量に出土したP－96と第2号鍛冶炉

(1) 鍛造剝片採集作業

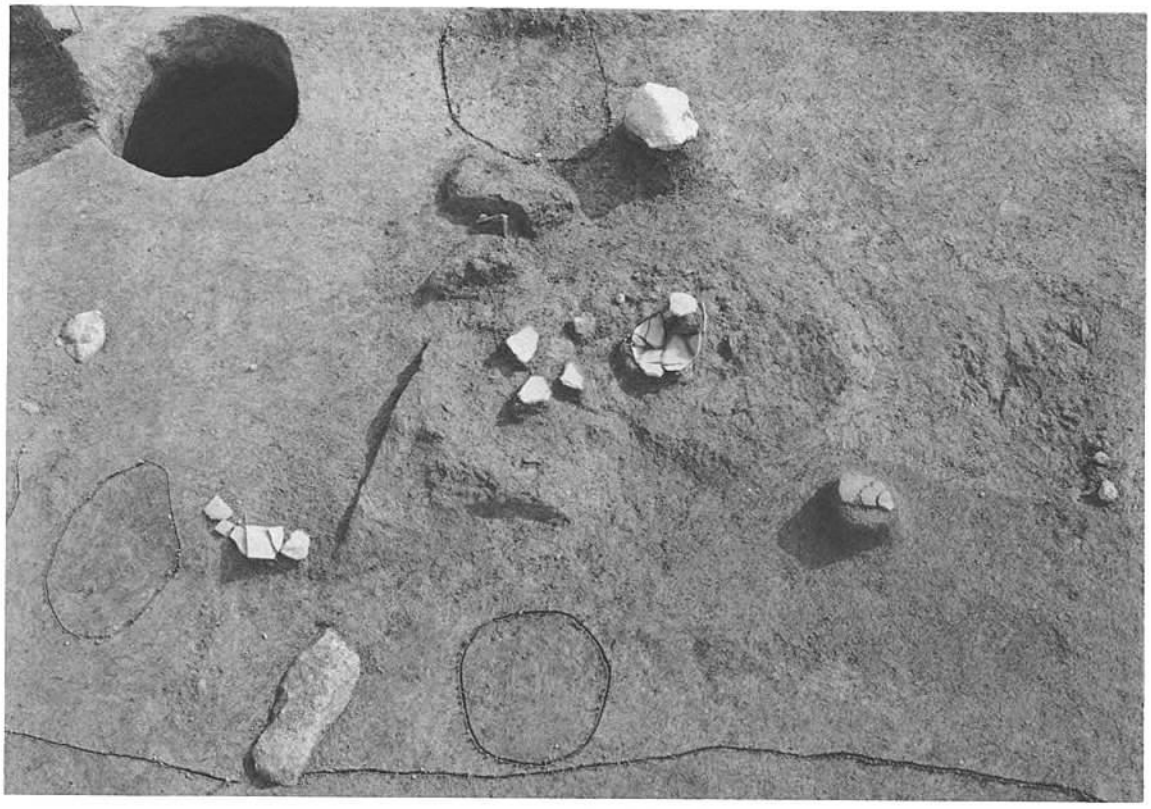
(2) 鍛造剝片包含土水洗作業

(1) 鍛造剝片選別作業

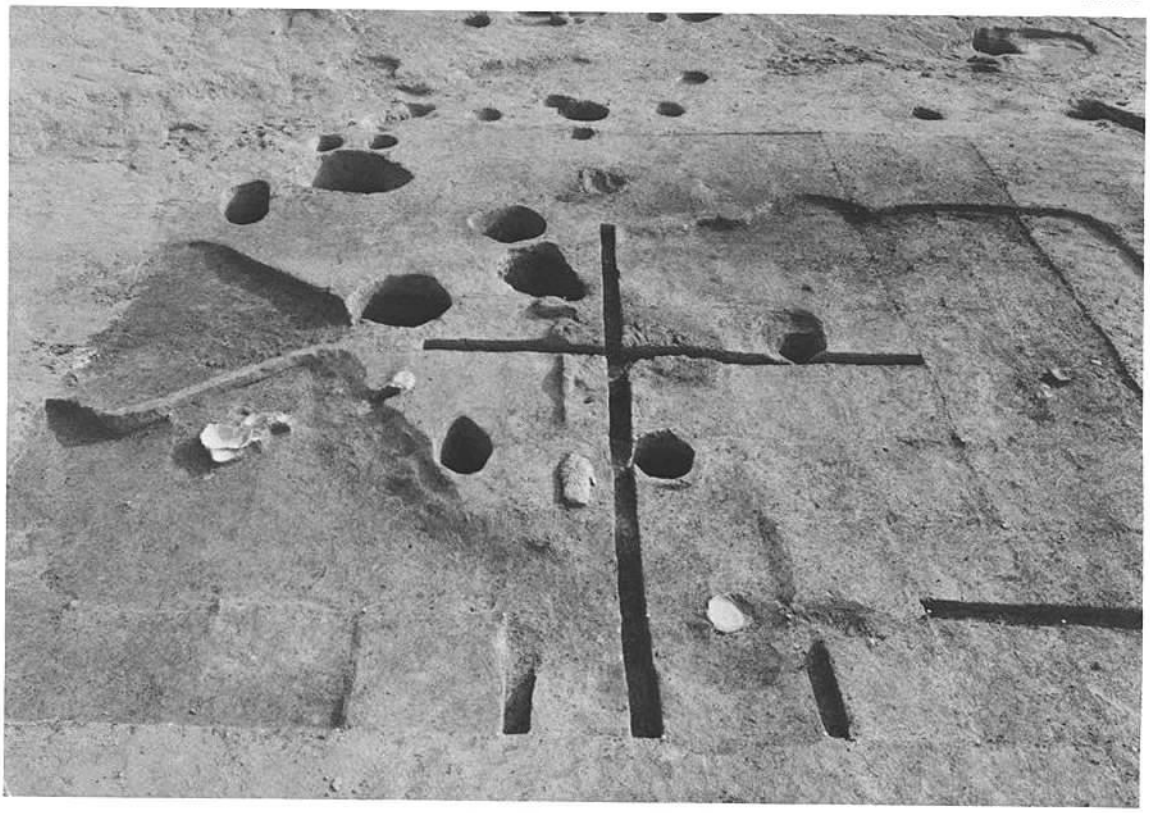
(2) 第1号焼土壙



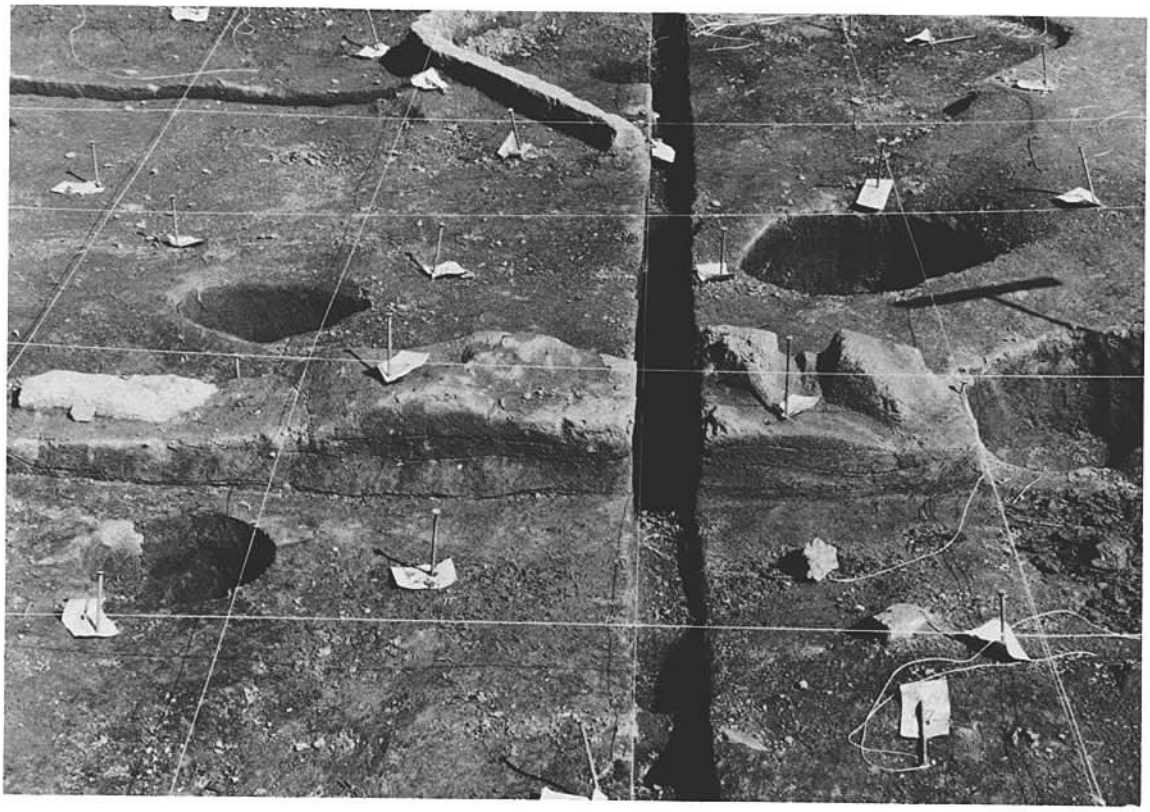
(1) 第 2 号焼土壙



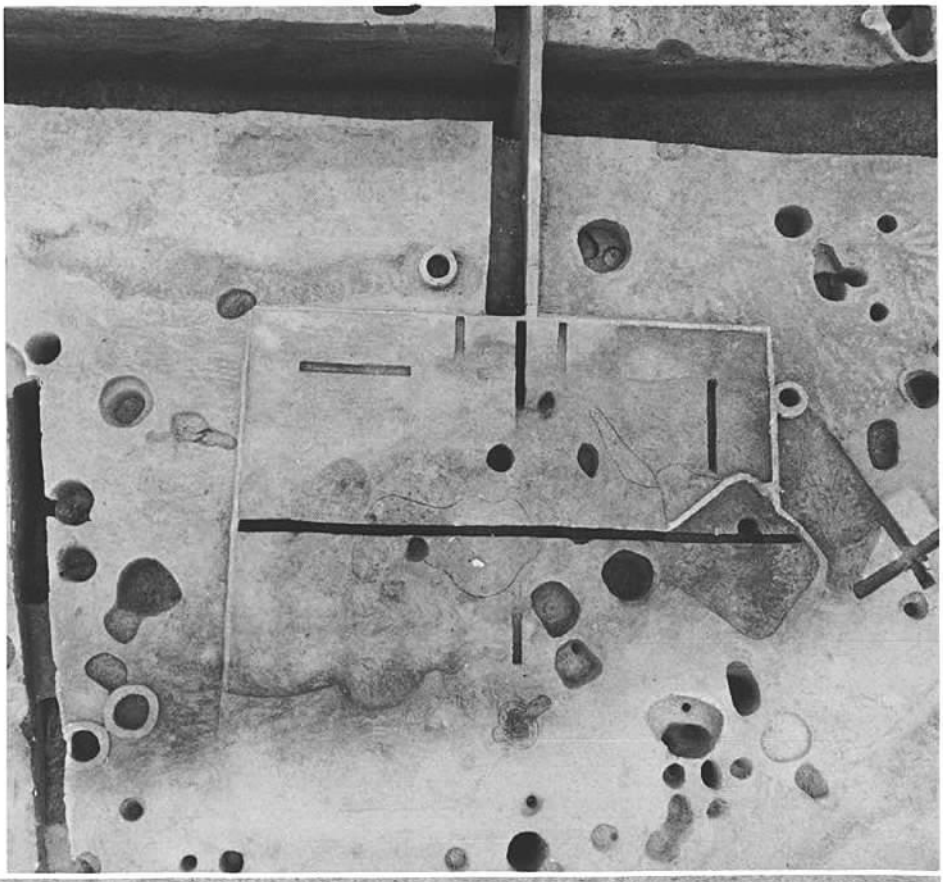
(2) 第 3 号焼土壙（上層）



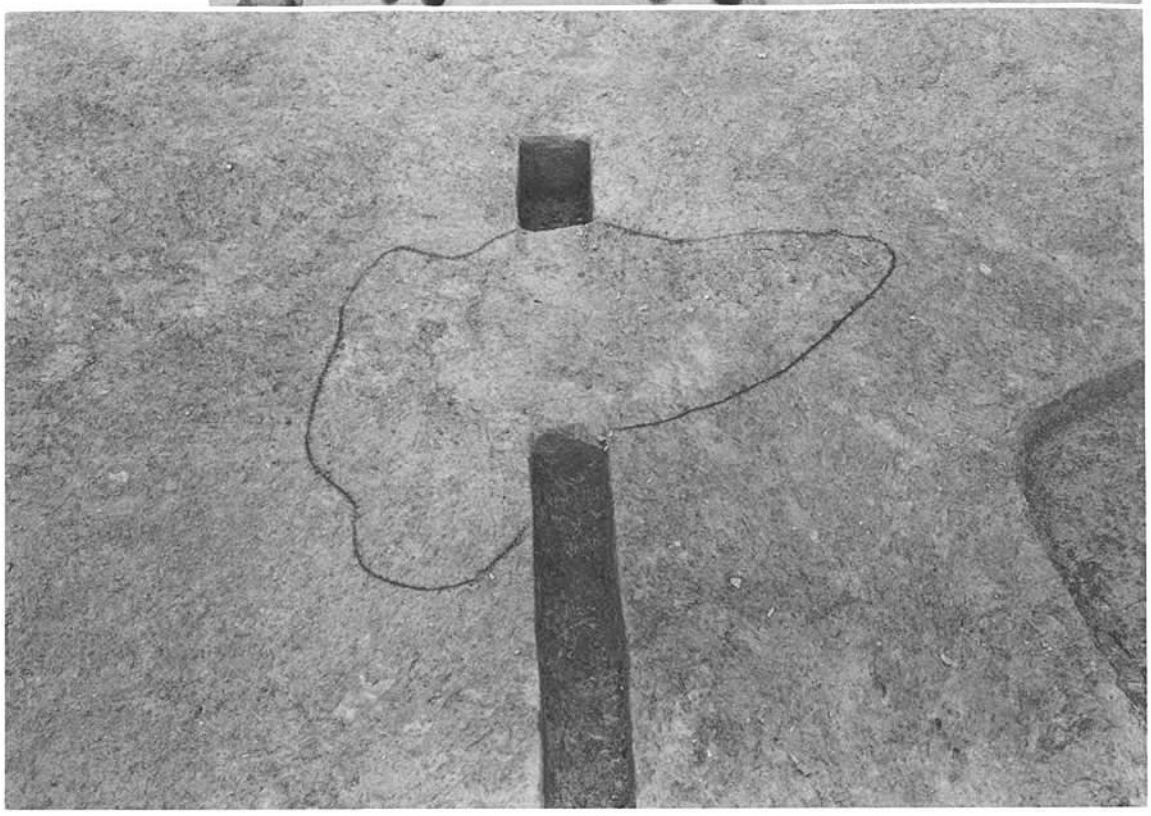
(1) 第 3 号焼土壙たち割り状況



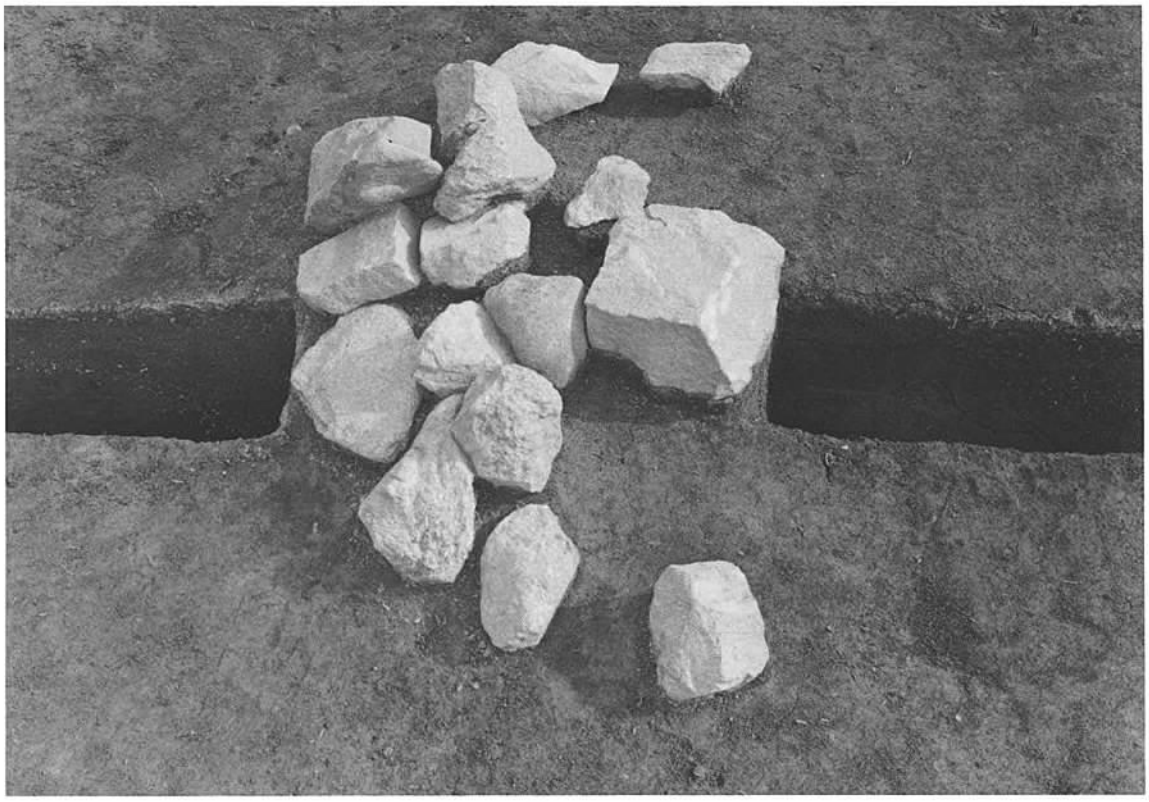
(2) 第 3 号焼土壙たち割り断面



(1) 第 3 号焼土壙
下層完掘後

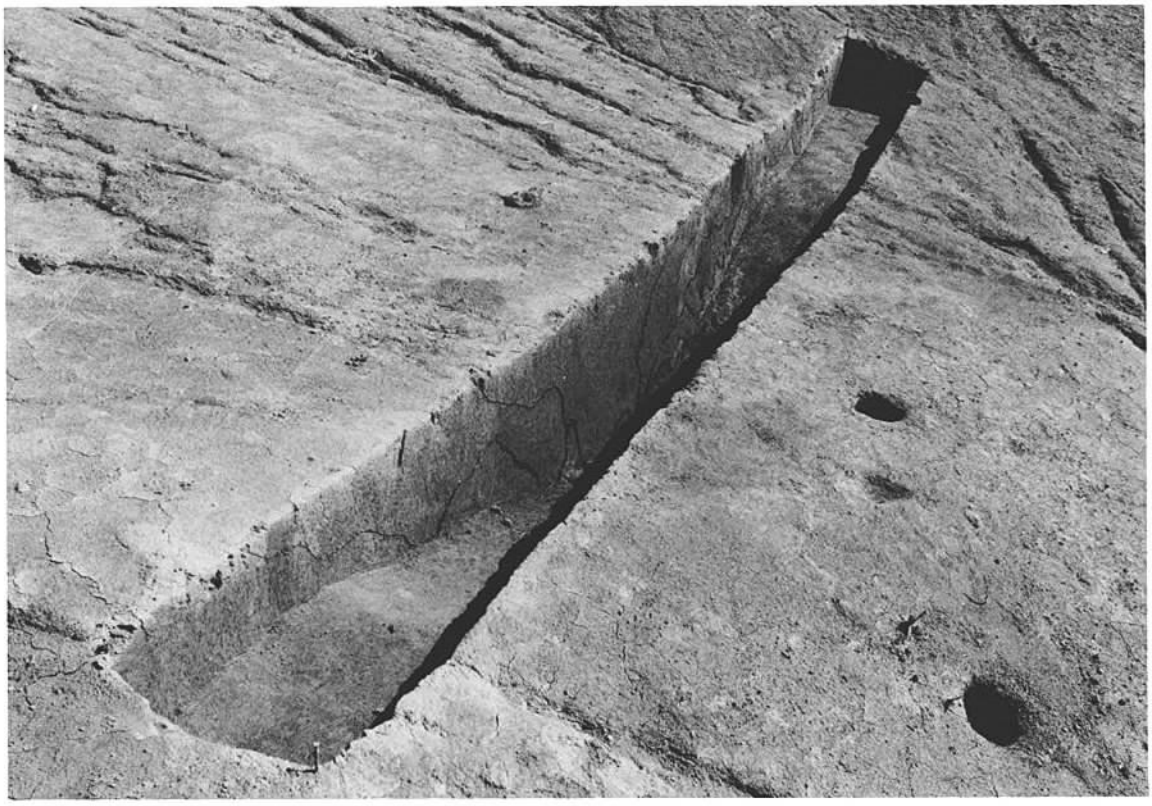


(2) 第 4 号焼土壙



(1) 第１号集石遺構

(2) 第１号道状遺構（北から）



(1) Ⅱ区谷上方トレンチ断面

(2) Ⅱ区造成面下層掘り下げ作業風景

(1) 第 1 号火葬土壙

(2) 第 2 号火葬土壙

(1) 第 3 号火葬土壙

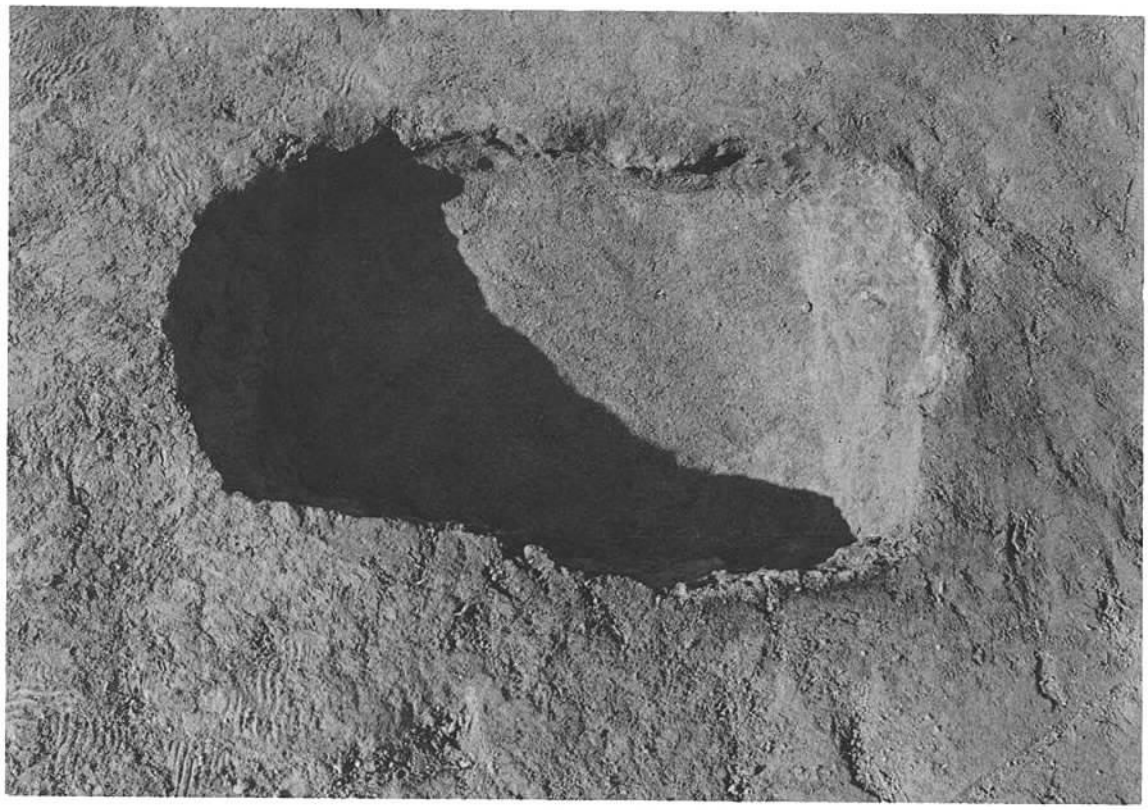
(2) 第 4 号火葬土壙

(1) 第 5 号火葬土壙

(2) 第 6 号火葬土壙

(1) 第 7 号火葬土壙

(2) 第 8 号火葬土壙



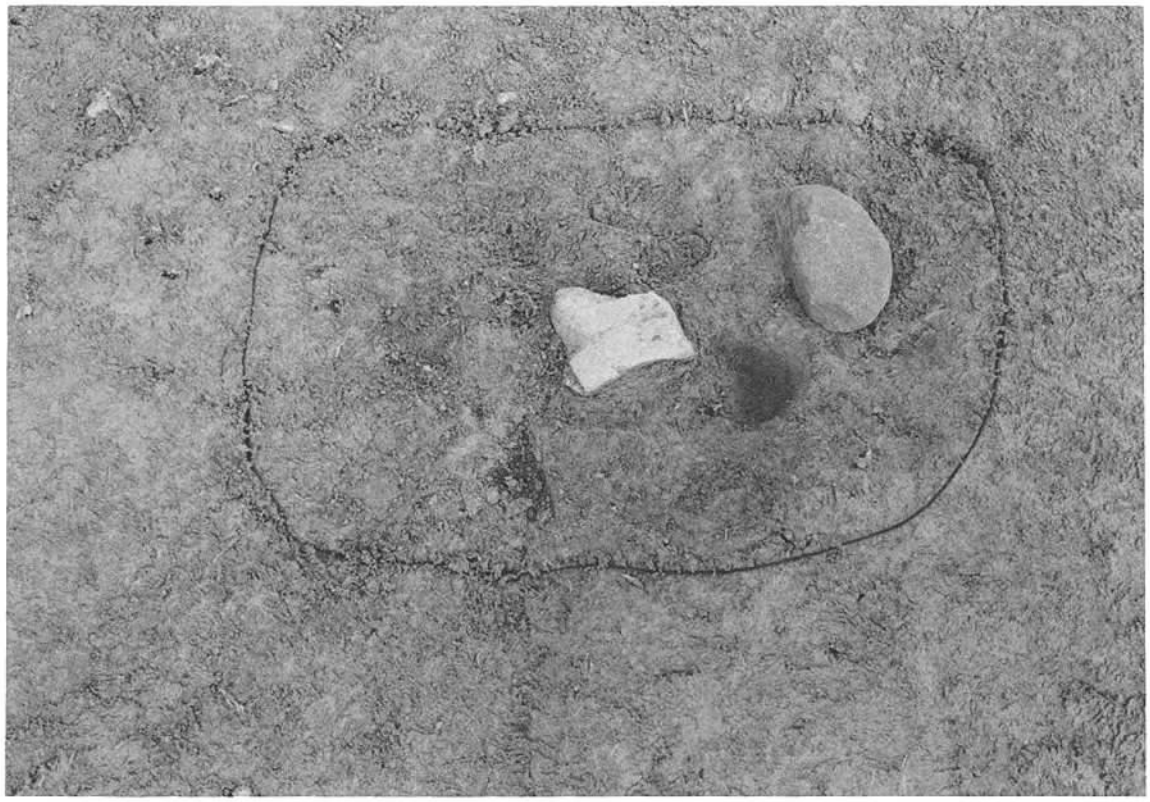
(1) 第 9 号火葬土壙

(2) 第10号火葬土壙

(1) 第11号火葬土壙

(2) 第12号火葬土壙

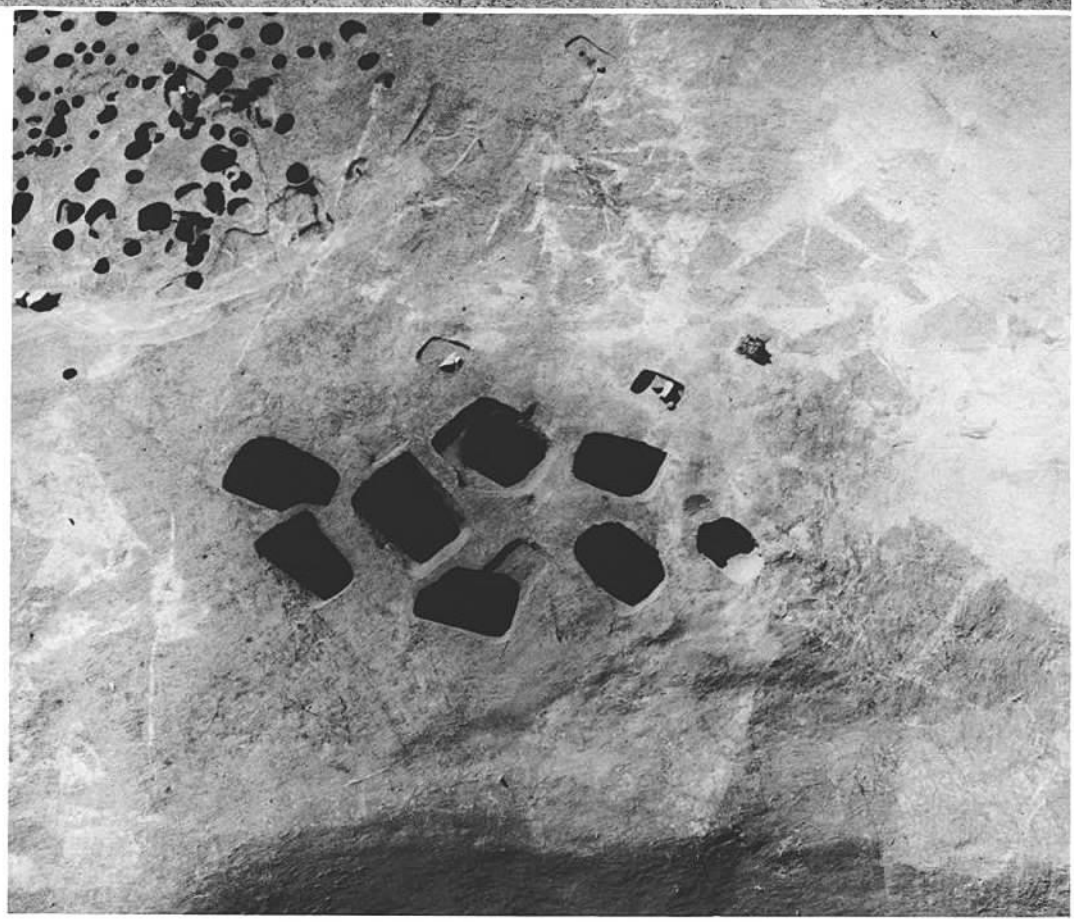
(1) 第13号火葬土壙



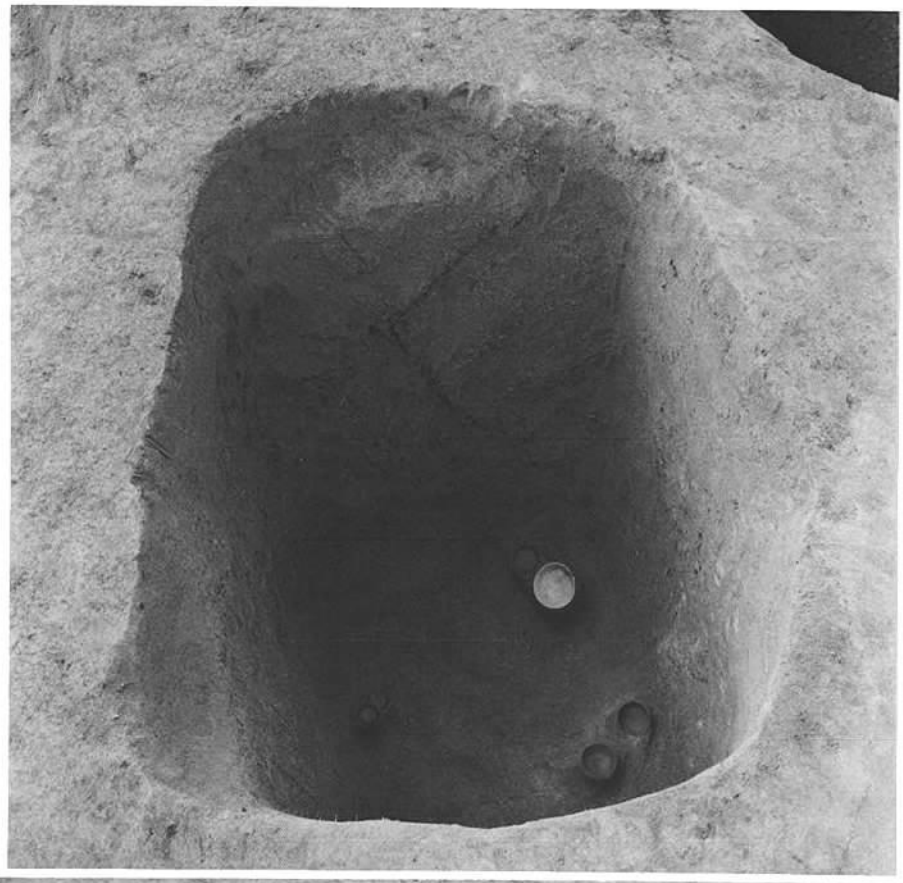
(2) 第14号火葬土壙

(1)

(2)



(1) 第15号火葬土壙　(2) 尾根先端土壙墓群



(1) 第 1 号土壙墓

(2) 第 9 号土壙墓

(1) 第1号土壙墓
土器出土状態

(2) 第9号土壙墓土器・下顎骨出土状態

(1) 第12号土壙墓上石積基壇

(2) 第12号土壙墓上石積基壇基礎部分

(1) 第12号土壙墓

(2) 第12号土壙墓の染付と六道銭出土状況

(1) Ⅰ区および
近世墓地全景

(2) Ⅰ区尾根最頂部近世墓地

(1) Ⅰ区東側の改葬済近世墓地（南から）

(2) Ⅰ区東側の未改葬近世墓地（北西から）

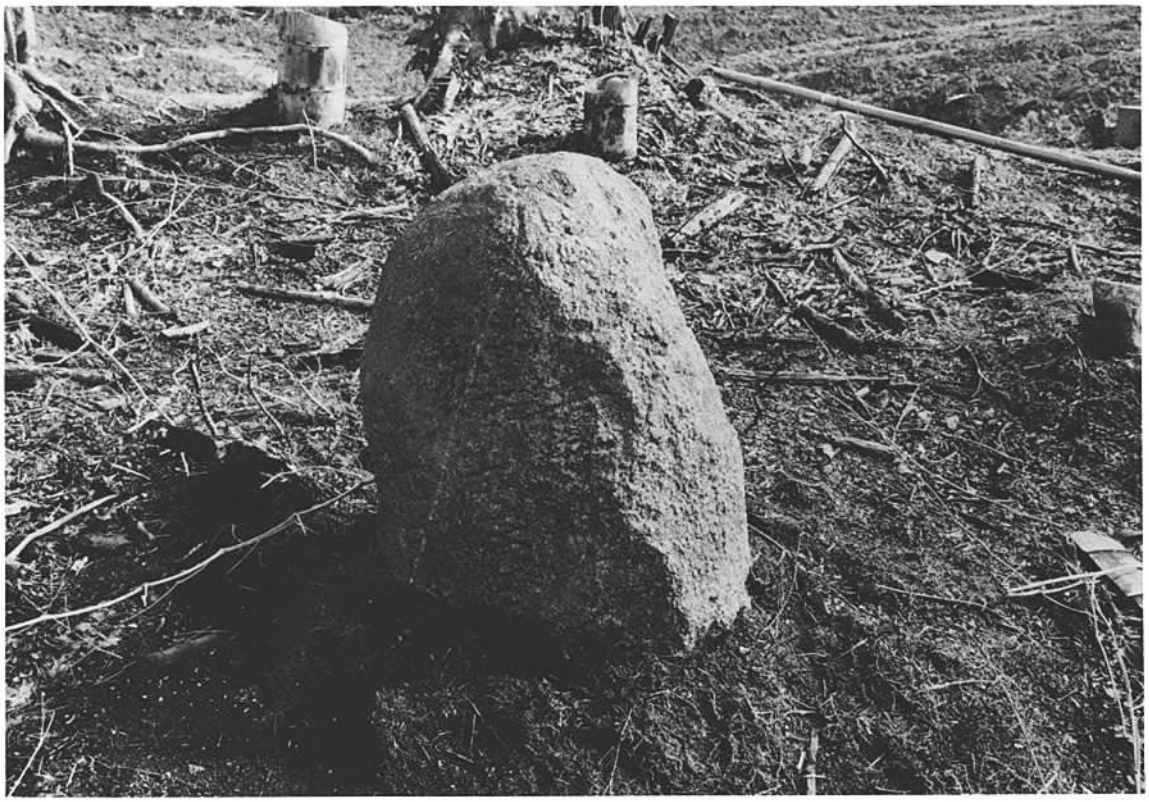
(1) Ⅰ区東側の未改葬近世墓地（南西から）

(2) 近世墓地の僧形石像

(1) 近世墓地の地蔵形石像

(2) 近世墓地の「小三郎」墓石

(1) 近世墓地の「寛延元年」墓石



(2) 近世墓地の「享保十五年」墓石

(1) 近世墓地の「高橋縫磨」墓石と板碑

(2) 近世墓地の板碑

(1)「高橋縫磨之墓」
正面

(2) 同上裏面
「頭山満立之」

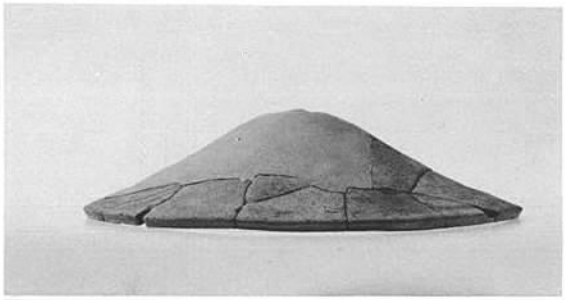
(1) 重機による表土剝ぎ作業

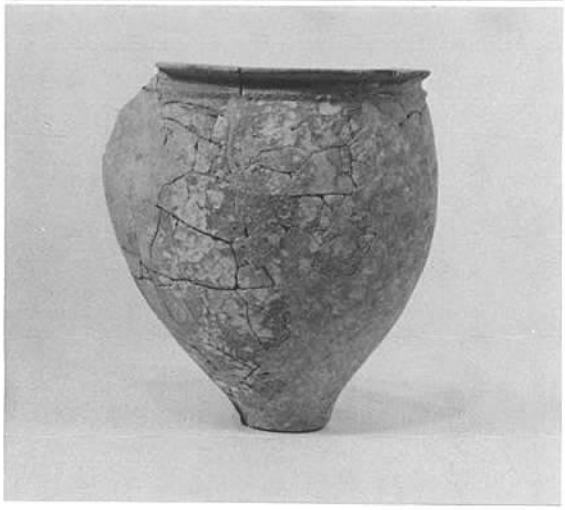
(2) 気球による空中写真撮影作業

(1) 平板による地形測量作業

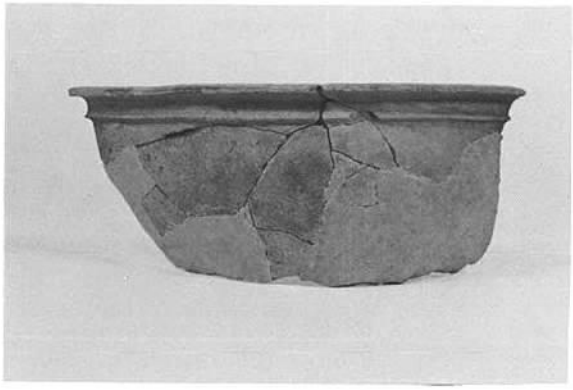
(2) 雪に埋もれた奈良尾遺跡（平成２年１月24日）

(1) 第1号甕棺





(2) 第2号甕棺



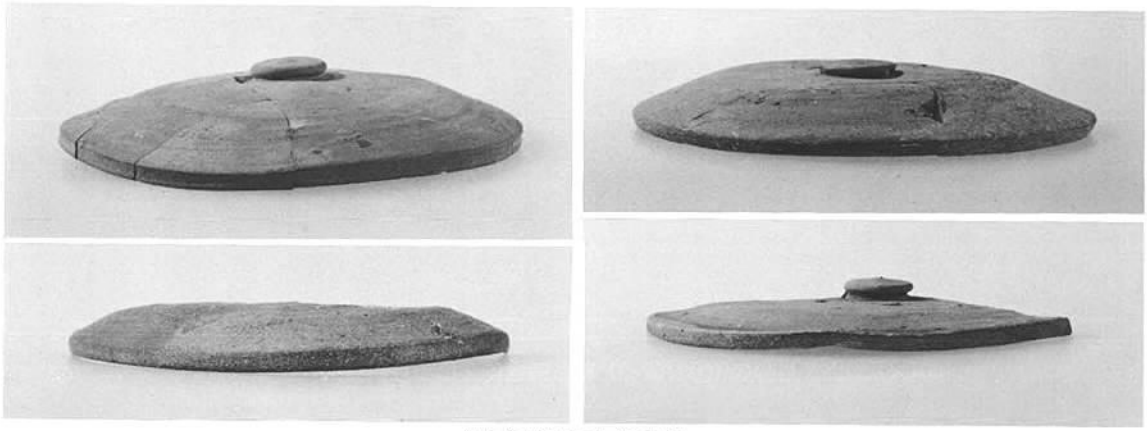
(3) 第4号甕棺（左：上棺、右：下棺）

Ⅰ区第１・２号包含層・他出土弥生土器・縄文石斧

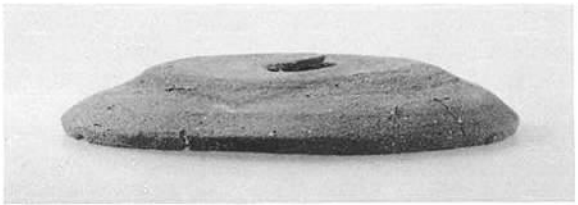
(1) 第1号掘立柱建物周辺地山直上出土土器

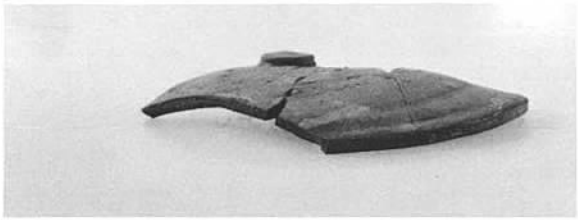
(2) 各柱穴出土土器

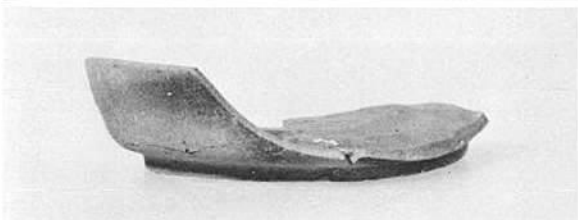
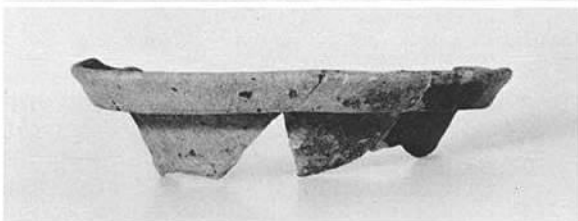
(3) 第3・5号焼土壙出土土器



(4) 整地層出土須恵器



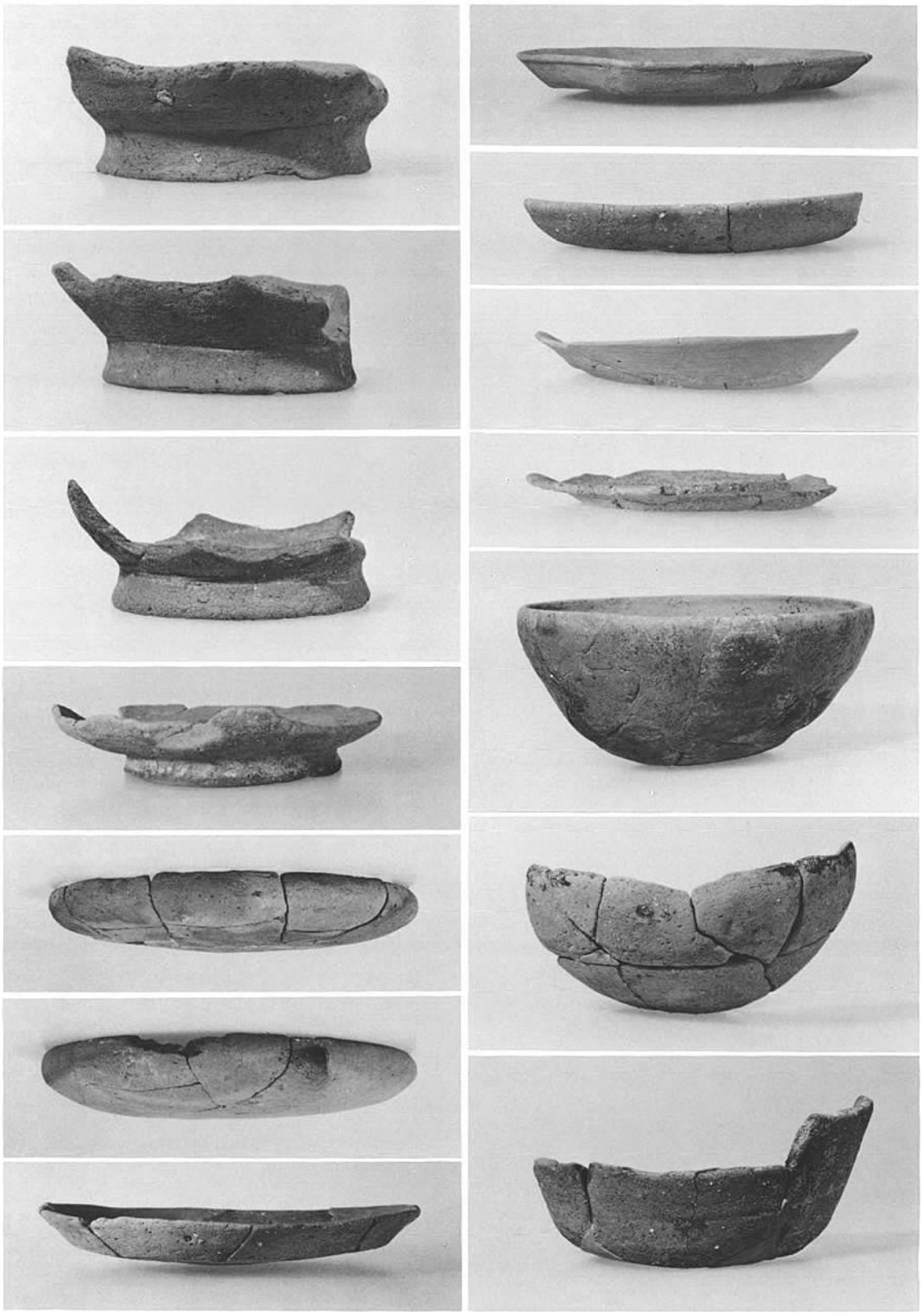


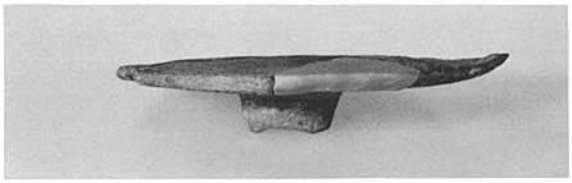
整地層出土土器

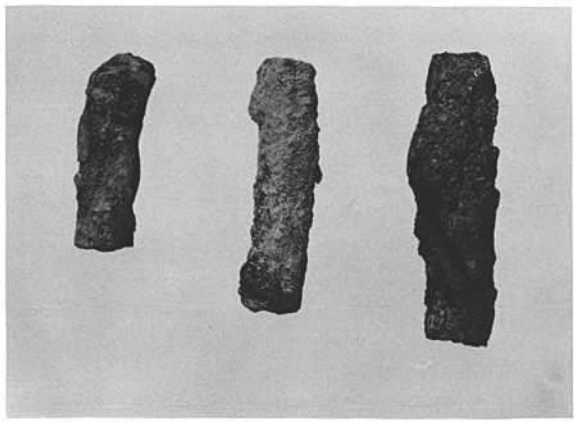
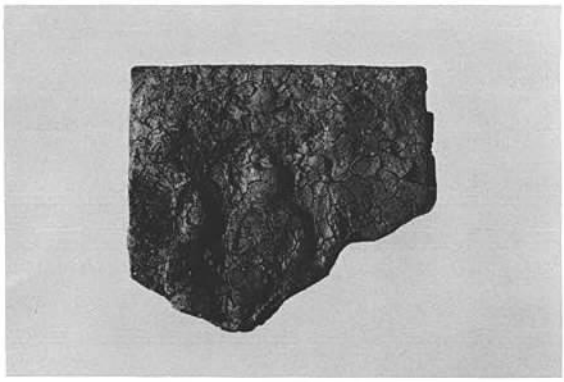
整地層出土土師器

整地層出土土師器

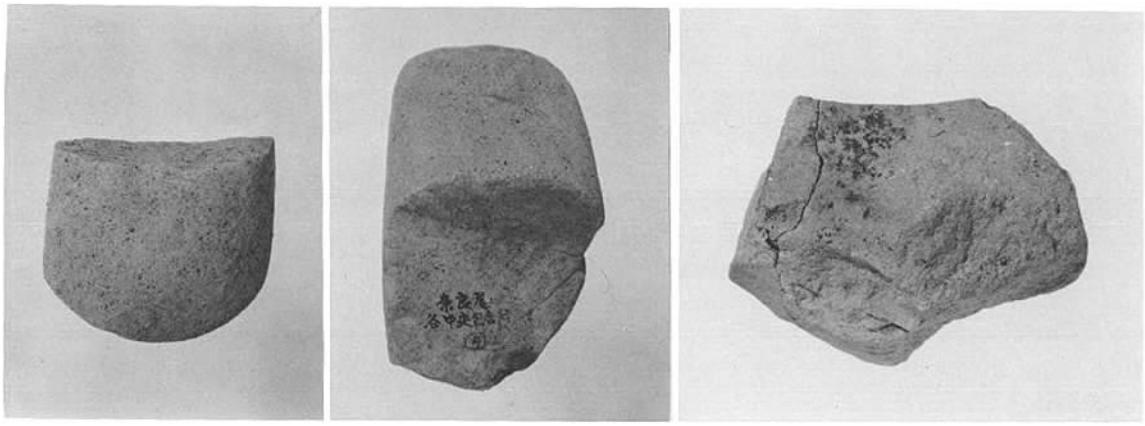


整地層出土土師器

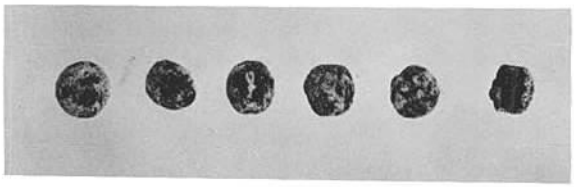


整地層出土土器・鉄器・塼仏



(1) 整地層出土磨製石斧・砥石



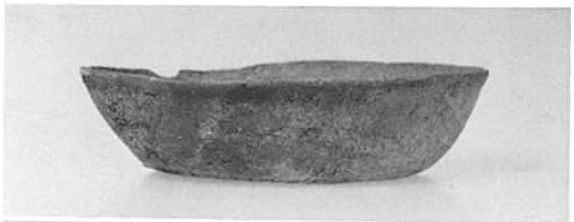
(2) 第 2 号火葬土壙出土数珠玉

(3) 第 4 号火葬土壙出土土師器

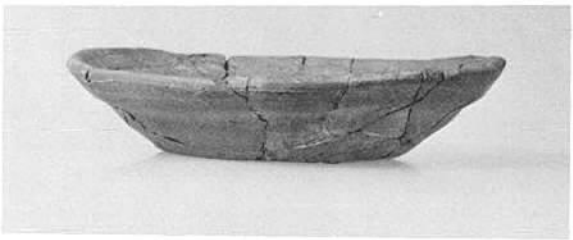
(4) 第 5 号火葬土壙出土遺物

(5) 第 3 号火葬土壙出土遺物

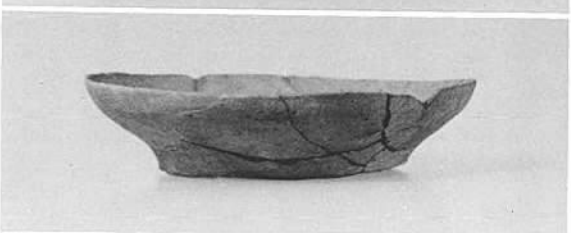
(1) 第 6 号火葬土壙出土青磁



(2) 第 7 号火葬土壙出土土師器

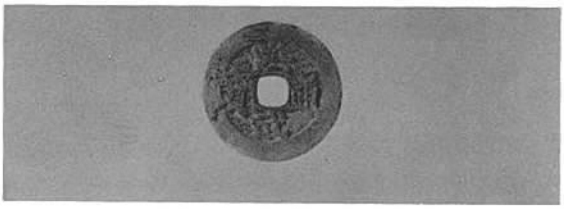


(3) 第 8 号火葬土壙出土土師器

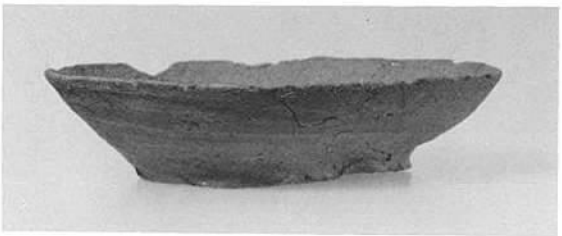


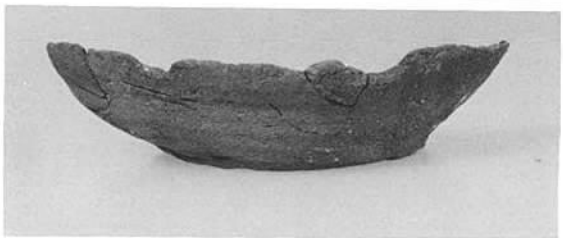
(4) 第11号火葬土壙出土土師器

(5) 第10号火葬土壙出土磁器・土師器

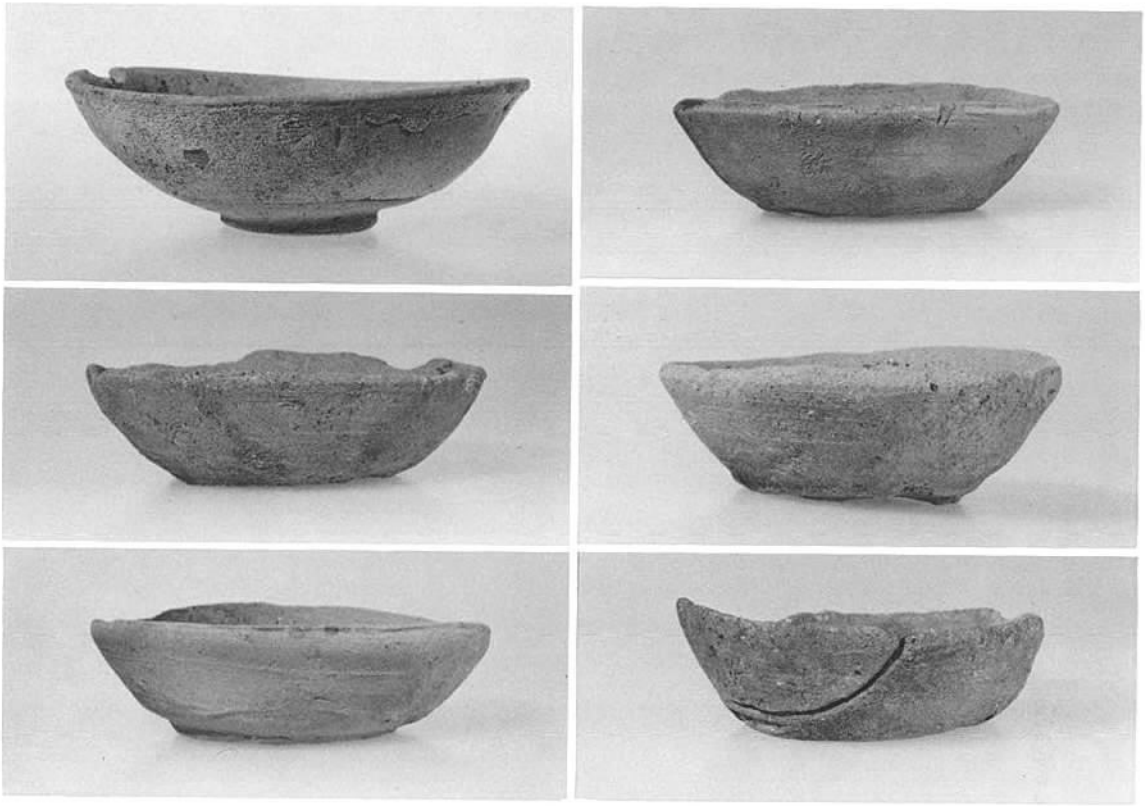


(6) 第 2 号土壙墓出土「洪武通寶」

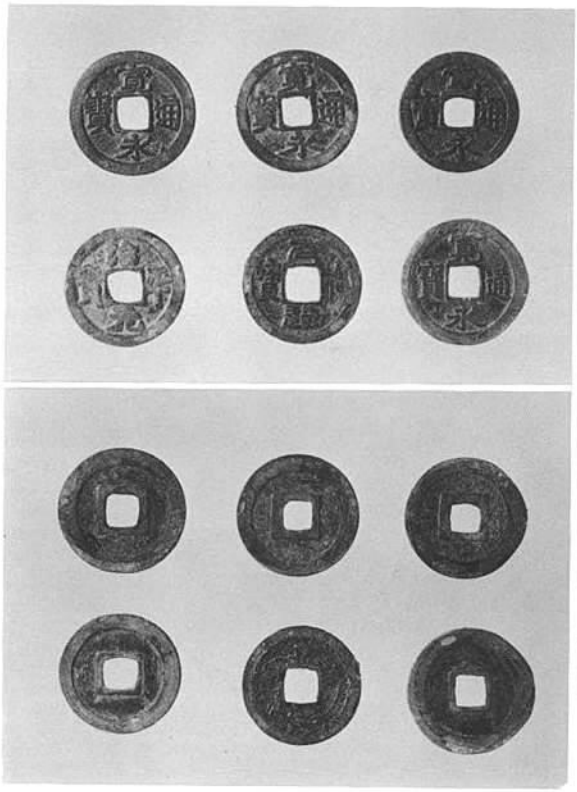




(7) 第 9 号土壙墓出土土師器

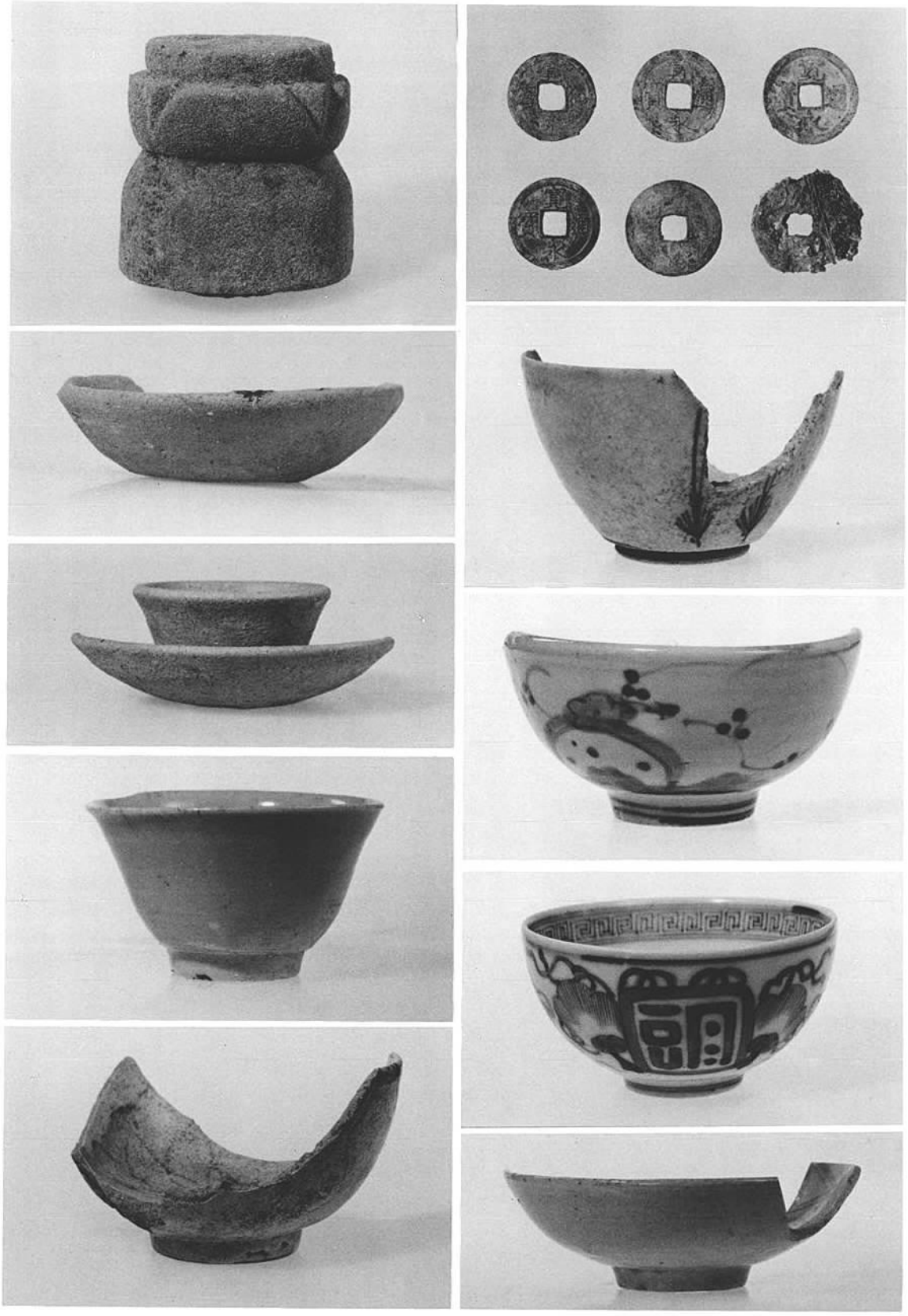


(1) 第１号土壙墓出土陶器・土師器



(2) 第12号土壙墓出土六道銭（下は裏面）

(3) 第12号土壙墓出土染付



土壙墓群近辺出土石塔片・近世墓地出土遺物

奈 良 尾 遺 跡

今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告　第13集

平成３年３月30日

発行　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園７番７号

印刷　正光印刷株式会社

福岡市西区周船寺3-28-1

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード ２１３３０５１
登録年度 2	登録番号 6